
ONE PIECE ~ 地味にひそかにおだやかに ~

壱円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 〽地味にひそかにおだやかに〽

【Nコード】

N2729K

【作者名】

壱円

【あらすじ】

ルフィ兄に転生。その後、平凡で地味で穏やかな暮らしを目指す
が、トラブル体質なのかいろいろ目立ってしまう。悪魔の実なしで
もやればなんでもできる…そんな唐辛子のように（主人公にとって
は）カライ物語。――の、残骸置き場。

【修正後】よりという意見をよくいただいたので、このままおかし
な設定や時間軸のままとりあえず終わりまで続けます。きちんと書
き直したものは【HPにて修正版】をご覧ください

はじめに

とりあえず、はじめに。

閲覧してくださった皆様に感謝を。そしてお詫びを。

毎週ジャンプを見てる方も見てない方もいると思うので、今のところ深くは明記できません。

ただ最近の原作展開をさくじつ知ったとはいえ、

知らなかったために原作では「戦争」があつたりいろいろあり、

「目指せエースと世界と幸せとギャグ！」なんて、このタイミングでギャグをはじめてしまったこと、深くお詫び申し上げます。

なんともいえないタイミングで気まずいものをこの時期に書いてしまい、

空気読めないといわれて当然です。

本当にごめんなさい。

決して原作に対して悪意があるわけではなく、この二次創作はあくまで妄想ものであり「主人公最強&チート！」といわせたのがためにノリノリではじめてしまったものです。

コメディ全快でこの先も展開していく予定です。

<この物語の主人公について>

・主人公はルフィの実の兄

- ・ エースと仲良し
- ・ 海軍とも海賊とも言いがたい立場
- ・ 悪魔の実を食べたとしても、なんかヨミヨミの実(?) 以上に使
い道のない実
- ・ 悪魔の実なしでどこまで卑怯に行きぬけるか
- ・ 主人公は勘違いされまくっている

もう一度注意 - - - -

これはあくまで「ONE PIECE」という作品を元とした作者による妄想物語です。

なお作者は国語の成績も英語の成績も非常に悪いです。
文章のかきかたなんてわかりません。

ひぼうちゅうしょうはお断り。

作者は小心者なのですぐに奈落とドツボにはまります。

上記のことを踏まえたうえ

それでも許せる方のみ、しばしのお付き合いを…。

作者
壹円

募集（終了済）（前書き）

こまっています。

ぶっちゃけ…この先どうしたらいいかなあ〜と（汗）

募集（終了済）

募集（終了済）

このページは読者様への質問コーナーです。

どうかアンケートにご協力下さいm（――）m

まず、「04」でかいた「05覚悟」に関してですが、05話で少し事件を起こそうと思っていました。

それで日を置いたら、3通りほど案ができてしまったので…

05話次第でその後のストーリーが大きく変わる事はありません。

この話以外はあくまでギャグで通します。

この選択肢で変わるのはリースの視力の上下ぐらいです。

どうかみなさまのご意見をお聞かせ下さい。

【1】

- ・ 事故発生
- ・ ドシリアス
- ・ リース、傷跡が残る怪我を負う
- ・ これによりリースはきちんとした「覚悟」が決まる
- ・ 髪を伸ばすらしい

【2】

- ・ 事故発生するもギリギリ回避

- ・すこ〜しだけ（危機感で）ドキドキするシリアス。だけど7割が明るい
- ・リース、ちょっと目が悪くなる
- ・少し軽い話になってしまふので【1】ほど強い「覚悟」は生まれない
- ・「まあ〜いいか」でながれてしまいそうな物語
- ・眼鏡をかけるらしい

【3】

- ・事故はなし
- ・完全ギャグ（エースとルフィが笑い死にかけます）
- ・リース、爺様の「女の子がほしかった」せいでいろいろ強制させられていたことを知り激怒
- ・祖父打倒のために「覚悟」が決まる
- ・このときの「覚悟」は【1】よりも想いは強いけど、中身の意味が違います。
- ・リースは以前から髪を伸ばしていた設定で、真実発覚後に髪を切る
- ・ピンク、ヒラヒラ、レース、女の子関係のグッズがいろいろ登場
- ・目標が爺様に逆襲（笑）する方へとうつる
- ・リースは力をつけようと海軍に一時はいるので、【1】や【2】よりも海軍よりの展開が多くなります

【4】

- ・その他
- ・1〜3以外のこういう展開を望む！とか、ありましたらどうぞ
- ・もし作者の考えている展開につなげることが可能だったらそのアイディアいただきます

…そういえば、リースの容姿をいっさい明記してない気がしますね。今更ですね（汗）

リースは黒髪黒目です。

【1】と【2】の選択肢ならルフィが旅にでるころには、リースの髪は長くなっているでしょう。

ただし【3】ははじめが長く、ルフィが旅にでるころには短くなっています。

あとリースの特徴は…うーん、今のところはとくにはないかと。

細かいところは大人編になれば追加されるので、その辺をお楽しみにとしかいえません。

とりあえずこの選択肢が決まると微妙にリースの髪型が変化するということ。

あ、いつそのこと、「覚悟のありかた」じゃなくて「リースの髪型を決めるための選択」ととってくれてもかまわないですよ。

上の選択肢はこの際どうとってくれてもかまいません。

ただこれ以上細かく容姿とか設定の話をするとなタバレになってしまうので、選択肢後の容姿のイメージはご想像におまかせします。

まあ、ご期待にこたえられるような展開になるかはわかりませんが…。

ちなみにこの後の展開がわからなくて回答しづらいといわれそうなので、四つだけ先にお知らせします。

・リースは6歳で悪魔の実を食べます（友達いわくグロイ能力といわれた）

・05話以降はすべてギャグ展開に戻ります。だらけた主人公が最強を演じてくれるハズ

・どれも『一時』ぐらい海軍にはかわりますが、海軍将校大將になりたいたか、誰かに勝ちたいとかリースは思ってません

・海賊なのか海軍なのかと聞かれると…ルフィについていくとだけ
(汗)

とにかくリースというのは、

周囲から見ても謎が多くて、おかしな人…というイメージが会う人会う人にひろがっていきます。

え〜と…

そんなわけで(汗)

期限がないとやりづらいので【3月26日】には締め切らせていただきます。

メールでもコメントでもかまいません。

申し訳ありませんが、アンケートにご協力お願いします。

本当に自分困ってます。

アンケートよろしくおねがしますm(_____)m

募集（終了済）（後書き）

アンケート以外のご意見、ご感想ありましたらお気軽にどうぞ。
作者の気付かない誤字脱字を発見報告もとても感謝です！
なにかありましたらどうぞ。おまちします。

募集終了

募集終了

アンケートにご協力いただきありがとうございます。
本日をもって募集は〆切りました。

ルート1	8件
ルート2	1件
ルート3	2件

たくさんのご意見ありがとうございました。

これにより1ページだけですが、シリアスがはいることが決定しました。

他にもたくさんご意見を頂いたのでいろいろ参考に物語を考えています。
こうと思います。

ハンデをどうのりきるとか、髪の長さとか、容姿とか、女性関係とか、ルフィとテンプレなのかとか…。

とりあえず作者も覚悟を決めたので、しばらくしたら続編をだします。

えーっと。ひとつだけ。

実は前後2部構成で終わる予定が、3部構成にのびました。
そのため「05話」は上中下に変更となりました。

やっぱりギャグが多いですが、シリアスもがんばって書いています。

これからもリリースをよろしく願います。

募集終了（後書き）

犀蘭様、烏龍茶様、ライ様、優癒様アンケートにご協力いただきありがとうございます。

とても参考になりました。

他、たくさんの閲覧者の皆様、ご来訪ありがとうございます！

本日、ついに総合評価が400pt達成！！

こんなにたくさんポイントもらっていいんでしょうか（汗）

だって、たった実質4話しかないのに…。

嬉しすぎます！！

みなさん本当にありがとうございます！！

真実が落ち着くのを待ちましょう

どうも、作者です。

まいりました。

原作のネタ不足でした。

やっぱり原作に介入するなら、最新情報はどんどん読まないといけませんね。

そんでもって知らない情報があれば、それについて考察しているサイトや意見を交し合っている掲示板など、確認する必要がありますが、そうだと今更ながら気付きました。

本当に気付くのが遅いですよね自分…。

ギャグ展開でありえないだろうというノリで、リリースに「つぶつぷ（ぶつぶつ）の実」というものを考えたのですが。

予想外なことがまたおきました。
いままで能力が出てこなかった人が、同じ名前らしい能力者であること。

その能力も、能力者も凄い方がきたのでびびっています（汗）

仏のセンゴク

仏だから『ブツブツ（仏仏）の実』

なるほど。

まだセンゴク氏の能力があかされていませんでしたね。

自分は「3」がエースの手錠をあけたところまでしか読んでいなかったんで、

センゴクのシーンを見事にみのがしていました。

やはり彼は『ブツブツ（仏仏）の実』なんでしょうかね。

いまのところ、まだ原作では能力の名前は出てないのかな？

でもこの調子だと間違いなく『ブツブツ（仏仏）の実』という噂が真実味を増しそう。

まだリースが原作にも介入していなかったんで、最近のジャンプをみるでもなく、漫画を買うでもなくのんびりと構えていたのですが、それがいけなかったようです。

噂とはいえ、意味も能力も違えど同名の悪魔の実がありそうということだけでも、【地味にひそかにおだやかに】はダメですね。

知らなかったとはいえ…参りました。

心底困りました。

とりあえず、センゴク氏の能力が確実なものとなるまで、リースは動くことができそうにありません。

このあとは悪魔の実ではなくリースの身体能力を鍛えようと考えていたので、続けるのは問題ないのですが、さすがに名前がかぶってしまうようならよろしくない状況なので自主休止させていただきま

す。

原作においてセンゴク氏が『ブツブツ（仏仏）の実』と言われたら、リースは『ツブツブ（粒粒）の実』：とかなら、まだ問題はないですかね？

わからん（汗）

念のためにリースの別の能力候補でも考えてみたいと思います。もしかぶつたら、【07話】も撤去して、書き直す。能力も変える。

それでもいつかリースの話は続けて見せます！！

どちらにせよ、です。

原作のセンゴク氏の正体がわかるまで、しばらく【地味にひそかにおだやかに】はおやすみさせていただきます。

毎度毎度変なところで原作を知らないため、問題ばかり起こしてすみません。

閲覧してくださった皆様、ありがとうございます。

真実が落ち着くのを待ちましょう（後書き）

旋階段様、ネメシス様、久遠様コメントありがとうございます。
ここまで閲覧してくださった方々にも、心からの感謝を。

リースのことは続けられたいいなとずっと思ってます。

脳内ではすでにエース処刑のシャンクス介入までプロットつくつち
やいましたからね（苦笑）

この脳内妄想が、いつか日の目を見るといいのですが。
当分は無理そうです。

またリースの冒険が続けられる日まで、しばしばの休息を…。

****修正バージョンをどうしようorz** (前書き)**

作者の言葉です。

更新じゃなくてごめんなさい。

****修正バージョンをどうしようorz****

おまたせしました。

修正版をボチボチ公開し始めました。

じつは誤字修正のほかに、時間軸や背景をきっちりかきこんだら、文章内容が現在アップ中の「地味に〜」とはすこしかわってきてしまいました。

今までの話とほとんど変わらず、肉付けしたような状態です。

現在「地味に〜」とは“別物”として「改」として新規投稿しているのですが、こういうのはやはり上書きの方がいいのしょうか？

新規で投稿しといてなんですが、どうしたらいいかちょっと悩んでいます。

修正後と修正前が、同じ流れでありながら少しずつ違ってきます。普通は違っていても上書きでしょうか？

****修正バージョンをどうしようorz** (後書き)**

質問はこれで最後にするので、どうかお言葉いただけるとありがたいです。

お願いします!orz

ゆうじゅうふだんでごめんなさい!!

****きめてみる** (前書き)**

ありがとうございます。

そももって「地味に」も「改」も両方続きます。

きめてみる

たくさんの方からご意見を頂き、自分の中でもう一度考えてみました。

「地味に」はこのまま残そうかなと現段階では思っています。

「改」は上書きではなく、このまま新規投稿という形で継続していきます。

そのため「地味に」の誤字脱字は、本当の意味で時間ができたら行いますが、

9割がた現状のまま直る予定はないとだけ認識していただけるとありがたいです。

今後「地味に」は、誤字のみ直し、短編置き場として残したいと思っています。

ズバリ書き直しですね。

本編の完全版もとい修正バージョンは、『ONE PIECE』地味にひそかにおだやかに・改』にて随時公開中です。

本編の続きも「改」にて連載しています。

続きもぜひよろしく願います。

たくさんの閲覧、メッセージ、お気に入りへの登録ありがとうございました。

修正版 >
>

【ONE PIECE 〆地味にひそかにおだやかに・改〆】
http://ncode.syosetu.com/n52
18m/

***きめてみる**（後書き）

リースの意思はそっちのけで、周囲からはガープの孫は強いと勝手に『勘違い』されて、すでに最強伝説が始まっています（笑）

さてさて、話は変わりますが。

たくさん閲覧者の皆様、ご来訪ありがとうございます！

そして真田信幸様、ブリューナク様、Mr.T様、やぎ009様、男爵様、ペルソナ様、ネメシス様、海原しお様 アンケートご協力ありがとうございます。

といっても、まだまだ募集してます。

問題はこの後の展開なので（汗）

sonでもってこの回は長いので前後に分かれています。

リースの容姿がまったくでないのは、アンケートによって左右するからという理由ですorz

後編はアンケート集計後にかきたいと思います。

どうぞリースに清き一票をよろしくお願いしますm（＿）（＿）m

ボツ01 (10・06・30) (前書き)

文章の修正をかけていると、後で使おうと思って書いておいた文章が使えなくなるんです。

ナミがリースとすであっていた設定にしたためボツになったのが、この「長〜いリースの愚痴」のお話。

ちなみにこの段階でのリースは、現在掲載中の本編のリース（大人版）の衣装や髪型とは違います。

初期段階のリースは、原作知識をフルに生かしているので「未来予知しちゃうよ」てきな凄い人間でした。

もったいないのでボツ話だけどアップ。

あくまでボツ話なので、修正後には消えます。

ボツ01 (10・06・30)

【期間限定のおはなし】

↳ボツ話01 鰐戦後、リース、ルフィに愚痴を言う

シャランと小さな金属音がして振り向くと、そこには一風変わった格好の青年がいた。

いつからそこにいたのか。

周囲には船が近づいた気配はなかった。

見回してみても自分たちの船の周囲には何もなく、気配も音もなく青年は忽然とそこに現れた。

黒淵眼鏡をかけた髪の長い青年。

真っ黒な髪は背中まで伸ばされ、ちらばらないようにか三つ編に編みこまれている。

髪を留めているのは、一本のワイヤーかなにかで一つにながったナルコを思わせる細く平らな板状のものがいくつもつらなつた銀細工。それが風に揺れてぶつかり風鈴のような音を立てていたのだ。

前髪は左側だけ長く、意外と整った顔を半分隠してしまっている。

もしかすると意図的に隠しているのかもしれないが、それでは余計目が悪くなるのではというつつこみは相手の独特の不思議な雰囲気

に飲まれて口にするものはいない。

背丈はルフィと同じぐらいか少しばかり低いだろう。

かなりの細身で、格好は少し変わっている。

黒いズボンに首元を隠すような黒い長袖。

その上に白い着流しを着ていて、腰には少し眺めの日本刀が二振り刺さっている。

風が揺れ、もう一度背筋を伸ばして立った青年の着流しの背には大きな字で「正義」の二字。

やるきのなさそうな態度は青キジを思い出させるが、青年のその背に書かれていたものをみて甲板に集まっていた全員が一気に臨戦態勢をとる。

ゾ「てめっ海軍か!!」

サ「海軍がなんのようだ!!」

リ「は?って、ちょっと…まったくだからめんどくさいのはイヤだったのに」

ギンと金属音を立てて抜刀したゾロと、いますぐにでも飛び掛つてきそうなサンジ。

女性陣もそれぞれ得意のものを構え……

青年はみてるこちらが同情したくなるほど深く、それは深く深くため息をついて、

リ「あゝ害をなすつもりはないのでおかまいなく。

ちよっとお訊ねしたいことがあってたち寄らせてもらったただけなんです…。

はあゝ、もう、ホントそう警戒しないでください」

青年は「心底イヤダ。疲れた」という疲労の顔でその場にしゃがみこんでしまった。

その様子にすべての警戒は解かないものの、話だけは聞いてみよう」と視線で頷きあう麦わらクルー。

青年は深いため息をついてカランと下駄をならして飛び上がると、ふわりと音もなくゾロの前に着地する。

あまりに音もなく警戒心もないそれに、しかしゾロは一步も動くことができなかった。

リ「君がゾロ？であっちがロビン？」

目を細めて相手を確認すると、いかにもだるそうな表情で手を懷につつこみ何かを探すようにガサゴソとあさったあと、「いやんなるな」とぶつくさつぶやきながら分厚い書類の束を取り出す青年。

リ「えーっと。まずお尋ねしますがここは麦わら海賊団の船で間違いはありませんか？」

つで、あっちの素敵な女性がナミさんで、ロビンさん。

……微妙に似ているようで特徴はしっかりつかめるので似ていないこともないこの似顔絵がサンジさんでよろしいですか？」

相手が懷から出した紙の束が手配書だと気づいた四人は、緊張をさらに深める。

つが、サンジだけは、画青筋を立てて怒りをあらわにして、しまいには嘆いている。

サ「微妙も何も似てねーよ……」

サンジは一瞬で魂が抜けたようんどヨンと打ちひしがれてしまう。

それに青年は見えている右目にうつすらと涙を浮かべ、魂が抜けて風化しかかっているサンジの肩をやさしくぽんとたたいた。

リ「ああ、わかりますその気持ち。さすがにこれはないですね。自分も昔、軍中にあらぬ顔写真を貼られ、どれだけ打ちひしがれたことか。

だれもオレがオレだって信じねーし（ボソリ）

もしかするとオレのときのポスター書いた奴とあなたの似顔絵書いた人、同じかもしれませんね。

あゝなつかしくもイタイ思い出だな。

あとでそいつ抹殺しとくんでまかしてください」

サ「な、なんていい奴なんだお前！！」

リ「あーはいはい。

それで？あの帆が正しければここは麦わら海賊団ですよ？」

ナ「え、ええ。そうだけど…。

えーっと。それで、どちらさま？ってか何のよう？」

リ「ああ、すみません。申し送れました。

海軍本部から参りましたリースと申します。

ただのそこらで雑務をこなしている下っ端ですんでおかまいなく」

ロ「下っ端が背中に正義の文字をつけているのは始めてみるわ」

リ「む。そういうことは見てみぬふりをしていただけると嬉しかったのですが…まあいいや。

それと海軍からきたといっても上は関係なく、むしろこの行動自体極秘でもって独断なんで、どっかの海軍とであってもオレのこと言わないでください。

あ、これ海軍本部で販売してる限定焼き菓子です、よかったらどう

ぞ。結構いけますよ」

サ「…茶でもいれてくるか。座って話そうぜ」

リ「あー、お構いなく」

ナ「敵意がないのはわかったわ。それで？本当になんのようなの？」

リ「うちの馬鹿ズが世話になったようなので、ぜひにもうちのバカどもを一発長男として殴らせていただこうとはせ参じました」

ウ「バカズってだれのことだ？」

リ「あれ？聞いてないですか？自分、ルフィの兄その1です。

いつもうちの大馬鹿野郎がお世話になっているようで本当に申し訳ありません。

ところでエース来ませんでしたか？

なんかあいつグランドラインを逆走してるみたいで…気になったんで後を追ってるんですけど」

ナウサゾ「……ルフィの兄！？」「……」

「に、にてねー」

「てかちっさ」

リ「……はあ」。本人の前で相違ことは言わないでください。傷つきます」

- - - - -

ル「リース！なんでここに！！」

リ「ルフィか。いまごろきたの」

ル「リースうう・・・いたたたたたた！！！！」

うれしそうに駆け寄ってくるルフィにちかよるなり、リースは思いっきりルフィの頬をひっぱってひねった。

それに呆然とする仲間達。

リ「お前いいかげんにしろよなあ。オレがどれだけめんどくさいかと嫌いかしってるんだろ？」

なのになんでエースはグランドラインを目立つように逆走するは、いくさきざきで地域の皆様に名前を覚えられるように行動してる麦わら小僧がいるわ。

エースなんかは予想よりは役黒ヒゲと早くぶつかったらどうしてくれるんだよ。

そんなことしてみろ死ぬぞあいつ。

ってか、お前はお前であの砂ワニの気違いとたわむれてるし。

なに王女仲間にしてんの？後始末の裏工作の方が大変だったのはどうしてくれよう。まあ、いいけどさ。

それにしてもお前いつも死にかけるなあ、お

い。マジで死ぬき気かよボケ！まだ音楽家っていう野望一つもとげてねえのに死にそうになってんじゃねーよ。このタコ。それじゃあ

お前の人生つまんねじゃねーか。もつと暴れてから死ぬ。

骨でもなんでもいいから仲間にしてもつと強くなれよ。

つてか、仲間にしまえばこっちのもんだ。

王女だろうが元敵だろうが、犯罪者扱いされたものだろうがどんな気に入ったら取り込んじゃえ。

お前は悩むな。お前の判断で傷つく奴はお前の仲間じゃねーから、お前がやりたいことをやってそれでもついてくる奴のみ相手にしろ。こないなら巻き込んじゃえ。周囲を巻き込んでそれでもお前が満足できる結果が出たら喜んどけ。

つてか、ビビなあ。あれやばいよなあ。一国の王女だし。後処理がめんどくせー。どう隠蔽してやるうか。

ああ、もう。親父が聞いたら笑って喜びそーでいやだ。

あの真東親父にどう報告しろと？

いつも同じ方向ばつかみてるってサウスバードっぽいな。今度ソレをネタに笑ってやるう。

そもそもなんでオレがお前のことで冷や汗かかないといけないの？ どうせうまくいくってわかっててもさ、こっちは気が気じゃないんですけど。

いいよ別にさ、お前が死ななくても冒険楽しんでるのもわかってるけど……あーそういえば、オカマ王の10年の寿命の行方がきになる。ああ、今はそんなのどうでもいいか。

つてか、王女と仲良くランデブーはともかく、クンフージュゴンになつかれてんじゃねーよ。あれが一番やべーよ。チョッパーいなくなったらどうなったことやら。

そもそも今回は爆弾でみんな死ぬかと思っただし。

あのバカ鳥、生きてるなら生きてるで、わずらわしいまねすんなよな。

肝冷えたし。オレの肝をいくつ冷やせばお前は気がすむんだ？

てか、お前らさあんまり無茶ばかりすんなよ。いやいやルフィにかぎったことじゃなくて、この船の全員な。

あとメリーもな！無茶すんなよお前が一番やばいんだから！

兄ちゃんとしては責任を感じるわけで、お前ら全員がどれだけ生命力強くてタフなのかもわかってるけど、気になるから！

いや、ほんとまじで気になるから！！

とくにお前だこのボケゴム。仲間を守ろうとするのはいい。っが、それ以上におまえ自身を守れ。

全員死なないとわかってても気になるし。ケガしたらいてーじゃん。ルフィ、お前いい友達いっぱいできてよかったな。

ここのクルーも出会ったやつらも、友達は一生もんだぞ。つてか、ともだちっていえば。

…そういえばオカマのボンクレーつかまったぞ。まあ、そのうちあえるだろうから今はどうでもいいか。

あの砂の国の一件のせいでスモーカーさん俺に八つ当たりするし、たしぎバカだし。あ

いつオレより目が悪いんだぜありえねーし。

ヒナさんうるさいし。じいちゃんが喜ぶしそのとばっちりこっちにくるし。

青キジがきになる女の子追いかけて仕事から逃げ出すのが見えてて腹立つし。

反乱&革命って言ったら、絶対間違はなく親父喜んでるし。

すべての原因はおまえだぞ！なに無茶してくれてんのお前？

これから自分の仲間増やすなら、もっともっと強くなれよ。守りたい奴がいるならさ。とくにエースとかエースとかエースとかエースとかさ」

エースしかいねー！！

リ「あいつ助けたいならもっと強くなってから海軍にいどめよ。ジジイにとどめさせるぐらいさ。

オレあいつのせいで正義の文字背負ってんだぜ。

千尋の谷やら、風船で子供とばすとかありえねーしあの糞ジジイ。つてかオレが悪口言ったのは黙っとけよ。またオレが八つ裂きにされるから。

あゝそれにしてもマゼランくせーだろうな。

おまえ、メンメン言う犬ごときにふみつぶされたり、地獄の業火に落ちて死ぬなよ。

死んだらオレが地獄の底まで鉄拳くらわしに行くから覚悟しろ。

はあゝ。マリージョア早くこわれなかなあ。マリンフォードの上司うぜえ。

レイさんにあいたいな。

九蛇のひとたちって露出しすぎだよな。オレも旅にでたいな。

ル「ちょ、ちょっとリリース！何に言ってるかわからないんだけど！？」

リ「んあ。あーわるい。つい、長年ためていたあふれんばかりの想いがつい愚痴となって口からもれ出た」

ル「つてかおれって親父いんの？」

リ「えーそこ。くいつくの。せめてボンクレーあたりでくいつこうよ」

ル「えー。でも会えんだろ？」

リ「…お前たちは会える」

ル「だったらボンちゃんとはそのときにでも本人から聞くよ。つてか親父の方がきになる」

ルフィのその言葉にリースの表情が一瞬でうわーめんどい。っていうものにかわった。

リ「爺に聞けよ。どうせ……どこだっけ？そうそうそのうち変な頭の二人と一緒にあえるからそのとき聞け」

ル「わかった」

リ「あゝ。そういうわけで。愚痴をこぼしにきたわけではないのですよ」

少し考えたような動作のあと、シャランと髪を揺らしてリースが集まった全員のほうへと視線を向ける。

いまだイテーと顔を赤くして甲板でうめいている弟は無視する。

リ「…もうしわけありませんが、うちのバカよろしくお願いします。本当にバカで考えなしであなたたちにご迷惑ばかりかけると思うところ胃が！ギリギリと絞られるように痛むんですが。

まあ、うちのも世話かけてばかりじゃないみたいですし。

あなたたちとこれから出会う仲間たちがそいつについていくっていうんだから仕方がない。

兄としてはもう気になって気になってしょうがないんですがね。いつ無茶するんじゃないかって。や、いつも無茶してるから、の方が正しいか」

ウ「あ、エースもそんなこといった」

リ「「でしうね

- - - - -

リ「……ルフィ。何があるつとあきらめるな
ル「リース？」

リ「空は……あきらめなければきっと手が届きますよ

ナ「え？」

ロ「まあ」

どうして次の目的地がわかったんだろう？

- - - - -

ナ「なんか。不思議な人だったね」

ル「リースは昔から分けわかんないことばっか言ってたぞ」

ル「でもさ対外リースの言った言葉に間違いはないんだよ」

ゾ「あの兄貴…能力者じゃねーか？」

ル「さあ？」

ウ「そういうえば突然現れたよな。なんの能力だありゃあ？あんなのみたことないよ」

ナ「未来を予知できるのか？」

ル「それに近いことは悪魔の実食べる前からだぞ。

ふだんはだれくっとしてて本ばっか読んでてで、家から一歩も出ないくせに、おれやエースよりも強くてさ。

おれら一度も奇襲に成功したことないし」

ナウ「奇襲かよその兄弟！！」

ル「キレルと口調が悪くなるは、すぐ拳が飛ぶわ。

ふてくされてもきれてもなんかよくブツブツと喋ってた」

ボツ01 (10・06・30) (後書き)

そういえば…全員の手配書が出回ったのは、W7後でしたね。

なにぶん書いたのが、連載当初だったもので、メモがき程度のつもりだったんで、みせられたものじゃないんですよコレは。

その時点で、この文章はやっぱり使えない。

そんなわけでボツ話でした。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます！

本編の方は相変わらず修正中です。

もうしばらくおまちください。

いろいろもうしわけありません。

ボツ02 (10・07・02) (前書き)

またまたボツ話2です。

もともとはリースの武器を何にしようかと思って考えたもの。

ある雑用さん視点のリースのはなしとなっています。

こちらのボツリースは足が悪いことになっています。

でもって物凄く口が悪くて、本編以上に物凄く卑怯です(↑だから

ボツになったり…)

口が悪くて本当にごめんなさいといたいorz

ボツ02 (10・07・02)

【期間限定のおはなし】

くボツ話02 黄昏ちゃたある海兵君とリースの武器のはなしく

【ある雑用君は見た1】

リースさんは凄い人だ。

悪魔の実の能力者でもないし、六式も使えないけど、海賊を一網打尽にしてみよう。

幼い頃に事故にあったとかで、視力もほとんどなく、足も悪いらしい。

それなのに能力者に引けを取らない。

そんなところに一般人からの出立した海兵たちの中には、彼の斬新な発想に共感し、ときに憧れる者も多い。

かくいう俺もその一人だ。

今日は日用雑貨の補給作業という雑用にあけくれていた。

あらかじめ必要なものを注文表に書いてもらい、それにしたがって各班や部隊に届けるのが役目だ。

最近はリースさんの作った石鹸が売れ行きがいらしく、注文が多い。

リースさんに憧れている俺としては、今回の仕事は嬉しいものだ。なんたってリースさん本人と会えるめったにない機会なのだから。

リースさんは、科学班によく出入りをしているので一般兵である俺は本当に会う機会が少ない。

以前も一度、リースさんに書類を届ける仕事をして話したことがある。

リースさんの部屋は、やっぱり研究室みたいに試験管やかき氷器、名前の知らない機材がたくさんあって、それよりも床が抜けてしまっただけじゃないかと思うほどの本で埋め尽くされていた。

その部屋からいつもリースさんの発明は生まれる。

そういえば、こないだは木の皮から時間をかけて紙をつくっていた。

海軍が栽培している花から食用油を採取したり、そこら辺に生えているような植物から美味しいお茶をつくったり。

食堂から出た余分な油で石鹸を作ったりもしている。

石鹸に関しては、あのあとおつるさんと一緒に材料から見直して新しい物を作っていた。

改良を加えられた石鹸は好評で、その後マリノフォードで出回ることとなる。

俺が今回注文依頼をしに行くのもその新製品の方である。

「ああ、ありがとうございます」

以前書類を渡したときのあの笑顔が可愛い。

海軍でも悪魔の実を使わない凄腕の将校ときいていたから、強くてもくましい姿を想像していた。

けど実際目にしたリースさんは、俺よりも背が小さくて海軍にはあるまじきほんわかとした優しい空気をもとう人だった。

眼鏡でほとんど見えないが、大きめな瞳はキラキラとしていて、顔

立ちも意外と整っていて一瞬女の人かと疑ってしまった。
長い黒髪も本当にキレイで、上司という意味での緊張よりも触ったら壊れてしまうんじゃないかという恐れに俺は動けなくなってしまった。

でもやっぱり俺より年上というだけあって、色々考えすぎて固まっていた俺にリースさんは苦笑すると、子供を相手するように頭をなでられた。

少し背伸びをしていたのが、また海軍の男らしくなくて——本当に小動物のようで癒し系だった。

いつものように石鹸を補充する依頼のためとはいえ、今日もまたあの笑顔が見れるだろうか、内心浮き足立っていた。

俺は鼻歌でも歌いたい気持ちでリースさんの研究室に向かった。

そのとき、もつと場所をわきまえた行動をするべきだったと気付いたのは後の祭り。

俺がリースさんの部屋に着くと、少し扉が碍いていた。

本来なら相手は海軍少将。自分はしがない雑用。

地位身身分も何もかも違うし、相手は上司のさらに上司。

碍いていたからといって、部屋の中を覗き見たり、ノックもしないのは失礼であつたが、そのとき頭に花がわいていた俺にはそんなこと思いつきもしなかった。

ためらいがちにも扉の隙間から中を覗き——
見てしまった。

なぜかリースさんが、一つの固形石鹸を眺めてリースさんが笑っ

ていた。

それはあの優しげな笑みなんかではなくて…

「石鹸って…すべるんだよねあゝ」

口調も違った。

なぜか背筋に悪寒が走った。

みてはいけないものをみた気がした瞬間だった。

【ある雑用君は見た2】

リースさんの元に配属されてから、あのひとのいろいろありえないことを知ってしまったから、リースさんが物凄く料理が美味しいのを知った。

このときばかりは部下になってよかったとさえ思えた。

リースさんの部下になると、リースさんの手料理が食べれるのだ！

しかもうまい！！

俺は両親が共働き、男ばかりの兄弟のなかで育ち、少しは手料理というものに慣れていた。

リースさんのご飯の美味しさは、いつかレシピを教えてほしいと思ったほどだ。

——今日も俺は雑用をこなす。

海軍に入って間もない俺はやはりいつまでたっても雑用兵であり、肉体を鍛える鍛錬を終えた後は、いつもどおりに床をピカピカに拭いて、調理場のほうへ野菜を運んだ。

調理場へ付くと、今日はコックがひとりもいないかわりに、髪をひとつに結ったリースさんが腕まくりをして流しの前に立っていた。いつも長袖で暑くないのかと思っていたが、まくられた袖のせいであらわになった古い傷跡に——事故にあったという噂を思い出した。リースさんも周囲の人も誰もそのことを言っていたことがないので、言いたくないのだろうと思って、傷のことには一切口にも顔にもださず、気持ちを切り替えるつもりでリースさんに手伝いを申し出てみた。

少しなら腕に地震があると伝えたと、リースさんは嬉しそうに笑って俺の参加を認めてくれた。

なにせこここの基地は小さいといっても人数がそれなりにいる。

一人では大変だとは思っていたからちようどいいと言われた。

大変だと思うなら声をかけてくださいよと思った。

「さあ、やりますか」

「はい！」

リースさんの声に元気よくこたえる。

隣にはリースさん。
目の前には魚。
なんか、嬉しい。

こんなところで家庭スキルが役立つ日が来るとは思わなかった。
俺はさすがにコックではないので、本物とは劣るが主夫としての腕
はあるつもりだ。

リースさんの指示に俺も野菜を切ったり、煮込んだりして――

「リースさん。この魚のムニ…」

ザシュツツ！！！！カット！カット！チャポチャポチャポ…。

指示を仰ごうと振り返った瞬間。

リースさんは包丁を投げた。

しかもその間に大根が宙を舞い、リースさんの腕が一瞬消えたかと思
うとまな板の上に数本の串が刺さっていた。

串には見事なおでんの具が複数串刺しにされていて、さらに頭上か
らはきられた大根の一部が鍋の中に落ちて行く。

「料理をする包丁なげてなにしてんですか少将！！」

「え？なにつて料理。投げないとその間に作業できないでしょ？」

「何処の職人ですかアンタは！？」

そこでふとみると宙でクルクル回っていた包丁が重力に応じて落
下を始めた。

獲物を狙った鷹のように直角に落ちてくるそれにヒィー！と慌てて
逃げようとしたら、リースさんがとびあがってソレをキャッチした。

——スタン！！

カキイン！！！！

見事な着地をしたリースさんの手にはなぜか包丁が二本交差するように持っていて、どこにあったのか魚の刺身が調理場に増えた。

あれ？

なんだろうこの光景？

【ある雑用君は見た3】

「ちょー！や、やめてくださいー！！なんでオレを狙うんですか！もつと弱そうなのいっぱいいるじゃないですかー！！」

「あの中で一番弱そうなのはお前だ女あー！！」

「んなつ！ひどー！！見た目で人を判断するなんて」

「お前の首を取ればこちとら名が挙がるというものー！！」

「そんな簡単に首は抜けません！」

「だから狩るんだよー！！」

「遠慮します！」

そういつてギャーギャー逃げ回っているリースさんをみて……あの人走るたびに何かが落ちているのに気付いて顔が引きつった。周りでは心配そうにリースさんをみている者、二人のやり取りなど無視して残党の処理に当たる者など、反応は様々だ。

だけどリースさんがこっそり落としている物体に気付いている人間はほとんどいないようだった。

いつもリースさんにくつついていた（こき使われていた）俺だからわかる。

もうじきこの鬼こっさも終盤だろうと。

同じように、リースさんという人をよく知っている大佐が、俺の側にやってきて足を止める。

「そろそろか」

「そうですね。今日はたしか食事担当リースさんだったので、今回は“アレ”がでるんじゃないかと」

「食事担当……ってことは、間違いなく“アレ”だな」
「ええ」

俺も大佐も互いを見ることなく、ただリースさんの動きを見つめていた。

そして。そのときはきた。

ズベツ！

ゴス！！！！

リースさんによって床に投げ捨てられたいくつもの石鹼によって、海賊がすべって転倒した。

何が起こったかわかっていない海賊は目をパチクリと開いたり閉じたりしていたが、「面妖な術を使いやがって」と勝手にリースさんが強いという誤解をした。

いや、足元見ろよ。

リースさんは泳げないけど、能力者じゃない。

しかも身体に障害を抱えるあの人は、強くはない。

けどいつも誤解されるんだ。

そこがまたリースさんらしいといえばらしいけど、どうしてみんなあの人のイタズラに気付かないんだろう。

「リースのイタズラなんか気付いたら夢も何もかも崩れるぞ」

「大佐。心の中まで読まないでください」

「まあ、私はしっていたからな。お前はリースの本性知ってるんだろっ？…崩れた側だろ」

「海軍が何たる力を知る前にリースさんの元に配属されたんで、夢を抱く時間もなかったですよ」

「それはついてるんだか、ついてないんだか。…ああ、そろそろでるぞ」

立とうとするたびにすべる床のせいで立てないのを海賊は、力が入らないと誤解していく。

そんな相手にリースさんはニッコリと笑って――

「だれが女だー！！！！この豚汁の具にも与えないコレストロールの塊があー！！！！」

貴様のような腐った肉が世に出回るから大豆を肉の代わりに使うと考える人間が出るんだよ！！賞味期限切れなんかごまかすんじゃないよ！！ってかお肉様に謝れ！！お前なんか食えるかー！！」

ああ、切れてたのか。

というか、女や弱いなどと暴言を吐いた相手も悪いが、あんたの方が酷すぎるから。

料理に物事を例えるのはかまわないけど、きつとその言葉の嵐だけで敵の大将も心が木端微塵にきざまれたことだろう。

「あ……」

「終わりだボケ！！」

「おわったな（りましたね）」

いつの間に海賊の側まで来ていたのだろうか。

【剃】が使えないくせに逃げ足だけは尋常じゃないほど速いリリースさんは、般若のような顔で海賊のすぐ脇に立っていた。

そして罵声を上げながら、手にしていた赤い物体を思いつきり、果然としている海賊の口につっこみ吐き出さないように身体をたたくことでそれを飲み込ませた。

「……」

海賊は絶叫を上げて、のどをかきむしるようにして暴れ続け「水」「みずをくれ」とその場にうずくまってしばらくしたら意識を失った。

「ハイ。海賊船長一丁捕獲うー。ついでに縄もってこい縄ー」

ノックアウトした海賊をみて、やる気なさそうに手をパンパンとたたいた大佐は、そくさくと後始末にかかる。

その際、懷から香水ビンのようなものを取り出して、海賊の顔に吹きかけていたのは、中身が何かを知る自分には耐えられそうもなく、視線をそらした。

あの大佐が使った香水。

あれもまたリースがつくったもので、特に女性海兵が好んで使っているものだ。

使用例は変質者に負われる女性が自分の身を守るためによく使われる即効性の秘薬。と、いっても睡眠薬やら毒、クスリのどれでもない。

実はあれ——ただの唐辛子と胡椒入りの水だ。

それが予想以上に効果があるので、あれを女性陣がしつこい男対策に持ち始めたら、世の男たちにとってみれば恐ろしいことこの上ない。

いやー。あの海賊、起きたとき死ぬね。

可愛そうに。

「しこ愁傷様です」

防犯用香水を懐へいそいそとしまつと大佐が、何食わぬ顔で戻ってきた。

俺と視線があつと――

「とりあえず数千万単位の高賊だからトドメ刺しといたがやりすぎたか？」

白目をむいたまま運ばれていく高賊の姿を見て頭をかく大佐。

その姿に是と頷いておく。

やりすぎな大佐の次の被害者が出ないように……。

なにせリリースさんのあの赤い物体だけでも破壊力は抜群のはずなのだ。

それに追い討ちをかけるこの人の凄さに感服しそうだ。

「ハバネロと唐辛子の摩り下ろしたもののだけでできた激辛団子。

知っていたら呆れるだけの技だけど。あながち間違つてないですからね。」

さすがに大佐の“擬態香水”はかわいそうに見えましたよ」

「いや、高賊だし。生ぬるいリリースのことだから、あいつのかわりにとな。

念には念を入れたんだ」

「念つて……さすがにいれすぎですよ大佐。

“アレ”はハバネロの塊ですよ。

それを食べて正常でいられる人間は、毎日ハバネロを食べている変人ぐらいですって」

リースさんが相手を転ばすために使ったのは、泡立てただけのただの石鹼（ただしリースさんお手製）。

そして敵を一撃でのしたのは、ただの唐辛子とハバネロの辛さ。

実際、どこの市でも買えそうなものばかり。

こんなもので海賊を相手にできるわけないと誰もが笑うが、リースさんは見事にそれを“可能”にしてみよう。

着目点は悪くはないと思う。

元をたどれば、能力者や海賊といえどただの人間なのだから。

効果は言うまでもなく絶大だろう。

「ただ、だからと言って、実行して人間一人を倒せるかというと――普通は無理だ。」

「海賊を前におびえることをしなければ、剣なんかなくともガムテームだけでも戦えるのかもしれないね。」

人間、やればできるって、今ならそう思えますよ俺」

「お、おまえ……リースに感化されすぎだぞ」

視線が青い空と白い雲を捉えた。

視線が宙を彷徨う。

そんな感じの俺。

そんな自分の様子に、最近リースさん繋がりで親しくなった大佐が、慌てたように俺の肩をつかんで揺さぶって現実へと引き止める。

「もどつてこい！！人間を捨てるにはまだ早い！」

リースみたいに生活の中で武器を作らなくともまっとうな武器を扱えるようにしてやるから！

もどつてこーい！

そんな声が聞こえた気がした。
お偉方と親しいとある雑用の一日。

ああ、今日も空が青い。雲が白い。海が青い…

ボツ02 (10・07・02) (後書き)

＼(。ロ＼)ココハドコ？ (ノロ。＼)ノオイラハダアレ？

お疲れ自分！

みんなー！オレ、がんばったよ！！

いや、まじでここまで長い文章によく耐えたオレよ！！よく書いた自分！！

そんなわけで、やっぱりどこまでいっても自分は自分でしかないらしく、ギャグが一部混ざってますねorz

シリアス宣言しときながらここまでやっただけでもう自分の魂抜けてます。

今回のやつとでました「リースの覚悟」。

でもこの覚悟、なんかおかしいです。

リースにはちゃんとワンピースの世界の住人になってほしかったのですが、相手はリース。

どうもこの人本当にやる気がないみたいで(汗)

生きるために逃げ足を早くするというとんでもない「覚悟」しちゃいました。

本当にヘタレですね。

期待を裏切ったらごめんなさい。

でもシリアスはここで終わりですので、コレ以降は安心してゆっくり笑いながらご覧ください。

……長かった(グツタリ)

ボツ03 (10・07・06) (前書き)

ボツ話集NO.3

今回は一番最初に入れようとして、結局未使用のままつかわれなくなったゼロページ目を発掘したのでアップ。

家のフォルダーを整理すると、なんかいろんな文章の断片が出てくるよ(汗)

モッタイナー…

ボツ03 (10・07・06)

【期間限定のおはなし】

くボツ話03 世界さえも震撼させることができる悪魔の実があったトサく

その世界には、悪魔の実と呼ばれる実がある
それは人々に不可思議な力を与えた
実によつては片手間に世界を滅ぼせるだけの力を秘めたものもある

ある男が食べたソレこそまさに――
世界さえも震撼させることができる悪魔の実であつた……

食べた者の心一つで一瞬で生み出され壊すことができる能力
その不可解にして最強の実を食べ、さらには政府に大きな地位をもつ者は願つた

「寝不足で死ぬ……寝たい」と

――悪魔の実？
そんなものなくなつていいよ。
むしろいらねー！！よんなっ！ちかづけるな！

——富？名声？力？

んなもん、いらんて。

それより、身長と睡眠時間をください。

——え？海？冒険？仲間？神秘？

いや、好奇心より命の方が大事だから。

それにオレは普通の一般人で弱いから、冒険なんか言ったら即死ぬから。

自ら死ににいく趣味はないよ。

——その地位は何を犠牲にしたか忘れたのか？

犠牲って言われても… なにか犠牲にしたっけ？オレの地位って結局は七光りだしね。

むしろ勝手にあがめられて、勝手に地位を押し付けられたので犠牲をだしたというよりオレが被害者じゃね？

え？殺し？実はまだしたことないよ。怪我は負わしたことあるけど殺してない。

だって殺すの嫌いだし。いろいろメンドーじゃん。

だから全員生きて捕らえるのがモットーだし。

——とりあえずなにがしたいんだ？… っていわれてもね。

なんか色々追求されたけど。

それより今日の畑の水遣りをしていないことの方が気になる。

今日の夜ご飯は何にしようか。

——ならなにがほしいのか？つて。
オレの身の安全の平和。

そんなはない願いを夢見るとある海軍将校の数奇な物語。

ボツ03 (10・07・06) (後書き)

全部修正してからアップしないと、また最初の方に修正箇所が出そうで…

後で迷惑かけるなら、初めにやっつけてしまおうとか思っでごめんなさいorz

なかなか本編をアップできなくてごめんなさい。

まだまだ修正中・・・

ボツ04 (10・07・09) (前書き)

ボツ話、その4

今回は「旧・奇跡の海」でのボツシーン。

リースとドレイクさんとあわしたかったのは、ルフィが映画「デッドエンド」でドレイク少佐に迷惑をかけていたから。

このときのリースはすでに20歳設定で、一度見た事は忘れないという記憶力の持ち主だった。

本編では予想より早く会っし、リースがなんか違うので、とりあえずボツとしてアップ。

ボツ04 (10・07・09)

【期間限定のおはなし】

くボツ話04 映画に続く、原作シャボンディにつながるはなしく

「ようこそおいでくださいましたリース少将！」

「ドレイクさん！！かつこいいあなたにあこがれてました！（前世を含めて30年ほど前）」

「へ？」

ルフィとシャボンディ諸島であうドレイク船長と同じ名前に、そういうえば彼は元海軍だったなと記憶をたどる。

前世の頃から大好きなキャラの1人だったので、だされた手にとびつくように握手をし、そのままぶんぶんとふっていた。

ここまで子供っぽいことはめったにやらなかったためと、海軍では軽い性格のものは少なく驚くドレイク。

リースはもげるんじゃないかとふっていたドレイクの手を離すと、ふとなにかがひっかかるのを覚えた。

一度見たものは絶対忘れることができな自分の記憶に、海軍姿の彼が目に入る。

なんだっただろうか？

首をかしげて考える。

記憶の中の原作のページを脳内でめくる。

いや、“めくつた”覚えはない。

そこでふと将来バツ印が似合いそうな少佐の姿を見て、リースは目を見開いた。

このひとつで、映画ででたじゃん！！

「あれ？あなた」

「な、なんですか？」

「いえ。どこかでみたなあ〜と思ったら“デッドエンド”のときたくさん海族を返り討ちにしていた人ですね。納得しました」

「でつとえんど？」

「ああ、いえ。こつちの話です。あれが本当にこちらで起こるとは時間軸的に考えてありえなそうなので…わすれてください」

そこまで語るとリースはニヤリと、それはそれは妖しげな笑みを浮かべた。

「つで、さらにいうと、シャボンディ諸島で見ることになる顔で」

ナバロン要塞の海軍本部少佐

ディエス

X・ドレーク

通称：赤旗

懸賞金：2億2200万ベリ

ドレーク海賊団船長。

北の海出身。

元海軍少将。

動物系・古代種的能力者であり、恐竜に変身できる

「遠くない未来で愚弟がご迷惑をおかけすると思うので（二度ほど）先に誤らせて下さい」

そんな出会い。

このあと「己の道を進めばいい」とかいったリースの言葉をきっかに海軍を出てしまえばいい。

ドレイクを逃がすなと言われても、腹黒リースは、笑って逆に応援してそう…。

「彼は彼の道を見つけたんです。

それがあのまっすぐな元海兵にとってどれだけ苦痛の選択だったかわかっているのですか？

彼をそうさせたのは、海軍だということとは？

流されるがままで己で道を見つけることもしないような海軍あなたたちごときが、彼の船出をとめていいはずはないでしょう」

つで、リースの能力により一網打尽。

——という展開。

ボツ04 (10・07・09) (後書き)

このリース黒いな… (汗)

このときの自分はバカで少佐と少将とか地位の順序を誤解してたことがあるんですよ (遠い目)

そういえばドレイクさんは少佐だったのか？あれ？

…まあ、あれですね。やっぱ、本編は修正と見直しを強化しないとダメですねorz

ちなみにこの話は、本編で違う形で使用してます。

結局「地味に」の話の中では、ドレイクさんは絶対どっかでリースと出会いますが、会うだけです (笑)

ボツ05 (10・08・03)

【期間限定のおはなし】

くボツ話05 ロジャーに聞きたいことがあるく

ねえ、貴方は後悔してない？

海賊王となったことを。

その称のせいで、貴方の存在が、貴方の周囲のものをすべて消してしまうとしても？

からっぽの牢屋を見ていたら、昔を思い出した。

檻の格子に手を突いて、今はいない人に問いかける。
それに答えがないとわかっていながら。

この中で会おうとき、貴方はいつもオレの言いたいことを理解してくれた。

だけどオレからは貴方に何かを言うことはできなかった。

赤ん坊でしかなかったオレの言葉は、赤ん坊のそれではなかったから。

本当は貴方とずっとたくさん話がしたかった。

「ねえ、『あの時』は聞けなかったけど、なぜ自首を？」

海賊王と呼ばれなかったとしても、貴方は海賊だ。

自首などしたら、彼の周辺の者達がどうなるか、考えついたはずだ。

「あなたはバテリラの民がどうなるとは考えなかったのか!？」

海賊王の子供を捜すため、関係のない子供も殺された事実は知っているか？

もういない貴方に言ってもしょうがないけれど、言わずにいられたかった。

ガンッ!

勢い良く牢を蹴ると、『落ち着け』とあの低い声が聞こえてきそうだった。

「だまれ!落ち付けたと!？貴方は自分の立場をわかっていないのか!？」

もしそれが未来に夢を託すための言葉だったとしても。

それが貴方の王たる者としてのプライドからくるものだとしても。

「お前の行動一つで、紡がれるはずの命さえ奪われたんだぞ」

――すべてが遅かったんだ。

「…そうやって、貴方はすべてを知っているように語る!？」

――俺の寿命も　そして　俺が海賊王と呼ばれたことも。今更すべてを否定するには無理があった。

否定しても周囲がソレを認めすぎていた。

「オレは、貴方が死に場所を求めて一年間さまよったんだと考えた。だから小さな国へ行った。

そこで運命が変わったのだとしても…

あの子のために、自首だけはしてほしくなかった！！」

——俺がバテリラにいけばどうなるかはわかっていたつもりだ。それにより奪われるだろう数々の未来も…

ルージュと出会った一年を否定はしたくない。

すべてが幻覚から来るものとしても、オレが知るロジャーならそう答えるだろう事が予想できる。

空っぽの牢屋を見やって、近い未来に訪れる出来事に唇をかむ。

『お前が救え。生まれてくる子を頼む』

「うるさい。お前の約束なんかしるか！！」

その後、オレは振り返ることはしなかった。

頭の中でコダマする声に、“父親”としての『奴』の顔に——

腹が立った。

勢い良く壁を殴りつけた。

拳から出た血をみても、オレの心は揺れなかった。

「後悔したと言ったらオレが殺しに行くところだったよ、ゴール・D・ロジャー」

ボツ05 (10・08・03) (後書き)

これはあくまでリースの妄想。

幽霊と会話しているようにしか見えないので、ボツになった話。

ルーターが物理的に壊れた。

このページもアップできるか怪しい状態…orz

いつ復帰できるか不明

ボツ06 (10・09・06) (前書き)

ボツ話なので、じかんがたつときえます

所詮壱円によるボツになったような過去のごみ文章です。

自分でも変だろと思う部分はあるのですが、ボツの一部なので修正するきは特にありません。

いろいろ変な部分は山のようにありますが、そこは多めにみてくれるとありがたいですorz

ボツ06 (10・09・06)

【期間限定のおはなし】

くボツ話06 ドンキホーテ・ドフラミンゴと名のない海賊く

『…名のない海賊のセリフ

「…ドフラミンゴのセリフ

『あなたは言った。勝者だけが正義だと…』

チリーンと鈴のような音を立てて、刀が鞘から抜かれた。
その刀の先は己の首にひやりと冷たい感覚を与えている。

すんだその音が聞こえてすぐ、背後から何者かから告げられた言葉
になぜか冷や汗が流れた。

ドフラミンゴは息を詰める。

『なら…お前ごと、この戦を一瞬で勝ちとれば、わたしはあなたに
とつての正義となるだろうか？

答えは否。正義とは結局、一人一人の感情論により変わる』

声が聞こえたと思った瞬間、身動きが取れなくなった。
それとともに今までにないほどの存在感が背後でふくれあがる。

「な！？なんだこれは！？」

気がつくのと、足が氷で覆われていた。

それを払おうとするが、なぜか動かそうにも指ひとつ動かすことが
できず、まるで自分の能力をそのまま使われているような感覚だっ
た。

それとともにすぐ背後で発せられるとてつもない殺気の混じった覇
気に、今までにないほど背筋が冷えた。

「こんな。こんな異様な気配の奴がいたらもつと早くに全員気付い
ているはずだ！！なんなんだよおまえは！？」

『一瞬の時を生きるただの泡』

すべてを守るには、数が多すぎる。

把握できない死傷者は守れない。

それでも一瞬でこの戦いを終わらせる力はある。つと——声の主は
語った。

ドフラミンゴはふいにその声に聞き覚えがあることに気付き、無理
やり拘束に抗って首だけを背後へと向けそこにいたありえないもの
に目を見張った。

「おまえは……！！能力者だったのか！！」

『悪魔の実の能力は、海の力をもって封じられる。お前もまたわた
しとてそれは同じ』

だからお前を殺すことも、消すことも一瞬だ。
今見たものを忘れるとばかりのことばにドフラミンゴは笑う。

「海…それがあんたの能力かい？」

『答える義理はないな』

彼はそれだけいうと、再び戦場へと姿を消してしまった。

その間にも身動きひとつできず、かといって周囲が“あれ”に気付いた様子もない。

ドフラミンゴが動けない隙を突いて、敵が襲い掛かってくることもなかった。

たぶん見えてないのだ。

それがあいつの異様さの正体。

「あのジョリー・ロジャーに刻まれた花は“誓い”の証だとも…聞いたことあるぜえ」

ドフラミンゴにとって、会ったことがある相手だった。

しかしドフラミンゴの知る“奴”は、能力の気配などさせたことはなかった。

あんな存在感があるくせに、なぜか幻のように印象に残らないような、異様な奴ではなかった。

ひきつけてやまないような奴でもなかった。

あんな髪の色や鋭い目もしていなかった。

すべてが違った。

それでも“奴”でしかない『モノ』を正面に持っていた。

それにおかしくなってドフラミンゴは笑った。

「クツクツク。あんな化け物までこの戦場にいるとはな。やはりここは中立だ。オレが生きていることこそ中立の証だ」

ボツ06 (10・09・06) (後書き)

とりあえずジャンプをちまみしたときのボツ話をみつけたのでアッ
プ。

すっかり忘れてしまったドフラミンゴの口調。

こんななんだったっけか？

こんな話あったっけ？みたいな気分です。

まあ、それはおいおいしつかり直します。

名前を呼ばれない変な人は、話が進めば登場したであろうオリキャラその2の海賊さんです。

「地味に」ではオリキャラはとりあえず2人だけ。

いつになったら、オリキャラ2の海賊さんやリースのからみがかかるんだろうかね(汗)

…チキンでごめんなさい。

文章読むに与えしないような汚くてヨムキもつけるような文章で「めんなさい」。

更新遅くてすみません。

いろいろチキンですみません

ボツ07 (11・02・08) (前書き)

2010年8月にかいたと思われる文章を発掘。

おつるさん視点で、頂上決戦の開始のゴングがなる少し前の出来事
のようです。

たぶんこのシーン使えないので、ボツということ。

このときのリースは海軍少将のようです(書いてたのが昔すぎて細
かい設定を覚えてないよ(汗))

ボツ07 (11・02・08)

【期間限定のおはなし】

〈ボツ話07 おつるさん視点で頂上決戦直前〉

100816

「どれだけ下がっても。世界の果てまで下がっても安全なところなんてありやしないよ」

いや…ひとりだけ。

安全な場所を作ってくれそうな存在がいる。

いろいろと“救える”かもしれない存在がいる。

『あの子』は予想外で。

何を考えているかこの私でさえさっぱりわからない。

そんな『あの子』が守ると決めたなら、世界さえも救うかもしれない。

ただ――

「さて。あの子はどっちにつくかねえ」

いつも企画外のことばかりやってみせる子供。

今回の処刑はそもそもあの子供にはつらいものになるときいていた。今回の処刑人。あれは『あの子』が家族と呼んでいるひとりだろう。ともに幼少期を過ごし、背をあずけあったという仲だとか…。

「なんとも惨い世だねえ」

背を守りあったとも同士が敵対しなければならぬなんて。

「おつるさん…」

ふいに声をかけられ、いま想像をめぐらせていた当の本人が目の前に現れた。

ふわりと白い羽織を揺らして突如として表れた青年を見て、そばにいた海兵たちがギョツと目を見張る。

突然現れた若者に海兵達が攻撃しようとしたが、その背に背負う『正義』の文字と私の制止で刀や銃から手を離す。

まったく、いつも驚かしてくれる。

だから敵だと疑われるんじゃないかい。

この子は…気配のないのは相変わらずだね。

「この戦争には参加しないのかと思ったよ」

「そんなはずないでしょ」

肝が小さいくせに、短気のせいでいろいろと首を突っ込んで暴れつくすことも。

そして誰よりもせこいことしかしないこの子なら、自分の家族が処刑というときに黙っているはずはないだろう。

感情の激しいことも。

それが・・・わたしたちにも相手にも敵意をむき出しにするでもなく、ただ平然とそこにいる。

なにか心境の変化でもあったのだろうか？

「現に、お前今までどこに行っていたんだい？」

「いままで？」

「いなかっただろう？」

「ああ、寝てました」

「お前のことだから・・・というよりつきりね。わたしや、あなたが処刑の途中で何かするんじゃないかとおもっていたんだよ。おかげでいまもヒヤヒヤだよ」

「最初はやろうとしたんですよ。」

センゴクさんがうちの子を処刑台につれていく間に、うちの奴だけ落とし穴で落として奪回しようとしたんですがね。

そうしたら間違ってセンゴクさんが落ちてきたらって……怖い考えがよぎったんです。そうしたらオレっておわりじゃないですか。

なので――」

これからです。

ニヤリと口恥を持ち上げて笑った子供を見て、この戦争は思っ以上に厄介なものになりそうだとため息が出た。

「それではおつるさん。オレはこれで」

「ああ。いっておいで。お前のやりたいようにしてくるといい。ただし世界は壊すんじゃないよ」

「うわゝ。どこまでお見通しなんですか？」

「まあ、おまえのことに關しては、あれだよ。あのセンゴクやガープよりは見てきたつもりだからねえ」

「そうっすか。では…これで。大好きでしたよおつるさん」

「これが最後にならないことを祈ってるよ」

「力はマックスフルパワーです!!」

「じゃあ、さつさといくんだね」

「あ、あの・・・いまのは？」

「海軍将校？味方なのですか？」

「たしかに海軍将校ではあるね」

だからといって味方とは限らないだろうけど・・・

「あのこは海軍少将リース。ガープの孫だよ」

「あの方が」

「あの英雄の孫！」

「う？んん？ま、まあ…たしかにあれがガープの孫だけど。あんた
らと思うような奴じゃあ…」

むしろ寝返るぞ。

そう告げようとしたところで、周囲の中將たちの目が輝いたのを目
にし、頭が痛くなった。

「そうですか！あの方が！！数々の海賊を倒してきた！会えただけ
でも光栄です！！」

「英雄の孫が味方だ！！」

「これで我らの勝利もまたきまつた！！」

「英雄の孫がいれば百人力だ！」

「……………」

ああ、こいつらもか。

あのわけのわからない子供に巻き込まれて、あの子が強いと勘違い
している人種だ。

あの子はなぜか勘違いされやすい。

しかもあの子の登場でこの場の士気が異常なほど上がっている。

「やれやれ」

ボツ08 (11・06・01) (前書き)

リースは海軍では「冬將軍」といわれるぐらい冷たくてすごい威圧感あるひとって思われている・・・という設定です。

ボツ08 (11・06・01)

【期間限定のおはなし】

くボツ話08 冬將軍とみんなの微妙な勘違いく

【リース視点】

ここは冬島。

ここは雪がふぶく、とある丘の上。

すぐに雪は降るし、風も吹く。

吹いた風はゴウゴウと耳元でうなりを上げて、なんだかいつも以上にうるさく感じる。

あまりにうるさくて、もしかして自分の知らない間に背後で部下のみなさんが宴会でもしてるんじゃないかと背後をやるが、なんもみえん。

そういえば自分目が悪かった。

眼鏡をかけていて見えるのが、せいぜい色と微妙な形だけってどれだけ目が悪いんだろう。

思わず目を細めてなんとか焦点が合うよう努力してみるが、これといって部下達が楽しそうな宴会をしているわけでもないらしいので視線をもどす。

つと、今いる自分の丘の下に、不明瞭ながらも巨大なタコがいるのに気付いた。

さすがにあれだけでかいとオレの目にもタコだとわかる。

ってか、この丘、あと2メートルほど進むと崖だった。

どおりで波の音が大きいと。

というよりあのタコ、タコのくせに岩場にはまっているらしい。

おかげでちよっと殺気立ってる。

そのうちあの岩場を崩しそうな勢いで暴れている。

うん。これはみなかったことにしよう。

チラリチラリ

ああ、また雪が降ってきた。

雪が降っているから、寒い。
たぶん。

事故にあつていこう寒いとか暑いとかイマイチ鈍くなっている自分には、こんなもんだろう。

けどここは空が澄んでいて気持ちがいい。

気付いたらこの世界でも空を見上げるのが癖になっていた。

医者いわく自分はあまり温度差がわからないらしい。

一定以上の熱さはゆだりそうでわかるが、寒さなどはさっぱりだ。

これも全て事故の後遺症らしいが、あの事故で生きているだけ、体を自由に動かせるだけでした。

雪も降ってきたし、タコが暴れて崖まで崩れたらたまらない。
帰るか。

たぶんころあいのもちょうどいいだろうし。

「風・・・でてきたましたね」

あゝ風が吹いてきたから帰らないと凍傷になるかも。

かかりつけの医者は風が吹いたり手が赤くなったら帰れと言っていた。

手を見ると若干赤いし、確かにうごかしづらいからそろそろ本格的に船に帰ろう。

そうしたらあったかい飲み物もらって、さっさと目的地に言って寝よう。

でも、帰ったら、また医者におこられるかも。

長居しすぎたかな。

まあ、早く帰る区切れに気付かせてくれたタコには感謝しよう。

たとえ軟体動物で、目玉ぐらいの大きさの穴があれば抜け競るはずのタコが、はまっていたのだとしても――うん。みなかった。

そうしよう。帰ろう。

そう思って振り返ったとき、なぜか雪に半分埋もれるようにおっ

さんが複数倒れていて、離れた位置では部下の皆様が顔を青くして震えていた。

でも目だけはキラキラとしていて・・・。

え？あれ？そんなに雪は寒かったかな？

それより、雪が振ったのが楽しかったのかな？

本当にオレの周りにはよくわからない人たちばかりだ。

ところで、オレの周囲で倒れているこのごつい人たち・・・だれ？

【第三者視点】

せつかくの休憩をかねた視察だったが、なんてことだ。

襲い掛かってきたのはこの近海で名をはせた残虐非道な海賊達。

どうやらこの冬島をねじろにしていたようで、偶然帰還した海賊達と自分たちはやりあうはめになった。

少し離れた場所では丘には、リース少将がいる。

一年ばかりあの人の部下をしているが、いまだに彼女が彼がいまいちわからない麗人は、眼鏡ごしに空を見上げている。

編み上げた黒い髪につけられた髪飾りがしゅらしゅらとこの北の風で音を立てる。

そうやってただたたずむだけでも相変わらず様になる人だ。

俺たちは、あのひとに焦がれて付いてきた。

だからこそよけいにあの方の手間を煩わせるわけにはいかない。

なによりこんなところで部下が海賊ごときにやられては、リース少将の面目が潰れてしまう。

俺たちは必死で、それぞれの武器を手に、中將をねらう外道なやか

らと剣を交えた。

海賊たちとの戦いは苦戦した。

はじめはいきこんでいた俺たちだったが、いかんせん数が少なかった。

もともとここへ視察のついでにたまたまよつたにすぎない。

その数少ない仲間の多くは船の番にここにはいないし。

なにせ散歩に出たいと告げた少将の護衛なのだから人数は初めからいなかったのだ。

むしろそこをつかれたといってもいい。

「逃げてくださいリース少将!!」

俺たちは人数の差でボロボロになった。

そんな俺たちをあざ笑うかのように、がたいのいい海賊達は、離れた場所にいたリース少将の元に向かう。

少将は【冬將軍】と二つ名をもつほど名の知れた海軍将校の一人。

新聞でもそのいでたちはよく書かれている。

海賊達は、リース少将の首を取ってさらに名を上げようとしているようだった。

ボロボロになった俺たちなどもうどうでもいいといわんばかりに、海賊たちは俺たちを通り越して、ただひとりがたたずむ丘へとむかう。

「少将!!」

あのひとは呼ばれるほどの声が聞こえないのか、リース少将は微動だにしない。

聞こえない——その可能性はある。

事故にあったのだと聞いたことがあるから。

役立たずの自分たちが齒がゆくなった。

逃げてほしい。

生きてほしい。

傷つかないでほしい。

助けたいのに、間に合わない。

あのひとのたてになるために自分たちはいたはずなのに・・・。

握った拳から血が流れる。

悔しい！！

——そのとき

風が吹いた。

ゴウと吹き荒れた風は、地面に積もった雪を一瞬舞い上げる。

視界が白で染め上げられ、その一瞬後には、20はいた海賊達が意識を失いそこに倒れ付している光景に目を見開く。

その場にいた全員が言葉を失った。

ああ、そうだ。

自分はなんてバカなのだろう。

あのひとは、リース少将は、【冬將軍】。

眼鏡の向こう側から覗くのは普段とは違う、なんだか祈るように眉間にしわを寄せたふせめがちのきつめの強い眼差し。

助ける——そんなことを考えた自分がなんておこがましいことをか
んがえていたのだろうと、恥ずかしくなってくる。

突如あふれ出したリース少将の街殺気は、まさに冬將軍の名にふさわしく身を凍えさせる鋭利な刃物のように周囲に風のように渦巻かせた。

襲いかかろうとした海賊たちは少将が一瞥を向けただけで、その気にやられて倒れふす。

きつとあれが将校以上が使うという「覇気」というものなのだろうと、あまりの凄さに言葉を失う。

少将は海賊達を倒した後、すぐに視線を外しまた空を見上げていたが、やがて下を見るようにうつむくと、次には海賊に怒っているのかそれとも別の何かを考えているのか、己の手をみつめ悲しげに目を閉ざし開いていた拳を強く握った。

自分の手が血まみれだと知って悔いてはいるがそれでも前に進もうとしているのだろう。

そんな哀しげでいて儚げな表情が、目に焼きついて離れなかった。

少将の傍に常にいるあの女医は以前言った。

よくひとりで空を見上げ少将に、彼女は「誰よりも生に執着してるのはあいつだ」と俺に教えてくれた。

だからこそ戦うことが嫌いなあのひとが、ダレよりも多く戦っているのだろう。

また風が強く吹きはじめた。

やがて風がおさまり、リース少将は髪飾りを揺らして、振り返った。

冬將軍は雪とともに訪れた。

ボツ08 (11・06・01) (後書き)

リースの覇気？

いいえ。タコの覇気です(笑)

いい加減本編すすめるよって感じですよ〜。

すみませんorz

文才ないので、すすまない(汗)

自分の脳みその妄想を文字にするのってむずかしいですね。

ゆっくりですが着実に頑張ってます。

01 ある日終わった人生と誕生（前書き）

これは ONE PIECE の二次創作です。
オリキャラがメインとなりますので、二次創作を嫌悪する方、原作
キャラにオリキャラが介入するのは嫌だという方はお気をつけ下さ
い。

01 ある日終わった人生と誕生

学校帰りに、本屋によって毎週月曜日発売の漫画雑誌ジャンプを買った。

どれも楽しみで、家に帰るなり即、一番気になっていた連載ページを確認する。

もちろんあとで最初から最後までちゃんと読むけど、まず一番は気になって仕方ない漫画にいくのが普通だろう。

ONE PIECE

今のオレの一押しはこれでしょう。

いやいや、だって今が架橋だよ。

これを最初にみないではいけないよ。

さあ、読むぞ。

そう思っ指定席である窓際に、だらしなく腰掛けて――

そこでふと外が騒がしいことに気付いた。

なんだろうと思って視線を雑誌から窓の外へ向けて…

「はあ！？なんだよあれ！？」

驚いた。

本気で驚いた。

はじめのうち言葉が出なくて呆然と口をあけたまま閉じられなくなつたぐらいには！

だって、窓の外にあったのは、銀色に光り輝く球体金属。
通称円盤と呼ばれるものだったわけで。
それがまっすぐこちらへ向かってきて…

一瞬後—— オレの視界は白一色に染まった。

さてさて、どうしたものか。
目の前にはひげ。

そしてオレは——

目を開けたら小さな赤ん坊になっていた。

「あぶうう（なんだこのヒゲ親父は！！！！）」

自分が赤ん坊であるからには、一番初めに目にするものは自分を見守る母親でないとおかしいだろう。
なのにヒゲヅラ。

しかもなんかみたことがある顔だ。

この顔はどうみても“かの海軍中将”。

オレの大好きなキャラの、そのお祖父様の中将にしかみえない。
でもそれだとおかしい。

“かの海軍中将”は現実でいるはずがないのだから。
なぜならば、あれはジャンプの――

「あぶぶうゝ（あのお、あなたは）」

「うおお！！みたか！こつちをみて笑ったぞ！！」

ヒゲ親父大誤解。

話を通じません。

ってか、今のは誰に言ってるんだ？間違いなくオレじゃないよな。

それよりいい加減スリスリやめれゝ！！

そうツコミたくなつたが、目の前のヒゲへ向けた疑問の答えは予想外のところから意外と早く出た。

それに驚いて、やめろと叫ぶタイミングをのがした。

側でクスリと笑う声があったのだ。

やわらかい女性の声だ。

この状況からして、もしかすると自分の母となる人物かもしれな
いと思つて視線をめぐらす。

そこでヒゲの後ろにベッドらしきものがあるのに気付いた。

どうやらそこにいらしいが、ヒゲ親父が邪魔でまったくみえない。でも間違はなく、もう一人部屋の中に誰がいるようだ。なら、やることはひとつ。

「あぶう。きや！きやあ（た、たのむそのひと！こいつをとめてくれ！）」

訴えかけるが、やはり口から出るのは赤ちゃん言葉だけ。

しかも相手からはくすぐったそうに笑っているように見えるらしく、目の前のヒゲヅラはだれくんと眉をたらし、鼻の下まで伸ばしている。

奥からは仲良しねと女性の笑い声。

「うんやわらかいのう！」

ガハハと豪快に笑いながら、少し年のいった大男が頬擦りをしてくれる。

ヒイ~~~~~！！！！

ヒゲがジヨリジヨリと痛かった。

いい加減にしてほしいけど。だけど体は自由に動かせないし、言葉も赤ちゃん言語しか出ない。

意識はジャンプを読む寸前まで高校2年生な自分のままなのに、自分の体は別物の様に勝手が悪い。

なぜか本当に赤ん坊になってしまったらしいと、今になってやっと実感がわいてくる。

つと、いうわけで。

もうこの際、赤ん坊になった事はなんとか認めよう。
原因は間違いなくあのUFOだろうことは明白だから。

それはともかく、

ガープさん。

…痛いんですけど!!

そう、目の前にいるのは、かなり若いけど、どこからどうみてもあの漫画にでてくる主人公の祖父モンキー・D・ガープそのものだ。
った。

ガープといえば、あれである。

ONE PIECE

つまりここはオレが今まさに読もうとしていたあのONE PIECEの世界ということだ。

しかもガープさんの腕に抱かれているという事は、オレは彼の孫か子供にあたる立場にいるに違いない。

ぞくにいう——転生。

あるいは憑依か…。どちらにせよこの状態は勘弁してほしい。
そろそろほっぺが赤くなってるって! ぜったいさ。

でもなんでONE PIECEなんだろう?

まあ、他の作品より遥かに嬉しいけど。

もしかしてジャンプを持ってたから?

それじゃあ、ONE PIECE 以外の世界に行く可能性もあったんだろうなあ。

でも最後の瞬間に強く思っていたことに影響されたんなら、オレがONE PIECE の中にいるのも頷ける。

これで原作の続きがわかるよ。しかもリアルで！……って、ちょっとまで。

それはつまり、オレが主人公？

だって目の前にはガープ。ガープの中には赤ん坊のオレ。

たしか血の繋がったガープの孫はルフィだけのはず。

ん？それじゃあ、オレはルフィか？それともエースか？もしかするとドラゴンだったり？

いやいやまで、落ち着け自分。

いくら原作より若いからといってもこの顔はどうみても子供を生むにしては年がいきすぎてる。

それすなわち。

オレ、ルフィ？

やべえ、それはやばい。

オレが介入することで、原作と同じようにはいかず、違う未来を歩み始めるかもしれない。

それじゃあ、原作の続きを知りたいオレとしてはだめなわけで。

それ以前にあんな死線ばっかりくぐりたくねー！！

どうしようと思って、とりあえず逃げ出してみようと思ったが、所詮赤ん坊。

首も定まっていなかったためか、首を傾げようとして逆に体ごとひっくり返しそうになる。

「うあ」

転がったもののうまくガープの腕の中だけすんだが、どうやらその子供らしい態度に彼のハートに火がついたらしい。

「りーいいいすううううう！！！！」

「ぶっ！！！！」

ギャアーという悲鳴はつぶれたぶうぶうクッションのような情けない声にならず、頬がいままで以上に頬摺りさせられる。
ヒエー！ご勘弁を！！ひりひりする！！

…………え？

あれ？そういえば今、変な言葉が聞こえた気がしたけど…

「みるりーす。じいちゃんじゃぞー！！」

「にやつ！？（ええ！？）」

……そうして天井に今にも着きそうなほど物凄く高いタカイタカイをさせられている間、オレは恐怖よりも今の発言に呆然としていた。

ありていにいおう。

りーすって…

だれえっ！！！！！

01 ある日終わった人生と誕生（後書き）

いろんな方の小説を読んでいるうちに、なんだか二次創作をやってみたくなっていました。

あと主人公最強とかチートとか言わせて見たかったです。

なので原作のある小説は初めてなのですが、よ、よ．．．読んでいただけたら光栄です。

目指せ「主人公最強&チート」！！

新参者ですがどうぞ宜しくお願いします。

100312

02 だって女の子がほしかったんだもん（前書き）

しばらくリースのお子様編が続きます。

リースは悪魔の実を食べるので、そこまで話はゆつくりと進みます。
今回の視点はガープですが、普段はリース視点となります。

うまく第三者視点でかけそうにないので、口語展開です。

一人称視点（口語）が苦手な方はユータン願います。
読みづらくて申し訳ありません。

02 だって女の子がほしかったんだもん

< side ガープ >

一番初めの孫は絶対に女の子だろうと思っていた。
むしろ息子でうんざりしていたので、初孫ぐらいは女の子がよかった。

なにしろ自分の孫だ。誰よりも可愛いく、間違いなく将来美人なるだろう。

きつと嫁に似て花もよく似合う。

可愛い声で「おじいちゃん」と呼んでくれるだろう孫の将来像を想像して、“花の冠”という意味で『リース』という名を考えた。

だからそれ以外の名前なんか考えなかったし、生まれたと報告があったて駆けつけたときふわふわな桃色の服に身を包んだ赤ん坊を見て、“そう”だと確信した。

間違いなくこの赤ん坊は、望みどりの女の子に違いないと思った。
まだベットのの上に寝ている嫁に許可を取って赤ん坊を抱き上げる。
その瞬間パチリと目が開かれ、赤ん坊は泣くでもなく、つぶらな瞳を限界まで見開き不思議そうにきよとんとしていた。
あまりの可愛らしさについ頬ずりをしてしまった。

「あぶうゝ。きゃー！きゃあゝ」

それから気がつけば赤ん坊は息子の嫁が「あらあら」と笑っていたが、赤ん坊はもつとでもいうように目を細めて嬉しそうに笑って手を伸ばしてきた。

可愛い。

初孫というおい目抜きにしてもかわいい。

それに普通赤ん坊というのは怪獣と例えられるほど騒がしく良く泣くが、この子は随分と静かで理知的な目をしている。

これが女の子か。

かわいさも息子と比べると百倍增しだろう。

「お義父さん、そのこはリースっていうのよ」

しばらくするとナイシヨ話をするかのようにこっそりと、息子の嫁が赤ん坊の名前を教えてくれた。

楽しそうな、嬉しそうなクスクスとした笑みに、なんて幸せな光景だろうと胸が温かくなった。

リース。それはワシが考えた名じやが、どうやら採用してくれたらしい。

嬉しいことこの上ない。

そうして生まれた子供はリースと名付けられた。

あとでわかったことだが、リースは男の子だった。

名前…。

言わなければいけないな。

ワシは墓場までそれを持っていくことにした。

02 だって女の子がほしかったんだもん（後書き）

ものすごくやばいです。

今日連載を開始したばかりだというのに、ものすごい新事実をその日の午後に知り、このままギャグっぽいこの作品を続けていいのかわからなくなりました。

本当にしまったです。

ウキウキと投稿小説を書き始めた今日ですが。

むしろギャグにしちやいけなかったんじゃないか。ふれちゃ、いけなかったんじゃないかとか思ってしまった（汗汗汗）

なにぶん自分が最後に読んだ原作がシーンが、ルフィーとエースがちょうど爆炎からでてきたところまでだったので…ここから大逆転になるとばかり思っていたのですが（汗）

今日知った新事実がやばかったです。

それを知ったら、こんなギャグ話を書き続けていいのか自信がなくなってきましたorz

明るくてごめんなさいorz

つ、続けていいのかな？ど、どうしよう（汗）

100312

03 交わされた約束（前書き）

とりあえず、はじめに。

閲覧してくださった皆様に感謝を。そしてお詫びを。

毎週ジャンプを見てる方も見てない方もいると思うので、今のところ深くは明記できません。

ただ最近の原作展開をさくじつ知ったとはいえ、

知らなかったためになんともいえないタイミングで気まずいものをこの時期に書いてしまったことをお詫び申し上げます。

空気読めなくてごめんなさい。

決して原作に対して悪意があるわけではなく、この二次創作はあくまで妄想ものであり「主人公最強&amp;チート!」といわせたがためにノリノリコメディ(?)でこの先も展開していく予定です。

それでも許せる方のみ、しばしのお付き合いを……。

03 交わされた約束

あるとき、自分は――。

ワンピースという物語のことで頭がいっぱいだったんだ。

新巻が出るよりも先に、ジャンプで先読みをするのがオレの日課だった。

その日もジャンプを買って、ワンピースを読もうとしていた。続きが気になって仕方なかったんだ。

あの物語は、今が架橋だったから。

だからいつもと同じように発売日当日にジャンプを買って、早速読もうとしたところで、

ちょうどありえないものが空からふつてきて……

目を開けたら小さな赤ん坊になっていた。

――いろいろとありえないです。

漫画の世界。転生？

ありえないことを体験しているオレの名前はリース。

ここであえていうのならば、言いたい事は一つ。

できるなら、リースなんてどこかのクリスマスの飾りのような名前はないだろうと思う。

もしかすると響きの似てるからリンなんて乙女っぽい名前になっていたかもしれないし。それよりはまだとは思うが、『リース』ってさ……クリスマス以外にもなんだか、こう、ヒラヒラピンクな

飾りをイメージさせるんだよね。なぜかね。

そんなピンクレースを思わせる名前より、キースとかルースとかルークとか、リユークでもなんでもいい…【エース】につなげるつもりなら、それ相応の男らしいもつと別の名前を考えてほしかった。まあ、いまさらだし別にいいけどね。

なにをどう間違ったのか。

いやいや、円盤が落ちてくる時点ですでにオレのいた世界も十分何かが間違っていると思う。

とにもかくにもだ。

どうやら地球からきたオレは、転生だか憑依して、このワンピースの世界にきてしまったらしい。

なんで漫画の世界にきたのかはさっぱりわからない。

思い当たる事はキラメク銀……の円盤。

まあ、あの円盤の話は置いておいて。

どう頭を絞っても帰る方法はまったく思いつかないのでこの際諦める。

かわりに力と海賊が謳歌するこの世界でも十分に穏やかに暮らせればそれでいいので、そっちへ向かう努力をしていきたいと思う。

この世界でのオレはモンキー・D・リース。

モンキー・D・リースは、モンキー・D・ルフィの4つ違いの兄だ。祖父はいわずもがな知られた将来海軍中将の座を約束されているあの『拳骨のガープ』そのひとである。

自分の存在は原作にはいないキャラだが、本当にあのルフィと血がつながっている。

なにせこの目で、自分を生んでくれた女性のもとで、ルフィが生まれたのだから疑う余地もない。

ポートガス・D・エースとは血の繋がりはないが、オレの一年後に生まれたので、彼もまた自分にとっては弟のようなものだ。

その義弟と、ただいま海を漂流している。
そろそろ現実逃避はやめて、この後の状況を考えなければいけない
だろう。

憑依かもしれないが、とりあえず転生ということにしておく。

オレがリースとして転生をして、目覚めてから早くも5年がたった。

最近ではすっかりリースと呼ばれることにも抵抗はなく、体もオレ
のものだといえるし、この世界にも随分馴染んだ。
同じようにエースは4歳になったし、ルフィも生まれた。

順調かと思える人生だったが、しかし5歳になったばかりのオレ
は日々死を目の前にしている。

それは目の前の「海」を見てもいえるだろう。

オレとしては原作に関わっているいろいろ変えてしまわないように、穏
やかに暮らしたいんだが…。

いやいや、むしろ面倒ごとが物凄くイヤなので、ひっそりと静かに
暮らせればそれでよかったわけで、強くなんかなりたくなかったわ
けなんだけど。

現在は波の上で揺られているので、命の安全という意味では状況が
かなり悪い。

それ以前に、オレは3歳になってからはちよくちよくじいちゃんに
風船で空に飛ばされているのだ。

エースもまた3歳になったらじいちゃんに飛ばされ始めた。

時には密林ジャングルに放り出されていたり…5歳児になにしゃが
る！？とくいつたのはもう何度目か。

これのどこが命の危機じゃないといえる？

どう考えても命の危機でした。

本当にいくつ命があってもこの世界では足りない。

こうやってエースといた日々を思い返すだけでも、じいちゃんほど子供の育て方を間違っている人間はいないように思えた。

とりあえずオレはエースを守るという約束を“あの人”としている。

だから守る。

でも、例えその約束がなくとも…それ以前に長男が弟を守るのは当たり前。

エースもルフィもみんなオレの家族だ。みんな（…とりあえずじいちゃんも）の生命力の強さは漫画で見ていたから知っているけど、守れる限り守りたいと思う。

ただその守りたい気持ちはいまは少し違った意味で「まもらなきゃ！！」って状況だったりする。

それはエースが後々黒ヒゲのせいで海軍につかまることを心配するよりも先に、しなければいけないことができたということ。

それをなしえなす「オレたちを守る」こと。

これをしなければオレたちは、前に進めないのだ。

そう。ズバリそれは——まず、じいちゃんからエースを守ること。

そうでない、今頃ジャングルやらなんやら、大自然によりオレたち二人は間違いなくやられているだろうから…。

オレと約束をした“あの人”はもういない。

だけど、今は意味も少し違ってるきもするけど、ちゃんと守るよ。

守れる力がある限り守って見せるから！

その約束というのは――エースの母親、ルージュさんと交わした
もの。

すっかり家族同然、血のつながりがない方が不思議なぐらいエースとオレは仲良くなった。

エースとの出会いは、今から4年ほど前。オレがわずか一歳のときだ。

一歳とはいえ、まだまだ子供。

しかし“リース”には生まれた時から、すでに高校生だった「オレ」という存在が宿っていたため、目が覚めたときから記憶はしっかり残っている。

それが0歳だろうが1歳だろうが、オレは覚えているし、エースが生まれた瞬間のことは強くこの心に刻まれている。

――エースがうちにやってきたのは、オレが生まれてすぐ、ゴード・ロジャーが処刑されてまもなくの頃だった。

+++++

< 四年前 >

ある日、いつも飛び回っていたはずのガープのじいちゃんが、腹に赤子を宿した女性をかくまうように家に連れてきた。

まだルフィも生まれておらず、うちには母さんとオレとじいちゃんだけだった。

親父はそのときにはすでに革命家として名が売れていて、雲隠れの達人と化していたので除外する。

… なんと因果なことか。

じいちゃんがつれてきた女性は、海賊王として処刑されたロジャーの妻ポートガス・D・ルーゾだった。

そのときオレは、ついにきたかと思った。

彼女のことはどこから海軍に流れたのか、海軍はロジャーに妻と子供がいるのを知り必死になって探していた。

みつければお腹の中の子供共に、二人とも殺されるだろう。

それが海賊王の唯一の危惧。

じいちゃんはオレという孫がいたこともありロジャーの最後の頼みをすぐにきいてしまったらしく、彼女を探して & a m p ; q u o t ; 南の海 & a m p ; q u o t ; のバリテラからルーゾさんを連れてきた。

そうして彼女とエースの存在を見事に海軍からだましとおした。

そもそもエースはロジャーの処刑前には生まれているはずだった。

それがうまい具合に海軍の操作網をくぐりぬけたのは、じいちゃんが盾になっていたからだけではない。

海軍は海賊王処刑前に生まれ子供ばかり探していたので、まだ生まれていないというのは予想外だったようだ。

ルージュさんはもう一年以上も妊娠したままだ。

一年以上。それが示す言葉は、体内ですでに死んでいるのではないかという状況を彷彿とさせるが、それでもまだお腹の中の命は消えていないと、医者も彼女も宣言する。

運よくうちにいた母さんがすでにオレという出産例もあり、ルージュさんの面倒をかいがいしく見ていた。

赤ん坊というのは十月十日で生まれるとされる。

それが20ヶ月も生まれず母親の胎内で生き続けたというのは、本当に奇跡のようだ。

まるで海軍から彼らの命を守ろうと何かが働きかけているかのようだった。

その奇跡があるから、オレは彼女こそこの世で一番強い人だと思う。

その、子を思うやさしさが奇跡を生んだとも。

誰よりも強くて、優しかったルージュさん。
だけど、いま、ルージュさんはいない。

彼女は死の間際、一度だけエースをだきしめた。

それから彼女は心配げにルージュさんのベッド脇にいたうちの母に別れの挨拶をし、続いて普通ならこんな子供に何を言ってもわかるはずがないのに……エースを頼まれた。

まるでオレが見ていたことを知っていたように。

「リースくん。この子を、お願いね」

まだ一歳になったばかりの子供になにをいっても本来はわかるはずがない。

だがそこにいたのはオレだ。

ただの一歳児ではなかったから、ルージュさんの目を見て頷いた。

「ありがとう」

そうして彼女はいつてしまった。

彼女はロジャーの死後1年と3ヶ月の間こどもを探す海軍から必死にその命を守り続け、妊娠発覚から計20ヶ月の間腹にエースを宿したまま戦い、自らの命と引き換えにエースを生んだ。

オレはこの世界に生まれて、この世の誰よりも彼女と彼女の引き起こした奇跡を尊敬する。

だからこそ。

前以上に、エースを守ろうと誓った。

+++++

最近の脅威であるじいちゃんからの特訓（？）中。

「ぶつちやけ、今ここで守らないと…オレも死ぬ」

小さな小船の上で、エースと一緒にナイフをもって、巨大生物とにらめっこ中。

うん、怪獣を相手にかっこいいセリフなんて吐けません。
死ぬ寸前のお子様2名漂流中。

修行どころじゃないです。ああ、やっぱりもう少し航海術を念入りに学ばないと。
めんどくさい。

だけどこのままではまた今日の二の舞になりそうで……。

「まだ、風船の方がましというものです」

「リースなに落ち着いてるんだよ！なんとかしろ！！」

「…エース。ここはとにかく二人で打破しよう。ふたりで！」

「ぎゃあーーーー！！きたー！！」

ああ、ルージュさん。もしかするとすぐあなたの元にたどり着いてしまうかもしれない不幸をお許し下さい。

なんでオレとエースが漂流しているかというと、じいちゃんである。

それ以外にいないから。3歳児を密林に放置し5歳になったら海に流したりする奴は。

そんなわけでぶつとんだじいちゃんから逃れるため、オレとエースはじいちゃんが来たといわれてあわてて逃亡した。しかし逃げ出し

たことがばれて気絶させられた。

つで、気がつけば海の上で、海王類が目の前にいるという状況だった。

いつも思うけど、糸があるわけでもなく、今までこれでよくオレたち無事に家に戻れたなあと思う。

現状――

・・・鳥の顔をした海王類、接近中。

口がでかいです。

「ぎゃあー！！たすけてーリリースー！！」

「あははははは」

「うわーん！リリースが壊れたー！！」

「はははは……」

どうしろってんだ！？この状況！！！！

03 交わされた約束（後書き）

コメントくださった方、閲覧してくださった方。

本当にありがとうございます。

ゆっくりとゆっくりとですが、物語は進めていきたいと思いました。
なにかあるかわかりませんが、どうぞよろしく願います。

100314

ワソビな豆知識　く世界政府／海軍く（前書き）

リースが海軍に絡んできたので
参考までに・・・

ワンピな豆知識 〓 世界政府/海軍〓

< 世界政府 >

・ 五老星

・ 総帥

・ 暗躍機関 (CP9) . . . スパンドム、ルッチ、カク、ブルーノ、カリファ、ネロ、ジャブラ、フクロウ、クマドリ

20 年前 ↓ スパンドイン

・ 暗躍機関 (CP1~8) . . . CP6 ジェリー、CP7 ワンゼ
昔 ↓ CP5 スパンドム

・ 役人 . . . コーギー

< 海軍 >

海軍

・ 階級は上から、元帥、大将、中将、少将、准将、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、准尉、曹長、軍曹、伍長、一等兵、二等兵、三等兵、雑用

・ 少尉以上が「海軍将校」と呼ばれ、背面に「正義」と書かれたコートを支給される (着用は任意)

階級

〓 海軍将校 〓

・ 元帥 (海軍トップ) . . . センゴク

・ 大将 (総督) . . . クザン (青キジ)、サカズキ (赤犬)、ボルサリーノ (黄猿)

・中將・・・ガープ、つる、ジョン・ジャイアント、コーミル
ストロベリー、ヤマカジ、ドーベルマン、オニグモ、モモンガ
・少將

・准將・・・スモーカー

・大佐・・・ヒナ、Tボーン、シュウ、ベリーグッド、シャリング
ル

・中佐

・少佐・・・ブランニュー

・大尉・・・フルボディ

・中尉

・少尉・・・たしぎ、マツコー

〔海軍支部〕

・大佐・・・モーガン（第153支部）、ネズミ（第16支部）

・中佐・・・リップパー（第153支部）

・准將・・・プリンプリン（海軍第77支部）

・中尉 ロック（第153支部）

・三等兵（新兵）・・・ウツカリ（第153支部）

〔他〕

・准尉

・曹長・・・コビー

・軍曹・・・シャイン、マシカク、ヘルメツポ

・伍長

・一等兵・・・ラインズ

・二等兵

・三等兵（新兵）・・・フルボディ、ジャンゴ

・科学部隊隊長・・・戦桃丸

ワンピース豆知識 ～世界政府／海軍～（後書き）

参照

- ・ Wikipedia 「海軍（ONE PIECE）」より
- ・ GRAND ONE PIECS 「世界政府／海軍」より

04 それぞれが向ける微笑み（前書き）

ルフィ母とかルージュさんとか、ダダンさんとか：現状の原作ではほとんどでてないので、勝手に妄想しちゃいます！

でも原作壊すのは怖いので差しさわりが無い程度しか出さないゾー！
さわりだけ（ミーはチキンだー！！）

04 それぞれが向ける微笑み

奇跡が起きた。

航海技術もないままに海の上を漂流していたら海王類に襲われかけ、そこで運よく傍を通りかかった海軍の船に救われた。

正確には「通りすぎり」という設定のじいちゃんがオレ達を拾いに来た。

「おうおう、おまえら。そんなところで何をやっておるんじゃ」

ニマニマとあからさまな笑みを浮かべて、魔王はそこに英雄として現れた。

その笑顔だけで十分何を考えていたのかわかる。

こいつを英雄とは呼べないと思った瞬間だ。

船の上でエースは泣いていた。

オレは鬱になった。

こうなることがわかっていたあの笑顔に、じいちゃんに騙し抜かれたことに、イライラとしていた。

誰かに八つ当たりできるなら苦労はいらないが、なまじ前世の記憶もある分中身は二十歳を超えているのだ。

そのため言葉一つでも相手が傷つくことがあるのをきちんと理解しているため、八つ当たりなんかもつての他だ。

まして現状で八つ当たりできる相手はせいぜいエースくらい。

だめじゃんそれ!?

二十歳杉のおっさんが子供、それも弟(4歳)をいじめるなんて…人としてだめだろ。

そんなわけで愚痴一つでさえ言うに言えない。

そのせいでさらに鬱憤はたまり、オレは部屋の隅に体育座りをして

八つ当たりの代わりに、壁を相手に愚痴を全部吐き出すことにした。壁なら何も問題はないだろう。

とりあえず周囲には聞こえないよう気をつけて。

「…みたかよあの笑顔」

平穏を望むオレにあのじい航海術を覚えさせる気だぞ。絶対それだけのためにオレたちを海に流したんだ。血かなあ？血だよな航海術がだめなのってだってルフィもタルで漂流…ブツブツブツ…

壁に話しかけてみた。

+++++

フーシャ村に無事戻るなり、オレはじいちゃんへなど無視してまっすぐにルフィのもとへとむかった。
この間からフーシャ村のダダンという奴のもとに預けられていたオレたち三人は、今は村長の家でよくたむろしていて、ルフィもそこにいた。

「ただいま!!」

扉を開けてすぐ、調理場で背にルフィを背負っている村長をみつけ

て飛びついた。

オレはひたすら癒しをもとめていたので、村長に何か言われるよりも先に、その背から赤ん坊を受け取る。

ずっと村長の背中で揺られていたルフィは突然抱きしめられてパチリと目を開けると、自分を抱いている相手が誰かわかったのかふにやあゝと子供らしい笑顔を向けてきた。

すると

「にー」

まだまだ小さな手を、懸命に伸ばしてくるのは小さなルフィ。

オレもエースのことも小さなルフィはまだ「にー」と呼ぶ。

エースはなんだかんだいって、ルフィに呼ばれたことと笑いかけられたことに凄く嬉しそうだ。

オレとしてはルフィの大人の姿を知っているので、よけいこの小さくて可愛い姿とのギャップに笑ってしまっていた。

「にーちゃ」

必死に伸ばされる手。

一生懸命な小さな赤ん坊。

どれをとってもかわいい。

先程までじいちゃんスサの非道さに愚痴をつぶやいていたのだが、そのせいで荒みスサかけていた心が洗われるようだった。

癒された。

「にー？」

今オレはルフィを抱っこしているが、顔にかかるオレの黒い髪が

気になるのか、追いかけるようにルフィの手がのびる。

「ほれほれつかまえてみる」

ノリに乗じて自分の前髪をルフィの前で揺らしてみる。

顔に髪が当たってくすぐったそうに笑った。

無邪気な赤ん坊の笑顔は本当に癒される。

エースがうらやましそうにこっちをみていたので、ずいとしルフィを押し付け「持つ？」と聞くと、勢い良く首を横に振られた。落としそうで怖いらしい。

「って、いつまでお前がだいとるんじゃないあ！」

ふいに到着したばかりのじいちゃんが、我慢ができなくなったらしく大声を上げながらズンズン！とやってきて、オレの腕から赤ん坊をひったくった。

「ほらほらルフィ。じいちゃんですよ」

じいちゃんのでれ〜んとたれきった顔を見て、それに村長もダダンも通りすがりのマキノさんもあきれている。

チラリとこっちをみつめてきたじいちゃんの顔を見て――

うらやましいだろうという表情に逆に驚いた。

オレへのあてつけ？

…そうか、嫉妬か。嫉妬なのか。

やっぱりじいちゃんも人の子だったんだな。

孫が可愛くてしょうがないらしい。

じいちゃんはさておき、ルフィをとられたことに関してはあんな

りオレ自身気にはいかなかったけど、ルフィは武骨ないちゃんの腕の中がイヤだったのか大泣きし始めた。ほれ、なくなとじいちゃんが高い高いをするもさらに泣き声がひどくなる。

ああ、あれ。オレもやられたなあ〜と遠い目をして見つめてしま
う。

だって2メートル以上子供を投げるってどうよ。
うん、やっぱりあんた、人を超えてるね。

それじゃあ、泣き止まないだと、さらにため息をついて、ルフィを受け取り「もう怖くないからな」とあやしているとまた「にー」と笑った。

むかしどこかの本でネタとしてのっていたが、ネコの鳴き声と人間の赤ん坊の声は似ているらしい。
たしかに。ニーニー言っていると、なんだかネコみたいだ。

そのあと、お茶目心をもれなく発揮し、風船をルフィの背につけて飛ばそうとするバカをみつけて殴っておいた。

「なに考えてるんだよじい！」

ジャングルで鍛えた脚力であわててジャンプして、風船ごとルフィをキャッチするもじいちゃんはキョトンとしている。
なぜオレがとめたかわかっていないようだ。

ただ次の瞬間にはニヤついていて…「いい拳じゃ」っと笑った。
本当に状況をわかっていないようだっただ。

せめて風船飛ばしは、いままでどおり3歳になってからやれよと思う。

それならなんとかなるんじゃないかと少し思うのだ。

考えるとか戦うとか…対応ができるようになるのがその頃だろうか。

ましてやルフィは現在1才。

うまく二足歩行できるか怪しい子供にこいつは何を考えているんだか。

だからこれからのことも考えて、きちんと赤ん坊の弱さを話して聞かせた。

だけど…

「だから小さいうちから鍛えておるんじゃ」と言われた。

風船でさよなら〜とか、鍛えるという言葉には与えない！

ましてや物心つく前の赤ん坊になんて非道なまねをしているとしか思えない。

「いまのうちから丹念を欠かさなければ最高の肉体ができる！！」

「んなわけあるかっ！！赤ん坊の身体は肉体云々以前に、先に壊れるってのっ！！」

「じゃあ、お前がルフィのことも守ってやればいいじゃろうが」

まず、目下一番の敵はお前だ！！

「じゃあ…じゃない！すでに守ってる！

そもその原因はいいじゃないですか。オレが何からルフィたちを守っているかわかってます？」

あんたがわからなくとも、あんたに言われなくとも守るとも。
たとえめんどくさくとも譲れないときもある。

さすがに家族は守ってやるさ！

もちろんできる範囲では！！

つてか現在進行形だし！？

それにしても本当にこの人は、いつどこでなにを始めるかわかったものではないので、こちらの気がまったく落ち着かない。

しかもじいちゃんとかれば——六式でも使っているのか？——あらん限りの力で殴ったはずが、まったくあの程度の攻撃では効かない。

殴ったオレの腕が痛かった。

むしろじいちゃんは、じいちゃんが言うような鍛え方をされたので、生身でも鋼の体を所持しているとか？

……ありえなくもない。このひとなら。

なんとなく。

本気で六式でも覚えないと、気付いたらルフィとエースの命が危なくなっていそうな気がしてきた。

まず一番は『剃』を覚えたい。

もつと、もつと早くたどり着かないと……いつか間違いなく、オレが助けよりもルフィとか風に飛ばされる方が早いから……！！

海賊にも海兵にもなりたくないオレは、いつも静かに影になって
いれればいいと思っていた。

そうすれば自然と原作どうりに物語りは進むと思っていたから。
だからオレがわざわざ手出しをする必要性を感じていなかったし、
中身が20歳以上の精神年齢だったため、かなり普通の子供より一
歩下がって物事を見ていた。

このまま原作のようなサバイバルやら激しいバトルやらせず、穏や
かにフーシャ村からでも彼らを生暖かい目で見守っていようと思っ
ていたわけだ。

なにせ前世は普通の学生で、日本はとても平和だったし、まともに
戦ったことなんかなかったわけだ。

まあ、この体になってからは物心ついた頃には爺ちゃんと命がけの
サバイバルをしてたわけだけど。

うん、穏やかが一番だ。

ズボラとかいうな。本当に面倒ごとが嫌いなんだ。

だけどさ。

本気でヤバイとおもったんだよ。

爺ちゃんの子育ての仕方は!!

「だずげで〜!!」

「ぎゃー! じじいエースをかえせ!!」

…やべえです。

ルフィに気を取られている隙に、エースがつかまった。
今にも売られていく子牛のような目でコチラに助けを求めてくる。
恐怖に顔は引きつり、鼻水と涙でボロボロのエース。

「リリースー!!」

「さあ、いくぞい！お前らには立派な海軍になってもらうんじやかな」

ガッハツハ!!とゴリラのような大声で笑って去っていかうとするじいちゃん。

待て待て待て!!そいつは白ひげ海賊団にいかなきゃなんねーんだから、そうしないとあいつの本当の家族ができなくなる！

そくだよ、そいつは海賊に向いてるんだよ!!

あ、話がずれた。

海賊になるから海軍に入れるとか、そうじゃなくて。

鍛えるのはかまわないし、じいちゃんが孫と戯れたいのもかまわない。

でも、でも……せめて、命の安全だけは保障してくれえ!!

ぎゃあー!!という悲鳴を上げて連れて行かれるエースを追って、オレはルフィをしっかりおんぶ紐で縛り付けて背に背負うとあわてて後を追った。

「ぎゃあああああああああ……」

しばらくするとやつぱりあのいつもの笑い声でじいちゃんはエースを放り投げた。

生まれてから直ぐにすっかりとした自我を持っていたようで、ハイハイができない時から周囲を観察するようにいろんなものを見ていた。

ただ簡単に物事を理解してしまうらしく、すぐに興味を失うことがおい。

そのせいか、子供特有の「なんで」攻撃が極端に少ない。

かわりに「めんどくさい」「だるい」があの子の口癖になった。

…なんだか、このだらっつけっぷりを見ると、部下のクザンという奴を思い出す。

あんな風にさせてたまるかと、リースがしっかり歩けるようになるとすぐに、海兵になれるよう鍛えることにした。

まだリースが3歳だったとき、ジャングルに放置した。手渡したのは水筒とナイフ。

心配だったので、こっそり知り合いに頼んで後をつけさせていた。

何かあった場合や、生きるためのヒントが必要な場合など、小さな子供一人では到底ジャングルで生き抜くことは無理なのはわかっているので、いざというときに限り手出しをしていいと告げ、孫をたくした。

どうせつねにやる気のないリースのことだから、すぐに獣に襲われてパニックになるのではないかと考えていた。

だからそこで知人が素性をばらすのもかまわないし——姿を見せなくともいいし見せてもいい——できることならどんな状況でも生き抜けるようサバイバルの仕方でもリースに仕込んでくれればいいとさえ思っていた。

しかし予想外にもリースは一人で帰ってきた。

見張り役の人間は、ただ見ていてただけで、自分の手は必要なかったと言った。

彼は一切手出しも口出しもする必要性をまったく感じさせず、むしろこちらが感心するようなことをやってのけたと驚きの報告さえしてみせた。

リース帰宅より先にその報告を受けていたときは、まったく信じられなかったが、帰ってきたリースの姿を見て目を見開いた。

リースは誰の力も助力も借りず、たったひとりでジャングルからきちんと生還してきたのだ。

手には巨大な獲物を携えて……。

リースが持ち帰った獲物は優に3〜4メートル近くある巨大な力エルのような姿かたちをしていたが牙があり、ズラリとならんだ鯊のような鋭い歯の羅列からもわかるとおりあれは肉食の生物だったはずだ。

その身体には荒削りなものだったが細く鋭利にとがったた槍のような枝や丸太が、急所だけを狙った的確な位置で刺さっている。

それ以外の傷はない。

ただその獲物は子供には大きく巨大でただでさえ他の子供より体力がなさそうなりースには持ってこれるようなものではなかった。

その重量はキログラムでは図りきれないだろう。

ましてや小さな子供でなくとも手で運ぶことさえできないような巨大な化け物なのだが、リースはその身体の下に丸太を置いてそれを移動させることで地面を滑らしてもって帰ってきた。

これを…… たった3歳の子供がやったというのか――。

呆然とするコチラに対し、リースは不思議そうに首をかしげているた。

しかも本人はあまり派手な怪我も汚れも見えなかったら、もしかすると罨でも仕掛けて頭脳だけで勝ったのかもしれない。

この様子には初め驚いたが、これで改めてわかったことがある。

リースの頭の回転のよさは、自分たちが思うよりも上であると。

この子は賢い。

やる気のなさそうな態度も、いつもめんどくさいと言っそれきつと何か考えあつての演技だろうと思うようになった。

肉体労働よりも頭脳戦が得意なだけでは、今の時代はやっていけない。

海賊なんかにもさせたくない。あれはいくつ命があっても足りないから。

とりあえずリースもエースも二人とも海軍にはいれるだけの度胸をつけさせよう。

そうでもないこの大航海時代は、どこにもいけない。

「このくそじじい!!」

聞きなれたリースのきれたときの罵声が響く。

リースの怒りマックスな拳が、わしの腕を直撃する。

日を追うことにリースの拳が強くなってくる。きれも良くなっている。

いいことだ。きっとわしのいい跡継ぎになってくれるであろう。

「じじい!なに、またルフィを殺そうとしてやがる!!」

「いや、まったく。そんなつもりはないんじゃないか?」

「…あんなに高く投げてキャッチできなかったら、普通人は死にます」

鋭利なナイフで切り裂かれたかのようにキツパリハッキリ告げられる。

ふだんはじいちゃんと呼んでくれるのに、きれるとこれだからなあ。

この変わりようは何なんだろう？

口調も態度もガラリと変わる。

というか、だれに似たのやら。

「…って、なんだそれは！？いい加減にしやがれ！！どれだけオレたちが苦勞したと…！！」

「えゝ。いやです。めんどくさい」

「体力？いらないますから昼寝する時間をください」

…などなど。

平凡な暮らしを求めるリースからは予想外の言葉がいつも返ってくるので、面白い。

本人に向かってそんな言葉をいえば、すぐにきれるので言わないが…。

本当にどっかの誰かに似てないか？

…昼寝とか言ってるし。

それにしても――

うんうん。

目を追うことにリースの口が悪くなっているな。

日を追うことにリースのだらけっぷりが…

「お前口悪すぎじゃろう。あとそのやる気なさそうなの何とかならんか。」

それよりも実の祖父をいたわらんか」

「……」

なぜか物凄くさげすむような目で見つめられた。

なんじゃ。わしがおぬしに何かしたとでもいうのか？

本当に何を考えているかわからん奴だ。

リースは普段からやる気がなさそうで、だれかれ問わず丁寧な言葉で話す。

きれるとかなり凶暴になり口も最高に悪くなるので、一瞬二重人格ではと何度疑ったことか。

まあ、最近では家族（特にワシ）の前ではくだけた口調がメインになってきたので、それもまた愛情だと思えばいいだろう。

ただ、最近になってだらけた空気他に、ブツブツと愚痴を言うことが多くなったのはさすがにどうかと思う。

言っている事はほとんどわからないが、この愚痴がやたらと長い。ほうつておくとそれだけ続く。

どうやら普段怒らない分、たまった鬱憤を一気に吐き出すらしい。我が孫ながら面白い奴じゃ。

今日もなにやらぶつぶつといているが、空からでも地上を眺めて頭を冷やしてくればすつきりするだろうとふてくされているリースのかわりにルフィを空に飛ばしてやろうとしたら勢い良く殴られた。

ふん。まだまだ甘い、さすがワシの孫。
いい感じでわしの技を覚え始めている。

ふとみると、エースが視界に入った。

わしでさえ何を考えているのかわからないリース。その傍にいつもいる一つ年下の子供。

リースは大人さえその口でだまらせてしまう頭脳派。

めんどくさいという口癖からもわかるとおり、あまり自分から動くとならないのがたまに瑕だ。

根暗な部分もあり、愚痴をいったら止まらなくなるところなどまさしく室内生活が似合いそう。

そのわりには一旦キレルとスイッチが切り替わるように凶暴化するからやっかいだ。

愚痴も増えるし。

エースはそんなリースとは真逆の性格で明るく、人をひきつけるパワフルさがある。

リースほどではないがエースは呑み込みが早く頭もいい。それよりなにより動きに長け、体でどんな物事を覚えていく。

怒るときは烈火のごとく起こるリースとは異なり、静かにその炎を揺らすのが常だ。

まったく対照的な二人だから、二人で互いの足りないところを補うように、リースの横にはいつもエースがいる。

そうやってエースはいつもリースのことを見ているから、リースのいいところとエースの明るさが交わって将来は礼儀正しい好青年になるだろうとみたてをたてる。

その未来予想図を思うと楽しみで仕方がない。

とことん父親には似ていないとエースを見て思う。

「父親……」

エースが自分の元へやってきたのは、もう随分前のことのようにも、昨日のことのようにも思う。

思い出すのは好敵手たる男の存在。
今でも鮮明に奴の言葉を思い出せる。

海賊王　ゴールド・ロジャー。

それがエースの父親であり、この海賊時代の幕をあけた本人だ。

奴が捕まったとき、その護送中で一つだけ頼まれごとをされた。
まさか逃げる側と捕らえる側の関係で、どうみても敵でしかない自分に奴は、奴にとって一番大切なものを託してきた。
ちようどリースという初めての孫に浮かれていたから、頷いてしまった。

——ロジャーの処刑前、そのロジャーから子供をたくされた。

けれど本来すでに生まれているはずの奴の子供は、まるで海軍の追っ手から逃れるようにそれから一年もあとに生まれた。

命と引き換えに子供を生んだルージュを、居合わせたリースはまっすぐに見つめていた。

それからリースの名をもじって子供には、エースと名付けた。

子供たちが二人そろったところで、イーストブルーにいる友人ダンののもとに彼らをあずけた。

休暇をとってはフーシャ村で子供たちと過ごし、いつなんどき海軍に見つかるともわからないエースのために特訓を始めた。

そのときまだリースは3歳だった。

エースも3歳になったら、リースと一緒に密林に放置した。
そのせいか以前よりもリースはエースを気に入ったらしく、それ以降二人はいつもつるむようになった。

今思うと、あのリースのことだ。

もしかするとルージユの最後の言葉を聞いていたのかもしれない。

そうでなくとも、リースがあいつの横にいて良かったと思う。

リースは無邪気にロジャーの子に笑いかけ、エースも普通の子供のように笑っている。

二人は本当の兄弟のようで、海賊王の子だからという負目のあるあの子にはいい支えとなっているようで、血がつながっていないくともいい家族となるだろうと思った。

このまま何事もなく、エースが奴のことを苦痛に思わなければいい。

目を閉じればあの漣の音が聞こえてくる。

「もともとわかっていたことだ。オレにははじめから時間がない」

世界中を魅了してやまないそのキラキラとした目が言っていた。
やがてその一言で、世界中を自分の夢のために巻き込んだ男の目が、
無言のうちに語っていた。

一目でもいいから会いたかった。

それは叶わぬことだとわかっていた。

会ってもきつとあいつにとって悪影響しか及ぼさないことも。

それでもあいつらは悪くない。

そんな海賊王の目に、このわしがすくんだ。

そこに覇気を交えてまで、奴はわしに託したのだ。

「あいつを！ルージユと生まれる子供を……」

たのむ。

「だれがいままでいがみあっていた者の子供の面倒など見るか！」

そう言うてはみたものの、たぶんあいつを追いかけるのはわしだけではないか思っていたから、好敵手としてはよい仲だったのだらう。

それを承知でだらう。

「お前だから言うんだ！」

ロジャーに逆に押されてしまった。

「生まれてきた子供に罪はないだらう！？」

ちやうど孫が生まれたばかりだったこともあり、その強い言葉に気がつけば頷いていた。

それにロジャーは笑っていた。

それはローグタウンで最後の瞬間にみせたものとは異なるもの――

「
ありがとう
と
…」

04 それぞれが向ける微笑み（後書き）

なんかたった4日で閲覧件数が凄いことになってるんですが（@
@:）

閲覧してくださった方、本当に有難うございます！

いろいろ書きたいことがいっぱい、書ききれないような…（汗）
とりあえず！

文章の書き方が良くわかりません！！

どこに空白入れよう？あれ？この空白位置あってるかな？おかしい
気がする。

なぐんて具合に混乱しつつも、まあ、一番言わせたい事言わせてる
し、よしとしよう。

とにかくこれからも脳内にあるシナリオをふるに文字で表現できる
ようがんばっていききたいです。

ちなにお子様編は、たぶん10話くらいまではがつづきます。

終わったらルフィは海賊へ。主人公は…謎な行動をとります（汗）
みなさまご期待の悪魔の実は、このまま順調に行けば06話にはお
見せできるかと…

今回は「覚悟」…読者様も覚悟してください。次回だけはシリアス
です。

それでは長くなりましたがこの辺で。

いつもみてくれてありがとうございます！

1
0
0
3
1
7

リースの設定（前書き）

誤字脱字とともに、

以下の設定どおりなるように本文を修正中。

ずっと一人称だったのでリースの容姿が出ない。

そのため他人視点でリースの容姿が後からでると困惑するといつこ
とを言われたので、今更ですがのせておきます。

おそくなってしまうかもしれませんが。

リースの設定

■五、六歳頃のリースの容姿

- ・周囲からしたら癒し系
- ・女性海兵がとりこになるくらいにはかわいいらしい
- ・中性的過ぎて女の子のようにも見える
- ・やわらかい小動物っぽい
- ・ガープの間逆をいく外見
- ・目はけっこうでかいらしい
- ・小さい（ちよつと気にしてる）
- ・あんまり筋肉が付かない体質らしい
- ・事故以降、両目黒色だったが、片方が銀ぼい色の目になる
- ・メガネはおつるさん推薦
- ・ほとんど半袖な海兵の服は着ない
- ・いつも首元も腕も隠す長袖（しかもいつも黒色）
- ・髪は黒色、サラサラのストレート、めんどうなのでショートカット（そのうちのばす）
- ・怪我は今では火傷のような痕のみ（痕は顔から首、腕と・・・結構広い）

■リースの性格

- ・常に平穏を求めているがむくわれない
- ・めんどうさがりのくせに、お人よし（衝動的）
- ・意外と短気
- ・子供好き
- ・愚痴が激しく長い
- ・基本「なまけるため」と「自分が生き残る方法」のためだけに動いている

- ・好きな事は昼寝、料理
- ・傷とか、自分がさぼるために役に立たないかなあ〜とか思っている
- ・怪我しようが痕が残ろうが気にしない
- ・うっとうしいのが嫌いなくせに、自身がネガティブ思考
- ・嫌いな事は命の駆け引き、戦争、争い、銀色の円盤
- ・銀色の円盤を見ると激情することもある
- ・約束は守る
- ・ツツコミ担当だが周囲への影響がほぼ0
- ・周囲からは何かと「凄い奴」と誤解されている

■海軍でのリース

- ・悪魔の実の能力を隠す（めんどいから）
- ・逃げ足と、気配の敏感さだけで、いろいろ生き抜く
- ・悪魔の実の能力は研究中
- ・なぜかいつも本と石鹸、おたま、棒の切れ端を持っている
- ・6歳にして情報処理能力にたけ、いろいろな上司を手伝っている
- ・武器にできるものはなんでも使って、とにかく身を守る主義

■実験後使用を控えている能力

- ＜つぶつぶ（仮）の実の能力＞
- ・家族からは、いつもブツブツ言ってるからそんな変な能力になったといわれている
- ・身体を粒に変換できる
- ・身体にぶつぶつと斑点を出すこともできる
- ・粒⇨粒子、原子等・・・きちんと【認識】することで粒を動かせる
- ・あまりに多様なことができるため他者からは何の能力かわからない

05 その覚悟は君が思うようなものではないけれど（上）

じいちゃんの子育てに危機感を覚え始めていた俺は、原作を必死に思い出して肉体強化の術として『六式』を覚えようとしていた。

ここはあくまでワンピースの世界だから、他の漫画やアニメの術や魔法が使えるわけでもないし、自分は神様に愛されてオマケをもらえた人間でもないの、ここで自分を強化するには鍛えるか、悪魔の実を食べるぐらいしかできない。

悪魔の実は運がなければダメだ。

第一他の漫画のキャラの鍛え方って、ドラゴンボールの手足に重りをつけて界王星を走り回るぐらいしか覚えてない。

だから体を鍛えようと思ったのだが、鍛えるなんて面倒くさくてしょうがない。

重りってのはいい考えかもしれないけど、もっと手っ取り早く段階を踏める方法が好ましい。

度胸以外は鍛えていないこの5歳の子供の身体では、重りは負荷がかかりすぎる気がする。自分がやると逆に体を壊しそうだ。へたすると一部だけマッチョになってしまいそうでイヤだ。

もともと海賊にも海軍になる気もことさらないので、このまま鍛えるのさえやめようかとも思う。

けれどここは平和な日本ではない。じいちゃんもいるし…自分の身を守るためにはどうしても必要な気がするから、体を鍛えるにしてもこの世界のルールにのっとった方法で強くなる方法はないかと考えた。

そうしてたどり着いたのが『六式』だった。

ルフィとCP9の戦いやヘルメツポとコビーが使っていたのも漫画で見ているので、『六式』を使うことによりどんな現象が起こる

のかは理解している。

しかしいざ一人で特訓しようにも完成した『六式』の図しかわからず、どうやってやればそれを身につけられるのかはさっぱりわからなかった。

だからといって、じいちゃんに直接「六式を教えて」とは言えるはずもない。

一番の理由としては、敵に自分の手の内を見せるのがイヤなこと。二番目は、『六式』は海軍独自の特殊技であること。

ましてや海兵でもない自分がその稀な情報をさわり程度であれ知っているとなると、『六式』使いと戦うか、その戦闘シーンを少なからず一度は目にしていないとおかしい。

しかし自分は本当にただの子供だ。

悪魔の実も食べていないし、面倒ごとは嫌いで海軍も海賊もかわりたくないといくたびやいては、家でのおんぶりとしている。そんなオレが『六式』を知っているのは常識的に考えておかしい。そのせいでじいちゃんに変に勘ぐられるのも面倒だ。

しばらくは鍛えるのはなしか？どうしたものかと思っていると、ちょうどいいタイミングでじいちゃんから連絡があった。

「じいちゃんが電話なんて珍しい。どうかしましたか？」

「リース、お前船見たくないか？」

「……」

相変わらず突拍子もない人だ。

「おいリース？」

「…おかけになった電話番号は現在使われておりません」

「ちよっ！！さっき「じいちゃんが電話なんて」ってでたじゃないか！！」

「この番号は現在使われておりません。もう一度番号をお確かめの

「上おかえなおしてください」

ガチャ。

でんでん虫を切ってやりました。

じいちゃんに関する突発的な事柄でいいことがあったためしがないのだ。

エースなんかじいちゃんから電話と聞いた瞬間に、悲鳴を上げて家の外へと逃げ出している。

うむ。すさまじしモンキー・D・ガープの愛情表現。エースをあそこまで狂わすとは…。

とりあえずあの逃げっぷりを見て、じいちゃんに挑むぐらいの度胸をつけさせようとひそかに思った。

『そこからだと二ヶ月以上はかかる。ちょうどイーストブルーのそばを通るらしくてな』

オレが受話器を置いてからすぐに、案の定じいちゃんから電話がかかってきた。

しかたなく用件ぐらいは聞こうと、受話器をとって次は無言でいると、じいちゃんが慌てたようにいろいろと話してきた。

とにかく切られてたまるものかというじいちゃんの意地が微かに見えた気がした。

じいちゃんの話のを要約すると、見聞を広げるため海軍の軍艦を見に造船場へいかないかということだった。

実際はじいちゃんがまた船を壊したので——これで何度目になるのかわからない——以前より頑丈な船を新しく注文しているらしく、今回はその様子を見に造船場に行く予定なのだとか。

その造船場は海軍本部から近いというから、きっとグランドライ

ンのどこかだろう。

今回いいちゃんはいつものように海軍を抜け出すことはできないらしく、近場ということもあり直に現場に行くそうだ。

興味があるのなら、迎えをやったそれに乗って向こうに來いということだ。

來いとはいうが、どこか頼み込むようなそれに首をかしげる。

ひとりはさびしいのだろうか？

「オレなんか海軍の船を見てもいいのですか？」

もしかすると海賊になるかもしれない子供に、そんな海軍の秘密をさらつと見せていいのだろうか？

しかしいいちゃんはオレの危惧など氣にもせずガハハハと笑った。でんでん虫がじいちゃんを真似て笑ったが、これはこれで不氣味で一瞬あがりかけた悲鳴を慌てて飲み込んで、顔だけをしかめるにとどめておく。

『なあにリリースだから問題なからう！！』

それに自分は危なくないという人間ほど疑わしい奴はおらんが、お前は違うじゃろう！』

ドドン！！と効果音がつきそうなほど大きな声で、ぶわっはっはっはっはと笑う相手はそういつて「なにせわしの孫じゃからのう！！』と何を根拠にか、物の見事に言い切った。

もともとこの世界の船には興味があつた。

世界のほとんどを海がしめるこの世界では、たぶん元の世界よりもはるかに頑丈な船が作られ造船技術も進んでいるはずだ。

グランドラインをメインに航海する海軍本部の船は、グランドラインの狂った磁場や海王類を考慮して特殊な肯定が取られているだろ

う。

なにせ海軍船は海棲石を舟のそこに敷き詰めることで、カームベルトを突破するぐらいだ。

不思議があふれるこの世界は本当に興味深いことであふれているようだ。

それに船について学ぶのは、本や知識だけでは足りない。

『どうじゃ？くるか？』

「行ってもいいなら行きたいです。でもそこまで行くにはどうしたらいいんです？」

『そうかそうかきてくれるか、うんうん』

「？」

なんか嬉しそうに鼻をすする『豪快な』音が聞こえたのはこの際無視しよう。

結局、じいちゃんが言う迎えというのは、偶然イーストブルーから本部へ向かう海軍船が通るのでそれに乗れというものだった。

しかしそこからまた進路が変わるため何度か船を乗り継がなければいけない。

オレは距離と日数、はじめにのせてくれるだろう海軍船がどこをいつ頃通るかきちんとじいちゃんに聞き出し、受話器を置くと早速荷支度して、エースとルフィ、村長たちに船を見てくると留守を頼みフーシャ村を出た。

海軍船とはすでにじいちゃんが連絡していたらしく、すんなり乗せてもらえた。

そこまでいくのが大変で、商船をつかまえて、二度ほど船を乗り換えた。

海軍の人たちは気さくで、あのガープの孫と聞くとなんだか尊敬とか崇拜とかいろいろ混ざった視線で「がんばれよ」といわれた。

少し同情の眼差しが何人か分あったのはどうしてくれよう。

そうしてイーストブルーを越え、カームベルトを通過してやつとグランドラインに入り予定のうちの2週間がすぎた。

航海は順調で、運がいいのか海賊には会わなかった。

かわりにオレは、乗せてくれたお礼として彼らの手伝いを申し出たのだが、はじめはあのガープの孫に…とかよくわからないように納得できる理由で、かなり遠慮された態度をとられていたのだがすぐに仲良くなれた。

船のみんなはいい人で、船の操り方を手伝いながら教わり、船長からは地図やログボースについて教わった。

「ありがとうございます」

「おう！気をつけていけよー！」

進路が変わるところで海軍が連絡を取ってくれた商船に乗り換える。

そこで船の人たちが手を振ってくれるのに、嬉しくなって手を振り替えておく。

航海術というのも船によって変わるようで、これはこれで面白そうなので商船に移った後もいろいろ手伝いながら聞いて回った。

造船島に到着したのは、フーシャ村を出てちょうど二ヶ月と十日目のことだった。

商船や海軍船を何度乗り換えたかは、両手の指で数え切れなくなっていた。

造船所につくまでにはさすがに海賊とも出会った。

海賊には何度か遭遇したが、乗ってた船の能力者さんや海兵たちが一網打尽にしました。

オレは傍観です。

たいがいは船室に逃げてましたが。

オレは傍観で……いたいところを、くるときは敵というのはくるものです。

そして巻き込まれるんですよ。

たまにオレが看板にいるとき突然攻撃がきて……ええ、攻撃がきたらよけますよ。もとい逃げます。

死にそうになったとき、じいちゃんへの恐怖を思い出して、こんなものたいたことはないと自分に暗示をかけて逃げたとも……！

ジャングルで鍛えられた目と足で、銃弾とか剣とかよけましたよ。

やればできるもんですね。でもオレだからわかるけど、これを普通死ぬ気のバカ力といいます。

むしろ死にそうでした……！

だってよけたといつても怖くなってしゃがみこんだら運良く銃弾が頭の上を通過したとか、逃げようと勢いこんだらそのせいで逆に派手にこけてゴロゴロと床を転がればその後をなぜか剣の刃がザクザクザクツツ！と追ってきたり！？脇すれすれで怖かったです……！さらには前後を海賊に阻まれたときもあって、どうしようかと思っていたら側で誰かが船から落ちた音が聞こえついそちに興味が注がれて足をそちらへ向けたところで、今度は背後で悲鳴が聞こえて振り返るとなぜか自分をはさんでいた二人の海賊が自分たちの剣を刺し合って抱き合っていたり……ありえません……！！！！

船室へ逃げこもうとして勢いよく扉を開けたら背後にいた海賊の頭部にクリティカルヒットしたとか、走って逃げ回っていたら小さい身長でせいで誰かの急所に当たってしまったとか……いやだ……！！！どれもこれもイヤな思い出だけど、船の仲間は「さすがはガープの孫」とか言って、オレの危機というときにはばかり周囲が盛り上がる。

なぜか中にはオレを見直したと言い、喝采までしてくれたり。

ってか人が死にそうになっているところを見て士気があがるってどれだけ変態よと思う。

オレ、ただ逃げてただけなのに？

なぜに？

ともかくにも、いろんな海軍船に乗ったせいで、若干5歳にして、海兵のお友達がいっぱいできました。

つと、いつか……。”ガープの孫”として顔が知れ渡ってしまった気がする。

いやだな～それ。

+ + + + + + + + +

珍しくじいちゃんがオレ一人だけを呼び寄せ、連れてきてくれたのは造船場。

フーシャ村から二ヶ月以上もの道のりの先にある、グランドラインのどこかです。

「おう、やっときたなリース」

「ど」

「？」

「ど、どおがっだあれすう……」

ついた早々ぐったりしたオレに、船着場で待っていたじいちゃんが

米俵を担ぐように気力もすべてうせたオレを担いだ。

オレは担がれつつ乗せてくれた船に手を振ると、なされるがままで
じいちゃんの肩でゆれていた。

その造船場はウォーターセブンとはまた別の場所のようで、よく
海軍を相手にしているらしくいたるところに海軍のカモメマークが
うろついていた。

通りすぎる人々がじいちゃんをみて挨拶をしたり、敬礼をしたりし
ている。

ああ、本当にいやだ。

なんでこの人、こんなに目立つんだろ。

しかたないか。なにせロジャーとやりあった「英雄」だし。

でもこんなのが祖父だと、オレのささやかな人生計画がどんどんと
ち狂っていくのがわかる。

オレ…。

物凄く目立ってねえ！？

05 その覚悟は君が思うようなものではないけれど（上）（後書き）

リースの意思はそっちのけで、周囲からはガープの孫は強いと勝手に『勘違い』されて、すでに最強伝説が始まっています（笑）

さてさて、話は変わりますが。

たくさんさんの閲覧者の皆様、ご来訪ありがとうございます！

そして真田信幸様、ブリューナク様、Mr. T様、やぎ009様、男爵様、ペルソナ様、ネメシス様、海原しお様 アンケートご協力ありがとうございます。

100321

05 その覚悟は君が思うようなものではないけれど（中）（前書き）

宣言通り、『ド』シリアスの回です。

これは公平なアンケート結果によるものなので、ギャグにはなりません。

あまりシリアスが好きじゃないという方は申し訳ありませんが読む前にご覚悟を。

05 その覚悟は君が思うようなものではないけれど(中)

原作の0巻でもおつるさんが言っていた。
モンキー・D・ガープはよく船を壊すと…。

その通りでした。

あまりにも何度も壊すので、船大工の皆さんが泣いてオレにじいちゃんをとめるように頼んできた。

「これでは作った意味がない！」

「我々の誇りをあの人は台無しにするんだ!!」

「え。あの…その、な、泣かないで…くれますか？」

「『これが泣かずにはいられるかあっ!!』『』『』」

ウオンウオン!!と泣きながらせまってくるむさいおっさんたちの群れ。

みんな！忘れかけてないか！？

オレ、孫とはいえ5歳なんだけど!!

5歳のお子様に何ができると思ってるの。しかもあの『海軍の英雄』相手に何望んでるんだあ!!!

船大工たちはオレがガープじいちゃんの孫だとわかるなりやってきて、あれをどうにかしろと汚い顔をさらに鼻水と涙で汚してじい

ちゃんを指差した。

示された方をみると、気まずいのかじいちゃんが、ゴホゴホとうさ
んくさい咳をして視線をそらすのが見えた。

そんなだから、あんた船大工に泣かれるんだよ。

おつるさんがじいちゃんを船に載せたがらなかった理由が今ならわ
かる。

本当にいったい何隻壊したの？

船を良く壊すじいちゃんにはいつかウォーターセブンをお薦めし
たい。

あの船大工たちなら、じいちゃんの拳でもそうそうは壊れなさそう
な船を作ってくれそうだ。

それにウォーターセブンなら、この造船場の人たちみたいに泣かず
にはすむんじゃないかな。

たぶん、じいちゃんのことを怒ってくれるんじゃないかな……と
か、甘い期待を試してみたり。

+++++

ここはグランドラインの中にある造船島のひとつ。

船大工の町で、じいちゃんが壊した海軍の船の修理をするというのでついできた。

ついた日は疲労でばてていたが、数日もするとすぐ島の中を歩いて回った。

「な、なんでみんなこっちみるんですか」

泣きたくなくなりました。

すでにオレが『孫』だとばれています。

通りすぎるたび、みんなが逃げるか憧れの目で見てきます。

目立ってますよオレ!?

しかも造船上の方へ行きたくて、ひとりでは危険だと保護者を伴っていけば…船大工たちに取り囲まれ、あげく泣きつかれたし!?!もう本当にオレ地味でいたいのに…。

泣きたい。

そんなことを考えて、どこかに心が休みそうな暗い建物のすみっこか壁はないかと視線を漂わせていたら、遠くでボォー!?!とこの世界に来てはじめて聞いた低く大きな音が聞こえた。それに伴い周囲も騒がしくなってくる。

ボォーと低い音とあがる蒸気と共に、一隻の船が着水した。

煙突部分からは蒸気が出ているし、水車のような車輪が船の両脇についているので、あれが普通の帆船でないことは一目瞭然だ。一目でわかる。

人が流れていく方には、巨大な蒸気船が港に到着していた。

「蒸気船もあるんですね…」

オレの言葉に、隣で立っていたじいちゃんが驚いた表情をしてい

た。

それくらいこの世界でエンジン搭載の船は珍しいのだろう。

そのせいか、造船上の人々の視線がものめずらしげに居間到着したばかりの船に注がれている。

やはり技術は進んでも化学と呼べるほどの技術は進んでいないためか、蒸気船といっても完全にマストがない前の世界の船とは異なり、今だ帆をわずかばかり残していた。

しかし船の大きさにくらべるとマストは小さすぎ、向こうの世界と比べるといびつにも見えた。

「なんだあ坊主。あれを知ってんのか」

驚くじいちゃんが何事か考え始めてしまったのでその場を離れるわけには行かず、みんなと同じように蒸気船に向かわず、のんびりと近くにあつた船を見つめていたら、脇を通つた男が声をかけてきた。

「ええ。中に動力炉がありそれであの大きな車輪を動かして進むんですよ」

「本当によく知ってんなー坊主。いいよなあ船。凄く早く走るんだぜ」

「あなたも船大工ですか？」

頷く相手はいつの間にか足を止めていて、ただいいなーいいなーと蒸気船をうらやむ。

彼は蒸気船の何をしているわけではない。

ただ大きくてどれよりも早いという船にあこがれているだけだった。はじめはそれでいいのかもしれないとのんびり話を聞いていたが、だんだん長い話を聞いているのも面倒になってきて、眠くなってきた。

さすがにじいちゃんやルフィ、エースのように突然目の前で眠るような図太い神経は持ち合わせていない。
でも眠い。

どうしようかな〜と思っていた。

そんなとき、『音』が聞こえた。

目の前に入ってきたのは、制御を失い港よりも大幅に島に乗り上げていたあの蒸気船。

とまるべ場所であまくとまることができず、船は逆にスピードを上げてしまったらしい。

蒸気船はその巨大さと強固さでもって町ごと島を砕いていく。

周囲で悲鳴が聞こえ、ガリガリガリと島と家と船と木片や鉄…いろんなものが擦れ、崩れ、飲み込まれていく音が響いた。

オレは目の前で起きたことがわからず呆然としていた。

じいちゃんは我に返ると走り出し、逃げ出す人を言葉だけで誘導しながら船へ向かって走っていった。

ズンッ！

ドカツ！！

じいちゃんが見えなくなったところで、蒸気船の方から爆発するような大きな音と土煙が巻き上がる。

どうやらじいちゃんがあの手で威力をそぎにいったようだ。

ドドオーンッ！！！！

蒸気船の暴走もやがて激しい衝突音でもって途絶えた。

蒸気船は別のドッグとの境目である壁に激突してとまった。

いままでのスピードと威力を考えるなら、本当ならあの壁さえも普

通に突破されていただろう。
船の前進をとめたのは、一撃が大砲の砲弾より威力があるといわれるじいちゃんのおかげだろう。

だけど…

「あーあ、めんどくさい」

「ちょ、まてい！！リリース！！」

遠くで悲鳴のようなじいちゃんの声がしたけど、オレはまっすぐ
にかけだしていた。

だって。

見てしまったから。

大きく輝が入って斜めに傾いだドッグをわける壁。

そのせいで区画中にあつた完成間近にした船が崩れ、どみの崩し
のように…オレのすぐ近くにあつた船の太いマストが倒れた。

降り注ぐ瓦礫。

なんとか帆の太いロープがからまって倒れることを逃れているが、

あのマストが倒れるのも時間の問題だろう。

そこで 偶然見つけてしまったのだ。

突然のことに驚いて動けなくなっている者たちの姿を。

あのままでは死んでしまう。

チラリとマストをみるとまだギリギリロープでもっている状態だ。すでに根元は皮一枚で繋がっているよう危険な具合で。

「5人か。きついが…少しなら」

でも、気づいてしまったんだから、このまま逃げるなんてできるわけもない。

呆然としている奴らに「逃げる！」と叫んで我に返って自分で動くとする奴は無視。それができないでいるから……見捨てられないのだ。

どれだけ呼びかけても腰が抜けているのか目だけで助けを訴えてくる人物を見つける。

同時にブチリという嫌な音が聞こえ、ギシッ！といままでにないほど大きく帆が傾き、周囲の悲鳴がさらに大きく木屑など上から振ってくるものも増えてくる。

「…っざっけんなあ!!」

またどこかで縄の切れる音で、動こうとしていた者たちの動きも止まる。

「とまんじゃねー!!」

音に降りかえることで、また彼らの動きが止まる。

それに舌打ちをして、一人の手をとってたたせるとタックルをしてその勢いを利用してもうひとり吹き飛ばす。

そのあと小さな子供を抱きしめて転がるようにして破片をよけ、さつきと同じようにいまだ呆然としていた男にタックルを交わす。

ガシャン！！

3人で転がったところで、さつきまで男がいたところを振ってきたガラス片が降り注いだ。

これで4人。

すでにギシギシという音と悲鳴で耳が聞こえずらい。

その中を降ってくる木片をなんとかよけて、さつきオレと話をしていた男の元へと向かう。

最後の一人。

そう思ったところで、ブチブチブチ！と縄の切れる音がして、ギイー！！と何かが倒れる音、そして大きな影が自分の方へ向かって覆いかぶさってきたのに気づいた。

間に合わない。

そう思い、足元に落ちてきていた破片をいきおいよく相手に蹴りつけ、自分と倒れてきた巨大マストの下から逃がす。

「ぼっずー！」

「オレのことはいい！さっさといけ！！」

オレに眠気をくれていた男が衝撃で我に返り、こっちに駆け寄ってこようとする。

それで戻ってこられるとオレの苦勞が無駄になってしまう。

とにかく慌てて「くるな！！」と叱咤して、逃げると告げて…。

そこで思い描いたのは、「約束ね」そうやさしく微笑んで逝った

あの人の笑顔――。

オレが逃がした相手の顔が恐怖に変わるのと同時に、今までにないほど周囲が暗くなつたのを目撃して――。

ドオオーン!!!

激しい音と痛み

「ゆ、き?・・・なん、で・・・」

赤い雪が頬に触れた。

そこでオレの意識は途切れた。

+++++

気がついたら暗闇の中にいて、右も左もわからず歩いていた。

なんとなく振り返ってみると、歩いてきた場所になにかが落ちて道ができていた。

ポツポツと赤いそれは、オレの腕から落ち続けている。

あれは何?

どうして腕が痛いのかな？

「…そんなの、どうでもいいよ。早く、早く…帰ろう」

ここはさびしいし、寒い。

それに真っ暗で何も見えない。

だから早くこんな場所から出よう。

早く、はやく…かえりたいよ。

なのに、どうしてかな？

右腕が痛いよ。

なんだかいつもより視野が狭い。まるで右目がなくなってしまった
みたいだ。

足も変。動かすだけで崩れていきそうだ。

痛いよ…

苦しい…

辛い…

痛くて辛くて、一生懸命足を動かしてもなかなか前に進まないんだ。

「オレ、帰るから…ここからだしてよ」

そう言ってみても、黒い闇は微動だにしない。

しかたなく痛む右腕を反対の腕で支えてまた歩き出す。

……そういえば、オレはどこに帰ればいいんだろう？

ふと足が止まり、背後を振り返る。

流れ出た血が、“ 帰るため ” の道標を作っている。

でも——そこは『オレ』の世界じゃないんだよ。

だから…前へと歩こうとした。

その瞬間、何かに腕をつかまれた気がした。

暗闇の中で、道に困っていたら名前を呼ばれた。

そっちはいなくなって言われた。

ねえ、そっちって…どこのこと？

あなたはどこにいるの？

ここは寒くて、何もなくて…さびしいんだ。

——行くな！帰って来い！！

いけないよ。帰るんだもん。

だってオレは帰らないと…。

それはわかるけど、帰る場所がどこかわからない。

それでも帰りたいと思った。

どこへ向かえばいいかわからない。

そのぬくもりは、オレの手をとると、しっかりと握ってひっぱりだした。

それはあの血の道の方向。

「だ、だめだよ！だって、あっちは『オレ』の世界じゃないんだ」
「いつちやいけないんだ。」

だからダメだよ。

そう言っても抵抗をしても…姿の見えない手が自分を向こう側に引っ張っていく。

その間も「行くな」という声は響いていて、まるで——泣いているかのようなだった。

ひとりぼっちの暗闇の中で唯一のぬくもり。

暖かくて、その温もりが在る場所に行きたかった。

本当はもうこんなところにいたくなかったから、伸ばされた手についていきたかった。

でも、なんでかその道の先へ行くことはいけないことなんだとわかるから……涙がとまらなかった。

「そっちじゃないよ『オレ』の世界は！ねえ、オレ帰りたいんだ。どうしたら帰れるの？」

伸ばされた手のぬくもりだけが支えだった。

でも手の主からは答えはなく、ただ涙だけがこぼれた。

「放してよ。オレはそっちに行っちゃいけないんだよ」

——だめだ！！行くな！ここにいろ！帰って来い……リリース！！

どうして…。

どうしてそこまでして引き止めるのだろう。

ここはどこ？ そこはどこ？

オレが本当にいるのはどこ？

そこに…行ってもいいの？

——ここがお前の場所だろ帰ってこいリース！！

リース——それはもう一つのオレの名前。

呼ばれた名に…。

嬉しくて。

そう思う前にまた涙が出た。

「ごめんなさい」

だれに言ったのかは自分でもわからなかった。

ただここには、今だれもいないから。

ここには何も無いから。

するりとその言葉が口からこぼれ出た。

オレの血でできたはずの道が、ふっと明るいオレンジの明かりで

ともされる。

腕から落ちたはずの水滴が、オレがそばを通るたびに迎えるように炎になった。

炎を覗けばそこにはたくさんの『光景』が映っていて、この道の先に何があるのかを思い出した。

「じいちゃ…ルージユさん…えーずう……るふい…」

見えない温もりの相手を探す。

炎の中にか、それともオレの腕の先にか…。

炎に映されたのは『オレ』じゃない、リースという名の“オレ”の過去。

この腕をつかんで、引っ張ってくれる温もりは…まだ見ぬ“リース”の未来。

「じいちゃ…『オレ』は違うんだよ。『オレ』は本当はその世界の人間じゃないんだよ。

イレギュラーないちゃいけない存在なんだよ」

わかってる。わかってるよ。

この手を振り払わないといけないこと。

でもこの優しさと暖かさから離れたくなくて、自分からは振り払う勇氣はなくて…。

「じゅめ、じゅめん。ごめんなさい…」

相手に振り払われることを望みながら、このまま向こうの世界まで連れ帰ってほしいと自分は思っている。

オレの目は壊れたガラクタのように、二つの世界の狭間で行き場所を見失って戸惑いをこぼし続ける。

オレはずるい奴です。

本当に謝らなきゃいけないのは、今を生きている人々全員に。自分の心を保つためとはいえ、あなたたちを『偽者』だと『作り物』だと偽った。

オレが見なければいけないのは、過去でもなんでもなくて、ずっとオレ自信が見ようとしたなかったオレの心の奥にあったもの。

気がつくとき、炎の道が途切れていて、目の前に一つの箱があった。

この箱をあけないといけない。
本当はずっとずっと前に――。

じいちゃんの手の温もりに促されてる気がした。
けれどまだ勇氣はオレにはなくて、この箱の元に辿り着いただけで
……今にも足が震えて崩れてしまいそうだ。

「ごめんなさい……」

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめ
んなさい…。

本当はずっと……

朝になるのが

目が覚めるのが

怖かった。

——『今更』って言うなよ。

オレが“リース”になってから、ずっとオレは朝が怖かった。

目を開けても変わらない世界に。

ここが自分の生きていた世界じゃないことに…。

オレは信じられずにいたんだ。

UFOなんて、あんなふざけたものを目にした後、気がつけば赤ん坊になっていたなんて……心のどこかで本当は信じたくなかったんだ。

だってあの銀が目の前に迫ってもいつまでたっても痛みも何もなかったから。

あのときは、ただあの銀色の円盤が近づいてくるのに驚いていただけ。

気がついたら世界は変わっていて…。

だから心のどこかで信じられずにいた——あっけなく反転した現実を。

赤ん坊になったのは諦めた。

そう言ったのも、まだ頭が混乱していたから。
現実を現実としてはみていなかったら。

いつか帰れる。

だから、それまではこれは夢なのだと高をくくって、世界になじんだ振りをしていた。

それでも——拒絶するには、この世界の人々はオレに優しくて。
人のぬくもりが、これほどあったかいものだったなんて思わなかった。

涙が出るほど暖かくて…。

だから本当はイレギュラーなオレがいてはいけないのだろうけど、
またルフィ達のいる世界へ帰りたいと思ってしまった。
地球じゃないこの世界へ帰りたいと思ったら、引つ張られた手を振り解けなかったんだ。

地球——向こうの世界では、ただ時が流れていくままに生きて
いる。

空だってここまで広くない。

ビルという閉ざされた箱のような空間で、人々は生き、勉強したり
働いてお金をもらって…それだけで流れていく日常は、いつも灰色
の空に囲まれていた。

そこでは戦争や悲しいことはすべてテレビの向こう側のことで。
オレには何も関係ない、気にはかけても自分とは程遠く、他人事
のようなそんな話はすぐに記憶としてはおぼろげになってしまった。
だから『隣の町』という表現をしてもおかしくないだろう。

例え隣の町で事件が起きたとしても、それはあくまで隣の町のこと。

それが普通。

それが向こうでは普通の人の考え方だった。

きっとオレもそうは思ってたなくても、自分さえ良ければいいと思う一人だったのかもしれない。

——目隠しをしても生きられるような世界。

オレは青い空と海の広がるこの世界で“今”を生きたいと思うから、向こうでのことをそう思う。

それがなまぬるい湯につかったかのように、どこかで安全が守られてることを疑わない——それが、オレが17年間生きていた『向こう側の世界』だった。

まだ学生だからと、将来のことさえオレは考えもせず、ただのんびりと暮らしていた。

武器を持つてはいけない世界。

でも昔どこかの誰かが言っていた様に、戦争を知らないよりも戦争を知る者の方が強い心をもてるのだらう。

傷つくことを知っているからこそ、その傷の痛みを理解できると。時代が変わり、戦争が身近なものでなくなり、悲しみを知らないオレはそのぬるま湯の中で浮かんでいたひとり。

ましてや、ルフィ達がいるこちらの世界は漫画のなかの世界のはずだった。

うすっぺらい紙の中であるはずの場所に自分がいて、ここが漫画だ
と思うからいつか帰れるのだろうという甘い考えがあった。

それを崩したのは『彼女』。

命を懸けて、自分の子供を守ったあの人がいたから。
あの人と約束をしたから 守る と――。
だから考えを改めた。

――目の前の閉ざされた箱と向き合う決意を……。
オレが異邦人のままの存在ではなく、世界で生きる人たちと同じに
なれるように……。

守る――そう約束したのにオレは強くなろうと努力もせず、船
が崩れたぐらいで“自分”を助けられなかった。
他人を助けて自分は助けられないって最悪だなと、自嘲的な笑みが
出た。

オレはなんて曖昧だったのだろう。
異世界に飛ばされて5年たっても人々の優しさにすがって甘えてい
たのは自分。
みんなと笑いながらもここが現実じゃないと、心のどこかで思っ
ていたんだ。

だから彼女との約束をなすための努力をしなかった。

心のどこかでオレに動かないよう歯止めをかけたのは、今いるオレの世界が『漫画』という空想の物語のはずだからだ。

じいちゃんに殴られれば痛かった。

ルージュさんが死んだときは胸が痛かった。

エースが生まれて、ルフィが生まれたときは、胸がギュウってなるほど嬉しかった。

小さな弟たちを落としたら危ないと一生懸命あやしたのは嘘じゃない現実だというのに。

船の破片が落ちてきて、痛いと思って意識が途切れたとき、そこにいたのは――まぎれもない自分だった。

誰かが怪我をするのも、自分自身が怪我をするのも……笑って喜ぶのも。

喜びも、痛みも悲しみもすべて感じているのはすべて自分。

この世界で、生きて、みんなといたのは――ちゃんとオレ自身だった。

なのに、オレはずっと何を拒否していたのだろう。

本当に今更だ。

ルージュさんは命を賭けた。

オレは？

あの約束を果たすためにオレは何を賭けるべきだろうか。

『約束』は守るものだ。

守るから、なしとげようとするから約束なんだ。

そうだね。

例えばオレがイレギュラーな存在だとしても、悪魔の実を食べていないとしても…。

この厳しくも優しい世界に還るのなら……このままではいけない。

あんな船の破片ぐらいよけられなくて……

「なにが守るだっ!！」

もうどうしたいか、本当はとつくの昔に決まっていたのがわかった。だって……死ぬんだと思った瞬間、思い返したのは、元いた世界じゃなかった。

この世界に生まれてきた“自分自身”の『リース』という過去で……。そして未来に命をかけた女性の姿。

死の瞬間の回想——いわゆる走馬灯という現象のはずなのに、思い返したその片鱗には、地球での情景はどこにもなかったんだ。

どうして全てに目をつぶってしまったのだろっ。

すでに『答え』は決まっていたというのに——。

約束よ。そう言って微笑むこの世で一番強いあのひとの微笑が蘇

る。

いまなら、彼女にも笑い返せると思った。

カ
エ
ロ
ウ
・
・
・

「オレが生きる世界へ」

ああ、オレは本当に生きていたんだなと思った。
ちゃんとこの『世界』でオレは生きていた。
それだけで十分じゃないかと思えた。

だから足元に浮かんでいる箱を手についた。

「ごめんな。ずっと開けてやれなくて」

例えなんの能力がなくとも、あんな破片ぐらい簡単によけられる
ぐらい強くなりたい。

——強く、強く…

誰かを守れるだけの強さを——

「オレにくれるかい？」

今なら、一歩前に進めるかもしれない。

オレが生るため、オレが『世界』と共に歩む堪ために…。

オレの言葉に頷くように、手に取った箱の蓋が音もなく開いた。

——なかにあつたものをみてオレはまた誰かに謝った。
目からはなんと说着ていいかわからないものが溢れ出た。

まるでその箱は、パンドラの箱のようだ。

そこにあつたのは“希望”とは異なるけれど、“勇氣”というオレ
が心の底に押し込めていたものだった。

+++++

目が覚めるとなんだかスッキリした気分だった。

同時に自分が情けなくて情けなくてしょうがなかった。

包帯だらけの腕が動かないのも腹が立つほど悔しくて、無理やり顔まで腕を持ち上げて顔を隠した。

夢の続きのように、何かわからない思いが目から落ち続けた。

ただ…悔しかった。

『今』を生きることを欺き続けていた自分に…。

窓に頼杖をついてぼろと外を見ていると、あちこちで町の修繕工事と同時に船の作成が進められている軽やかなトツテンカントツテンカンという音と職人たちの罵声が耳に届いた。

造船場の事故のせいで重傷を負ったオレが意識を戻したのは、船の倒壊事件が起きてから一週間以上もあとだったらしい。

現状を一言で言うなら、暇である。

助けた人間たちは無事らしいが、オレは包帯だらけ。

それに寝ている間の話だが、何度か危なかったとも医者に言われた。

今、生きてるのが奇跡なんだそうだ。

生きていたのが運いいの？

それとも…こうやって事故にあうことはオレがずっとうじうじしていた罰なのか。

どれが罰なんだろう？

生きていること？それとも事故にあったことが？

どちらにせよ、オレは船の崩落事故に巻き込まれた。

「オレ、ついてねー」

目が覚めたとき、あまりの全身の痛みに戸惑いを隠せなかった。

全身が痛いし特に右側。包帯も右側が嚴重だ。

よくわからないけど、ギリギリでマストには踏み潰されることはなかったらしいが、オレは大きな破片と正面衝突したらしい。

そのせいで手足のどこかを切断するようなことはなんとか免れたが、全治数日というわけにはいかなかったようだ。

他人を助けて自分は助けられないって本当に最悪だなと、夢の中と同じように悔しくてしょうがなくなつて、また自嘲的な笑みが出た。

すると独り言で言つたつもりが、

「生きておるだけましじゃ」すぐ側から小さな声が返ってきた。

ベットの脇にはじいちゃんがいた。

ふとあまり感覚のない手に、自分の手を包み込むような温もりを感じてドキリとした。

あの暗闇ですつとオレを導いていた手の暖かさを思い出した。

そこにあつたのはしわくちやの—— モンキー・D・ガープの大きな手。

それは『地球』に帰ろうとしたオレに「ここにいてもいい」と、「

「この世界にいろ」と強く言ってくれたあの…… 厳しい声のもの。
あの泣きそうな声がじいちゃんのもだったことに気がき、涙が出
そうになった。

うつむいていたじいちゃんには気付かれてはいないだろうけど、慌
ててその涙をぬぐって何事もないように、今気付いたといわんばか
りにじいちゃんを見やる。

いつもはでかいその姿が今日はとても小さく見えた。

「…じいちゃん」

「なんじゃ？」

名前を呼んだことでようやく顔を上げたじいちゃんは、ひどく疲れ
きっているように見えた。

もしかすると、ずっとこうやって傍にいて手を握りながら呼びかけ
てくれていたのだろうか？
リース…って。

それはオレが死なないように？

その声が聞こえたから、暗闇の中でオレは戻ってこれた。

この世界に。

必死な声だった。

あまりに必死で、ひとりぼっちで寒いあそこにはじいちゃんの低め
の体温は凄く暖かくて…。

「あのさ、じいちゃん…」

オレは何を言おうとしたのだろうか？

お礼でも言おうとしたのだろうか。

それとも怪我のことは気にするなとも言つつもりだったのか。自業自得のケガだと、これがオレの罪なのだと？

そんなの、どうでもいい！

じいちゃんを見ていて、オレの手を握るその無骨で暖かい手を見て……目の前にいるのがオレの祖父なんだ！と狂ったように叫びたくな

った。
もうなんと言おうとしたのかさえ、どうでもよくなった。

オレは決めたんだから。

夢の箱の中にあつたもの思い出してしっかり抱きしめるつもりで、未来を生きるための一歩踏み出そう。

——これからはオレはオレだと胸を張って言おう！なにがあってもオレらしく生きてやる。

だからこれからも『生きる』！
それだけだ。

「オレさ、逃げ足がもつと速くなりたいです」

だから、ごめんねもありがとうも……そんな言葉いらない。

今、一番オレがやりたいことをじいちゃんに告げた。

悪魔の実なんて能力がなくてもいい。

海軍の大將のように強くなくてもいい。

せめて二度とこんな馬鹿げたことでオレが死なないように、オレの

せいで大切な誰かを悲しませることがないように……足が速くなりたい。

逃げるためじゃないから、これは逃げ足とは言わせない。

ただ、今すぐ『早く走れる足』がほしい。

願わくば『剃』と『月歩』が！

でもその存在をオレが知っているのはおかしいことだから、『剃』や『月歩』を教えるとは直には言えなくて。

「早く、走れるようになりたい」

そう言うのが精一杯だった。

オレは強くなくていい。

だから強くなるのは別の人に任す。

オレの役目は別にある。

せめて、誰かを助けて、オレ自身も一緒に助けられるように。

『覚悟』を決めよう——そんな声がした気がした。

戦う覚悟はきっとオレには無理だろう。

血を見るのも、誰かが傷つくのもイヤだから。

なにかをしようと思っても続かないオレだから。

でもひとつだけできることがある。

『覚悟』が必要だというならば、オレは生きるよ。

この世界の中で、オレはオレとして…。

それが、オレが決めたもの。
閉ざされていた勇気を手にして、オレが始めてしようとすること。

「海軍に入れ。今よりももっとすぐに強くしてやる」

オレの言葉に対しての返事に驚いた。

ポツリとつぶやかれたじいちゃん言葉に目を丸くする。

なんだか本当に心配をかけてしまったみたいで、じいちゃんはひどく落ち込んでいた。

ささやかれた声も小さく、その真剣な眼差しもいつものじいちゃんじゃないみたいだった。

それからオレは――

長く長く、考えた末にじいちゃんの手を……

05 その覚悟は君が思うようなものではないけれど(中)(後書き)

＼(。□＼)ココハドコ？ (ノ□。)ノオイラハダアレ？

お疲れ自分！

みんなー！オレ、がんばったよ！！

いや、まじでここまで長い文章によく耐えたオレよ！！よく書いた自分！！

そんなわけで、やっぱりどこまでいっても自分は自分でしかないらしく、ギャグが一部混ざってますねorz

シリアス宣言しときながらここまでやってただけでもう自分の魂抜けれます。

今回のでやつとでました「リースの覚悟」。

でもこの覚悟、なんかおかしいです。

リースにはちゃんとワンピースの世界の住人になってほしかったのですが、相手はリース。

どうもこの人本当にやる気がないみたいで(汗)

生きるために逃げ足を早くするというとんでもない「覚悟」しちゃいました。

本当にヘタレですね。

期待を裏切ったらごめんなさい。

でもシリアスはここで終わりですので、コレ以降は安心してゆっくり笑いながらご覧ください。

……長かった（グツタリ）

100327

05 その覚悟は君が思うようなものではないけれど（下）（前書き）

じいちゃん、はひたすら孫が可愛いと思ってます。

ついでいうと、どれほどリースが嫌がっても、ガープには笑顔に見えたりすることも…

05 その覚悟は君が思うようなものではないけれど（下）

ベシッ

払ってやった。

ああ、そうとも。勢いよく払ってやったさ。

逆に包帯だらけのオレの方がものすごく痛かったけど。
だって、違うから。

伸ばされたじいちゃんの腕。

その手をとればすぐに海軍へご招待されてしまう。

ほしい奴にはたまらない魅惑の切符。

だけどそれ本当に違うから！

オレの望みと違うから！！

たしかに海軍の六式の、瞬間移動っばいやつか空を走れるのとか
使えるようになりたいけど。

そりゃあその招待状はとんでもなく魅力的だけど！！

オレはただ『足が速く』なりたかっただけだ。

それが自分自身さえ守るためなんだけど…。

どこをどう聞き間違えたよ、じいちゃんや。

じいちゃんのはたかれるとは思っていなかったらしく、オレに叩

かれた自分の手のひらを呆然と見つめている。

その手がどれだけ温かいかわかってはいるが、今は無視だ。

呆然としている相手に向け、無言（たぶん無表情でした）でチョップをくれてやった。

ズビシッ！

そんな効果音がしたような気がした。

もう自分の痛みなんかどうでも良くなってきた。

とにかくこの人には突っ込まずにはいられなかったんだ。

「オレがいつどこで海軍に入りたいといったんだあ———！！！」

「や。だって今強くなりたいって……」

バシ バシ バシ！！

ミイラ人間のツツコミつけてみよ！！

「いとおわあっ！じいちゃんになにするんじゃあ！」

「どんな悲鳴だそりゃ！！こっちの方が痛いわっ！！」

「はっ！そうじゃった！！怪我人がなにをおきておるんじゃあ！！寝とらんかりースッ！！」

「あんたが変なことというから寝てられなかったんだよ！！」

と、今更思い出したとありあり顔に書いてあるアホ面の相手に怒られても、逆にこっちの我慢の尾がブツチンとこっちまいましたよ。ツツコミと同時にもういっちょチョップをくらわせる。

ベシ！

「オレは足が速くなりたいと言ったが、強くなりたいとも海兵に

なりたいとも一度も言つてねえっ!!」

本当ならさつき手をとるべきで、その瞬間は覚悟を決めたキラリ輝くように様変わりしたかつこいいオレがいるべきなのだろうけど。残念ながら、ここにいるのはさらに神経が図太くなっただけのオレである。

ここはきつといいシーンか、シリアスな顔を保つべきだったのだろうけど、人には時に譲れないものがあるってことだ。オレの譲れないものは、一つ!!

平穩無事に老後まで静かに生き抜くことだっ!!

だからもう一度言っ!これだけは譲れない!!

オレはいつ海軍になりたいと言った!?

殺し合いが常の海賊にもなりたくはないが、強くなりたいなんて一度だっ言っただろうか?

答えは 否 だあ――!!!!

っで、じいちゃんともめているうちに、その騒ぎを聞いて駆けつけてきた医者にもオレは鎮静剤なんてものを打たれた。地味にイタイ。

じいちゃんはオレが海兵になることを拒否したので、医者をふっ飛ばしそうなほど興奮していたが、慌ててかけつけてきた部下の皆さんがたくさんじいちゃんにしがみついてくれたおかげでなんと沈静した。

それを見て夢うつつなオレは思ったね。

みんなあゝ。ニヤマゲってしってるかい？

にやまげににやまげにとびつこうゝ 日光江・村
実際ににやまげにはとびつかないでください

って、あれのようだったと。

しかもタイミングが悪く倒れたじいちゃんの上には「ひいゝ」と青い顔をしながらも必死こいた海兵さんの皆さんがさらに上に乗っていくので、気がつけば床とデート中のじいちゃんの背には人間ピラミッドができていた。

「ガープさん！気を確かに！！」

「あ、あいてはお孫さんですよ！！」

「お孫さんケガしてるんですから！！」

うん、みんな顔青いよ。

でもそこまでして助けてくれてありがとう。

オレは礼を述べようとしたけど、その前に薬が効いてきたせいかな眠気がやってきた。

目を必死に開けようとするけど重くて。

そのままうとうととしていたら、ベット脇にいた医者が今はお眠りなさいと優しく髪をなでくれた。

優しい手。

このぬくもりが暖かすぎて——カクンといっちまいました。

じいちゃんも目が覚めるまでずっとオレの傍にいて疲れていたんだろ。

オレの意識が吹っ飛ぶ前に、つぶされながらガーと鼻ちようちんを

だして寝こけている姿を視界の恥に見つけた。

どこかで

「「「寝たー！！」」」

なんて、漫画にありそうな見事なハーモニーが聞こえたが、もう限界だ。

結局オレとじいちゃんどっちに対しての雄叫びだったのかはわからない。

けど、問題はそこで終わりじゃなかった。

オレはあの騒動以降、夢と現実をいつたりきたり、痛みに目を覚ましたり、熱がすぐにでたり…ほとんどもううつとして日々をすごしていた。

じいちゃんはその日以降すっかり病院には立ち入り禁止を食らっておとなしくなっていた。

だけど、オレたちは気付かなかったんだ。

あれが、嵐の前の静けさだということに。

オレがなんとか起き上がれるようになったころ——あの人はついに行動に出た。

リハビリがてら身体を動かし、食べて、動いて、話して寝て——
いつものように次に目を覚ましたら…。

しかしそこは、オレの知らない場所だった。

出入り禁止を食らっていたはずのじいちゃんが、いつの間にか忍び込んだじいちゃんに攫われ、オレは気がつけば船の上。

慌てて甲板へ出てみれば、すぐ目の前にはなんとあの海軍の文字がでかでかとかかれた要塞のような島！！

どこだここはあ——！！！！

内心でパニックになっているこっちの心情を一切気にもせず、甲板にいたじいちゃんが振り返った。

「おお。やっと起きたなここは…」

いえ、言わずともわかります。

あのいかにも和なカンジな天守閣、何度か漫画で見た気がする。

あれがある海軍。

しかも島丸々ひとつ海軍関係の施設。

そうなればここがどこか言わずもがな。

こっつて…

「海軍本部っ！？」

「よくわかったのお。さすがわしの孫！！」

じいちゃんのをふさぎたいと思った瞬間だった。

なに、怪我人を軍に連れてきてるの。

そもそもオレがここにいるということは、やつぱりオレは海兵にならないといけないのか！？

間違はなく怪我人にも容赦しなそうな特訓とか訓練が待っていそうなんですが…

なぜだ！？

なぜ、オレはこんなところにいるのでしょうか？

[illegible]

< said
ガーブ >

リースが船に興味があつたのを知っていたので、ちょうどいいと思って造船上へ船を取りに行くついでに連れてきた。

長旅に疲れたのか、はじめのうちリースは室内で茶を飲むか寝るかしてすごしていた。

それもやがてトッテンカンという音に誘われるように外に出た。ただ町の中はいい、けれど造船上の方ばかり気にするので連れて行く、と、案の定船大工たちにイヤな顔をされた。わしがあげく孫のリースまでこつちを白い目でみてきたので、突然気持ち悪くなって咳が出てしまったようじゃ。それで慌てて視線をそらした。

ん？まてよ。気持ち悪いでは、咳はでんか。
まあ、じゃあ突然風邪をひいたということ。

ともかく、そのすぐ後にタイミングよく蒸気船が到着し、周囲は一気にざわめきと好奇心につつまれた。船に興味を持っていたリースのことだから目でも輝かせているだろうかと思いきや、そちらをチラリと見ると、「えいがいいにも実在してんだ」と何かわけのわからないことを言っていた。

「蒸気船もあるんですね……」

蒸気船を知っていたことにも驚いたが、まさかその仕組みまで知っているとは驚きだった。

「いいよなあ船。凄く早く走るんだぜ」

「あなたも船大工ですか？」

「おう。いつか俺もあんな大きくて早い舟作ってみてーぜ」

「早く……ね。でも蒸気船はスクリーンや水車部分に当たる一箇所を崩せば必然的にエンジンが停止するので、物凄く手間をかけているわりには沈むのもあつけないでしょう。」

ほら中身の大半が鉄製なぶん、木船より重いでしょーし。

帆船の方が航海士とよい帆を利用していればより早く、そして海賊に襲われてもそうそう沈みはしません。

木は水に浮くんですよ。鉄よりは長くな。それには木に含まれる空気が……となり破片でも……」

驚いた。

船大工と引けをとらないその知識にも目を見張るが、なにより驚いたのは、リースが蒸気船を一目見ただけで理解したこと、そして船の構造自体珍しいためまったく船大工たち以外には口外されていない船の仕組を詳しく知っていたこと。

本だけで得たにしてはその知識は、あまり知られていないことのように思い考え込んでしまった。

リースはたまに変なことを言う。

それと同じぐらいの確立で、自分さえ知りえないようなことを言う。それはときに予言のように未来のことを示唆し、ときに5歳の子どもが知りえない過去であつたりした。

それでもその言葉の隅々には、自分たちを気遣うようなそんな労わりを感じ、強く聞き返すこともできないでいた。

ぶつきらぼうで、けれど人との繋がりを大切にする小さな子供。

子供とは思えないそれも、不思議な言動もなにもかも……リースだから。

『リースだから』

彼を相手にする者はいつもその気の抜けた雰囲気や、子供にしては丁寧な彼の雰囲気にも飲まれてしまう。

もしもリースがいつもの不可思議な言動を取ったとしてもそのときには、なぜか『リースだから』それだけで納得できてしまう。

そう思わせる空気を自然とリースが作り出している。それすら才能といえるだろう。

孫の奇妙さ……より、可愛さを自分の中でつらつらとあげていると

突如悲鳴が上がった。

何事だと思っていると、先程港に到着していた船がそのまままらずに動いているのを目にした。

あわてて駆け寄り船の動きを止めるべく船に穴を開けるが、その程度では蒸気船の動きを止められない。

たしかリースが、車輪がどうか言っていた気がする。

車輪を止めればエンジンが停止する。

その言葉を思い出し、後ろのほうを見るとたしかに車輪が勢い良く回転して、島ごと町をえぐっていた。

必死の思いでとめ、リースは無事かと戻ると、今度はリースが駆け出していた。

その先に何があるか理解し血の気が引いた。

やめるんじゃっ!!

そう呼ぶ声もリースには聞こえないようで、何かを叫びながら…倒れ掛かるマストの下へともぐっていった。

そこには五人の人間が動けずにいた。

後から走ってきた自分では間に合わなかったであろうそれ。

リースが飛び込んでからやっと気付いた存在。

けれど身体が小さいリースだったからこそ、倒れるマストの影にいた彼らの存在に逸早く気付いたのだろう。

リースは小さな身体を最大限利用して突撃するようにしていつきに二人を影の下から追い出し、次々と子供、男と助けていく。

だが、間に合わなかった。

わしの手もリリースには届かなかった。

いままでにないほどブチリ！と大きな音がして、それと同時になんとか傾くにとどめていたマストがついに折れた。

巨大な樹でも倒れていくような錯覚がおきる。

樹のせいでできた影の下から、男が一人飛び出した。ただリリースはいない。

「リリース！！！」

ドオオン！！！！

今までとは違う大きな土煙。

わしの声はそれにかき消され、続いて絶望的な光景に拳を握った。握った拳が一瞬ぬるっとしたがそれを無視してマストへ向け拳をそのまま振り上げ、地面に横たわる柱を粉碎し、破片をどかし、リリースがいただろう場所を探す。

いた。

運良くマストの直撃は免れたようだったが、大きな破片が当たったのだろう。

小さな身体は赤くボロボロだった。

「り、リリース……」

初めての孫。

だれよりも可愛くて、守ってやろうと必死になった。

だけど自分では守りきれず、大人のような表情を見せる一面、こんな小さかったのだと、その痛ましい姿に改めて思い知らされた。どうやら身体のどこも千切れてはいないが、腕が折れているのはわかった。

意識もなく、口元に手を当ててもほとんど息をしていなかった。

慌てて医者の方へかたづき込み、そのままリースは集中治療室で何日も過ごした。

医者は重症ではあるものの身体の一部を切断するようなものではないと言ったが、今夜が峠だといわれた。

なんとかリースの死は免れたものの、そのまま意識は戻らず何度も何度も熱を出した。

それから一週間リースは寝たきりだった。

何度か危ない状態が続き、手を握って「いくな」といい続けることができなかった。

『海軍の英雄』と呼ばれようと自分の孫一人救えない自分自身が恨めしかった。

どうすることもできなかった。

それがなんともいえない苦虫をわしにかませた。

ひいてはかえる波のように不安定な状態が続いてから、やっとリースの容態が落ち着き、仕事もあって長く病室にいられなくなったころ。

いつものように病室にのぞきにいったらリースが起きていた。

慌てて医者に報告に行こうとして、リースが泣いているのに気付いてやめた。

なぜ泣いているのかはわからなかった。

ただ痛むであろう包帯だらけの腕を酷使してまで、顔を隠すように、歯を食いしばって静かに泣いていた。

扉から聞こえたのは、「悔しい」という小さな小さなさすれ声。

しかしリースは医者と呼ぶ前にまた意識を失い丸々一日眠ってしまった。

そのまま目を覚まさないのではないかと不安が震えになった。
やがてそれも杞憂に終わり、リースは事故から8日後にちゃんと目を覚ました。

リースの目がしっかり覚めるまで——その間ずっとそばにいた。
椅子をベッドの脇に置いて、助けられなくてごめんと……目を覚ましてくれと、その手を必死に握った。

医者はもしかすると目覚めないかもしれないといっていた。
けれど今度こそ、目を覚ました。
それだけでここ数日のどうしようもない衝動は収まった。

目覚めたリースは、部屋の中を一瞥すると自分の状況を的確に理解したらしく、小さくため息をついていた。

それは小さすぎて……もしかすると本人さえ気付いていないようなものだったのかもしれない。

まだ手を握っていたが、この様子ではわしがいるのにも気付いてないのだろう。

「オレ、ついてねー」

そんな自嘲的な呟きが聞こえた。
やはり気づいてない。

それより、なぜそんな言葉がこの子の口から出るのだろう。
何が？どこがついてないんだ？

死にかけてたところを命を取り留めただけましじゃというのに。

それをつきつけたら、驚いたようにこっちをみたリースと眼が合った。

リースは小さく笑って、そっと手を握り返してきた。
それが無意識かどうかはわからないが、ほっと乾いた唇から安堵の

息が漏れたのを聞いた。

先程とは違う、安堵のため息。

それに目を丸くしていると――

「オレ逃げ足がもっと速くなりたいです」

事故のせいか、リースは自分から強くなる覚悟を決めたようだった。

そうだなと思った。

風船やジャングル、谷落とし程度では、リースの实力はあがらないだろう。

たぶんフーシャ村にいても同じ。

わしがずっと側にいらればいいのだが、それは不可能だ。

それは今回のことで実感した。

誰かが側にいなくても自分自身で生き延びるための強さが、この子には必要だ。

「海軍に入れ。今よりももっとすぐに強くしてやる」

いつの間にかほぐれていた小さな手。

その手をもう一度取るため、手を伸ばした。

強くなりたいなら、この手を取れ…と。

だけど返ってきたのは、「ありえないこいつ」みたいな目をした無表情な孫の姿。

ひどい！こんなにじいちゃんが真剣なのに。

そう思っていたら、無言で白いものが振り下ろされた。

痛そうな顔で、相手が包帯人間と貸した腕を振り下ろしたのだと気付いた。

怪我が酷くなるとめようとしたが、その前にリースがぶちぎれ、いつものマシンガントークがはじまり、つい言い合っているうちにわしまで熱くなってしまった。

しまいにはついいつもの癖で殴りかかりそうになったところで、部下に押さえつけられて——寝てしまった。もちろんわしが。

まあ、ひとまずリースを傷つけずにすんでよかったよかった。

だが、その後医者にはリースの見舞いに行くことさえ禁じられたのは腹正しかつたので、病院の前ですねてみた。

かわいくねーですというんな奴らにつっこまれたのは、わしとて傷ついた。

それで喧嘩両成敗となったが、あの子のリースの涙と言葉が忘れられない。

悔しいと言っていたリースは、自分さえ守れないことに悔しがっていたのではないだろうか。

心の中では強くなりたいたいのではないだろうか。

だからわしは、ある程度リースが歩けるようになった時点で、あいつを鍛えるべくとある計画を実行に移した。

医者からはリースの外出許可をもぎ取った。

リースはすでにフーシャ村に「すぐには帰れない」と連絡をいれていたの、奴の弟たちにわしから連絡せずとも大丈夫だろう。

まったく問題ない。

いざ、海軍本部へ。

強くなりたいというリースの側にわしがつっというて助けてやることはできん。

いい方法はないかと思ひ、海軍にリースをいれるのはいいことももしれないと思つた。

可愛い孫を海賊にはさせたくないし、息子みたいな革命家なんて不良にもなつてほしくない。

まあ、あやつはあやつで連絡だけはたまにしてくるから、まったく一切してこないリースよりその部分は可愛くもある。
つが、やっぱり、初孫の方が可愛い。

本当はエースも海軍にはいつていれば、奴の子供として世界を敵に回すこともないだろうが……まあ、今はリースじゃな。

強くなりたいのなら、やっぱり海兵になるのが一番いい。

わしは眠るリースをつれて海軍本部へ戻ることにした。

あそこならわしでも相手ができるし、暇な奴らも大勢いるから時間が空いた奴はリースの相手をしてくれるだろう。

たぶん黄猿あたりは、あれで甥っこがいるからリースのことも可愛がつてくれるじやろう。

とりあえず――。

クザンにだけはリースを会わしたくはないな。

なんだかクザンとリースを会わせたらうちの子がダメになるような気がするし……。

「おう、みえてきたな海軍本部」

リースとわしを乗せた船が、重々しい島影をとらえた。

甲板で潮風に当たりながらそれが近づくのをみていたら、船室への扉が開き、小さな子供が姿を見せた。

目の前に現れた巨大な要塞のような島などみたことがないリースには、はじめてみるそれは驚きだったのだろう。

包帯に覆われていないほうの大きな左目が今までにないほど驚きを表していた。

そんなリースに誇らしくなって、自分が所属する場所をみせるつもりでここがどこか教えようとした。

しかしリースはそんなわしの言葉をさえぎって正しい答えを先に述べた。

「海軍本部っ!？」

よくわかったなあ。と思ったが、やっぱりリースらしいと思った。うんうん。それにしても嬉しそうだ。

やっぱり強くなりたかったんだなと思った。

05 その覚悟は君が思うようなものではないけれど（下）（後書き）

閲覧してくださった方、ネメシス様、海原しお様、ライ様ありがとうございます。
うございます。

「リースの覚悟編」はここで終わりです。

皆さんが気になっていた爺様の手は払いました。
思いつきりね。だってリースですから。

なのに海軍本部までリースはちゃっかりたどりついたちゃいました。

それもこれも全て爺様のおおいなる誤解によって（笑）

そろそろ爺様の孫ラブ行動も落ち着くかと思えます。

なにせリースを海軍に入れちゃいましたから。

さあ、どんどん上がっていくリースのやる気なし度はどこまであがるのか！？

誤字脱字、感想あつたらお気軽にどうぞ。

これからリースともどもよろしく願います。

100328

06 すべてが違う（上）（前書き）

話の長さの都合上、急遽、話がずれました。

この回では悪魔の実はでません。

リースが六歳のなるのを待ってください（汗）

06 すべてが違う(上)

++ たまにはオレだつて子供である ++

事故からどれくらいたったか、どつかの誰かのせいで日付感覚がおかしい。

すっかり海軍の奴らに毒されているのが悲しい。

とりあえずフーシャ村に帰りたい。

あそこには可愛い弟がナイフを持って奇襲を……じゃなくて、ただただ遊ぼうと「にーちゃん」と無邪気に寄ってくるのは大変な癒しである。

(ルフィがナイフなんか持って襲ってくるわけないから、落ち着こうオレ)

さらにフーシャ村というのは、まさにオレの理想郷であり、願わくば骨をここに埋めたいとさえ思うほど平和な良き村だった。

そこでまったりと日々を過ごすなんて——老後まで見据えたはずのオレのウハウハ人生計画。

じいちゃんによる過酷な愛情表現を抜かせば、それはまさに順調とっていいオレの楽園だった。でも最近、それがおかしい。

オレの人生計画は狂ってきている。

なにせ太陽があるうちは体力作りという名目でマラソンさせられたり、ナイフもったり、刀もったり、銃について学んだり…あれ？
されに気がつけば、右の死角を補うためとか何とかで、誰かしらに突然の奇襲を日々しかけられ、ナイフを常備していないと生きていないような状況だ。

あれ？なんだろう。

なぜか目から鼻水が……うん、本気で泣きたい。

たとえ今が大海賊時代だからといっても、いままでのオレの平穏な日々を壊さなくてもいいではないかと思う。
世の中には一生戦わない人間だっているのだから、自分もその仲間に入れてほしいものだ。

弱くてもいい。

強くなくてもいい。

ただ静かに生きたいだけなのに…

「だというのに、なんでその考え方一つできないのですか？」

「なに言ってるんじゃ。お前が『強くなりたいから鍛えてくれ』って言ったんじゃろ」

「・・・」

言ってねーです。

グランドラインに浮かぶW7（ウォーターセブン）とは異なる
ある造船場にて、船が暴走して町を壊すなんて事件に巻き込まれて
から約一年がたった――。

オレの一年はハードだった。

半年間はリハビリ。残り半年はリハビリをかねた修行だ。

怪我の完治とリハビリに半年以上を費やし、なんとか身体機能は
回復した。

しかし包帯が取れた後もオレの視界は狭いまま。寝込んでいる間に
見た夢の通り、結局オレの右目はもう何も映すことがなくなった。
えぐれたわけではなく、白く濁ってしまってるだけ。

左目は船の破片が入ったとか何とかで少し視力が下がったため、一
年前にはしていなかった眼鏡をいまではしている。

右目はいかれ、顔や腕……は、みるも無残的な傷。

運良く目以外に障害や後遺症と呼べるものはなく、手足は普通に動
くようにまでは回復したが、なんかついてないねオレ。

別にさ、ヒーローになりたかったわけでもないけど。

目があつて、ここで死なれると後味が悪いので、それが嫌だっただ
けだし、とっさのことだからあんまり考えている余裕もなく体が動
いちゃっただけ。

生きてるだけでしたとは言われたけど。

なんか目玉を船に持っていかれた気がするのが釈然としない。

損した気分なんだけど。

もつというところだってこのケガつて、オレが活躍した証じゃん！？
どう考えてもイヤだろーそれ。

助けた人には感謝されちゃうし、周囲からはなんか尊敬の目で見ら
れるし。

だから！あれはオレの力ではなく、火事場のバカ力という奇跡です

から！

そこ！あがめないでください！！

そんなわけで。以前より目立ってます。

顔の傷でも目立つし、事件のこととかでも目立つ…。

オレ…オレさ、本当にただ地味に暮らしたいだけなんだから。

そんなに見つめないでほしい。

むしろ忘れてください。

そこらへんの石だと思ってくれるとオレは幸せになれるんです！！

ああ、むじょー。とはこのことだろう。

実は一つ驚いていることがある。
傷のこと。

身体のうちこちを傷つけた怪我の痕。服で見えない部分はどうでもいいけど、常に人目にさらされる顔の方を見てもわかるが、かなり痕が薄くなっている。

普通の人なら無理だろうというぐらいには薄いし、治りも早い。

やはり若さゆえか。それとも信じたくはないが…最強遺伝子のなせる頑丈さゆえか。

前者がいいな。まだまっとうな人間的理由だから。

それでもその異常な回復力もさすがにメインのケガには効果を見せなかった。

顔の一部と服の下、体の右側を中心に火傷のような傷痕は広がっていて、さすがにそれは生涯消えないだろうと医者に言われた。

そこまではいいんだけどね。

問題はこの後だ。

医者には怪我をした経緯を伝えたところ、ため息を疲れた。

「さすがはあのガープの孫」

なんだそりゃ？

医者が言うには、普通はやっぱ致死量に与える怪我だったそう
で、一年足らずでピンピンしてるのも信じがたいそうだ。

それに加えて怪我の治りが早くて、怪我の痕も消えかかっているの
もすべてじいちゃんそっくりだとか。

いやだ、なんだその遺伝子。

なくていいのに。

とりあえず愚痴っていたら、ため息をついてあきられ

無茶のしすぎだと…

静かに言われた。

「無茶…したつもりはなかったんですがね」

あのかきは本気で面倒だった。

でも見てしまって、目が合ってしまったのだからしかたない。

あのまま彼らが死んで、たたられたらどうしてくれるんだ！怖いじ
やないか！！

それにこんな傷、気にしてないよ。

自分としては傷痕など本当に気にもしていなかったし、逆に怪我を
理由にこれでやっと静かに暮らせるとさえ思っていた。

ウキウキして完全復帰を待っていたのに…。

そうは問屋がおろさなかった。

半年後——怪我也治り、復帰という意味でしっかりと動けるようになる、じいちゃんが動き出した。

もともとじいちゃんはオレを強くするために海軍につれてきたため、リハビリも終盤になるとオレに身体を鍛えるようになってきた。右目が見えないのだから、見ることもよりも気配で物を察知するように注文つけられ、あるときは目隠しをして戦わされたりした。

今の俺じゃあ、あってもなくてもあんまり変わらないんだけど。

修行をなんとか耐え抜いたというより、徐々に徐々に段階を上げているので、修行についていけてしまうオレが嫌だ。

修行——はじめのうちはまだよかった。

たとえば海軍式の鍛え方だといっても相手は実の祖父。

言葉でしっかりアドバイスしながら、オレへの労わりを交えた修行だったから。

でも日がたつつれ、それも最悪な方向へ向かった。

ぐうたらと日々を満喫したいオレには想像するだけで悲鳴ものだが、人によっては羨望と憧れの修行方法。

それはじいちゃんが集めてきたお偉方（＝強い奴ら全般）の目の前で起こった。

「わしの孫のリースじゃ。強くなりたいらしくてわざわざ海軍に入りたいと言ってきたから連れてきたんじゃない。

お前たちどうせ暇じゃろ。空いてる時間にでもリースにつきあってくれんか？」

え？なにその真実が一つもない話。

ってか、どれだけ勝手に設定作ってるんだよ。

あんたの頭の中をまず解体してオレに中身をすべて見せてみる！と一瞬殺意が沸いた。

本当にできるならそうしたい。

あのひとの脳みその中のオレがどんな奴に変換されているか見てみたいものだ。

しかも最悪なことに、何をどう勘違いしたのかわからないがオレが自分で強くなることを望んでいると信じ込んでいるじいちゃんは、中將連中目の前にありもしない尾びれをたんまりとつけてくれて。

ああ、オレ、死んだな。

よかれと思ってやったのだろうが、じいちゃんや。

それはオレへの死刑宣告と同じだ――。

そのときオレは、どうしたらいいかなんて考える気力もなかった。ただ一言言いたい。言えるのならばだ。

すっかり海軍本部に居ついているけど、オレ、リハビリ中でしかもただの子供です。

年齢なんか、永遠の幼稚園児クレヨンし・ちゃんと同じ5歳ですよ。もう一度言いますが。

オレ、ただの子供です。

それも右側見えないようなハンデ負ったあげく日々だらけることに

だけ努力し、まったくもって海軍になんか役に立たなそうな奴ですよ！！

ましてや海賊相手には兵力にもなりませんから！

なので海軍に推薦しないでください。たとえ海軍本部をつろついても！

もう、修行もいらないますから！！

なのに、ひっぱりだされた先には、どっかのマフィアな帽子が似合いそうなボルサリーノさんと、濃い顔が素敵なサカズキさん、ヤギさんが相変わらずそばにいらっしやるセンゴクさんまでいらっしやいますよ。

熊耳帽子のお方とかどっからつれてきたの？

ついでに微妙に見覚えのある中將とか大佐とか以下略…将来どこぞの大佐になるだろう方もいますよ。

って、おつるさん。あなたまで！？

貴方がいるなら、なぜか将来の大佐とかもいるのは納得できる…気がする。あくまで『気がする』ただけけどね！なんたってオレの勘はあたらないんだからさ。

他にもけっこう原作で重要な大御所達がっ…ズラリ！？

ああ、みなさんはじめまして。

そしてさようなら。

と、言えたらいいのに…。

無理だよ、うん。

それより、壁とお話してもいいでしょうか？

海軍本部といっても医療区域を出たことがなかったオレは彼らとは面識がない。

オレが彼らを知っているのは、原作でみていたから。

ここで知っていることがばれないようにしなければいけない……っが、そんなことよりもあまりに微妙でいて凄すぎる面子に、言葉も出ずびつくりしたままもう動けません。

青キジことクザンさんがいないのはきつと面倒という理由で逃げたのだろう。

なんてうらやましい。

それはいいとして…

なんでだよ！なんでいるんだよあんたら！！

みんな、そんな孫を見るようなやさしい顔してもだめですよ。

オレのウハウハでまったり人生を奪いに来たのはわかってるんで

……

じいちゃんには嫌な予感しかしないオレの肩を叩き、集まったお偉方（あと暇人も含む）に向け、ついにこの凄い展開の理由を話し始めた。

あ、オレ、なんか聞きたくないなあ。

もちろんじいちゃんにオレの心の訴えが聞こえるはずもない。

「暇な時に鍛えてやってくれ」

ハイ。ありえないです」。

+++++

そんなわけでリハビリ終了から約半年、ことあるごとに変態に迫られています。

相手はどこかの戦闘民族か！？とツツコミたくなるほどの戦闘狂な方々だから、たぶん憂さ晴らしですよ間違いなく！

「鍛えてやって」というあのじいちゃんの発言が、なぜか…というかたぶん故意的に、いろんなところに広がってしまい、海軍本部だというのにも関わらず悪いことをした要人のように暗殺者よろしく日々殺気立った変な人に命を狙われるようになりました。

おかげで足は速くなりましたよ。

まあ、まだまだ——たぶんずっと無理だ。何せ、オレは一般人だから——『剃』とか『月歩』なんて六式は使えないけどさ。

とりあえずは鍛えてはいるけど、六式の修行をしている日まもなく、体力と剣捌きだけ上達しているこの頃。

あくまで『さばき』であって、剣術としてはさっぱりです。

迫ってきたものをさばくことはできてもね、それに対応する力はまったくないです。

だって、オレ、五歳。

でも訓練の効果は少なからずあったのだろう。

最近では五感が異常に発達し、ほとんど目で見ずに物を認識できるようになった。

右目負傷したからって、なんでみんな死角ばかり狙ってくるのか…

…おかげで五歳児にして、ちょっとオレは人の道をそれた気がする。

オレはただの人でいたい！

でもね。そろそろオレも限界なわけで…。

なに、このむさい空間。女子率が低すぎだあ！！

そんなわけであの事故から一年、完全復活を遂げたオレはついにこの海軍本部という砦から逃亡をはかることに決めた。

オレはフーシャ村に帰るんだあー！！！！

さあ、いざ敵陣へなぐりこみだ！

「帰りたい！！」

「いいぞ」

死を覚悟していたものの、実際のところあつさり許可が下りた。なんたつてオレ5歳ですし、「じいちゃん！もう限界だっ！！」エースやルフィに会いたいよぉー！マキノさんのおいしいご飯が食べたいですうー」そろそろホームシックだったもので泣きながら訴えました。

嘘泣き？いやいや、本気^{マジ}泣きでした。たぶん鼻水でたかも。それぐらい本気で泣いてました。

だって本当に帰りたいんだから仕方ないだろう！！

じいちゃんもちょうど休暇をもぎ取っていたらしく、フーシャ村への許可はなぜかみんなに微笑ましいぐらいの優しい笑顔で持って許可していただいた。

安息の地（使い方間違ってる？オレの中ではあつているので問題ない）に帰りたくて帰りたくてしょうがなかったこと。ついでにこの地獄の空間から出れること、命の危険を回避したこと。そしてなにより帰れる嬉しさで涙と鼻水が止まらず、ずっとウオンウオン泣いていた。

「うわーん！！もうおうち帰るうー！！」

え？中身20歳すぎのおっさんがなにをしてるかって？

ボルサリーノ

だって、あの黄猿とか、おつるさんとか、じいちゃんとか……！！あんな奴らが毎日に奇襲かけてくるんだよ！とくにボルサリーノさん！！なんで？なんであの人はやたらとオレをかまうの！？

死ぬから！

もうやだ。命が危ない。とくにオレの！

この世界がどれだけ命のやり取りがすぐ側なのかは知っていたけど、なにもオレでそれを実践しないでほしい。

いや、おつるさんはね。戦った後、お菓子をくれるんだよ。でも…怖いんだよこの人たち！！容赦ないし！

しかも他の海軍の皆さんも八つ当たりと可否待つ無事に奇襲を…。そりゃあ、家にも帰りたくなるといふもの。

そのまま帰郷準備をするため、オレはじいちゃんに米俵のように担がれ運ばれた。

その間「おうち帰えるう」と連呼していたら、道行く人が「ホームシックかあゝあいつもちゃんと子供だったんだなあ」というような、なんともいえない生暖かい目で見送られた。

何度もいうけどオレ5歳よ！！精神年齢は別としてもさ！

なのに家族と無理やり引き離された拳句、1年もあえないんだよ！？そりゃあ泣くべ。

…まあ、本当の理由は違うけどさ。

オレ、そろそろ自分の命の危機感を感じたのが最もな理由でして。

帰れることが決まるとさっそくエースとルフィにと、海軍本部名物の『正義』印入り焼きせんべいを土産に、オレは途中まで乗せてくれるらしい海軍船に乗り込んですっきり浮かれていた。

「おうちまだですかあゝ」

これでやっとなると。

これでオレは命を取り留めた！！

でも、すっかり忘れていたんだ。

ここがどこか。

海軍本部がどこにあるか考えてみてほしい。

たとえばカームベルトを通過したとしても、フーシャ村のあるドーン島まで何日もかかる場所であることを…。

オレは出航してから数日後、このまますぐに弟たちに会えないことに気付くまで、「フーシャ村はまだかな？」と子供のように船の上ではしゃいでいた。

実際外見がお子様なため、船の船員や海兵の皆さんには年相応に見えたのだろつ。

たくさん飴や優しい言葉をもらい、なぜか必要以上にみなさん人の頭をなでたり手をつないだり…スキンシップが激しかった。

もちろん一番激しいのは案の定じいちゃん、あのヒゲによる頬ずりは相変わらず痛かった。

つで、ここでもあの人、またやってくれたわけですよ。

「わしが鍛えてるからな。こいつは強いぞ。なんたってリースはワシの孫じゃからな！」

ぶっはっはっはっは！！

つて、そこ！笑っている場合じゃねー！あんた、なにけしかけてんだよ！！

船の上で暇なことも合わさり、闘争心をかきたてられた一部の海兵さんにより、結局船の上でも相変わらず奇襲を受ける羽目になった。

訓練？なにそれです。

あれは訓練とは言わず、襲撃や暗殺。相手の憂さ晴らしといったいいものだ。

だって大概、予告もなくしかけてくるんだから、間違いなく「手に

とつて教えますよ」的な修行じゃない。

この変態どもめが!!

ああ、本当に長い。

長い1ヶ月（と少し）の航海だった。

ちなみにフーシャ村までの順調な航海（でも一ヶ月もかかる）で、なかなか目的地に着かないのを知った瞬間オレは絶望したさ。

しばらく割り当てられた部屋の隅で壁とお友達になっていたのはしかたがないだろう。

【追伸】

オレ、船倉で見知らぬお子様とお友達になりました。

エースと同じくらいの女の子。

あれ？そういえば、あの子どうやってこの船に乗ったんだろう？ここ海軍の船なのに。

まあ、いいか。

「ねえ、じいちゃん。あの船、オレ以外にも子供がいたんですね。オレ名前聞くの忘れちゃって、後であそこの海兵さんに聞いたいてもらえますか？」

上陸後、手を振って見送ってくれたあのこのことを思い出した。話を聞いてくれたお礼を言いたいのだというと、じいちゃんが真っ青な顔をしてオレを近くの病院へと担ぎ込んだ。

ハ？なにこの扱い？

「あそこに子供はお前だけだ！！」

「……」

えーっと……どういうこと？

密航者とかではなくて？

あ、首をふられた。「ありえない」だつてさ。

それじゃあ——……………あの子は……

「……」

「……え？まじですか？」

コクリ

「……」

「……うそはいけませんよ嘘は。ふうふうっかり騙されるところでした」

06 すべてが違う（上）（後書き）

拉致誘拐より一年、そしてついに帰郷！！

まだまだリースは弱いです。

ルフィが17歳になって旅立つころにはきっと少しは強くなっているはずです。

リース、運命の誕生日まであと少し…

『すべてが違う』…人生思い通りに言っただためしがないぜと、いうこと。

リースが考えた事は周囲にはさっぱり間違っただけで解釈されるし、その都合でリースの計画や考えや将来の夢はことごとく壊されていく。そんなリースのこと。

哀愁ただようリースの背中が見えれば大成功です（笑）

100330

06 すべてが違う(中)(前書き)

あまりに「!」と雄たけびが多いので、読みづらくてすみません。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

06 すべてが違う(中)

++まだまだ青い果実++

一ヶ月越えの航海を終えたリースです。

えーっと、未知と遭遇して、さらにはお友達にまでなってしまったオレですが、生きてます。

UFO以来か、規格外生命体との遭遇は…。

せめてあれが幽●と呼ばれるものではなく、ゴイングメリー号みたいな子であることを願おう。

だって怖いじゃん!!

まだ船の化身のほうが怖くない。

さて、現状を述べると一度はフィシャ村に戻れた。

『一度』はね…。

「なあ、リース。リースってば」

現実逃避していたオレを呼び戻したのは、すっかり原作の面影が出てきているエースだ。

ゆるゆると波打つ黒い髪もやんちゃっぽいニキビ顔も…ああ、一年

で人って成長するもんだなあと、オレはしみじみとしました。どうやらオレがじいちゃんに攫われたことで、エースは「あのじじいを倒すぐらい強くなってやる！」と修行を始めたらしい。

できればもっと早く大きくなって強くなって、オレが捕獲される前に助けてほしかったが——あのつらい一年を思い出しホロリと涙が出たけど——今はルフィを抱いているし、十分心の傷は癒されたので許すことにしておこう。

むしろ殴る蹴る怒鳴るなんて、そんな余力さえオレにはもう残っていない。

オレのおかげで決意したというのも微妙なのだが、エースも腕を上げたようでじいちゃんを見ても逃げなくなった。

ごめんよエース。

オレはあの人を目にしたら逃げたい。

だって現状を見てもそういうだろう！？

現状——

そういえば、なんでオレの服は濡れてるんだろう？

目の前の湖に飛び込んだのだろうか？

よくわからないまでも、今、オレ、エース、ルフィは、小さな滝の在る湖のすぐ脇にいる。

「おいリース！お願いだから戻ってこいよお！！おおいっ！！」

「ハハ……五歳児に一歳児を抱かせて、四歳児と一緒にサバイバルって……」

「リース！？」

ああ、オレの魂抜けそう。
しかも、いま、ヒュンっていうか、ひゅるんって音したよね！？
エースの悲鳴も聞こえるし、オレ、相当やばいかも。

説明すると、ただいまルフィを抱いたまま、エースと密林に放置
され中。

フシャー村に帰るとエースが物凄く喜んで歓迎してくれたのが、い
まとなつては懐かしい。

これでゆつくりできると、またいつかのようじいちゃんを無視し
てルフィを村長の腕からもぎ取り、ぎゅうっつと抱きしめ……その
後エースに怪我のことで泣かれ、説明が済んだところで——記憶
がない。

気がつくとおレの腕の中にはルフィがいたまま、オレ達お子様3人
はみたこともない無人島の上にいた。

ちなみにどうして無人島かわかったかというと、側に書置きがあつ
た。

『親愛なる孫達へ

村長も忙しいというので、ルフィと一緒に置いていきます

いつものように水とナイフは置いていく

子供でも暮らしていけるだけ食べ物そろってる島なので安心せよ
リースは自分の武器を使え これもまた強くなるための訓練じゃ！
助けを及ぼうとしても無駄じゃ無駄。ここは無人島じゃ！

わしも用があるから迎えは一週間後じゃ

1週間後に迎えにいく それまでがんばじゃ！ B y ガープ』

最後に犬のマークがあった。

後の被りもののアレかと納得した。

犬…意外と可愛かった。

けど、物凄く隣の文字が憎たらしくて、すぐにその手紙は破いて捨てた。

「食べ物はあるって野生の動物に襲われたら死ぬわっ！！どこが安全だ！」

そうしてオレはしばらく呪詛という愚痴を吐きつらね、生い茂る木々の合間に青い空を見つけ…無性に人生がどうでもよくなってる気が抜けた。

ぶしゅ〜と効果音がしそうだ。怒りなんてあっという間にゼロ地点へ到着し、さらに急降下し続けマイナスまでたどりつき、ついにオレはその場に座り込むと現実逃避をした。

その様子にギョツとしたエースが、オレの名を呼びながら肩を揺さぶったりしてくるがそれも遠くに聞こえていたほど。

幽霊とか、UFOとか…なんか色々とありもしないものの遭遇に思いをはせている間に、ルフィがぐずりだしてそこでやっと本格的に我に返るという状況だった。

まったくあの人は本当になにをしてくれちゃってるのかな。

オレが相手じゃなかったら、本当にお前の孫達死んでるぞと密かに思った。

それを容易に想像できて、オレは年には似合わないほど大きなため

息が漏れた。

「なあ、リース腹減った」

「あゝ、うん。とりあえずこれでも食べて、それから作戦でも練るとしますか」

「うん」

ぐゝぎゅるぎゅるぎゅるうゝ

凄い音共に、エースにクイツと服裾を引っ張られ、一瞬この小さな子が哀れでしろうがなくなった。

オレよりも小さな体をして普通の人の数倍食べる第二人は、ひもじそうな顔で腹をすかせている。

エースのおなかに続き、ルフイの腹まで合唱を始めたところで、オレはこの現状を作り出してくれた存在に殺意がわいた。帰ったら本気でじいちゃんに逆襲しようかと考えた。

ぐゝぐゝぐゝ

なんてこった。

ついには三部合唱になってしまった。

オレの腹じゃないのは間違いないから、いったいどっちの腹が2回鳴ったんだろう。

食材は現地調達しなければいけなかったのに、オレが呆けていたばかりに…。

殺意は捨て置き、かわりに少しでもお腹を満たしてもらおうと、土産に海軍本部で買った煎餅の袋をあけた。脇でポリポリと音がする。

なんだかいつもと違ってちょびちょびと食べるエースの姿は、ハムスターとかリスみたいでかわいい。

「問題はルフィか」

もう時期に二歳とはいえ、歯がまだ微妙だけど…あのルフィだし。なんか普通に肉とか食べそうで怖いな。

しばらくは果物とかすりつぶしたのでもあげるか。

それにしても。危険な密林でうまく安全に一週間過ごすにはやはり万全の準備が必要だろう。

ルフィもいるし。

この面子ではまだ誰も力がないし、助けは…本当に期待できそうもないな。

こういうときぐらいは子供たちを心配して密かに見張り役の人間ぐらいつけておいてほしいが、そんな心配すらない。

いないというのはあれか？これは、オレが信用されている証なのだろうか？

それとも忘れられてる？

そう思ったら、もし見張り役いたら…とオレは笑った。

「いたらいたらでやつあたりしてたでしょうねオレ」

うん。いなくてよかったね見張り役。

でも、本当にどうしよう。

あゝ、まじで人の気配ないし。

でもあちこちから違う気配はする…ジャングルだし仕方ないか。

チラリとエースを見ると、空腹すぎるのか煎餅がまずいのか、微妙に哀愁を漂わせてまだ一枚目ももそもそと食べているがやはり元氣

がないような気がする。

ルフィは体いっぱい空腹を現している。さっきより泣き方が微妙だ。まさか食べ物の気配を察知したのか！？

まだお前には早い。

さすがに煎餅は無理だ。

オレ？オレはもとから人並み以下、小食なもんで煎餅なんか食べたらご飯が入らない。

それに何時間か前かは忘れたけどちゃんと昼飯食べたし、まだまだ平気だ。

長兄としては、ここががんばりどきだ。

そこらの獣のうなり声に近い大きな音を立てている二人の腹を満たさねばならない。

めんどうでも、生き延びるためには、食が必要だ。

あっちの方にいるメチャクチャ殺気出してる動物：あれ、食べれるかな？

こういうときサンジがいてくれるとなんでも料理してくれるのになあ。

今度マキノさんに、ある程度食べれる物体の知識を教えてもらおう。あと料理法も。

本部にいるときからずっと持っていたナイフを引き抜く。
鞘もとつてと…。

「ご飯の保障はできないですから」

エースに断ってから、ついでのように気配のする方へと投げると

ギャウンと悲鳴が聞こえてドサリと音がした。
うん。倒れたね。

「わーすげー！今のどうやったんだー！」
隣でエースが喜んでるけど。

…一撃で死ぬって。悪いけどどこにあたったの？

オレの方がビツクリ。

だってさっきの言葉も自分たちの方がご飯になるだろうなとしか
思ってたから。

とりあえず今日は食べれそうな肉ではなくて、食べれそうな植物で
もいためて我慢してもらおうと思っていただけだし。

当てるつもりはいつさいなくて、気まぐれに投げたけど、それだっ
て手元にそれしかなかったからで。

だってあんな小さいナイフだよ？

この世界の生き物は大概大きいし、凶暴だから、あれくらいじゃ死
ぬとは思えないんだけど。

それにほら、今投げたナイフは五歳児が投げるんだから手裏剣より
軽くて小さいんだよ。毒だってぬってないし！？

オレ、気配は人一倍読めるけど、力あんまりないし、まず投球とか
ノーコントロールだよ（見えてないから）。

うん、なんか…ごめん晩御飯君。

「それにしても本当にリリース強くなったなあ！！一撃であんなでかい奴たおすなんて！！」

結局、先程の巨大生物は、トカゲでした。

心臓がとて河の表面に近いところにある生き物らしく、腹の部分以外はすべて強固なうろこに覆われている。

オレの小さなナイフでなくなりになった理由は、弱そうなお子様ズにおそいかかろうと立ち上がったところを、弱点であるやららかい腹部分のそれも心臓にナイフが当たって即死したもよう。なんだか哀れだ。オレ達が運がいいのか、トカゲさんが運が悪いのか微妙である。

しかも今はその肉が晩御飯用に調理中。

もちろんうろこはしっかりおとしてからね。

焼かれている肉を見て、これはドラゴンボールのゴハンが緑なピッコロさんに修行してもらっているときのあのトカゲを思い出すなどひそかにおもった。

ドラゴンボールでは、シッポを毎回ご飯にされてドンドン斬られていく大トカゲ。

同じような感じで、大きなトカゲがたおれていて、しっぽが現在火で焼かれている。

そのシッポの先端は、エースの腹の中に入っている中として最中。

オレ…ごめん。食べれません。

気持ち悪いかじゃなくて、そこら辺にあった果物を食べたなら腹が満たされてしまったので。

エースはまだまだ食べられそう。

じいちゃんもそうだけど、本当にこの一家は良く食べるなあ。

オレ、そういうところなんで似てないんだろう？
違うところは似てるらしいけど…。

まあ、いいや。

まっとうな人間らしくていいじゃないか。

エースはモグモグと口を動かしつつまだこちらをほめている。

早く早く。とその目が明らかな期待を含んで、オレの次の言葉を待っている。

うーん。そんなにキラキラした目で見られても困る。

だって、あれは偶然だし。

この際、はっきり言っただろうがいいよな。

ここで尊敬されても困るし。

「なあリースってばあ！おれにも教えてくれよ！！あのスパン！ってやつ」

「え？ごめん。あれ、偶然」

「は？」

正直に言ったら、エースの顔がびっくりって感じになって動きが止まった。

いやー、いつみてもこいつのこんな顔は面白い。

じいちゃんもそうだけど、どうしてこうも感情豊かね。

純粹だねー。

「えーと。ジャングルって危険なわけですよ。

それで長兄として弟達を守ろうとしました。

脅し程度のつもりで、たぶん足を狙ったつもりだったんだけど…な

んでか直撃してたんですよ。晩御飯君も運がない。かわいそうに」

そんなわけでそれでトカゲ君は晩御飯になったわけです。うーん。これって、可愛い弟の夢を壊すことになるのか？

まあ、オレがほとんど見えてないのは事実だし。

そりゃあ、間違いの一つや二つ…ねえ。

「……」

「あ、言ってなかったですか？オレ。ノーコントロールですから」

「うえっ！？なにそれ！？それって下手したら俺たちが死んでたってことじゃー！」

うん。死んでたね。オレによる不可抗力のせいか、あのトカゲに襲われてたか。

まあ、生きていたからよしとしよう。

「だからはじめに言ったじゃないですか。『ご飯の保障はできないですから』って」

「あれってそういう意味なの！？リース怖っ！！」

なんて恐ろしい子と、どこかの漫画のように小指まで立てたポーズでエースは震えているが、事実^{じじつ}は事実だしね。

今回は赤ん坊のルフィもいたので、作戦としては【刃物で脅して敵を遠ざける】予定だった。

それがなぜか運よく晩御飯までありついただけで。

オレ、いつからこんなに活動的な子になったのかな？

ああいやになる。

なんでこんなところでサバイバルをしているのかな？

だってやつとあの奇襲地獄から開放からされて、オレはだらけてでも生き延びられる新天地フーシャ村に戻ってきたはずだったのに。また、死に掛かっているような気がする。

このジャングルにいるだけでもいつ死亡フラグが立つてもおかしくない位置にいるのに、さらには身を守るすべさえ知らない1歳児（もうすぐ二歳）付き。

どう考えても普通の子供なら三人とも死んでる環境。どうしてこうオレに身近には危険しかないんだろう。

ハァ。

じいちゃんのアホ。

+++++

島での一週間はハードだった。

サーベルタイガーに追いかけられたり、木に登ったり。

釣りをしていたら、こないだのサーベルタイガーとなぜかお友達になれたり。

海の水をろ過して作った塩でもって、肉とか魚を料理をしてたら、エースに誉められたり。

食べられそうな果物を見つけて、見よう見真似で料理なんてものをしてみたり。

寝る前は、二人で星を見上げながら、離れていたこの一年のことを話し合った。

甘い果物ではジャムを作ってみた。

乾燥させると粉っぽくなる実をみつけた。

それで粉の料理に挑戦したけど、お好み焼きには遠く白いクレープみたいなのができた。

エースには好評だった。

そうしてジャングルの猛獣たちをやりすごしたり、「うおー!!」とか「ぎゃあー!!」とか日々何度も叫びながら過ごしていたら吃驚することがあった。

驚いたこと。

やっぱりルフィが肉を食べた。

ええ！？その塩漬け、そのなさそうな歯で食べちゃったの！？

く、果物で我慢しようよ。

エースがじいちゃんそっくりの馬鹿笑いをしていた。

とりあえずルフィは赤ん坊でも食べっぷりは原作とまったくかわらなっ

た。これで…ひとつ心配がなくなりましたね。

ただ逆に、赤ん坊なのがいいのかってという疑念は生まれましたが」

「齒が丈夫そうだよナルフィの奴」

「エースとどっこいどっこいだと思いますよ」

「そうか？」

おいかけ、おいかけられ…そんな野生生活が始まって4日目。

剣捌きではなく、包丁捌きがうまくなった。

謎材料による料理のレパートリーが増えた。

サーベルタイガーは、食糧を供給してやったら、強い敵からも守ってくれたり、一緒になって逃げたりしてすっかり意気投合して仲良しになった。

っで、

おめでとーオレ。

この修羅場の中で、なんとか生き延びているうちに誕生日が来た。ついに6歳になったよオレ。

エースが朝からいつもより多く魚を釣ってきて祝ってくれた。

うん、これでオレはついに23歳（精神年齢）か。

振り返ってみてもこの六年…

はは。すっかり人生やり遂げたような気がするよ。

特に去年一年ですべて終わった気がしたな。

——年、とつたなあ。

喉がかれてるのは、きつと獣とのおいかけつこで悲鳴を上げすぎただけじゃなさそうだね。

じゃあ、体が痛いのは筋肉痛や擦り傷のせいじゃなくて、年かあ…。

なんか…いやな誕生日だな、おい。

年をしみじみと感じていたその日の午後。
オレが更なる絶望を感じる直前のこと――

エースと喧嘩した。

その延長で、エースが言った言葉に腹が立った。

「…そうやってルフィばかりかまうんだ！」

「だって、まだ状況理解してない子供ですよ？このまま放置はできません」

だってルフィってば勝手に出歩くし、さまよっては迷子になるし、動物に食べられかけてるし…

さすがに放っておけないじゃないか。

「いいよもうリースなんか！！」

オレだけどうせ本当の兄弟じゃないし！！どうせ海賊の子供だ！！」

その言葉にハッした。

エースは自分で言った言葉に傷ついているのか、本当に泣きそうだ。

ああ、そうか。エースは知ってたんだなと思った。

どうして自分だけ名前が違うことも。

父親が誰なのかも、なにをした奴なのかも。

原作ではいつからエースが、ゴール・D・ロジャーのことを知っていたかは詳しくは触れていなかった。

けどきつと自分で気付いたんだ。

周囲の言葉や態度で…。

まだ5歳なのになお前。

いまからもう、ロジャーのことをその小さな背で背負っていくのか。

「リースなんか嫌いだ!!」

「なっ!?!」

……だからといって、それはないだろうマイブラザー？

めんどくさがりやのオレが、せっかくお前の負担を半分背負ってやるうと言おうとしたのに、それがよ!？

「このドアホー!!」

買い言葉に売り言葉だ。

思わずカツとなって殴ってしまった。

下から上へ、エースのあごを狙った左ストレートが見事に決まった。けれどさすがエース。赤くなった顎をおさえつつすぐに起き上がった。

「いてー！なにするんだよりース！」

いやいや。エースくんよ。普通ならそこは脳震盪を起こしていてもおかしくないんだよ。

弱い力でもあごからの衝撃は、脳を揺さぶるのだから。

まあ、エースだし、あのガープじいちゃんのにごきを受けたものとしてそこはスルーさせてもらおう。

むしろ見てみぬ振りするからね！

それに実は、オレも痛かったです。

でもまずはこの怒りをぶつけてしまふことにする。

「オレの大切なもん否定されてだまってられるか！！」

”あのとき”じいちゃんがオレをこの世界に引き戻してくれなかったら、この世界で生きようとは思わなかっただろう。

だから今、オレはこの世界で懸命に生きている。

オレはオレを引き止めてくれた家族が死ぬほど大事だ。

その家族って——なにもじいちゃんのことだけじゃないんだよ。

なあ、エース。

だって、オレたち家族だろ？

「このひねくれものめがつ！！」

オレがいつお前を無視した！？いつ家族じゃないと言った？

オレはエースが大事だ！！

オレがどれだけ苦労してここまで戻ってきたと思ってる！？この一

年ずつと脱獄を謀ってはつぶされ潰され…！　　ただけエースやルフィに会いたかったと思ってるんだ！

オレはおかげでホームシックになったぞドアホ！」

本気でさびしかったんだからな！！

突然癒しを奪われて！！逃亡計画は防がれるし！！

それに――

海賊だからって……なんだよ。

――それって『拒絶』だよな？

リースとして生まれてからオレは、ずっとエースを家族だと思ってた。

それがその一言で、否定された気分だった。

「誰の子供だって関係ない！でもお前がオレ達に嫌いっていうな！！その言葉はお前自信が、オレたちを拒否してることになるんだよ！なんだよお…！　　なんだよもう、コンチクショ―！！」

ちやぶ台がほしいね。

気分は湯のみごとひっくり返した気分だ。

それに海賊の血が嫌なら、もっと嫌な血があることを教えてやろうじゃないか。

「血が繋がってるというならオレはあのガープの孫だ！！」

「は？」

「血ならこっちのほうが濃い!!」

ドーン！といってやったさ。

『海軍の英雄』の孫なのにどこが不満なんだと、文句あるか！といわれたら、分身の術でも使って100回は「ある！」と言いたいだってガープだぞ！あのモンキー・D・ガープだぞ！！
それでもって孫ラブな激過保護なあのじいちゃんだぞ。
痛いんだぞ。死にかけるんだぞ。

「オレなんか愛情表現の仕方間違ってるあのジジイの孫だぞ！！いつも殺されかかってるし！」

絶対じいちゃんの方が、ロジャーより性質タチが悪いといつも思うし、むしろ断言できる。

夢と希望を世界に振りまいたロジャーより、妄想と正義感でもって何かすぐに自分で話しくって過激な行動を取る奴の被害のすさまじさ！？（しかもオレ限定）

「アホやバカ発言は許す！だけどどうせ海賊の子供だとか、嫌いとか言っとなっ！！」

だって子供は親は選べないんだからどうしようもないじゃん。
オレ、祖父を選びたいよ。

でも無理なのがわかるから、それにその親から出ないと自分という

存在が生まれないのも理解してるから。血とかさ、実はどうでもいいことじゃないかなって思う。

大切なのは、血じゃなくて、生まれてきて、その後の人生をどう過ごすかだ。

そりゃあ、近親結婚はさすがに遺伝子的に危ないからさ、それを防ぐためには血を知るのは需要かもしれないけど、オレ達の間には血とか海賊とか関係ないことじゃないか。

「エースのアホ」

——そんなこと言うなっ！！って。

将来ルフィが聞いたら同じ事を言うだろうな。

ルフィなら怒鳴ってさ、必死になってくれて、きっと誰よりもほしい言葉をくれるんだ。

うん、そういう子になるように、人の心がわかる子になるようちゃんと育てよう。

いや、むしろこの言ってもわからないアホには、ぜひのびるその腕でもって怒鳴ってやってくれ。

エースのこの問題はさ、ルフィ後は任せるよ。

お前がオレとエースのただ一人の弟なんだからさ。

オレはエースの兄。兄ちゃんは弟をしかるのが役目だから怒る。

だけど兄ちゃんは弟を守るもんでもあるんだ。

だからエースの弟であるルフィから怒られたら、オレが言うよりもっと威力があるよね。

だからさ…

「そんなこと言うなっ！！」

きたるべき“いつか”のかわりにオレが今言ってる。

だからいつか、ルフィも言ってるよ。

そんなこと言うなっ！オレは弟だー！ってね。エースが嫌がっても言ってるほし。

そのときまだ血のことで悩んでるようなら「家族だこのやろっ」ってさ。

——ルフィは唯一エースが守りたい弟君。

大切な家族だ。

家族っていいよな。

そんなもって、オレはエースの兄ちゃん。

だけどそれだけじゃない。

オレとエースは、じいちゃんという同じ敵を相手にする戦友で、ライバル（なんのだ？）だ。

兄弟だけど血が繋がらないから、親友にだってなれる。

家族じゃあそうはいかないんだよ。

だから繋がってないからこそ、そっちの方がお得なんだとオレは思う。

「本当には血が繋がってないからこそ、家族にも親友にだってなれる。

そっちの方がお得じゃねーかよ！！

オレが女だったら嫁にだっていけたぜこのやろっ！！

そのどこが不満だ！！」

「え！？嫁？なんでそこで嫁！？ってかリースならい、いらない！」

「うっせー！！」

オレが嫁だと嫌なのか！？

オレがヒツキー希望なのが悪いのか？

ま、まさか。一生を独り身で過ごす気なのか。

なんて未来も夢もない人生だ。

そんなのダメだぞエース。

「ルージュさんの願いを知らんのかー！！！」

彼女は未来を望んだというのに、幸先悪いなもつじき五歳児よ。

ん？いけね。エースは知らなかったけ。ルージュさんの言葉。
まあ、いいや。

「そもそも長兄にむかってなんて口の悪さだこのドアホウめ。兄を
敬え」

なんか今、オレじいちゃんの台詞、無意識にパクッた！？
いやいや、じいちゃんも「実の祖父を敬わんかー！」ってよく言う
けど、まねしたわけじゃないよ！！
似ていないからね！！

「バカエース……」

別にルージュさんに頼まれたから、彼女と守ると約束したからとかじゃない。

彼女はエースっていう『未来』を夢見ていた。

それを叶えるために命まで賭けた。

それだけでもエースがどれだけ愛されてたのかわかるだろう。

お前は愛されて生まれたんだよって、誰かこいつに教えてあげてほしい。

それに「血がつながってないから」…そんな言葉で、家族だと思っているオレ達を否定してほしくなかった。

オレもルフィもじいちゃんも村長もマキノさんもさ、エースのこと大切だよ。

だから…オレのことも認めてよ。

オレ、もともとこの世界の人間じゃないし。壁つくられるとよい悲しくなる。

つで、振り返ったオレは固まった。

さっきまで非常に腹が立っていたので、言いたいことをひたすら言いまくった。

そうしたらエースはうなだれてしまい、しょぼくれてしまった。

やばい、子供をいじめすぎたか!?

でもオレが嫁だと嫌だって言われてオレ傷ついたし……てえっ!おれえ!!なんでそんなわけわからん話になってるんだ!!

とにかくまずは謝らなければ。

「え、エース?」

オレの呼びかけに反応するも、ピクリと肩を動かしたきりで、エースはそのままふるふると肩を揺らしている。

な、泣いてる！？

ひえー！！そこで落ち込まないでくれ！

ここは謝るでも喜ぶでも怒るでもいいので、ガツンと言い合おうじゃないか！！そのつもりで意気込んでいた矢先にコレだ！？

こ、こ…こど、こども相手にオレはなんてことを！！

どうしょ。

こついうのは苦手なんだよ。

なぐさめる？とか。

オレが慰めてほしい子だしね！

「その。あれですよあれ！！

ひ、ヒゲはすばらしいんですよ！！とくに白くて三日月形のは！！ほら月に願い事をかけるといって言うじゃないですか！それに…」

——何を言ったかは忘れた。

とにかく元気付けようとワタワタしていたら、エースはいつの間にか笑っていた。

どうも彼の話によると、彼は泣いていたのではなく、喜んでいたらしい。

なんじゃそりゃ！？

それじゃあ、あれか！今、オレが頑張って笑わそうとしたのは無駄だったと！？

「もうだめだ。鬱だ」

クラリときた。

このまま倒れてしまおうかと思ったが、エースがいまだにニヤニヤしてるのをみてカッと頭に血が上った。

頭に血がくって、今日で何度目だ？

オレの神経よくもってるな。キレすぎて血管まで切れたらどうしようか。

あはは、笑えねー。

内心呟いた自分の冗談に、顔が引きつった。

エースも笑ってる。

オレ、頑張ったのに無駄で。これじゃあ寒い冗談を一人で言い続ける悲しいおっさんじゃないか！！

もう石になりたい。

オレのことは兄ではなく、通りすがりの村人A……じゃなくて、もっと目立たなそうなくぐらいにみてくれ！いや、ぜひともポジションチェンジしようぜ！

「うわー珍しい！リースが照れてる！！」

「っな、わけねー！！」

照れているわけじゃねーっす。

あまりのことに「腹が減ったんだこんちくしょー！！」なんて騒ぎながら、オレは近くにあった草を切ってさっさと先に進む。

別に…さ。

本当にお腹がすいていたわけじゃあないさ。
まあ、いろいろだよ。いろいろね。大人心は複雑なのさ。

運がいいのかな？

エースにからかわれる前にと必死こいて逃げたら、美味しそうなきいちこの群れをみつけた。

オレは目の前にあったきいちごをやけ食いした。

だってお腹すいてるって言っちゃったし。

そうしてるうちに、追いついたエースに発見され笑われた。

結局その周辺は果物の宝庫で、その日はここで一晚を過ごすことになった。

オレは照れ隠しで、とってきたきいちご（本当は後でジャムにしようかと考えていた）をエースと競争するよつに食べた。

「あれ？リース…それ」

「なに！？」

いつの間にか本気で食べていた。

突然声をかけられ声を荒げるほどには…

あれえ？オレなにしてたのかな？

いつの間にかきいちごに夢中になっていた。

脳みその中では、食べながらこの実を何か別の料理に利用できないかと考えていた分、突然のそれには驚いた。

「や…今食べたのだけ、なんか色が青かったから」
「青い？」

「なんか、ブルーベリーみたいで…ん？違うや。もっとこっぴど綺麗で、青いビー玉みたいで……」

なぬっ！？

いつだろう？そんなもんを食ったのかオレは！？

でも口の中にビー玉みたいな硬い感触はない。

エースの見間違いないんじゃないかと思ったとき、あまずっぱくておいしかった口の中に突如不快な味が広がった。

「うええゝ……」

「り、リリース！？」

「まずっ……」

美味しかったいきちごまでその味に支配されてしまい、口の中にあったものをあわてて吐きだしてしまっただけにはまずかった。

水をがぶがぶと勢いよく飲みほしてもなかなかまずさがなくならない。

そこで自分が吐き出したものの中に、たしかに青いものがあるのに、気付く目を見張る。

いきちこの粒の間に、変な模様付きの青いきいちごがありやがりました！

たしかに。綺麗な色合いだなあ。まるで陶器のよう……

でもこれってどうみても

「あ、あくまの…」

あまりのまずさにか、ありえないものを食べたショックにか、オレはその青い欠片を見て気を失った。

たしか——悪魔の実というのは、一口で効果があり、二口目以降はただのまずい実になるのだとか…。

やばい。

食ってしまったよ。

食ってしまった！！

あの悪魔の実を！！

これで二度と泳げなくなった——！！！！（もとから泳げないけど——！！）

しかも確実に平穩からまた遠ざかったし！！

ってか、悪魔の実が誕生日プレゼントとかありえない！！

今日がなぜオレの誕生日なんだあゝとか呪いたくなくなった。

いや、生まれた日はこのまずさと悪魔の実には関係ないか。それでも呪わずにはられない。

平和を望むオレに悪魔は笑いやがった。

さよなら、オレの穏やかな生活。

いやいや、諦めるのはまだ早い。

オレがただでさよならなんていうと思うな。いつかみてるよ悪魔め。オレはお前になんか負けない！

かならず自分が望む平和を気付いて見せるからな！！
そんでもってお前以上の呪いをお前にかけてやる！

なんか今日のオレついてない。

きつと人生で一番ついてない気がする。
特に悪魔の実…。

それにしても…

「まずっ」

どうやらオレはあまりのまずさのせいで気を失ったらしい。

ってか、これなんの実だよ！？

+++++

目が覚めたら知らない天井でした。な、展開にはならなかった。なにせまだ一週間もたっていないので、相変わらず無人島の中。青空教室ですよ。

もとい雨風をしのぐためにつくった洞穴の中の仮宿です。

二日目にオレ達を襲ってくれたサーベルタイガーさんが、快く譲ってくれた宿です。

「……」

「……」

「……ぶっ！！！」

「いい加減笑うんじゃないー！！」

「だって、リースそれ……ぎゃー！！はらいてー！！ひーっひひひひ！！」

オレが食べた実の効果とその使えなさにエースは笑いつぱなした。まずさによる失神から目が覚めて、早速、自分が何のみを食べたかの調査をすることにした。

そのときは、リースは顔を引きつらせて逃げた。今は笑っている。

オレは正直、泣きたいよ。

食べてしまったものは仕方ないと、なんの実が確認しようと考えていると、突如エースが悲鳴を上げた。

なにことだと思っていると、自分の身体を見ろといわれた。持ち上げた手をみて自分でひいた。

「きもっ！！」

なんと服の間から威見える腕に、赤い斑点がたくさん浮き上がっていた。

なんだかどこかの伝染病みたいだ。

それをみて何かを考えていたらしいエースがウキウキと挙手した。

「わかったー！仮病がつかえるようになる『ケビヨケビヨの実』だ！」

「んなもんあつてたまるかー！！」

「じゃあ、『ケヌケヌケの実』？ほらケビヨウとケヌって発音が似てるし？」

「毛がぬけてたまるかー！！ってか、いい加減仮病から離れろ！！」

で、怒っている間に、斑点は斑点じゃなくなった。

なんだかふくれて、つぶみたいに…キモイ！！

腕に実がなつた！！

いや、腕がこわれてく！！

怖：じゃなくて壊れてるよ！！
どうなったオレ！？
なにがおこったんだ。

壊れて、壊れてこわれてコワレコワ……なんか実になりました。

「ってか、まじできもっ！きもぉーっ！……！！！」

手に葡萄のようなものがありました。

あまりの気持ち悪さに、何かを考えるより先に思いっきり腕を振ってしまい——ザーと音を立ててオレの腕はいくつものビー玉のようになって落ちた。

「なんじゃこりゃー！！！」

これはもしかしてスナスナの実だったのだろうか。
でも砂より粒が大きいから違うだろう。

それにスナスナの実は今この時期ぐらいならもう食べた人がいるんじゃないかなあ。

ワニっぽい黒いひととかね。

とりあえず腕を戻さないといけないなあと思い、ろうそく人間とか砂人間の姿を思い出して、自分の意思で戻らないかなと気合を入れてみた。

うーん？どうやればいいんだろう。
なかなか戻りません。

「オレの腕——！！！」

小さな粒となつてしまつたオレの腕達。すこぶる気持ち悪いです！！
それよりなかなかもどらないなあ。

どうしたもんかと考えて、何か条件が足りないのかもしれないと思つた。

条件で一番初めに思い出すのは、マネマネの実。

マネマネの実は左右の手を順序良く触れる必要があつた。

また自然系ロギアの能力者は自然物そのものに身体を変形させることで火や砂を自在に操る。

ソオン動物系の能力者として姿を変えるのは自分の意思だ。

バラミシア超人系であるバギーでさえ必要なときに分裂し、バラバラに体が分裂していても感覚はしっかりとつながっていた。

それはつまり能力の制御を自分の意思でしているということであり、同時に能力を発動するためのなにかがあるということ。そしてこれは推測だが、能力者は自分があやつるものにきちんと“動かしている”と手ごたえをもっているはずだ。

一度死んだら戻るというヨミヨミの実を抜かせば、きちんと何かしらアクションを起こせるはずだ。

ましてやどんな姿になつても、手ごたえが少なからずはあるはずなのだ。

それが一切返つてこない。

戻らないなんて事はおかしい。

「なんでオレの意思で動かないんですかね？

しょせんは水や炭素、アンモニア、石灰、リン、塩分、硝石、イオウ、フッ素、鉄、珪素……そこらで売っているようなものでできてる分際で、なんて面倒な」

悪魔の実の力だろう。変化した腕をきつくにらみつける。

「かなり安上がりなものできてるくせに」

なんで主にさからうんですか？

お前、オレの腕だろうと腹立ち紛れに踏み潰したい衝動に駆られる。むしろ感覚が自分にならないのだから、潰しても問題はないんじゃないかと思いいちあがる。

よし、踏み潰そう。

そう思った。

オレはただ平凡に暮らしたかった。

ただ、穏やかな生活を望んでいただけ。
なのに…。

「次から次へと…」

オレの腕なんだからなぜ逆らうのか？やはり悪魔の実というくらいだから悪魔が宿ったか。

どうしてこうオレの周りには、オレの些細な夢を壊そうとするのかわからない。

腕がなきゃ何もできないというのに。

ただの固形物の融合体ではない腕。今はビー玉のようなそれでさえ、自分の邪魔をしているようにしかおもえなくて腹が立った。

一瞬、自分の腕なのに。自分の腕だからこそ。悪魔の実ごときでその変なものと化した腕に殺意が湧き上がった。

その殺気に危機感でも覚えたか、突如ビー玉たちが磁石に引き寄せられる砂鉄のごとく一斉に動き、再びオレの腕は元に戻った。

そのとき、本当に一瞬だったが、何かをつかんだようなそんな感覚がした。

今はその感覚は感じられないが、腕が戻ったので怒りも随分引いた。

「はあ？」

なんで今更オレのことを聞いたんだ？

どうして粒たちは腕に戻ったのだろう？

何が起きたのかさパリわからない。

エースには「悪魔まで黙らせた！リーススゲー！！」とか、なんか誤解だかあってるのだからいいことではめられた。

ちなみにそのあと、再び粘っても気合をいれてもあの気持ち悪い現象はおきなかった。

せいぜいが、病気っぽい斑点が出るか消えるかぐらいだった。

……… いったい。なんの能力さこれ？

「なあリース。おれ思っただけどさ」

「エースの考え付くのってさっきから仮病のことばかりじゃないですか」

「それって『ツブツブの実』じゃないのか？きつとそういう名前だよコレ！」

「……」

たしかに、さっき一瞬だけど、腕が粒になったね。

でも赤い斑点を見る限り『ツブツブ』って感じだけど。

いや、どっちの名前もイヤだけどさ…。

どちらにせよ気持ち悪いし。

エースはニカツと笑うと爆弾を落とした。

「リースつてばいつも『ぶつぶつ』言ってるから！

そんな粒だかわかんない斑点みたいな能力になるんだよ。

だから『ブツブツの実』じゃなかったら『ツブツブの実』。ドーヨ
！！」

エースはいいアイデアだといわんばかりに、胸を張っている。
かわいいな、ちっちゃいこ。

可愛さあまって、憎さ百倍とはこのことだね。

ぶつぶつ呟くから、ツブツブの実とかありえないんですけど。

それは本気な発言なのかと、拳が揺れた。

きれる前にと必死に条件反射のような腕を押さえ、無理やり顔に笑
み浮かべたことでひきつたがそのままエースに尋ねかける。

「それはジョークですかエース？」

「いんや。マジ」

エースはニッシッシと未来のルフィを思わせる楽しそうに笑い、
オレは世界が沈没しそうなほどでかいたため息について、穴の隅の
ほうにいかせてもらった。

ちよつと悪魔の実というのを試してみる。

試してみる試してみる試してみる試してみる試してみる試してみる

試してみる試してみる試してみる試してみる試してみる
試してみるためし……

何も起きません。

いろいろ考えてみる。

考えて考えて、試してみるも何も起きない。

いい加減、腹が立つのも通り越し泣きなくなってきた。

「聞いてよ。オレ今日誕生日なんだよ。なのにまずいもんだべちまうし、しかも悪魔の実だし。なんか使えないし。本当は命からがら逃げてきたんだよ。なんかオレを鍛えようとするおっさんに満ち溢れた世界で……生きてけないと思ったさ。だからフーシャ村に帰ってきたのに、感動の再開もよそに即ジャングルに放り投げられるし。ありえねー。しかもルフイまだ1才だよ。まだうまく動けないんだよ。オレ怪我したんのに。すぐなおるってじいちゃんそっくりって医者に言われたんだよ。いやだーいやだー。ってか、じいちゃんいつから頭の上に犬乗せるようになったんだろな。オレ家かえって寝たい。安眠……いい響きだな。ってか、寝るゆとりもなくサバイバル。そこら辺の猛獣と友達になった。ハッ！笑えねー。ってかさ、オレあそこまで動くこじゃなかったと思うんだよね。なのになぜか一生懸命になつてさ。きいちご食べまくったし。新しい料理のメニュー考えてみたり。そうしたら……」

土臭い壁と話していたら、サーベルタイガーさんが逃げ出した。
いいよ、いいよ。

オレのことはほっとしてよ。

エースが「ほらやっぱり『ブツブツの実』じゃん」と腹を抱えて笑っていた。

その間、オレはやっぱり疲れ果てて、地面に転がって壁と話ながらこの先どうやって地味に生きようかと思った。

悪魔の実の能力者ってさ、みんな目立つんだよなあ。どうすべきか。

はあ。もう考えるのも面倒になってきた。

寝よう。

願わくば、変なもんを食ったのは夢でありますように…。

明日がフーシャ村のベットの从上から始まりますように。

まあ、無理だろうけどさ。

【後日談】

『悪魔の実』辞典を読んで画然とした。
あつた。

—— 学術名称：ブツブツの実

本当に『ブツブツの実』だった。
さらに下の能力説明を読んで、本気で泣いた。
最近、とことん涙腺が弱くなった気がする。

【学術名称：ブツブツの実】

後の能力者により、名称変更により改名。 【ツブツブの実】となる。

一度だけだが粒になれることもあり、改名を許可された。

- ・青いきいちごのような実。
- ・他の自然系の実は際限なく、砂や炎などをだすことができるが、それも不可能であるため超人系と断定
- ・食べた人は名前の通りぶつぶつと愚痴が増える
- ・身体の何処にでもぶつぶつとした斑点をだせるので仮病に役立つ
- ・身体から離れた粒はあやつれない
- ・身体を粒に変えられるが、一度身体を粒状にすると二度と戻らない特殊な実

「ようするに使えないと…」

ヨミヨミの実より使えないのではないかコレは？
仮病ってどんだけよ。

ついでに食べたら、死亡確率みたいな能力ってなに！？
二度と戻らない…。

…オレ、今、なんで腕がついてるんだろう？

もう、頭がおかしくなりそう。
ってか、もうなってるな。

もう
やだ
・
・
・

06 すべてが違う(中) (後書き)

<現状>

・青い果実〓考え方が幼い(エースのこと)
青い果実〓悪魔の実のこと(リース関連)

・リース6歳(4日目に)、エース4歳。あと数ヶ月したらルフィは2歳

自分に子供いないので、何歳ぐらいで話せて、歩いて、どんなもんを食べれるようになるのかいまいちよくわかりません。

2歳つてもう離乳食は卒業してますよね?(汗)

さてさて、ついに悪魔の実が登場!!

なんかいろいろありすぎてリースの性格が壊れててきた気がします

orz

ここで最強の悪魔の実を想像したごめんなさい。

リースが食べたのはヨミヨミの実よりも価値のない「ブツブツの実」です。

もちろんオリジナルな悪魔の実です。

実ははじめにどんな実にしようかと考えた時思い浮かんだのが「ぶつぶつ言っているから、つぶつぶの実」というギャグでした。

それで落ち込むリースがみたかったんだだけだったり…

1
0
0
4
0
2

06 すべてが違う(下)

++ エースとリースの一週間 ++

< side エース >

「前回の人生では無理でも、新しい人生。肉体も世界も違う。だからオレは飛べる!!」

さあ、みてろよ。

そう言って崖ギリギリに立つリース。

リースが今まさに行くこうとしている場所へと先に視線を向ける。
下は小さなながらも滝になっていて、小さな湖ができている。
このくらいの高さから落ちて死ぬ奴はまずいないだろう。

「見ていてくださいルージュさん！オレはこれを成し遂げて、死ぬときには立派になった姿をあなたにみせられるようになってみせます！！そうだオレ飛べる！オレは飛べるんだあーーーー！！」
みよ！この柔らかな肉体を！子供ながらのプニプニさ！以前のオレにもガーブのじいちゃんにも似てないこの顔！そして見知らぬ島！！間違いなくオレはここで生まれ変わった！！
悪魔の実も食べてない！！やわらかな身体も手に入れた！今だからこそオレは飛べる！！」

顔が似てないからって、体がプニプニだからって、それって泳げないのとは関係ないと思う。

チラリとリースをみると、自己暗示でもかけるようにフッフッフと不気味な笑みを浮かべている。

そんなでもって、相変わらず意味不明だ。

ただやたらとテンションが高いのがなんだか気になる。

「いける！いけるぞオレ！！」

「や、やめとけよ……」

俺のとめる声さえ聞こえていないのか、リースはいままでにないほど目をキラキラと輝かせて、助走をつけて湖へ向かって崖を飛んだ。

「汚名返上だーーーー！！！！」

「ちょ……リース！？」

「アイ・キャン・フラーーーーーイ！！」

両手を広げてリースは飛んでいった。

それからすぐに

ザッパーーーーン！！

大きな水飛沫があがり、水面上がってきたリースが嬉しそうな声をあげた。

「やった！やったぞ！ついにオレは……ぎゃー！！！！！！！！」

ばしゃばしゃばしゃ！！！！

ぎゃー！！たすけて…ブクブクブクブ…

——シーン……

「リース！？」

心配で様子を見ていたけど、やっぱりリースは沈んでいった。

「だからやめろっていったのに！！」

俺は慌てて飛び込んでおぼれるリースを引き上げた。

たぶん今日俺がいなかったら、今頃、リースは死んでるんじゃないだろうか？

普段のリースなら、無意味に飛び込むなんてことはしなかっただろう。

なにせリースは生まれついでのカナヅチだ。

村の近くの川でだっておぼれるのに、それでも今日は自分をだますような言い訳をしてこうやって水の中に飛び込んでいる。

いつもの冷静なリースなら、絶対水辺には近づかない。

それどころか、はじめから溺れないようになんらかの工夫をしてから水に飛び込むだろう。

そもそもここまでリースが奇行に走ったのは、久しぶりに帰ってきたガープの爺さんが悪い。

彼は村に帰ってくるなりリースを気絶させルフィごと肩に担ぐと、呆然としていた俺も一緒に連れていかれた。

その際に、にやりと笑って小船でもって近くの無人島へと置いてい

かれた。

それがこの無人島の水場であり、目が覚めたリースは状況を把握するなり近くの崖に登ってそのまま湖へ飛び込んだ。

普段なら、どんなことをしようとも、リースだから大丈夫なんじゃないかとも思うだろう。

リースのことだから、泳げないことも予期して、はじめから湖に口ープをはりめぐらせておくとか、木から伸びる命綱をもっていたり。丸太を支えに浮かぶ練習をしたり…（たぶん無駄）

などなど。とにかく頭の回るリースなら、確実に万全な準備をしてから行くはずだからだ。

だけど現状はそうもいかない。

慌てて湖から引き上げたけど、リースは水を飲んで目を回している。

ルフイは岸边において置いたら、よちよちとした危なげな歩ながらもびしょぬれのリースをみて側によってきて、そのまま楽しそうに手を叩いて笑っている。

子供って凄いなとちょっと思った。

何度目かはもう忘れたけど、爺さんには谷に落とされたり、ジャングルにおいてこまれたり、風船で飛ばされたり。

もう十分すぎるほど痛い目を見てきた。

リースなんかは、それに加えて海軍でもあの爺さんにしごかれているらしい。

「ジジイもジジイだよな」

溜息が出た。

ガーブの爺さんのことは嫌いじゃない。

家族だって笑って受け入れてくれて、抱きしめてくれる。ヒゲが痛いけど…。

でもあんまりだ。

愛情表現とやらがすごすぎて、リースと一緒に何度も死にかけた。そのつど、リースが助けてくれたけど、俺だっていい加減兄貴にはばかり頼ってられないと思った。

だからリースが造船場の見学に言った後、一人で特訓した。せめて爺さんに一発殴ることができるようには強くなろうとして、恐怖を克服しようとかむしやらに修行して勉強した。

一年してやっとリースが帰ってきたとき、話には聞いていたけどリースの怪我の酷さに驚いた。

いつてきますと出て行ったときにはなかった眼鏡、顔は隠しきれない火傷の跡のような傷跡。

身体の傷痕を隠すように長袖を着ていたが、袖から見える肌は手の甲とか結構酷い痕があった。

それに泣きそうになった。

だって、俺はこんなことになるとは思わなくて… だってこいつて薦めたんだ。

リースが爺さんに「船を見に来ないか？」と誘われたのに対し、「めんどくさい」とリースは断ろうとしていた。

でもリースがそういうの好きだって知ってたから、いけばいいのにと背を押したのは俺。

ぶつぶつ文句を言いながらも準備をしていくリースは笑顔で、やっ

ぱり船に興味があつたようで、楽しそうに爺さんの後をついていった。

本当は嬉しいくせに。

本当はいろいろ見れるのが好きなくせに。

リースの言葉や態度からはまったく逆に感じてしまっけど、凄くやさしくてかなりお人よしだ。

だから楽しんできてくれるといいと思った。

リースが見たいものを見れるといいなと思っていた。
なのに……。

軍艦を見に行ったただけなのに、帰りが遅いなと思っていて、そのリースが帰ってきたとき、正直心臓が止まるかと思うほど驚いた。

「ただいまエース!!」

帰るなり、爺さんを無視しての鉄砲玉のような突撃にびっくりしたものの、それよりもリースのケガに目がいった。

その傷は顔だけじゃなく、体全身を覆っているようだった。

服の下から見える傷跡が、電話ではわからなかった事故の酷さを生々しくさせてみているこっちの方が痛かった。

「どうしたんだよそれ！なにがあつたんだ!？」

「倒れてきたマストに踏まれたんですよ」

「なんで!？」

「人を助けたから？」

「何でそこで疑問系なんだよ」

「人がマストの下にいたんですよ。彼らを逃がしていたら大きい破片にあたって大怪我……という状況ですね」

もう、すっかり元気ですよ。

左側だったら今頃心臓は動いていなかっただろうと笑って言うが、俺からみてもその傷は大きすぎて…何年たっても消えることがないだろうそれに怖くなった。

リースがいなくなるんじゃないかという恐怖。

だけどそこまで俺たちは長く話すことはできなかった。

なぜって、爺さんに攫われたから。リースが。

つで、俺も…。

結局爺さんは頑丈で、でかくて、強くて…一発殴るところではなく、暴れても爺さんの腕からは逃れられなかった。

そして手紙とナイフと水を渡され、リースがおきたらよろしくと言われ密林においていかれた。

「どい…い？」

+++++

離れていた一年間、ずっと側にあつたものがなくなった寂しさは、ぽっかりと胸に穴を開けた。

だからルフィの世話をしてみたり、マキノの手伝いをしてみたり、対爺さん用に修行してみたりした。

一年—— 本当にいろいろあった。
フーシャ村ではその話もできなかったけど、今は時間はたっぷりある。

だからルフィをあやすリースと火を囲んで、お互い離れていた一年間のことを話しあっていた。

ただどこは野生の宝庫。

盛り上がっているところで、トラがあらわれた。

——牙が長くキレイな白色をした巨大なトラ。サーベルタイガーというらしい。

「トラ相手に戦えとかなんて面倒な。ってか、走ってるのもそろそろだるく……」

「だあ！！！！なんでリースはこんなタイミングでやる気なくしてんだよ！！！」

いろんな意味でリースは凄いと思う。

走る足を止めたら死ぬという状況にもかかわらずやる気が失せたり。それに、なんだかんだで大概の事は一人でできてしまう。

赤ん坊の世話なんかしたことないとキツパリ言い切るくせに、しっかりルフィのお兄ちゃんをしている。

今だって、しっかりルフィを抱きながら走っている。

ルフィだけじゃない。俺にとってもいい兄ちゃんで、物心ついたころにはもういつも側にいた。

リースは凄い。

あの凄さは本当に一つ年上だからという理由では納得できない。

とくに爺さん直伝のあのこぶしの威力だけは…

それでも時に、その拳さえ通じないものが現れる。
俺だって一年で鍛えてはいたけど…あれは無理。
たとえば現状。

ほら、なんとたつてまだ俺たちは子供だし。

「ぎゃああああー！！！！！！」

密林に放り投げられたのはこれで何回目か。
争いごとを極端に避けていたリースと、爺さんの孫ゆえに必然的に
受ける羽目となったあの扱きに耐えられない俺。

俺たちは、爺さんがくるたびに必死になって姿を隠していた。
だけどすぐにみつかる。すぐに捕まる。

そして命の危機。

今回は一年間たつてやっとリースが村に帰ってきたと思ったところ
で感動の再会を引き裂いて、爺さんは俺たち（ルフィ付）を無人島
に置き去りにしてくれた。

「だずげてりーいーズウー！！！！」

「そんなトラ、逆にくつちまえ！！」

「リースじゃないんだから無理だから！！」

「オレだつて無理だ！！」

ただいま密林。

牙がやたらと長いトラに追いかけている。

無人島生活2日目。

その日はトラに追いかけまわされて終わった。

最後は意外とあっけなかった。

追い掛け回されすぎて疲れきっていたところで、あまりにしつこいトラに途中でキレたリースが、なにやら派手に罵詈雑言ならべて思いつきり石を投げつけたのだ。

その豪速球は背後にいたトラではなく、その脇の林の中にいた巨大な熊に直撃し、熊がトラをおいけかはじめたことで俺たちは逃げられた。

本当にノーコントロールだった。

そこは…まあ、運が良く逃げられたからよしとする。

そうやって運だけ(？)でなんとか逃れたところで、俺たちは水辺までユータンし安全を求めて木の上で寝ることとなった。

その後、リースはトラの悪口をずっと言っていたけど、いつ息継ぎしてるんだろう？と思うほどそれは続いていた。

呪詛がお経みたいだったとだけ言っておく。

はじめのうちはきちんと聞いていたけど、リースのつぶやきは聞いているうちに眠くなってきてしまい、俺はそのまま寝てしまった。

+++++

リースはめんどくさがり屋だ。

何をするにも「めんどくさい」の一言でやる気はとことん感じられないし、寝転がってばかりで海軍にも海賊にも興味を示さない。海賊の残した財宝とかの話にさえ興味を見せない。

今回のサバイバルもそうだけど、何度もリースには助けられている。やっぱし、いろんな意味で。

リースは、本当は凄い奴だと思う。
頭も切れる。

でもめんどくさがりやで。

それでも一つだけ。

リースが本気を出すものがある。

「リースってさ、なんでいつもめんどくさそうなのに料理だけはまじめにやるのさ？」

俺の前では、この死までとれた食材だけで、美味しそうなスープを作っているリースの姿。

リースは湯気でもった眼鏡を服の隅で拭きながら、ここは妥協してはいけないところですと強く言った。

「料理は生きるために絶対必要なんです。面倒でも妥協しちゃだめです」

リースはすべてにたいしてやる気をあまり見せない。
でも、生きることだけはいつも必死だ。
つで、穏やかな老後を目指して頑張っているらしい。

「へんなの」

不思議がる俺にリースは笑う。

「いつかマキノさんやオーナーゼフに弟子入りしに行きたいぐらいですよ」

「誰だよオーナーゼフって」

「イーストブルーにある物凄くおいしい店だそうですよ。いつかいきたいですね」

しばらくはそのまま食べ物と海の上にあるというレストランの話になった。

なんでいったこともないのにそんなに詳しく知っているかは、やっぱりリースだからなんだろうなで納得できてしまった。
しらべたというより『はじめから知っている』みたいな雰囲気はいつものことだ。

それにしてもレストラン…。

ぐう~~~~~

「…食べ物の話するから腹がへってきた」

「……今、肉。ほぼ一人で食べませんでしたかエース？」

さっきまでなんだかよくわからない生物の丸焼きを食べていたけど、すぐものはしょうがない。

リースは凄く食が少ないけど、本当によくあれでもつなぐと感心してしまう。

リースのご飯は美味しい。
マキノのご飯もおいしい。

ぐう~~~~~

「腹減った」

だけどやっぱしこは量だと思っ。

「魚でも釣りますか」

またあのサーベルタイガーが現れた。
なんだか疲れきっていたリースは逃げる気も起きなかったようで、
今度は釣ったばかりの魚を与えていた。
そうしたらトラは懐いた。
魚をあげて、トラが友達になった。
案外トラはいい奴だったことがわかった。

+++++

トラは…

「ベル。あなたもちゃんと体を洗わないとダメです」

すっかりリリースに懐いていた。

サーベルタイガーがから、ベル。

体長が2、3メートルはある大きなトラで、上にのつても問題なく、夜は自分達を抱きこむようにして一緒に丸まっていて、すごく温かい。

ベルはベルでリリースが気に入ったようで、湖でリリースに体を洗ってもらって気持ちよさそうにゴロゴロとのを鳴らしている。あれは間違いなく餌付けされたな。

その日は放置4日目。

じき2歳になるまだまだお子様な一歳児ルフィをみていて、あることに気付いた。

「もう数カ月後にはルフィも2歳…もうじき？」

もうじきという言葉にひっかかりを覚え、そこで別の存在の誕生日を思い出した。

『もうじき』なんて言葉が甘いほど緊迫した日付だ。

なんとリリースの誕生日だった。

それも『今日』。

慌ててベルと協力して川で魚を捕獲してきた。

カレンダーもなかったからすっかり忘れていた。

リースは、はじめのうちキョトンとしていたけど、すぐに嬉しそうに笑ってくれた。

よかった。喜んでくれた。

間に合ってよかった。

これで忘れてたら、すみでいじけていそいでイヤだ。

+++++

四日目の午後。

リースといままでにないほど喧嘩をした。

わかっていたのに、言っちゃいけないことを言ってしまった。

「オレだけどうせ本当の兄弟じゃないし!!」

そう口論の末についてしまったら、拳もって「アホ!」と怒鳴れた。

さすが爺さんの孫。見事な拳は俺のあごを直撃し、痛かった。

でも手加減されていたのか、すぐに起き上がったけど、あごはしばらく痛かったから赤くなっていたかもしれない。

「お前がオレの弟じゃなきゃとつくに見捨ててる！
名前が違う。血が違うからなんだって言うんだこのドアホ！」

リースが叫んだ。

弟じゃなかったら見捨てて……って、説得力ないと思う。
だつてリースだし。

それに見捨てられなかったから、怪我までしたくせに。
でも……ちよつとその言葉に嬉しくなった。

『弟』だから見捨てないんだ。

弟——それって俺はリースの家族でいていいってことだよな？
つまりはそういうこと——。

買い言葉に売り言葉の勢いだったのに、なんだか物凄く嬉しいこと
をいわれた気がする。

あんまりにも嬉しくて、飛びつこうかなくしようかと本気で思った。
結局どうすることもできなくて、俺は慌ててリースから視線をそら
した。

目の前でリースがすぐくびびったような気配を感じた。

そのあと顔が見れなくて下を向いていたら、なにやら一生懸命い
ろいろ言ってるリース。

しかもそのどれもが、少しひねくれた言い方だけどもめちゃくちゃ嬉
しいんだけど——！

相変わらず素直じゃないなあ兄貴はさ。

一つだけ気になるのは……

リースと喧嘩したらわけわからないことを言われたアレ。

「ヒゲはすばらしい！！とくに白くて三日月形のは！！」

なんでそこでヒゲ？

あのあと、なぜかヒゲにつて絶賛していた。

あまりにヒゲヒゲ言うもんだから、おかしくなつて腹を抱えて笑つてしまい、笑われたー！！とリースは顔を真っ赤にして逃げた。

照れてるよ。

あのリースが照れてるよ！！

さらにおかしくなつて、その場でしばらく笑っていた。

少ししてもリースが戻つてこなかったから、笑つてでた涙を脱ぐつてベルの案内でリースの後を追つた。

「砂糖がほしいですね。これはいつそジュースかアイスでもつくつてみたくなる味ですね。砂糖は大匙……」

追いついたとき、リースはブツブツ言いながら物凄い勢いできいちごを食べていた。

すでにさっきのことは頭にないみたいで、真剣にイチゴと格闘している。

俺もリースにならつてつまんでみたら、それは凄く美味しかった。

横で食べているリースをみていて――

「あれ？」

今、リースが手にとったキイチゴだけ色が違う。
なんかガラスで作ったよくできた偽者のキイチゴみたいだ。
青いし。

…しかもリース普通に食べたし！？

え？ガラス、食べて平気なのか？

「リース…それ」

「なに！？」

一心不乱に食べていたリースに怒られた。

とりあえずさっきの青いキイチゴのことを指摘したら、不思議そうな顔をしていたけど、しばらくして気持ち悪くなったらしい。
やっぱりあの青いキイチゴ、たべちゃだめだったんだ！？

つらそうなリースの背をさすっていると、「うえゝまずい」といってリースはそのまま気絶してしまった。
脇にはあのキイチゴのかげら。

微妙に見えるこの渦巻きもようってアレか？

なんとかの実っていう…。

泳げなくなる実だよな。

「……」

まあ問題ないか。
だってリースだもん。

リースならはじめから泳げないし。この青い実のことも自分でなんとかできるんだろうし。

「ベル、帰ろう。リースたのめる？」

そんなわけでキイチゴのまずさに倒れたリースをあなぐらまで運んだ。

起きたリースが『悪魔の実』というのの実験をした。

またまた笑わせてもらった。

なんというか、今日は笑いすぎでお腹が痛くなった。

あー、うける。

さすがリース。

06 すべてが違う(下) (後書き)

とりあえずしばらくは実を使わずに強くさせていく予定だったので、そのまま計画通りにかいてみました。

そんなわけで無人島でのエース視点。

リース以外の視点で書くのは難しいorz

だって原作を壊しそうで…。

最近気付いたんですが「リースだらけすぎな変人説」より、「ツンデレ説」の方があってきた気がするのはなぜでしょう(汗)

意外とおひとよしでおせっかいなで短気なリースなので、だらけているシーンがほとんどかけていないのが残念です。

では今回は、また海軍本部で。

皆様お待ちかね… ついにあの方が登場！(イエーイ)

黄泉染様、舞月様、元気の源ありがとうございます！

閲覧してくださった方、こんなチキンなお話をお気に入りに入まで入ってくれた方、ポイントくれた方。本当にありがとうございます！！これからもスローペースですがどうぞよろしくお願いします。

100410

07 あなたがくれた安らぎに（上）

++ 二つ目の約束 ++

一週間の無人島生活を追え、オレは能力がどんな作用をもたらすのかなんとなく理解した。

けど将来の安泰を考えると能力は極力使いたくない。悪魔の実というのは、使っただけで目立つ。

なんとなくを確実に自分のものとするために、エースに相手をしてもらいつつ使えるようになったのだが、エースには男の約束と称して口止めしている。

それになんだかんだで、使わなくてもやっていけるし、ただいまルフィというやんちゃ盛りな末っ子がいるので能力どころではないのが実情だ。

迎えが来て、エースと約束をして、それから村長さんがじいちゃんにかわって救助しにきてくれた。

サーベルタイガーのベルとはここでお別れだ。

そのうち会いにいこう。

すぐにフーシャ村に戻ると、ルフィが今までになくよく食べ、活発に歩き回れるようになっていた。

すごいな一週間。

2歳児直前のお子様が、漫画のようにハイスピードで歩き回っている。

あの肉事件のせいか、まだ1歳とは思えないほど食べる幼児。
エースはそんな弟に喜んでいるけど、幡から見るとちょっとシ
ュールだ。

たぶんすべてじいちゃんの子孫というだけで、納得できる遺伝子情報
がどこかにはある気がする。

「うつめー!!」

じいちゃん、エース、ルフィ。

目の前でよく似た三人が、物凄い勢いでオレが作った料理を平らげ
ていく。

一緒にご飯にしようとさそった村長とオレは、ただ呆然とその光景
を見ることしかできなかった。

「村長：おかわりは？」

「あ、いや：もう十分じゃよ」

「ですよね」

オレの前には、冷めてしまったスープがまだ残っている深皿と、パ
ンのかけらが乗った皿が一枚。

村長の前にはからっぽの食器が二枚。

テーブルの真ん中には、サラダが入っていたボウルが一つ。

じいちゃんの前には空の食器やボウル、鍋などが山積みになってい
る。

横の子供たちも同じようで、多めに作ったものがすべて平らげられ
てしまっている。

さらには足らなくなったので急遽炒め物やら色々作って出したのだ
が：それらすべてもう残っていない。

「ブラックホールだ」

あの三人、一週間分の食材をすべて食べつくしやがった。

エースはわからなくもない。

やっと塩以外の味のある食材を食べれるのだから。

でも量が半端ない。

「ご馳走様！」

「ほいよ」

「なあリース！！俺が海賊になつたらコックになってくれよ！リースがいれば航海もぜってー楽しい！！」

「なあリース！俺と海賊やろう！！」

「だめじゃだめじゃあ！！リースは海兵になるんじゃない！！ワシの目が黒いうちは、身内から海賊なんか出させん！！
そもそもワシがなんのためにお前たちを鍛えていると思つとるんじゃない！！」

エースが海軍に捕まらないように。

もし見つかったとしても海軍に属していれば…。

そういう期待も少なからずあるのだろう。

だけど。

人には向き不向きというものがあるものだ。

たとえば、オレがいくら頑張つてもあなたたちのように飯が入らないのに、無理して同じ分量を食べれば——それは無謀という。

オレに物凄いハードな運動をしてみせるとか…オレなら「めんどくせー」とか言つてやらなそう。

なんか自分向きでないことを無理やりやれといわれても…無理、無

駄、ありえない。
それと同じこと。

海軍に入る入らないってのは、そういうことだよ。

エースは海賊になるんだ。
そう思う。

そっちの方が、『正義』という欺瞞のがんじがらめな世界よりも、
エースはきつと自由でいられる。
きつと夢を諦めず、翼を広げられる。

——海を地上の空のようだと例えるのなら、鳥のような海賊達。

そんなエースとなら、一緒に旅はどれほど楽しいだろうかと思えた。
冒険は命をかけるからこそ楽しいのだろう。

『未知』という言葉に胸躍らされる。

でもそれはオレにとっては、少しだけ面倒くさく、不安なこと。
それでも、数多の海賊達が、海に出て行った。

夢を追いかけて。

きっかけを作ったのはゴール・D・ロジャー！。

目の前の少年の父親…。

キラキラと期待に目を輝かせてオレの返事を待つ姿は、将来彼も名
をはせるだろう海賊になるだろうそれ。
海軍ではそんな目は見れない。

ふと——納得してしまった。

…いいかもしれない。

エースの夢と、オレの夢とは程遠いけれど。
たまには命がけで、心躍る冒険を試してみるのも――
それはこの世界で生まれたからできる特権だと気付いて。

「……いいですよ別に」

笑って答えた。

「リース――！」

「やった――！！」

驚いたような顔をしたじいちゃんが、あわてたように咎める声を
あげ、エースは心から嬉しそうに無邪気に喜んだ。
そこで――

「ただし」

オレは言ってやったさ。極上の言葉を。

オレがタダで無謀な行動を許可すると思うな。

だってオレは、例えどんなことがあてもまだ『生きて』いたい。
かなうならば波風ひとつない穏やかな場所で。

だから自分でもわかるほど満面の笑顔を浮かべて、

「食器はてめーで洗いやがれ――！」

それができないやつについていく気はねえ――！！

実際、今のオレ達の周りは凄惨なことになっている。

すでに家中の食器だけではたらず、近隣からめいっばい借りることとなった山のような食器たち。

この後始末は誰がつけるんだ？ええ！

…と、いうことで、一枚も割らずに、今回の分、そしてこれからの分の食器を無事に洗うことを要求した。

料理は嫌いじゃない。作るといふ工程や材料を選ぶというのは面倒だけれど、それで喜んでくれる人がいる。

なにより自分を生かすための苦労だと考えれば、やる気もでる。剣や拳だのの訓練より数十倍ましだ。

だけど食器というのはそうはいかない。

洗わなければいけないのだ。

しかも油でこてこてしたものから、こげついたもの…二人分ぐらいならまだしも、これだけの量を一人で洗うのほど面倒なことこの上ない。

ついでにこの家では、“乾かす”という工程の後、“村の人たちに返す”ということをしなければいけない。

やってられるかと本気で思い、そんなことを毎日しなければいけないのなら、コックなんて嫌だと思った。

雑用として誰かサポートでもつけてくれないと辛そうだ。

「食器が一枚も割れなくなつてから出直してこよう二人とも」

二人です。

じいちゃんもは圧力でうつかりすると食器を割つてしまつたろう。

エースはまだお子様なので圧力が弱い。

じいちゃんとは逆で、かなり気をつけられれば割れないが、小さな子に皿との格闘は難しいのは目に見えている。

せめてあと1年は滑って落とすだろう。

「っと、いうわけで、オレのことはフーシャ村にゼヒ置いていつて帰ってくださいね（特にじいちゃん）」

誰が海兵になぞなるか。

ましてや命の危機を楽しむゆとりが小心者のオレにあるはずもなく、それに自ら挑む勇氣や氣力さえない。

もしうまく海賊や海軍といった両方の運命から逃げられたら、オレは本をいっぱい買って、自分の分だけのご飯を作って日々をまったり過ごすのだ。

これ以上ないというぐらい素晴らしいアイデアについ夢を見てしまっが、視界の隅にドサツと倒れた黒いものにすぐに現実に引き戻される。

「ま、まけた（でもつれてつれてかえるもん）」

自分自身をよく知るじいちゃんが先に膝を着いた。

でも下を向いた顔がニヤリと何かをたくらんでいる風だったので、間違いなくよくないことを考えていそうだ。

エースはやる気を出して早速流しにある皿に手を出しているが、スポンジの泡で滑ってしまい、初っ端から危うい状況だった。

とつさに、ここ二、三日で使い慣れてしまった悪魔の実の便利な能力を使いそうになった。

今のオレならあれくらいの皿なら指の一振りで受け止められる。しかしオレを止めるものがあつた。

そのまま腕を伸ばそうとしたところで、エースと視線が合ったのだ。エースはニイっと不敵な笑みを浮かべると、落ちそうだった皿を（ジャングルの逃亡劇で）鍛えられた身体能力を使って、危なげなく両手で受け止めもつ一度落とさないようにそれを安全な場所に置い

た。

「だめだろ」

せっかく約束したのに。

そう言われ、無意識に能力を使おうとしていた自分に呆れる。

あやうく能力者だとばれるところだった。

一度能力者になってしまつと無意識にもそれを多用してしまつので、きつと能力者はすぐにばれてしまふのだろう。

慣れとか、無意識つて…怖いなあゝと思つた。

「たすかった…ありがとう」

食器をあきらめたエースの頭をぐしゃりとなでて、ほつと一息ついた。

どうやらオレ達の含みのある言葉の真意まではわからなかったものの、オレが悪魔の能力者であることを知らない大人たちは勝手に皿のことだと誤解してくれたようであ堵する。

あとで「あんなにあわてるリースはじめてみた！」とじいちゃんや村長にむけた補足説明なのかサポートのつもりなのかにやにやしたエースにそう言われたが……そんな顔して、そういうことをいわれと、こっつからもつて反撃したくなるじゃないか。

エースがつい先ほどまで持っていた一見豪華な皿。たしかあの皿は…

「…エース、あの皿、いくらか知ってますか？」

うちにある奴で一番高いお皿だよ。

なあゝんて真面目な顔をして言ってみたら、

エースの顔から血の気が引いた。

まあ、嘘だけど。

村の人で芸達者な人がいて、陶芸が趣味な人からもらった失敗作という奴だ。

むろんタダ。

でもいい雰囲気で照るだろうあの皿。

ただし、あれがどんなに安くても他人様の物だったら、もっとあわてた気もするけど…。

「嘘です」

「・・・はあ!？」

「やつぱりですね。挑戦っていうのは、ある程度内容を理解してうえで受けないと身を滅ぼしますよ」

今回ならそのお皿が安物であるという事実。

そしてその周囲には借り物の食器もあるということ。

これは逆手に取られて有効活用されちゃってもおかしくないだろう。そうシミジミと説教するように言い聞かせるていたら、大人たちに変な顔をされた。

じいちゃんがリースらしいなと笑っていた。

村長が危ない奴らめとため息をついていた。

あれえ？オレ、何かしたかね？

それより村長『ら』ってなに、『ら』ってさ!？
なんで複数形なのそこ!!

「変な目で見ないでくださいよ」

「割れるとわかっていて、ほのめかすのもどうかと……」

いやいや。オレそんなことした覚えはないんだけど……！

そうしたらさらに呆然と驚いたような表情をされて、しまいにはため息をつかれた。

「小さな子供、それも自分の音うになんてむごい仕打ちじゃ」
「ええ！？なにそれっ？」

オレ、正義のヒーローになりたいわけじゃないけど、だからといってなんで悪役。
どっちもいやだ。

「できるのならば、通りすがりの大量エキストラの一人になりたい……」

穏やかな生活とは、まだまだ遠そうだった。

07 あなたがくれた安らぎに（上）（後書き）

長いからわけてみたよ。3段階に（最近「上中下」おおいなあゝ）。でもわけないと、自分の中で組んだ10話設定がずれることが判明したので、短くもブツリブツリと変なところで区切れていくかと思いますがそこはお許しを。

ついにみんなの期待のあの方が登場！といっておきながら、クザンさんを書き忘れましたorz

まあ、クザンさんとリースの出会い編はまた次回にでも。なかなか進展がなくてごめんなさい。

100413

07 あなたがくれた安らぎに（中）（前書き）

その安らぎは、人に癒しをあたえ
誰かの力となる

その安らぎは…

ときにだれかの不幸ともなりえる

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

07 あなたがくれた安らぎに（中）

++ 何かに目覚めた瞬間 ++

用は、諦めも肝心だということだ。

「ん」。相変わらず小っこいねえい」

海軍本部に帰るなり、ボルサリーノ黄猿さんに捕まった。

二ヶ月間、ガープじいちゃんの監督のもとエースと組み手をした
り、また風船やら谷やらのしごきをうけつつ、フーシャ村では楽し
くすごさせてもらった。

平穏な日々は最高で。

訓練も海軍本部にいたときよりも緩やかで、これくらいならいいか
とさえ思うようになっていた。

エースにはさらなる目標ができたとかで、そこからオレを奪回する
とかで…相変わらず強くなんだ！と叫んでいる。

オレが海軍本部にいくよりも前のエースとは変わっていた。

「強くなりたい！」そう言うエースは、弱気そうな昔とは違って、
目に強い炎を乗せて自らじいちゃんに修行をつけてくれるよう頼み、
オレにも組み手をしてくれと頭を下げてきた。

弟の成長に驚いたものの、なんだか胸があったかくなって——とり

あえず「航海術だけは絶対覚えたほうがいいですよ」っと、組み手よりも先に遭難防止策を叩き込んだ。

平和な日々。

穏やかな村での、のんびりとした環境。

だけどやっぱりただではすまなかった。

最近、なぜか嫌な予感がしていたため数日間、獲物を狙う獣のように極力気配を消すようにして、じいちゃんから逃げ続けていた。誘拐なんて前例があるので、寝て起きたら次の朝は見知らぬ場所だったとか……なりたくないの、夜ベットでは寝ないように心がけた。だけどその日は夜ではなく、朝かたから事件は起きた。

村人総出の怒涛のかくれんぼの末、オレはやっぱりじいちゃんにみつかつてしまい、とニコニコ笑顔の祖父に米俵のようにこぼれ、マリンフォードまた海軍本部へとやってきてしまった。

永住予定が、約半年の本部外滞在だけとなって海軍本部へ帰還することとなった。

泣く泣く戻ると、おつるさんに「お帰り」と歓迎された後、その優しさで現状のむなしさにまた泣きなくなった。

あてがわれた部屋に行こうとして、廊下でボルサリーノさんとお会った。

背後から気配を消してズかれ、そのまま抱き上げられてしまい顔に頬擦りをされた。

爺ちゃんとは違って痛くない。

痛くはない……けどしつこい。

「な、なにかようですか？というかくつつきすぎです！！あついあつい！！」

小さな身体を思いつきり腕を突っ張って逃れようと頑張るが、顔が少し放れる程度。

そのまま気にしない気にしないと言われ、オレは部屋には戻れることなく移動することとなった。

ぬいぐるみでも抱くように両手で持ち運ばれ、気がつけば目の前には……これまたどこかで見覚えあるようなみことなおかつは頭。

マリンフールド海軍本部の訓練用グラウンドにて、少し見覚えが歩けどそれよりも若い男がデン！と座っていた。

他には何もない。

訓練している者の姿もないので、不思議に思い、そのままどうするんだろうと首を傾げてボルサリーノさんを見上げれば、大丈夫大丈夫と頭をなでられ、少年と青年の間ぐらいの男の子の横に座らされた。

相手も座ってるけど。

…でかつ。

というより、オレが小さいのだろうか？

子供だからというのもあるけど、それでもやっぱりエースより少しチビだけど…。

横が大きいですよ戦桃丸さん！

「おお。オジキ。そいつか？オジキが気に入ってるって子供は」

なんと。驚きです。

うええ！？オレ、ボルサリーノさんに…き、気に入られてるんですか！？

「はじめまして…リースと申します」

「おう。わいは戦桃丸。世界一ガードの固い男だ」

本当にあの台詞を言った！

うわーうわー。原作キャラ万歳！

ニツと笑って手を差し伸べられたので、そのまま握手をした。

さすがにここまでは…かたくないようで。

手はとっても柔らかかった。

じいちゃんよりやわらかくてやさしい。でもオレよりも遥かに大きなその手で頭をなでられた。

なんというか、ボルサリーノさんよりこっちになぜられてた方が癒される。

「おじき…おつきい甥子さんですね」

「オジキと呼ばれても、本当においっこか、おじかは…どうだろうねえ」

ふと気になつてボルサリーノさんに戦桃丸との関係を尋ねてみたら、うーんと少し考えたところをみて秘密だよ。っと、そっちの方が楽しいだろう。と、言われ、そういえば原作でも詳しくはでていなかったなと頷いた。

なるほど。

ボルサリーノさんが秘密主義、もとい楽しいことが好きだからそういうことは秘密なのか。

脇でまだオレの頭をなでていた戦桃丸が、あきれたように「オジキ

…」なんて呟くのが聞こえた。

それから、意外と戦桃丸さんがかまってくれるようになった。

ほら、ここって子供少ないから。

子供っぽいまいかたしてくれる人なんて今までいなくて、抱き上げるときも肩に荷物のようにもたれたり、歩調なんかこっち無視だし。

おいかけっこって、アレは追跡訓練って奴でしょう？ まちがいなく、しかもその他にやるのは、奇襲奇襲奇襲。

あとは外での遊びっていう名の全て訓練。訓練訓練訓練…。

できるだけ若い部類だと、下っ端過ぎて『ガープの孫』という代名詞に踊らされて、こわいのか近ズいてもこない。

そうするとやっぱり少ないわけで、お子様相手って言い切れないことしかしてこない他の大人たち。

そこへ現れた戦桃丸さんは、まさに癒しだった。

“たかいたかい”と称して、力の限り投げられることもなく。

側に戦桃丸さんがいるときは、奇襲されない。

なのでゆっくりできる。

しかも無理やり訓練とかされないの、側で本を読んでも誰も文句を言わない。

たま〜に手合わせを頼むときがあるけど、そういうときは手加減をきちんとしてくれる。

手加減——今までじいちゃん（それもはじめの方だけ）以外は誰もしてくれなかったことを普通にしてくれる。

歩くときは手をつないでくれるし、歩調合せてくれるし、いざというときは肩車してくれるし…って、なにほだされているんだ自分！？

「飴、いるか？」

「います！」

飽くれるし…。

うん、いい人だな。

あまりに普通でいい人過ぎて、いつだか泣けたのは秘密だ。

最近、地獄の訓練から逃げるべく、方法を編み出した。

これも戦桃丸さんのおかげで心にゆとりができたからだろう。

まず、イヤな気配が近ズいたら即逃げる。これは基本。

次は誰々が呼んでいると、大将連中の名前を言えば、その名前の威力に相手がひるむ。その隙に逃亡。

小さい身体を利用して、気配はできるだけ消すようにして隠れる。

（オレは獣。オレはハンターだ。などと暗示をかけてみたりする）
本を読みたいときは、庭や人気のないところを探す。

けれど人がいたらすぐにわかる位置を確保する。

なぜってもちろん逃げるため。

ビバ！戦闘回避！！

しかしそこで諦めてくれるような奴ばかりではないのでやっかいだ。
しかもオレ自身の身体は見ての通りお子様なため、力や体力がそれほどあるわけじゃない。

なのに相手さんは、こちらの体力などお構いなした。

そこでオレはある秘策を思いつき、最近では“オレ自身”で対処しなければボロボロにされることもないと気付き、自分の周囲に罫を張るようにした。

もちろん奇襲&憂さ晴らしにやってくる変人用だ。

じいちゃんのような奴らに攻撃されればすぐに吹っ飛ぶ身体は軽すぎ、攻撃をさばくためには腕力が弱く衝撃を緩和している間に次が来ていつもボロボロ。

そこで考えたのが、“自分で手を汚さずにやってしまおう”といういつだかじいちゃんにジャングル放置されたときにやった【迎え撃つ】という手法。

運がいいことにここには武器やら材料は山のようにある。

薬品がほしければ、科学班に言えばいい。

以前科学班で一度薬品をくれといったら、使い方を聞かれ、そんな使い方もあるのかと言われた。

それ以降薬品の使い方を報告する代わりに、ほしいものをもらえるようになった。

能力者対策もおかげでできている。

海棲石と海の水とかで、いろいろと。

落とし穴の下には本当は針山でも置いておきたかったけど、海に直通コースにしておいた。

能力者なら沈むからそれだけでいい。

戦桃丸さんと仲良くなったのも良かった。

戦桃丸さんは、科学班とも縁があるようで、使い方さえきちんと報告すればほしい材料を気軽にくれるし、武器を運ぶのも手伝ってくれる。

なので、戦桃丸さんはオレがどこにどんな罠を張っているか知っている。

知っているけど、すっかりで口を滑らせられるけど…もちろんそこも想定済み。

おかげで今まで以上に変人が罠に嵌る。はまる。

狩られる立場の獲物が、牙向いて狩る立場になった瞬間を思い知れ

ばい。

サクッ！ブチッ！

「ぐわっ！…なんだこの縄は！」

キン！キン！キン！キンッ！ザスッ！「ぐはあッ」

本を読んでいたら、どこかで草を踏む音がして、ああ、あの辺の仕掛けが発動したんだなと思った。

いつものお礼です。降り注ぐナイフ。

だけどそこは計算済みだ。

足とか手しか狙わない位置だから、重症になることはないはず。

「ぎゃあー！！！」

——ペラリ。

ズボッ！！「ぎゃふっ！！！」

——ペラリ。

「まだまだ甘いな。やはり子供。こんな罠…ぎゃあー！！！！」（三重トラップ！？）」

——ペラリ。

ズボ！「ちつ。こんな穴」バキッ！バキバキッ！「ええ！？（二十底！？）しかもふけえ~~~~~」……「バッシャーン！

ああ、今、誰か海へ直通の下水に落ちたな。
それにしてもいい天気だ。
こついう日はゆつくり寝るに限る。

本を日差しよけにしてオレは寝ることにした。

一度フーシャ村に帰ったのも良かった。

“オレの癒し”が手に入れたのも良かった。

おかげで心にはゆとりがたつぷり。

そんなわけで、いままでの逆襲といきましょう。

体力なくてもなめんなよ。外見子供、頭脳は大人！なオレを！！

これで海軍にいても自分の目標通り、穏やかな日々が送れそうだと願わくば、この幸せな日々が老後まで続きますように……。

まあ、むりだらうけどさ。

「科学班と合作のトリモチ作戦です」

たくさん変人を捕獲できましたよ。

これなら海賊も簡単に捕まえられそうですね。

もちろん海兵も簡単に…

ニヤリと口元がつい緩んでしまつて、おつるさんに報告書を出しにきていた海兵が悲鳴を上げて逃げた。
失礼だな。

「はあゝ。あいつに似てるんだか似てないんだかわからない子だね」

おつるさんにため息を疲れた!?

それ以前に、あなたが示す『あいつ』とはじいちゃんのことでしょうか？

えゝ？どこが似てるのさ。

外見は…まったく似てないよな？

どこがだ!?

わからん!!!

罨という手段を思い出して以降、おつるさんが呆れたようにこつちをみるようになった。

ボルサリーノさんが、なぜかさびしそうにこつちを見ている。もちろん無視。

戦桃丸さんの横は気が楽なので、いれるときはそこで本を読んだり昼寝をしたり。

じいちゃんは罨にかかる人間を見て楽しそうにガハハと笑っていた。セングクさんは「なんてやつらだ」とオレとじいちゃんをさらに同一視するようになった。

赤犬^{サカズキ}さんは「あんな子供に負けるなんて、だから犯罪者が増えるんだ」と海兵たちをひきつれ鍛えなおしたとしごき始めた。

罨もしばらくすれば効果を出し始め、余分な力を使う訓練（奇襲ともいう）はしてこなくなつた。

変わりに「あれくらい超えてみせろ!!」という誰かの発言のせいで、“オレへの襲撃”ではなく罠に自ら挑む更なる変人が増えた。海兵の皆さんも大変そうだ。

うん。やればできるもんだね。

悪魔の実、オレの場合はあってもないようなものだけど、それがなくともなんとか平和を確保できそうだ。

問題は海楼石やら、海水を大量に使う罠は、自分も微妙に弱るという問題点だけ。

まあ、普段からゴロゴロと寝てるだけから、弱ってるようには見えないだろう。

これでだらけられるし、能力者だってこともばれずにすんで一石二鳥だろう。

それにしても能力というのは使わなければ、それはそれで意外とばれないものだった。

自然系ロギアじゃなくてよかった。

あれは身体そのものが『現象』になってしまうから。

きっと打撃攻撃で身体が飴のようにぐにやりとなる人みたいになつて…訓練再開初日で間違いなく、絶対すぐにはれていただろう。

あぶないあぶない。

ある意味、身体を戻せないとか…変な能力でよかったのかもしれない。

いやね、一番は食べないことだけど。

さすがにね、食べた後にそれは無理だし。

きままに使い方を覚えていくしかなさそうだ。

しばらくは悪魔の実じゃなくて、罠でいこう。

+++++

ハッピーかい？と某ばあさんに問われたら、ノリノリでイエーイ！と頷ける。

そんなオレの更なる不幸。

罨をかいくぐる人間が出始めた。

さすが海軍。

海賊や悪魔の実の能力者とやりあうだけある。

裏の裏を読んだオレの必死の作品が…。

引つかかる率が減っているのもイヤになる。

「なんでこんなところに！？」

だって、そのトラップヒモぐらいみんなすぐよけるんだもんよ。

だからヒモをよけてふむだろう位置には落とし穴を設置。

それさえもよけようとすると、よけて足を着いた地面からは重さによってわなが発動！

俺の能力（こういう地味作業の時に使う）でうまく掘り返した地面の後を隠し、わか状のロープは見事獲物を捕獲するとしてまって、あつという間に宙吊りの刑。

これなら力のないオレでも、ぜんぜん力が要らないからね。体重が重いほど勢いよく引き上げられる網とかもあるよ。

「「「ぎゃあー!!!」」」

ちなみに、一人が引つかかると、どこかで別のトラップが作動します。

なにぶん体力のある海軍さん相手ですので、そこもきちんと計算して何段階も意表をつくものを用意させてもらっています。

なのに、それさえよけるって…。

しかも楽しそうだし!!

あれか、サカズキさんが奴らを鍛えなおしたせいなのかこれは!?

「やめてくれ」

「うぎゃー!!」

なんか悲鳴が聞こえるけど…。

あのですね。

君達が俺を放置してくれたら、なにもしないんですよ。

誓ってね。オレは戦闘向きじゃないからね。

「そもそも勝手に飛び込んでるのはあなた達のほうじゃないですかあー!!」

そんなわけで。

逃げてます。オレ。

なぜって、背後からは目をギラギラとさせて「うおー!!」と後を追ってくる数人の海兵たち。

なぜ？なぜ、オレを追う！？

しかも手に何持つてるのか聞きたい。

武器か？武器なのか！？

よせよ子供に。

それともオレへの恨みか！？

オレがわな仕掛けまくったから？

それならイヤだ。けど、武器を持っている理由がわかった。

逃げよう。

何かよくわからないけど、側にいたら危ない気がして逃亡。手には、ついさっきまで読んでいた本をしっかりと持って。

お菓子は…見捨てた。

あとでおつるさん、くれるかなあ。

最近甘党になってきたオレの日々。

07 あなたがくれた安らぎに（中）（後書き）

リースに「普通」をあげると調子に乗ります。

そのままヒヤッハア！と笑いながら、ついに逆襲をしようと決意。だけど、やっぱりリースの平穩は長く続かない。

そんなリースの日々…。

今日、なにげなくみたら凄いことになっていた！！！！

総合評価が1000pt達成！それも今日ですよー！！

こんな高評価をいただいてしまつていいのか不安になつてしまいましたが、本当に有難うございます！！死ぬほど嬉しいつてこういう瞬間なんだなつて思いました。！！

コメントくださったネメシス様、ヒョウガ様ありがとうございます。さらにチキンにポイントくださる神様のようなステキな読者様方に、感謝を。

100415

07 あなたがくれた安らぎに（下）（前書き）

その誤解はどんどん深まればいい…

* * * * *
* * * * *
* * * * *

07 あなたがくれた安らぎに（下）

++ “だるゝん同盟” 友の会 ++

「んゝだれだい？」

木の陰からそんな声が聞こえるがかまっている余裕はない。

「すみません！どなたかは知りませんが、かくまってください！！」

どこにいったー！と周囲からオレを追ういつもの海兵たちの声が聞こえる。

人がせつかくまったり本を読んでいたというのに…。

オレは入り組んだ海軍本部内を走りまわり、人の少なそうな影場をみつけそこへ駆け込んだ。

だって後ろから「うおー！」っていいながら、怖い顔した人たちが手に武器を持って追いかけてくるんだもんよ。

逃げるに限るさ！！

少しだけでもつさりとした茂みがあって、背後には大きめの木がある。海軍本部にもあるんですよ緑はね。

そこで木としげみでうまいいちに目だ棚そうな場所を見つけたのでそこへ飛び込み、ゴイーンと激しく何かに激突した。

「あ、あたまがっああ！！！！」

顔から飛び込んだのがいけなかった。

そこにまさか寝椅子があるとは思わなくて、見事に椅子の金属部分と頭を強打してしまいあまりの痛さにうずくまる。

眼鏡とあたってたらもつと痛かったらうなあ。

ガツッ！っていつて、鼻はいたそうだし、眼鏡は傷つくし…って、妄想はおいといて、がいたい。

けど声に出したらあの戦闘狂のようなハイエナにみつかってしまうとあわてて口を押さえて、そこでやっと目の前にいるのが誰か気付いて目を見張った。

「ただいま使用中」。悪いけど俺に用じゃないなら別の茂みにいてくれる？」

そこにいたのはステキアイマスクをして、ちゃっかり自分空間を作ってお昼寝体制万全なおひと。

いわずもがな。あのクザンさんです！

たしかクザンさんとニコ・ロビンがであったのは原作より20年前。もう過ぎてるねあのオハライベント。

知ってるついでに口出ししたくなっちゃうから危ない危ない。

そんでもってこの人は、「誰かな？」とそっちがずねたくせに警戒心がないのか、アイマスクもあげずに…また寝ようとしている！！いまにもグ〜という声が聞こえてきそうで、

ガッ！！

つと、思いつきりその寝椅子を蹴って…やりたかったが、そこはそこ。

相手は将来大将のクザンさん。

とりあえず現状では上司です！！

け、蹴れない。

でもお昼寝。

なんて、なんて…うらやましい光景だ！

オレと変わってほしい。

おいかけられてなければ、オレもそこでお昼寝したい。

いいな。

いいな。い・い・なあ。

むしろここまできると恨めしい。

「さぼりですか…クソッ！なんてうらやましい光景なんだ」

「あ、うん。それでおまえさんは」

どうやら心の声が口に出ていたらしい。

気がつけばアイマスクをずらしたクザンさんの顔が引きつっている。
動くのねあなたの顔も。

…それよりオレの心の愚痴は、どこから漏れてたんでしょう？

「いやいや、蹴ってたからすでに」

「え！？そ、それは申し訳ありません！！」

言われてみると、たしかに寝椅子が微妙に動いた後が地面にある。
怒りのあまり我を忘れてやってしまったらしい。

さすがのオレも一気に血の気が下がり、勢いよくその場に土下座をした。

「ごめんなさいごめんなさい！！」

将校でも上位の方とお見受けします！自分は海兵ではないですが、海軍本部にいる限り下っ端でございます！（むしろ石でいたい）本当に申し訳ありません（未来の大将様）！！

この非礼はぜひその冷たい能力でお手打ちにするなど、海軍本部から生涯ずっと追放などして、気を紛らわせていただければ光栄です！！」

追放とか…海兵なら死刑宣告と同じだよな？

それでもいいです。

でもぜひ追放——してくればオレは一生海軍に入らないですむんですけど。

「どうかお怒りをおしずめください！！」

もうあがめちゃうよ。

将校以上の能力者ってのは、みんな化け物じみた力の持ち主達だからね。

ここで謝らねば死ぬ。

死んだら『約束』はどうしたの？って川のほとりでルージュさんに怒られてしまいます！！

そう思つて、額に土がすりつくほど平伏させていただいた。

「や。いや…べつにそこまでしなくても」

「ほ、本当ですか！！」

さすが将来有望株！大将青キジ！！

心が広いようだ。

しばらくクザンさんはおかしな顔をしていたけど、それどころじゃない。

この人、物凄くいい人だった。

「あの、追われてるんです！」

どうしようかなと思っていたところへ視線を向けられ、ついすがりように言ってしまった。

ここにはたくさん大人がいるが、助けを求めても意味を理解してくれなかった。

だというのに、自分のいい方へとおかしな風に聞き間違えもせず、信じてくれたのだ。

この海軍本部マリッフォードにいる人たちは、もう誰もオレの声は届かないだろうと諦めていたのにだ。

「ふん。あれとか？」

「え？」

そこへちやうど、自分達のすぐ側で複数の気配がした。

追跡者の声がオレの名を呼んでいる。

しまった。ここまで来たか。

めんどろだけど逃げないともっと面倒なことになると思って、また逃げ出す準備をしていたところでクザンさんにとめられた。

なんでかなと不思議に思ってクザンさんを見上げていたら、椅子から起き上がり茂みから出て行った。

オレの脇を通る時に、声だしちゃだめだよと言って――

――あ、クザン…よう！！ここ…リース…きませ…でしたか？

——こども？…てない……よ

凍らすよ。

そんな会話が聞こえて、悲鳴と謝罪を残して追跡者達は去っていた。

帰ってきたクザンさんは「もうめんどくさいなあ」と頭をかいていた。

その態度にオレはほれそうだった。
思わず拍手をしたら、なんか考える用に動きを止め、しばらくしてから頭をなでられた。

それから先ほどの位置に戻り、オレに用じゃないなら、どうしたの？と聞かれ、

「オレを強くする訓練という名目の地獄から逃亡してきたところで
す」

「逃げてきたって。まあ、たしかに凄いやね、君の訓練につきあっているひとたち」

まっとうな会話が返ってきました。

あまりの嬉しさについて色々と話してしまい、ガープじいちゃんの誤解の話までさかのぼったけど、クザンさんはそれを全部聞いてくれた。

「3歳になると我が家ではじいちゃんにより空へと飛ばされます。
5歳になると密林においてかれ………というわけで、船の事故にあったのが去年です。」

その時、オレは逃げ足を早くしようと心に誓いました。

だけどなぜか。どこをどう間違えたのかじいちゃんが暴走し、オレはここにつれてこられたってわけです。

しかもオレって外見からしても絶対強くなるようには見えないじゃないですか？

なのにオレを強くしようと、じいちゃんに言われた暇人や大将達が、ふつうにもてる力惜しみもなく使ってきますから。

とくにボルサリーノさんとかおつるさんとかじいちゃんとかじいちゃんとかじいちゃんとかじいちゃんとかじいちゃんとか

オレとじいちゃんは本当に血がつながっていて、家族だ。

家族だから何とでも言う。

家族だからすぐ殴れるし、すぐ言い合える。

白ヒゲと同じくらいオレだって家族が大事だ。

だけど・・・

恨みの多さについてじいちゃんの名前を繰り返してしまったのは、しかたないだろう。

すつきりした顔でいいきると、さすがクザンさん。

じいちゃんのことをよくわかっていているらしく、あの人ならやりかねない。とまで同意をくれた。

それからクザンさんは、やっぱりサボリで。

お昼寝が好きで。

じいちゃんに迷惑ばかりかけられていて。

いろいろと逃げまくっていて・・・

なんだ。最高じゃないかそれ。

目の前のお偉いさんが、実はほとんどオレと同じような性質だと改めて判明した。

目が合った。

無言だった。

それでも互いに胸に秘めるものがなんであるか理解し、瞬間ギョツと互いに手を取り合って硬く握手をした。

同士よ！！

「あなたとはいい友達になれそうです！」

「俺もだよ」

『いろいろだるいよ。だらけるの最高！大好き同盟』略して【だるくん同盟】が結成された。

二人で「だるくんですね」と笑いあつて、その名を粒や管kで胸がポカポカ温かくなったりした。

クザンさんは本当にいい人だった。

しかもオレのことを気遣ってくれて。

「休み…たいの？それなら人が来ないとおきの場所教えてあげようか？」

なぐんで、逃げ場所まで教えてくれた。

ああ、もう。あんた最高だよ！！

マンガを読んでいたときはわけわかんない人だと思っていたけど、オレのことを理解してくれるなんて。

むしろオレの意見をきちんと耳を傾けて聞いてくれただけで、オレは生きていたかいたきがする。

話を曲げずに、きちんと聞いてくれた初めての人。

そのひとがいたずらの共犯者みたいな笑みを浮かべるもんだから、うれしくて「これからもいたずらいっしょにやろうね」って意味をこめて笑い返してしまった。

まんがからだ、うれしくてもあんまりかおにでないひとだなんて思ってたんだけど、予想外の表情にオレの中でテンションはさらにあがった。

どうやら彼は一緒にイタズラをたのしんでくれるらしい。

オレのなかで、クザンさんとのイタズラは、昼寝とかサボリという意味で定着した。

なんだか暗号みたいで楽しいね。

今度昼ねポイントにお茶と煎餅でも持っていこうな。

きっと昼寝がもつとたのしくなるね。

こうしてオレは海軍本部において、地位ある味方を仲間に加えた。オレはまだここでもやっていけそうだと。

その日は鼻歌を歌って部屋に戻った。

あまりにまったりしていたせいで、背後からの光線にあやうく焦がされるところだったとだけ…恨みの報告としておきます。

鏡でも持って歩こうかな。

○ ○
 \
 .
 .
 .
 ○
 .
 .
 .
 .
 ●
 |
 ○

 ○
 .
 .
 .
 .
 .
 ●
 |
 ○

 ○
 \
 .
 .
 .
 .
 ○
 .
 .
 .
 .
 ●

<side クザン>

一年ほど前から周囲が騒がしい。

あのときはガーブさんが、重症の子供——それも孫——を連れてきたので騒ぎになった。

次には、その小さな子供が成し遂げた偉業と、ガーブさんに話して聞かせたという知識の深さに、その子供はガーブにならって『英雄』……『小さな英雄』と呼ばれるようになった。

正義を貫く海兵たちにより、『小さな英雄』の存在は一躍アイドルのように盛り上げられてしまった。

なかには反発するものもいたようだが、実際その子供に会いにいくと必ず態度を変えて戻ってきた。

しばらくすると、子供は大将を中心に稽古を始めた。風の噂で聞いた。

実際当時の俺にもガーブさんから呼び出しがかかっていたが無視した。

子守なんてめんどくさい。

騒がしいのも嫌で、今まで子供を見に行くこともしなかった。

こどもは…オハラを思い出す。

大将というのは、自分も含め能力者しかないような連中である。例え能力をセーブしていたとしても、相手は大将。

化け物じみた能力者たちのさらにその上に行く彼ら相手に死にもせずにいる。

そこでまたガーブさんの孫にあこがれる者が増えた。

あのお方ら相手にしていき照られるなんて——さすがはガープさんの孫だ。

それから諸々の事情で俺は子供を避けた。

所詮子供だという理由からと、面倒だという理由だけ。

しばらくしてあの彼はなにやら泣きながら家に帰ったという。

子供は極度のホームシックだったらしく、ガープさんが暴走して、無理やり上から休暇を取り付けている姿を見た。

「おうちかえるうゝ！！」という子供特有の泣き声は、実は通り返りに聞こえていた。

オレはその声しか知らなかったのだが、その子供の態度は普段とは違っていたらしい。

いつも冷めた子供らしく、普段と違った反応にか、おつるさんまで顔を緩めて見送っていた。

「いいのおゝ。わっしもああいうのほしいな」

なんだかんだいってボルサリーノが一番緩んだ顔をしていたとただ、記述しよう。

「またまた随分と人見知りが激しい子だね」

「あ、クザンさん！」

「俺、面と向かってあったことないけど……どんな子？」

ガープさんの孫という子供が、ホームシックで帰郷してから一ヶ月ほど。

なんだかすっかりマリンフォードが静かになった気がするのには錯覚だろうか。

一年。よく俺、その子供と会わなかったなあと思っていたら、あの子のおっかけをみつけた。

なんとなく聞いてみると予想以上に相手が幼いことを知った。

その話では、ガープさんがつれてきたのは、なんとも小さな子供だという。

まだ五歳だという。

その小さな身体で、自分の身を省みず船の崩落事故から人を救いだたらしい。

事故のせいで右目を失明し、歩くのも困難なほどの怪我をしたため半年間は、表に出てこなかったとか。

医療棟の方にいたらしいので会わないのも無理がない。

失明。怪我。事故による恐怖はないのだろうか？

誰もがそう相手を気にしたようだが、子供は諦めることをしないのだという。

何があっても諦めない姿勢や、丁寧な対応はクールで、だけどキラキラと輝く瞳にその子供特有の河合裸子がいまって、ファン達には囚われるのだから。

子供ってうるさいだけだろう？どこが可愛いんだろう？

夢見る海兵の目は、自分よりも強者に対する尊敬と憧れでキラキラと輝いていて、訓練の相手をしてもらえるだけで満足だと言った。

『小さな英雄』に抱きつくこうとする者、組み手を申し込む者は後がたたないと海兵たちは口を揃えて言う。

早く帰ってこないかなあ〜と女性陣は、すっかりやるきをなくすほど。

「おいおい、しっかりしてくれよ」

「無理です」

「わたしたちに癒しを！リースちゃああん！！」

「（どこまでいっちゃってるんだ・・・）」

そうしてだいたい半年ほどして戻ってきた子供に、再び海兵たちは群がったが…

休暇で成長したらしく、お子様は彼らに答える前に、畏を仕掛けるようになった。

それも高等な…。

おかげ日夜、海軍本部の一部では悲鳴が耐えない。

やっぱり静かな方がよかった気がする。

+++++

ガサリと草を踏む音がする。

仕事をするにしては時間は早い。

だれだろうかと思っていると、ゴイン！！と変な音がして「あ、あ
たまがつあああ！……！」

という悲鳴が聞こえた。

どうやら俺の椅子に頭を打ったらしい。

草に向かつてダイビングでもしたのか？

器用な打ち方だ。

「さぼりですか。うらやましい」

「あ、うん。それでおまえさんは」

「……」

しばらくしても返事がない。

どうやら帰ってしまったか。

それならそれでいい。

なんだったのだろうという考えさえ、面倒でそのまままた寝ようとした。

「……？まあ、いいか」

会話がなくなり、もう一回寝るかと思っていると、突如物凄い悪寒を感じて慌てて起き上がった。

瞬間、ガン！と勢い良く視界が揺れて、椅子から落ちかける。

なにごとだとアイマスクをとれば、そこには5、6歳ほどの小さな子供がいた。

長袖からはみ出した肌にある傷と、左右違う色の瞳を見て、その子供がここ一年ばかり噂になっていたガープ中将の孫だと気付いた。
名前はなんだったか。

ガープさんがことあることにその名前を言っていたきがするが、あまりにうるさくて（しつこくて）聞いていなかった。
興味がなかったら、どうも名前が出てこない。

さっきの音は……一番振動の激しかった部分から予測して覗いてみると、椅子が一部へこんでいる。

ワオ。

さすがは能力者でもないのに拳だけでのしあがったガープさんの孫といったところだろうか。

その孫はというと、どこか遠いまなざしで宙をみつめていた。

視線を向けると、なにやらクリクリした大きな目を鋭く細め、怨念でも吐き出すようにブツブツとなにか呟いていた。

さっきの寒気はコレかと冷や汗が流れた。

これは寒気とかそういうレベルを超えた——覇気にも近い殺気だった。

「ずるいずるいずるい……昼寝邪魔されないなんて……ずるいずるい……」

暗闇のような片目が、なにか遠い過去でも思い返しているのか、だれだれが何々をしたという風に正確な名前ごとそいつにまた昼寝を邪魔されただの呟いているところを見ると、
その恨みはよほどのものだろう。

ただそこは可愛そうそうだとは思うが、何も俺の脇でつつたたまま呪詛をはかないでほしい。

ぶつぶつぶつぶつ……

お前は『ブツブツの実』でも食べたのかよ！

食べると死ぬか愚痴が非常に多くなるという絶対食べたくないNo.1の悪魔のような、悪魔の実。

あの伝説級の実をマジでこいつ食ったんじゃないだろうかと思った。

怨念に取り憑かれた！！

そんな気分。

もういいかげんにしなさいよあんた。オレが怖いから！やゝめゝろゝ。

あまりの怖さに、呼びかけながら軽く突っついてみた。
さわるのもなんとなくイヤだった。

呪われそうで。

でもここで触らないほうが危なくなりそうでは仕方なく…

「あ、あれ？」

ふいに我に返ったらしい相手から、一気に殺気が引つ込み、かわりにキョトンとした普通の子供らしい表情が戻ってくるのに安堵する。

あれで、自覚なし。

そのうち本物の覇気まで使えるようになるだろうなと思うのは、オレだけじゃないだろう。

もしかしてそれがわかってるからガープさんも大將方もかまうのだろうか。

「あ、うん。それでおまえさんは」

「…それよりオレの心の愚痴は、どこから漏れてたんでしょうか？」

不思議そうに小首をかしげる仕草が、小動物のようで可愛い。本当にさっきの豹変振りはなんだったのかと問いたい。むしろ同じ人物なのか？

先程まで意思の感じられなかった常闇のような暗い瞳には、生来のものだろう輝きが戻っている。

そのせいか片目だけのクリクリした大きな黒い目は、夜の星空を閉じ込めたように黒いのに、暗闇の中にあっても柔らかさを内に秘めているようだった。

もう光が見えるか見えないかほどしか視力がないといわれる左目は、汚くにごるわけではなく、海と光を反射して銀色のようにきらめいている。

下がった視力を補うための黒縁眼鏡は誰が選んだのか、ガリ弁とは程遠いおしゃれなデザイン。たぶんおつるさんだ。

傷跡を隠すために伸ばし始めたらしい髪は肩までぐらいのびてきていて、ガープさんの孫とは思えないほどサラサラだ。なんとなく女の子じゃないか思いそうになる。

頭にある天使のわっかみたいな艶を無償になでてみたくなって手を伸ばすと、

「うわ〜ん！！ごめんなさい！！ごめんなさい！！」

物凄い勢いで土下座された。

殴られるとも思ったのか。

ゴツンゴツンいつてるほど、激しい土下座だった。

あまりのことに呆然としていて、相手の額が微かに赤くなっているのに気付いてハッとした。

このままこの子を放置したら、ガープさんが…くる！！

せつかく逃げてきたのに、ココでつかまるわけにはいかない。
あわてて子供の衝撃的な行動を止めると、周囲を見回してガープさんがないのを確認してホッといきをつく。

離している間子供は、凄く目を輝かせて、嬉しそうにオレを見ていた。

あのプニプニした肌は面白いくらい柔らかくて、ガープさんとは似てない顔立ちがさらに愛くるしくて。

頭を触ってもいいだろうかと…

お邪魔虫を払ったあとわしわしと撫でてみた。

ネコのように目を細める仕草や、くすぐったそうな笑顔は、無邪気
そうで凄く可愛かった。

それからいろいろあって、結局その子供の話を聞くこととなっ
た。

しごとは…まあいいや。

めんどくさいし。

「オレを強くする訓練という名目の地獄から逃亡してきたところで
す」

しみりとした顔で話すのは、ガープさんのお孫さん。

やたらとぬいぐるみみたいでかまいたくなるけど、たぶん男。

訓練？そつえばはじめのうちはそれをやれとかガープさんが言っ
ていた気もするけど。

将校以上にしか言っていなかったような。

なのに毎日奇襲を受けている？

攻撃されたから、自分の命を守るために逃げようとしてもダメで、よけていたわけじゃなく体重が軽すぎて吹っ飛ばされるのか…。

やっぱこども…

つて、ああ！

訓練とか紀州つてあれか。

ファンとか、女性陣とか…。

この子には訓練だと思われてたのか。だから攻撃してきてたんだな。罨とか罨とか…。

ふと視線を感じて思い出からもどると、これで本当に目が見えていないのかと思うほどまっすぐにこっちをみていた。

それがあまりにまっすぐすぎて、逆に少し怖いなと思った。

もしかして俺の言葉を待ってる？

「逃げてきたつて。まあ、たしかに凄いやね、君の訓練につきあってるひとたち」

やっぱり子供だなあ。

大人の言葉一つでガッツポーズまで喜んだり、すぐに落ち込んだり。

それにしても大将に遊んでもらうってするという事は、彼らの弟子に当たるのだろうか？

そりゃすげー。

けどそのまま階級でもつけられたら、この子も可愛そうに。きつとオレのように仕事をおしつけられるんだろっな。

海軍に入ったら一度はお会いしたいナンバー1〜3は普通にこの子供にメロメロ。

あんなステキな大将たちのフルコース。

愛されてるなあと思っていたら、物凄く顔をしかめられた。
あれ？そう思っているか

「あなたと会ったのは初めてですよ。」

だからこの際はつきりいますが、大将やら中将やら、悪魔の実の戦闘実験でもされているような気分でしたよ。

地獄です。地獄。あなたも上の地位にいるのなら部下には容赦してあげたほうがいいですよ」

経験者は語るって…この子が言うとなんでここまでリアルになるんだろう。

この子は、苦労しそー。

「やるならせめて普通の海兵の訓練に参加したいです。
だからといって自分から訓練してくれともしたいとも、オレが言うわけじゃないですけど」

普通の海兵って…。六式もなくすでに大将相手にできる時点ですりゃあ無理だろうと思った。

それに相手もさすがに手加減しているだろうと思ったら…

血の気が引いた。

「ふつうにもてる力惜しみもなく使ってきますから。とくにボルサリーノさんとかおつるさんとかじいちゃんとかじいちゃんとかじいちゃんとかじいちゃんとかじいちゃんとか」

あんた達おとなげないよ。お子様に何してくれてんの。
ため息が出そうになった。

それにしても…ガープさんが何人かいた気がする。
随分うらまれてるなあ。

そこで相手がまだブツブツと文句をいってるのに気付き、

「休み…たいの？それなら人が来ないとおきの場所教えてあげようか？」

苦勞してるからたまには休日とつてもいいんじゃないかと思ったし。
ガープさんがいうには、この子供は強くなるために海軍に来たとか…
…そんな人間が、まさかなと思ってジョークのつもりで言ってみた
ら。

「ほんとうですか…！」

『休み』という単語に、予想以上のくいつきを見せた。

そのとたんガバツ！と顔を上げて、いままでもたこともないほどキラキラとした期待のまなざしで、ずずいと近寄ってきた。

やめろ。

俺にはま、まぶしすぎるー！

「あ、ああ」

「さすがクザンさん！！サボリのプロだけありますね！！約束ですよー！」

プロ…ってそれ。
まあいいや。

それ以前に、俺の名前…知らなかったんじゃない…。
なんで知ってんの？

「オレも弟とこのあいだ約束事したんですよ！小さくてかわいい奴
なんですよコレが。」

そういえば…村にはあんあんまり子供っていなかったからオレ友達
いないなあ。

クザンさんだってお友達とかと約束するでしょう？そいつの守る
でしょう？

オレも約束って大事だと思うんですよ。

だからいつも死んでたまるか！と思うわけです。

だからぜび！オレがこれ以上死線を彷徨わないように、じいちゃん
にあおられてた海兵を何とかしてください！

そしてあわよくばお昼寝ポイントも教えていただけると…」

長い…。

途中すっかり眠気に襲われたが、そこはそれ…

寝ているようにはみせなかった！（目を開いたまま寝た）

それにしても変な子供だ。

会ったことも名乗ったこともなかったのに、名前を呼ばれ、なんか
俺の秘密情報ギリギリまで言い当てた。

『友達』『約束』ね…。

“こどもはオハラを思い出す”

そうおもっていたけど、それ以上だ。

無理やり記憶の中から呼び起こされた。

無意識なのか本当に知っているのか、なんか後者のような気がするけど、鋭いところをついてくる。

こんな…こんな5、6歳の子供に。

「お前、ほんと変」

なんとなく無邪気さの向こう側に、俺では想像もしえないような企みがあるような…

いやいや、なんというか。物凄く動きたくない。やるきない。のんびりしたい…みたいな念を感じるが。

どっちが本当なんだろう。

…楽したいから頑張る！

この子供の考えはそれですべて納得できそうな気がして、これ以上、深く考えるのを放棄した。

ただでさえ、目の前の相手は今とてつもなくテンションが高い。

これはつつくとよいけいな何かを出そうだ。

やっかいごとは回避しなければ！！俺あぶない！

そもそもこの異常なテンションの理由も凄い。

ガープさんに向け聞いてみたい。あんたたち何してきたの？といいたくなるようなものなのだ。

気持ちはわからなくもないその理由——「人がいない場所」の話をしただけで、なぜここまで…。

目から涙までこぼしてるし。

そうして彼の口からはどんだけよ？と思うほど長い愚痴がこぼれた。

その愚痴を聞いていて、なぜオレのことを？と聞こうとしていたことさえ、今頃だな。とかどうでもよくなってしまった。

「じいちゃん達にききましたから」という普通の発言が、決してかえってこなそうだ。

きつとまた愚痴が始まるんだろう。

それは勘弁してほしい。

「…というわけで、後でのろわれたらイヤだなって思って人を蹴り飛ばしました！

……があつて、それで必死で逃げてたんです！いたいけなご、じゃなかった6歳児にひどいと思いませんか？」

だからって、何もやってきた海兵を返り討ちにするために、串刺しにせんでも…ああ、最近はトリモチだったか？

最近科学班が喜んで新しい武器や兵器の開発を始めたのは…間違いなく感化されたか。

あまり考えたくないな。

「その時、オレは逃げ足を早くしようと心に誓いました！！」

“強くなりたい”ならわかるけど。

“足が速くなりたい”っていう決意はどこからくるんだ？

「あしをはやくさせるぞー！！」って、なんか物凄く変なところで燃えてるし…足ねえ。

とりあえず無事でよかったんじゃない。

・・・あれ？

この話を聞いていると、どうもガープさんの話とも、この子にあこ

がれていた海兵の話ともちがくないか？

「つまり君はあれか？やる気ないのにどこいっても群れてきていやだと・・・」

「はい！話がやっと通じたのはあなたが初めてです！」

あのガープの血を引いた孫。

船の事故から人を救った小さな英雄。

大将たちと渡り合う力の持ち主…。

そう呼ばれていた子供は、

「好きな事は寝ることと料理と日々ぼけぼけしてることです！！」
と言い切った。

こいつ、いいなと思った瞬間だった。

即大将がついたのもいまなら頷けるきがした。

本人はわかっていないが戦闘能力があるし、彼なら自分達が本気で攻撃してもなんとかしてくれそう。

会話の合間に見える不可解な言葉や、その銀と黒の瞳はすべてかわすんじゃないかという感覚がわきあがる。

——大丈夫。

すえてを受け入れてくれそうな、そんな暖かさのある子供。

能力者である俺達にさえ普通に『相手をしてくれる』。変——そんな言葉が一番あいそうな子供。

それにどうもかまいたくなるのだ。

はじめのときは面倒だった。

そのあとは、強くなりたらしいという話を聞いて、ガープの孫だから試験もなくさらっと海軍に入れて、ガープさんを利用して大将やオレたちが呼ばれたのだと思った。
傲慢な子供の願い。

だから会ったら立場とかわかってないくせに命令されそうで、きつと腹が立っただろうし、そのいらだちをどうことうするのでも面倒だ。会うのも話すのも、訓練に付き合うのもめんどうだ。なら会わなければいい。

そう考えていた。

だけど偶然あった。

実際は予想のどれも違っていた。

ふてぶてしさは微塵もなく、むしろどこにでもいそうな弱そうな子どもは逃げ惑っていた。

あれほど人々の間でもちあげられていた小さな英雄は、ただの子供で…。

それも極度のやるきのない…自分とことん気が合いそうな子供だった。

「そういつ（じじくさい）の、嫌いじゃないよ」

むしろ自分の好みだ。

「じゃあおしえてくれるんですか!？」

「かわりにおれのこと黙っててね」

「よろこんで!」

ものすごくまぶしくも無邪気な笑顔で笑う相手に、「これからやりかえしてやるうぜ」というふうになやと笑い返して、二人で手を組んだ。

俺の笑い方がへんだったのか、一瞬こっちを驚いたような表情で見

た後――

ニヤリ

いたずらをなしとげる子供のそれではなく、共犯者――それも戦ですべてをはあくしていて敵や仲間をすべて自分の手のひらの上で転がしている知将のようなきらめきをのせていて。
あれは大人が見せる笑みだと思った。

ゾクリと悪寒がした。

「うわあゝ。なんかやばそうなのと仲良くなっちゃったきがするなあ」

昼寝場所に、わなとかしかけられないといいなあゝ。

「大将連中とあのこは敵にしたくないな。うん、気をつけよう」

でも嫌いじゃないんだよねゝ。

彼の存在は『彼だから』その言葉ですべて終わってしまふ。

不思議な魅力ある子供は、将来何処まで伸びて、どこまでだらけるだろうか。

「楽しみだ」

+++++

俺とガープさんの孫との間で同盟ができた。

その日も盾となるべき戦桃丸がいなかったせいか、リースはひよっこりと俺のもとへと現れた。

こどもながら惚れ惚れするような、舞のような一連の流れ。

それにあの子のファンは頬を染めて、ペンと色紙をもっておいかけている。

ときにはチマチマとした小動物のようで、可愛くコテンと首をかしげられると、癒しを求めて海兵たち（女子率が高い）が子供に群がろうと手を伸ばす。

けれどそれをいち早く察知したあの子供は、畏がはつてある方へと誘いこんで彼らを一網打尽にする。

畏から開放された人たちは、「さすがはガープ中将の孫」といつてさらに闘志を燃やすことさえ知らず。

ボルサリーノ

黄猿さんがあのふくよかな子供をよく抱えているのを見る限り、たしかにやわらかそうなほっぺだなと思う。

さわりたい。なでくりまわしたいともだえる女性陣は、よほどこの海軍という殺伐とした雰囲気にあてられてしまっているようだ。

まあ、女性陣もいくつか多いからなあ、ここは。

なんたつてのおつるさんでさえ、あの子供を可愛がっているようで、

よくお菓子を上げているのを目撃する。

あれってさ、間違いなく餌付けだよね？
ねえ？

「ほどほどにな」

「でもあつちからくるんですよ。殺気ふりまいて」

「ありゃあ、殺気とはちがうだろ」

「え？違つんです？」

「……」

気配に敏感だとは聞いていたが、敏感すぎだろう、おい。
まあ、あれだけギラギラしてたら…殺気といつてもいいか。
それにしても数少ない女性陣を手玉に取るとは…やるな。
うらやましい。

+++++

最近は避ける必要がないとわかってからは、同盟の相手リリースと
は仲がよい。

偶然にもリリースがいても俺がどこかに逃げる必要がないので楽だ。

そこにいたから「よお」と手を振れば、同士であるリースは嬉しそうに笑ってついてきた。

ああ。女子が言っていたのもわかる気がする。

これはかわいいな。

でっかい犬みたいだ。

むかしのガープさんと同じ色のかみをわしゃわしゃとなでると、思っていた以上にやわらかくてやめられなくなる。

髪の色以外は何も似ていないようで、髪質は母親似なのだろうか？のばしはじめたそれはサラサラで、体格も性格もことんあの人は間逆。

子供だからさわりこちがいいだけです。と言われたが、コレはなくすのは惜しいなと思ってしまう。

子供の中でも更に小さそうな体。

この様子からみても本人の言うとおり、あまりガープさんのような筋肉質にはならなそうだ。

性格もあそこまで豪快ではなく、むしろ地味を好む見事な庶民派だ。よくこんな生き物がガープさんから生まれるなと思ってしまう。

似てないなあ。

わしわしわしとなでていたら、突如背後から殺気が…

「わしがあんなことすると殴るのに!!」

なぜじゃあ！とガープさんの絶叫が響いた。

「だってじいちゃんの手、痛いんですよ。むしろつぶれる。圧死す

るから。

これ以上つぶれて将来身長が伸びなかったらどうしてくれるんです？豆って呼ばれたら…オレ、生きていけません」

なぐんて呟きがボソリと腕の下で聞こえた。

どんだけ力強いんだよあの人…と、改めて思った。

まあ、そんなわけで。我が【だるぐん同盟】同士は、すかつかり俺になついちまった。
そりゃあ同士だし。

おかげで俺はガープさんに始終にらまれる羽目に…。

いやね。わからなくもないよ。

けどリースが、『いろいろだるいよ。だらけるの最高！大好き』好きなので、昔からでしょう？

俺のせいで彼がやる気なくしたなんて、絶対ないと思う。
気付いてやんなんさいよ、最初からだよガープさん。

「クザン！お前、わしの孫に何をしたあつ！！」

ワシを避けている！なのにこうしてお前になついている！！なに
もしてないくせに！

お前のせいだ！

と、腕の中にいるリースをみて、俺に嫉妬しているガープさんが怒鳴り込んできたが。

「そんなのしりませんよ」

「いいもん！わしなんかちょーくだけた口調で話しかけてくれるもん」

「もんとかやめてください。キモチワルイですよガープさん」

そういえばリースはキレルと口が悪くなるとか。

それってつまり…

親しい話し方ではなくて――。

どんだけリースをキレさせてるんですかあんだ・・・。

お前も大変だな。

つい自分の背後でフシューとけを逆立て散るリースに視線を向けてしまった。

だんだんとガープさんの嫉妬攻撃と、リースにじゃれ付かれるのに慣れてきた頃。

唯一の理解者だからか、側にくっついて無邪気なお子様は、借りてきたネコのように大人しい。

わしわしわしわし…

頭をなげるとやっぱり嬉しそうで、さらに猫みたいに目を細めて笑う。

まるっこくて、無邪気で…。

ふと、思った。

この子はいった誰に似ているのだろうか？

だって――

「これは間違いなく将来は美人になるだろ」

なあ、そうおもわね？

誰に問うわけでもなくなんと呟いただけのそれに、

「おまえにはやらん！！」

殺気混じりの返答がきた。

ってか、どうしてこういうタイミングであなたがいるかね？

「いつからいたのガープさん」

「今じゃー！！」

うわ。タイミングよすぎ…

とりあえずリリースには飴をやって、この場から遠ざけておいた。

【後日談】

最近の日課であるクザンのもとへリースが遊びに行くと、さっそく子供相手にしてくれるような態度にリースは喜んでいた。

そこへ祖父が現れ、グラウンドにいつとけと言われ、外に出ると遠くで爆発音がした。

ピクリとリースの顔が引きつり、それに伴い殺気があふれ出た。

しかし彼は一瞬で殺気を抑えると、センゴクの怒鳴り声と祖父の罵声と氷の凍るような音を無視した。

後で黒焦げになっていた同士のもとに水を届け、身体の冷えたと呟いた祖父には……。

07 あなたがくれた安らぎに（下）（後書き）

ついにやった！クザンでた！リースの容姿も出た！

か、かくのが大変だった。やっぱり人の容姿を表現するのは難しい

orz

クザンさんの口調がわからないorz

漫画ー！漫画は何処だー！

漫画読んだら、クザンさんの口調治します！それまで違和感あったらごめんなさい！

とりあえず、リースが更に謎な人となればいい。

みんなお子様にメロメロになればいい。

こうして海軍のひぞっこは誕生した…（笑）

110416

08 認識の森羅万象、逃亡先のカケガエノナイモノ（前書き）

相変わらずのチキンです。

最近ワンピースのトリップ？とかエース奪回ものとかふえてきましたね。

すみません。自分かくのがこんなですみません。

すみませんすみません。

誰かの話に似てるとか、パクリじゃね？といつお声がかかるかわからなくて、怖くてそろそろ本気で死にそうorz
でも書く。こんなチキンでごめんなさい。

08 認識の森羅万象、逃亡先のカケガエノナイモノ

「水兵リーベ僕の船♪七曲がりシップスクラック
軽い姿の手袋はあゝ、まてよここにも数があるうゝ」

頭から離れない音楽は、友だちがテスト前に歌っていたあの呪いの元素記号の歌。

よくあの暗記方法にメロディーをつけたものだとは思うが、これになかなかにテンポがよくて一度聞いたたらなかなか頭から離れないという呪い付き。

今から6年も前、変な円盤で自分が生まれた世界を去る寸前、ちょうどテストが近かったことを喜ぼう。

今のオレにはとんでもない家宝となったのだから。

前世の記憶をふる活用で即席の歌を歌いながら、使っていいといわれた部屋で“悪魔の実”の能力を使って実験中。

やる内容は中学でもやった簡単なもの。

成功したら、次は炭素とダイヤについて調べよう。

「レッツゴー！縦軸！！」

水曜日、リッチな気分でルーブルのおゝ美術に接してフランスを知る

ベルバラまがいのカストロのバラ スカイラークでお食事を」

手元には水。

これはもちろんすぐ脇の水道からいくらでもできるので、実験の材料には丁度いい。

水(2 H₂O) + 電気エネルギー - - - & a m p ; g t ;
水素(2 H₂) + 酸素(O₂)

必要なのは電気エネルギー。

火気厳禁で。

なにをしようとしているかといえば、ただの電気分解だ。

中学生ならやったことあるんじゃないかと思うほど簡単な、実験。

ビーカーや試験管ではそれほど量もできないけど、水を材料に酸素と水素を作りたいんだ。

たぶんこの二つの元素は、何もせずとも自分の周囲には漂っているだろうけど、作るからこそ楽しい。

それにきちんと道具を使えば、誰もオレが悪魔の実を操る実験をしているとは思わないだろう。

そんなわけで科学班から許可を得て借りてきた試験管を着々と設置していく。

これはあくまで見回りが来たときようのカモフラージュで、本当の実験は悪魔の実の能力実験だ。

悪魔の実。

食べると海に嫌われ泳げなくなり、かわりに実に宿る悪魔の能力を使えるようになるという——あれである。

そしてオレの能力は“粒”・・・らしい。

辞書にもよくわからない変態的能力であること意外用途がない。

仮病に役立つだけ。

愚痴が増えるだけ。

そんな能力。

はたから見れば、電気分解とこなんでオレの能力が関係あるかと思うだろう。

ここまでいたるになにがあつたかという、オレが誕生日に偶然にも食べてしまった悪魔の実のおかしな性質に関してだ。

一度、体を粒にしてしまうと二度と戻れない――

本当にありえない能力だ。

このまま放置しておくのもいつまた元に戻れなくなるか、いつ周囲に能力者だとばれるかわからない……なんて不安なことばかりなんだ。

かといって無意味な能力が、無為意味にオレにくつついていることも氣にくわない。

だから「無意味なもの」を「意味あるもの」へと変えようと思ったのがきつつかけだ。

オレの能力は“粒”だ。

そう確信した瞬間……。

実はオレは、無人島での何度かの挑戦と、絶望の末に抱いた悪魔への殺意から、自分の能力に気付いたのだ。

体の一部が粒になるたびに、戻らなくて殺意を抱き、エースが笑う。それを二日繰り返した時、なんでオレが殺意を沸いた時のみ、粒が操れ元に戻るのだろうと考えた。

エースは悪魔がおびえているといったが、よくよく思い返してみればすぐに思い至ることがあった。

身体は何でできているか？

どこかの漫画で人体練成とかやっていたので、人体が何で構成されているかなんとはなしに覚えていたオレは、あんなお手軽で安い物質のくせにといつも殺意が沸いていた。

安い物質のくせにオレに反抗的なのが許せない——ちがう。“そこだ！”

必要なのはそれが“物質”であるという“認識”。

そこまで推測したところで、怒らずに、粒となったものが何であるかを考え——やがて粒はオレに従うように動き出したのが始まり。

そこでやっと自分が食べた実の能力に気付いたオレは、なんとかじいちゃんが迎えに来るまでに身体を粒化して元に戻すという技を身につけた。

だからといってすぐにそれを完璧に使えるわけでもなく、身体の何処を粒にするとかはまだオレの意思ではできない。

粒の大きさだって、すべてバラバラ。

しかも気合を入れれば歪な形になったり、大きさがでこぼこしたり……。

まだまだだという自覚はある。

でもこのつかんだ！という手応えから、それも時機にできるようになるだろうと思う。

そもそもオレが使用する【ツブツブの実】（正式名称だけは言いたくない）の操るものが“粒”であるのは、腕が粒化したことからわかっていたことだ。

なら、なぜ自分で操ることもできず、自分では元の姿に戻れないことがほとんどなのか。

なぜ、自分の腕だけは元に戻ったか。

そこで注目すべきところは“粒”という部分だった。

決して気にするのは、グチが多くなる“ブツブツ”の方ではない。

——“粒”という概念がどこまでの範囲なのか。

ここまで考えてたどりついたのは、“粒”の範囲がとんでもなく限定されているのではないか。それも動かす対象をしっかりと自分が理解していないと、実に宿る悪魔の能力をもつてしても操れないのではないかということ。

いままで成功例がいなかったことから、この能力が酷く小規模な限定的なもので、厄介なのはわかる。

だが、自分は運がよくも一度は壊れた腕が元に戻っている。

そこから考えるに、オレの悪魔の実の能力は、“身体の変化”ではなく“何か”を“操る”ことが主要であるのは間違いない。

けれど今までその“何か”を理解できた者がいなかったから、粒となった身体は戻らなかったとしたら…。

もしも——。

本当にもしもの話。

こちらの世界より、オレの前世の世界の方が一般教育レベルが高かったら？

海への対応技術ばかりが上昇していくこの世界の技術は、オレのいた世界にはないものが多い。それはこの一年科学班にくつついていて違いを探しまくったのでいろいろと確認済みだ。

海がもつとも身近なこの世界では、科学技術のかわりに悪魔の実の研究や、航海術、戦闘術等が世界の技術の要であり、一般人でもまずじまりに「海」の知識を幼い子供に与える。

逆にオレの世界にも海はあれど、悪魔の実やグランドラインのおかしな磁気天候のようなそんな魔法じみたものはなく、かわりにすべではこれで解明できるとい wanna ばかりに科学が発達した世界だ。そのため、一般的に航海術なんて学ぶ者はその職種に就くものだけだ。

オレが習った技術は、ここでは生物がそれを補うことが多い。例えば電話は、電伝虫のように。

つまり、向こうの世界の方が、科学技術が上であるということ――。

地球の一般学生レベルで学んだ知識は、このワンピースという漫画に酷似した世界では遥かにオーバーテクノロジーだったり、悪魔の実の産物だったり、夢物語だったするのだろう。

そんなあちらの世界で“粒”といえば、万物の原点をしめす。

原子や分子、粒子。そういった根源たる“粒”だ。

科学よりも航海術が発達した面白世界では、そういった詳細な概念を持ち合わせるのは一握りの学者に限定されるだろう。

もしもオレの持つ悪魔の実の能力が、この“粒”を示しているとすれば――。

いままで誰もこの粒の能力を操れなかったのがわかる気がする。知らなければ動かすこともできない。

簡単に言ってしまうばさういうことだ。

『対象を知る』――そういう能力か！やったぜ！

そう思つて喜々として島から帰つたオレは、さっそく悪魔の実図鑑を調べて絶望した。

愚痴の多くなる実つてなんなんだ！？と…。

そんなオレだったが、それからもつと自分と自分の実について考えた。

今度は自分の身体ではなく、それ以外のものと能力について考えたのだ。

海軍本部の中では目立たないよう細心の注意を払って、部屋の中で能力の実験を繰り返した。

そうしてオレは、オレなりの結論をだした。

■ □ ■ 学術名が微妙な悪魔の実についての自己判断 ■ □ ■

<実の特徴>

- ・青いキイチゴのような姿
- ・青いガラスか、陶器で作ったリアルな飾り物のよう
- ・よくよくみるとなんともいいがたいの模様が入っている
- ・気絶するほどまずい

<図鑑との差異より>

- ・正式名称は「ぶつぶつの実」ではなく「つぶつぶの実」が正解
- ・身体を変化させ、さらには周囲にも影響を与えるため超人系と断定
- ・愚痴が多くなるのは能力がしょぼいための絶望からくるものと思われる（決して実のせいではない）

・身体が一度粒になると戻らないのは、能力を操者が理解していなかったから

・病のような斑点が身体に現れるのは、能力を理解していないために無理やり使おうとして発生した実の暴走

『認識』後、きちんと粒を操れるようになれば斑点はなくなる

<能力について>

- ・ “粒” を操るの力
- ・ 操れる “粒” は主に元素とよばれるもの
- ・ 限定条件は、操る対象への理解
- ・ 身体を粒に変える場合大きさを自由に変化できる（まだ無理。でもきつとできそう）

- ・ 身に着けていれば、着ている服も一緒に変化する
- ・ きちんと『認識』していれば自分の身体を粒から元に戻せる
- ・ 自分の身体元にした場合、粒に変化＆操作できる分量は自分の体積分のみ

- ・ 自分が『認識』している粒を動かせる
（つまり自分の身体以外にも、そこにあるものを使えば代用できるということ）

- ・ 『認識』さえしていれば、手がとどかなくとも動かせる
- ・ 物体を好きな大きさの粒にすることも粒同士を結合することもできる

—— 結論。

「…これやば。ちょっとオレ最強じゃね？」

元素……分子や原子レベルのものを操れるらしい能力に開花したオレ。

あと少し使い勝手が良くなればこの能力——

笑われ者の落ちこぼれから一転。

うまくすれば、一人で世界を滅ぼせそうです。

世界を滅ぼせるってあーた…

どうしよう？

エースと無人島で過ごしてみつけた、身体を粒にする方法。

それを行なうためにしたのは、操りたい対象を知ることだった。

そうなってくると、対象を知ればあらかたのものは操れるような気がするので、自分の身体意外にこの能力は使えないか疑問が生まれた。

なので粒になる自分の体と同じように、それ以外の粒はどうか、操れるのかそうでないのか。今、オレが一番知りたいのはそこに集中する。

——今回の実験はそれに通じる第一歩になるはずだった。

そんなわけですらなるやる気に火が灯ったところで電気分解。

ちやつちやかやるぞ！

水素と酸素を使った実験だ。

だって、オレがやる気をだすのは、オレのため99%、残り1%は家族のためだけ。

あとは寝てたいオレ！

さっさと能力を会得してさるなる…

ドッカーン！！！！

何をどう間違ったか…。

突如部屋に巨大な日が発生し、大爆発が起きた。

さすがのオレもこれには驚いて、何が起きたのかさっぱりわからなかった。

もうもうと土煙が上がる中、呆然としていたら、すぐに周囲が騒がしくなったけど、オレはそれどころではなかった。

どうやら能力が暴走して、ほしいぶん以上の水素と酸素をどこからか集めてしまったらしく、余分に集められた水素に水分解用の電気装置から僅かに飛んだ火花で発火して大惨事となったようだ。

壁には穴があき、廊下へ続く扉は吹っ飛び、自分と支給されていたお部屋は真っ黒こげ。

試験管でやる電気分解でこれって…どんだけよと思った。

悪魔の実【ツブツブの実】。

とんでもなくやっかいな粒をあやつる他、細かい制御がその分難しい。

マンガに登場したCP9のカクも初めて悪魔の実を食べてキリンになるとき、能力が暴走してたし。

やはりなにことも、最初は誰でも失敗するようです。

特に悪魔の実の場合はね。

それから――

あまりの大惨事に、海賊が攻めてきたかと思われ武装した皆さんに囲まれた。

案の定、オレは目があった海軍大将の皆様にごつぴどく怒られた。けど、やっぱり悪魔の実の能力の事はばれなかった。

科学班のひとたちが、リースだからいつかやるだろうと思ったとか、今度の実験は何だ？とかたずねてきたので、能力ではなく実験と判断されたらしい。

それもそうだね。

海軍本部で悪魔の実を食べることは、「偶然」ではありえなそうだから納得したのだろう。

科学班の茶化しは結局オレにとっては、この上もない良いフォローにしかならなかった。

――うん、どうもありがとう。

ん？あれ、ありがとう…？…で、いいのか？

よくわからん。

+++++

モンキー・D・リース。

好きなものはルフィ、エース、じいちゃん、フーシャ村の人たち。
ひなた、布団。料理、いたずら、妥協、昼寝。

嫌いなものはじいちゃんの愛情。争い事、面倒ごと、おしつけ、体を動かすこと、銀色で平べったくて丸いもの。
地位は軍曹。

——はい、オレってば軍曹です。海兵です。

まいったねこりゃあ。

こないだの実験によりおつるさんの溜息が号令となり、オレはあえなく海軍に御用となった。

逃げる道は自分で閉ざしてしまい、あげく海軍本部の客人ではなく、所属になったしまった。

まあ、さすがにあの大爆発は、ただの試験管の電気分解とは思えない威力だったし、さすがにまずいだろうとは思っていた。

なにかあるだろうとは思っていてけど、危険視されて逆に海軍への正式な所属が決まってしまった。

とりあえず大将預かり。

オレの平穩は！？今後の幸せ老後人生は！？

涙を流して叫びたくとも、逆に涙を耐えて心の声も飲み込んだ。
首を絞めたのは自分だ。

諦める自分。…正確には、だらける人生をあきらめるつもりはないが。

それよりなぜに？

なぜ軍曹だ。

なんでそんな高い地位にいるのオレ？

だってご、じゃなくて6歳だよ。

そ、それにまだ戦えるほど大人じゃないし（中身は無視）…。

はじめは誰でも雑用か、三等兵から始まるものだろう！？

それがなぜ5段階も上な軍曹なのだ。

冷たい汗が全身から噴出しそうだ。

海兵になるのはこの際、諦めよう。

けどなんでそんな厄介な立場だ。

それを目の前に腕組んで静かに座っているおつるさんに言うと

「これでもたらないぐらいさ。お前のことを思っ
て妥協したんだよ」

「いや、どこが妥協ですか！？せめて雑用からはじめるのがこ
こは筋でしょう！」

まだ雑用なら、楽だ！！

戦わなくてすむのだから。

掃除や料理は好きだし！！

ほら、オレ弟二人も世話してきたしね！

それに目が見えないかわりに気配に敏感だから、“イニシャルGの
恐怖”とかでないよう隅々まで掃除しちゃうよ！！

なのにおつるさんからは「何を言ってるんだろうねこの子は」って
いう目で見られ、あげく首を横に振られた。

譲れないんだそうだ。

「リース、お前は能力者でもない六式も覚えてないただの子供が、
海軍の大將相手に平然と立ち向かう姿を見たらどう思う？」

なんじそりゃ？

「がんばれ〜って一応応援します」

いや、うん。他人事だし。

大将なんか相手にして平然としてるような奴、オレ知らないし。それにあれだ。

オレはいつも死に掛けてるし。

むしろ平然とって…この先待ってるのは地獄だと思うよその子。ご愁傷様。

あるいはその子供が異常な強さを持っているとかならまだしも、きつとその子はバカだよ。

うちのルフィのようなまっすぐでいい子に違いない。

オレは死に急いでいるわけではないので、そのバカ正直さを生温かい目で見守ってあげる。

手出しなんかしたら、オレが大将にロックオンされちゃうからね。

「はは。それにそんなむぼ…じゃなくて、勇気ある行為をするだけでその子は将来きつと上ってくると思います。

ほら、よく言うじゃないですか、勇気と無謀は紙一重って。

だからきつとその子はさぞ無謀かつ、勇気ある者とお見受けします。つで、その子供がどうしたんです？」

もしかして入ってくるの？海軍に？

なら、オレのお友達になつてくれないかな〜。

この世界に来てから同い年の子、本当に少なくて…。

精神年齢とかきにせず。

だって心と体は一緒って言うだろう？あれ、今ならわかるよ。

体が子供だからか、最近けっこう自分が子供っぽいなるところがあつて…。

いいがたいほどに年寄りのようなオーラを放って日向でのんびりと茶をすすっていることもままある。

本人は最近クザンとよくいるところを見る限り、後者の方が素であり、争いや強さを求めるよりそういうものが好きなのだろう。

クザンと二人で茶などしているときは、年寄りが二人いるように見えるほどだ。

飴やら饅頭やら菓子をやれば、周囲に花が飛び散った幻覚が見えるほど嬉しそうに喜ぶ様子は子供以外のなにものでもない。

だというのに、なんでクザンなんかを目指そうとするのか。

思い返してかすかに頭が痛くなつたつるはこめかみを押さえつつ、ふと自分を見つめている黒と銀の極上の色彩に気付く。

チラリとそちらへ視線を向ければ、こちらを見てくる左右異なる色合いの瞳に見つめられる。

何の感情もこつちには読ませないほどに深く澄み切ったそれは、本当に自分や他の景色を何も映していないのが信じられないくらいまつすぐに、黒い夜の闇と星の広がる銀河のようなそれに、すべての思考をよまれているうだと錯覚してしまいそうに多々おちいる。

つるはしばらくその瞳を見つめていたが、こちらが降参するよりも先に子供が自然な様子を装って視線をはずした。

それに一気に息をつく。

つるは緊張していた自分に若干驚きつつもまあいいかとも思った。

知られて悪い事は今、なにもないのだから。

あれほど見つめられていたにもかかわらず、そらされたらそれはそれでいいと、恐怖や怒りなど何も浮かんでこないのはいつものことだ。

嬉しいわけでもない。

けれど問題がないだろと思ってしまうのだ。

「なんでオレが軍曹なんだ？」と不思議そうに首をかしげている相手を前にはいつも浮かんでこない。

浮かぶのは、自分がいつのまにか本音を出して心のうちをすべて口

に出し始めているのに、大丈夫かこいつ？という考えだけである。そのよく変わる表情に、深く考えずに孫でも相手にしているような気分になってしまうのは、なにもつるばかりではない。

その不思議な感情を与える子供を「自分の孫」だから当然とガープなら言い切るが、彼の孫というよりはすべてが「リースだから」その言葉でうなずけてしまう何かガープにはある。

子供のようでそうじゃない。

けれどそれがほんとうかわからないのに、そのすべてをひっくるめて彼が『リース』なのだと思えるのだ。

ましてや彼自身それには、気付いていないのだろう。人をひきつけるそれに。

自分自身の強さに。

子供だからという理由は関係なく、周囲からは軍曹ではたらないと思っているのだが…。

それほどの実力をここにいたった一年ほどで見せ付けているというのに、なぜ気付かないのだろうか。

どうも目の前の相手は地位さえ嫌がっているらしいとつるは理解していたので、妥協で妥協してその地位まで下げたのだ。

それでも嫌なのか…

半分以上本気の大將相手に、よけるだけでなく攻撃を仕掛ける子供。

それだけではなく重症を負う怪我もせず、軽い打撲や擦り傷程度すむ頑丈さと素早さ。

それだけでも凄いというのに、相手をするとき慌てるでもなく常に冷静で、相手の先の先を読む動き。

本人に尋ねれば

「オレ目が悪いから」

その一言で落ち着いてしまうのだが、いったいガープはあの子供に

何を教えたのか、こつちが気になるほどだ。

事故で視力をなくしたから、目でみるよりも先に気配でわかるようにしろと訓練させられたと言っていたのをつるは思い出した。

「なにつて。目隠しをして、障害物競走して、飢えた海王類の巣窟に落とされて。風船で飛ばされて…そのくらいですかね？」

「なっ！？（こどもになんてことを）」

「いや、結局目隠しあっても少ししか見えてないような片目じゃどっちも同じでして」。

なんだかんだで今までの密林放置と変わらなかったんですね。

なのでいつも同じようにやるかわり、音とか気配といつも以上にさぐるだけでしたよ」

「（どんな愛情だ）」

そのときのリースの笑顔を見て、つるはガープにどんな育て方をしたと視線を遠く向けた。

他にもいるらしい彼らの孫のことを思いつるは、将来を不安に思った。

なんとなく背筋に寒気が走ったのは——未来を案じてか察してか…。

そんなときにリースはこちらをみて

「大丈夫ですよ」

わかってもらえないだろうに、自分だとして未来は見えるはずもないのに、こちらを気遣って笑う。

リースは聡い。

子供とは思えない何かがそういつときにはある。

また、その黒い髪を見たら、そこが戦場でもホッと安堵の息が出る。

「一緒におひるねしませんか？」

そう手をのばして左右変わり果ててしまった瞳を正面から見ることでできれば――。

笑ってくれば——そこに太陽が生まれる。

彼なら、なんとかできるんじゃないか。みんなそう思うんだそう。

その瞳に、その背に人は惹かれてやまないというのに……

(よからぬことじゃないといいんだけどね)

話の途中からキラキラと目を輝かせて、なにかうっとりとしている相手に、つるは…

たのしみだね

笑っていた。

[illegible]

おつるさんが笑っている。

飴をくれるわけでもないのにそんな顔をするなんて変だ！

その何かをたくらんだような顔！！

なんだ！？今度は一体何がオレを待っている！？

試練か？依頼か？

そ、そうだよな。

こんなガキが軍曹――。

オレ、子供だし。英雄ガープの孫だし、すごい嫉妬の嵐にあいそう
で…こわいなあ。

お仕事、なんだろう？

つてか、なんで軍曹になったんだろうオレ。結局聞けなかった。
というか、オレがわからなかったただけかもしれない。

「その子供は、皆の憧れなんだよリース」

「憧れが子供？」

じいちゃんにも勝てるほどで、無鉄砲、イノシシな子供…想像もつ
かない。

どんなマツチヨな子供だよそれ！？

小麦色したボディービルマツチヨで歯をキラ〜ンと輝かせている
どこかのアメリカン漫画のような筋肉のついた子供を想像してみる。
……………キモイな…。

目を丸くするオレに、おつるさんはこうも言った。

「っやぱりねえ、光っているのは上から下を照らすもんだから。
下すぎちゃだめなんだよ」

そう言つて、手招きされ、言われるがままに椅子のすぐ側まで行く
と、なんだか優しい顔をしたおつるさんが頭をくしゃっと撫でてく
れた。

じいちゃんとは違う優しい【だけ】の手に泣きそうになる。

何も強要してこないごつくない手が優しい。

あまりの優しさに……

ここが海軍本部（オレ専用死刑執行台）であることを忘れそうにな
った！？

「さっそくで悪いんだけどね。お前に頼みたい任務があるんだよ」

「そ、それで話つていうのは？」

まさか上に持ち上げて落とす作戦だったとは。

あ、もう…軍曹うんぬんは諦めたよ。

変わりにこれ以上出生しないようにだけ気をつけないとな。

名が売れると面倒しかこないのが目に見えてるから！

嫌味のように大きな溜息と一緒にボソリと愚痴を呟くと、おつるさ
んが驚いたような顔をして、すぐに苦笑を浮かべていた。

ハイ。そしてお仕事舞い込みました。

海兵になって、地位もらつて——さっそくですね。

いやゝっす。

泣きたい。

+++++

「えーっと…？」

「お茶、入れてくれる？」

「はあ」

突然だけどこは船の上。

だけど、目の前にはクザンさん。

相変わらずどこから出したのか寝椅子でくつろぎつつ、アイマスクを額にのせて横たわっている。

なぜに軍曹？なぜにお仕事依頼？なぜにクザンさん？

つまるところ、オレに危険性を見出した方々により、ストッパーとしてクザンさんがつき、オレは海軍おあづかりとして地位をもらってしまったわけだ。

そこでなんでクザンさんかというと。

いやね、おれはクザンさん大歓迎なんだけどね。そこまでは色々いあったんだよ。

なぜクザンさんかというと、サカズキさんは、子守はイヤだ。時間はないと去っていった。

じいちゃんは過激すぎる愛情が痛いから却下。

ボルサリーノさんだと、嫌がるオレと喜ぶボルサリーノさんで、

なにをしでかすかわからず、二人で暴走したあげくいろんなものを壊しそうだからダメだとか。

オレ、大人しくていい子だよ。ボルサリーノさんと一緒に穴あけたりしないよ（落とし穴以外）。……たぶん。

こんな愉快的な面子を相手にしている知将であるおつるさんは暇じゃない。

そんなわけでクザンさんが後継人のような立場で、おっかなびつくりいろんな人のところを転々としている。

もっぱら精神力を鍛えるために前線に出てもらうといわれ、世界中に散っている大佐とか●佐のもとをおつるさんの命令所で転々と移っているわけだけど…。

これもたぶんだけど。

オレはじいちゃんつながりだけど大将や中将連中と仲がいいから、それを肩書きに視察の役割を持つてるんじゃないかなと密かに思う。だって本部に帰るたびに、今回あったことをレポートとしてまとめようってクザンさんにのんびりした口調で言われるし。

彼曰く、じいちゃんやおつるさんとか孫可愛くしようがない連中が、オレが無事が気になってしょうがないそうだ。

嘘でもなんでも、嬉しいじゃないか、かまってもらえるなんて。

だからきつちり『報告書』としてその海軍基地の情報を事細かに書いておく。

ついでに最近密かに行った能力開発で、自分の一部の粒を飛ばすことに成功した。

ので、ちようど新技開発で成功した粒による偵察で、意外なトコマで見てるのでそこまで記入。

例えば、×××大佐が伍長のマツチヨ女子に告白してふられたとか。どこどこでギャサリンという女子が人気高いとか。

。の海で何百万ベリーという賞金首の海賊がいるらしいから、そこに行ったらオレ死ぬだろうから行かせないでくさいとか。

まあ、雑用か、おえらいさんの雑務手伝いか、基地の説明つきのの見学会か、みんなで茶飲みか。

たいがい女の子とか、上の人とお茶してるオレ。

なんか皆が本当にお菓子とかくれるので、太りそう。

こないだはふわふわな巨大ぬいぐるみをもらって舞い上がったり。

その日は、回りも嬉しかったのかお祭りの日だったのか騒がしかった。

オレも仲間に入れてもらって騒いでおいた。

そんなかなで、ほとんどの場合は何もなくていいよと言われるので、日々襲われるのを日常としていたオレは最近さらに一息つけるようになって喜んでいる。

でも今日はお仕事しないといけないみたいだ。

なにせ今日は、久しぶりにクザンさんがいる。

本部にオレが戻ってきたわけじゃなくて、自転車でオレがいる船までやってきた。

さすがに生で、海を自転車で移動する人を見たときは、そのまま銃で打ち落とそうかと真剣に考えてしまった。

なんか不気味で。

近づいたら夏は便利な人。

ヒエヒエの実の能力は、実物は本気で半端なかった。

能力使用中は側によると寒いし、常に変動する海凍るし…。

オレ？オレも能力者だけど、温度差には勝てません。

っで

「何しに来たんですかクザンさん？サボリですか？」

「いやだなあゝそんなわけないでしょ。これもお仕事お仕事」

寝椅子で横たわり、さらにいつ寝てもいいようにアイマスクを額に

装備して、片手に紅茶もって、さらに優雅に本を読んでいる人の何処が仕事なのだろうね。

まあ、いいけど。

この人の事は好きだし、サボリ方法も尊敬するけど…オレまで巻き込まれないのなら、どうでもいい。

オレは日々を穏やかに過ごしたいからな。

平穩は諦めきれないけど、平凡は少し諦めた今日この頃…。

「なるほど、ようはサボリですね。応援します！」

この後なにがあっても、最後にはきちんといつものおひるねポイントに骨は埋めてあげますから！まってるだろう少将の説教地獄を頑張って切り抜けてくださいね！！」

「なにっ！？少将って…それはやばいな」

「はい、やばいでしょうね」

実は彼の部下、もといあずかりになってから、本部にいる間ほとんどをクザンさんの補佐的なことをして過ごしていたら、彼の部下の人とも仲良くなった。

そんな彼らから連絡があつたのだ。

『リース君！あ、っと軍曹！クザンさんそこにいないかい！？』

「いいえ。それより少将、どうかしたんですか？」

『いないんだよクザンさんが！もしそっちに行ったら早く帰れって言ってくれないか！もう書類が山のように…どさどさど「うわぁ！どさどさ…ブチッ——」』

つと、まあ。電話の向こうで雪崩の起きる音と派手な音がしたので、クザンさんの今後は決まっているようなものだ。

骨は拾ってあげますよ。

その話をしたら顔を青くしてクザンさんは、お昼寝体制に入っ

まった。

睡眠に逃げたか。

まあ、自分は時期に目的地に着くので、船をおろさせてもらうけど、クザンさんが寝るのなら、船の人たちにはそのままっすぐ本部にコータンするように言っておこう。

それからオレ（だるゝん同盟仲間）には気を許しているクザンさんには悪いけど、気配を消してポーチに入れといた睡眠薬を嗅がせて本気で眠ってもらってから、縄で椅子ごと縛って上陸した。

追ってこられたら休暇にならないから！

船を見送ってからみまわした街は賑わっていて、なんだかみたことのある気がしたけど、それよりおいしい名産物があるといわれて喜んだ。

ここは東の海で、それもそれ程いられていない街だけど、そこに目的の人物がいるらしく、海軍の情報網は凄いなと思った。

だって今回は、おつるさんが「オレみたいな小さい子がいて、ゆっくりできるところにいけ」って。そうして紹介されたのは、海軍をやめたとある将校のおうちらしい。

海兵をやめて子育てにいそむ女性…というか、やめた後の足取りも知ってるところがおつるさんが怖いなと思うところ。

実は数日前までに、オレは一騒動あつて疲れていた。

理由は…じいちゃんがきてサカズキさんがとめにきて…あゝなんだか、もうね。

そこまで言えばもういいだろうと思う。

おかげで本部にあったオレの部屋なくなっちゃったんだよ。

弟が側にいれば癒されるんだけど、無理やりとはいえ海兵になつてしまったので、あの柔らかい癒しほっぺや悪ガキ達にはなかなか会えない。

ぬいぐるみさんは部屋にいたんだけど、今はもういない。

なぜかって、オレの部屋ごと彼らは昨日この世を去ったから。

疲労もピーク。クザンさんのもの書類も山積み。

そこでおつるさんに直訴したところ、育児退職した女性が静かに暮らしているらしいのでその人のところに行って三週間のんびりしてこいと言われた。

あわれみの表情と共に。

オレは泣いた。

それに舞い上がったオレは、【オレの分だけ】の仕事をすべておわらし、さつさと海軍本部を出て船に乘せてもらったわけだ。

空に飛んで生きたい気分ってやつさ。

喜び？悲しみ？どっちもさ。

気分はイヤッホー！ラリホー！と叫んで、可愛い子ヤギさんとブランコにでも乗って空島にでも飛んで生きたい気分だったわけだ。

「たしか、街からそれた場所…ってどこ？

あ、あのゲンさん。元海軍将校のベルメールさんおたくはどこでしょうか？」

村につくなり迷いました。

だって、いままでに知らなかったようなものが、知らない場所にあつて、あんまり見えていないオレは何か木らしきものにぶつかつたり迷つたり。

この村、歩道から少しずれるだけで、やたらと木が生えている。

オレが今精神不安定なものもあったし、“普通”の町中だしということで、今日はまったく警戒していなかったのがだめらしく、ぶつかるぶつかる…。

だから知らないはずだけど見たことある人を発見して、つい声をかけてしまったそれもご愛嬌。

カラカラと頭の帽子に風車をさした怖顔のおっさんをみつけ…つい

名前を呼んでしまったのだ。

だって原作で登場してたもんよこのひと！オレ、意外とこの人が好きで…。

って、それはバレちゃいけないじゃ！？

しまったあゝ！！ばれたか！？ばれたかも！！それより変人に思われたかも！？

ギロリとにらまれ、ひいゝ！と腰が抜けそうになる。

原作で登場した東の海、ココヤシ村のゲンゾウさん（結構若い）がいて、つい名前を呼んでしまったのだ。

そう、ここは弟の仲間になるはずのナミの故郷たるココヤシ村。育児退職したつていう将校は、かのベルメールさんだったのだ！ちなみにこここそが、オレの休暇だ！！理想郷だ！

原作？どうでもいいです。

それよりも休暇が大事！

休暇…ついにもぎとつてやりましたよ！がんばったのよオレ！なのでオレに癒しを！

オレの癒しはどこだゝ！お子様は？プニプニのちっちゃい子は何処？…おつきいぬいぐるみでもいいよ。もう溶かされちゃってないし。やわらかいものを抱きしめたい気分なんだ。あるだろ？そういうときって。

「あ、あの…ベルメールさんのおたくは……」

ひえゝ。ゲンさん怖いです！

まだ睨んでくるよ。

もしかして心の声が届いてしまったか！？あなたの大事なお子様達に危害は加えませんよ。

変態じゃないし。ただ、ただオレは癒しを求めて――。

だからご安心を…って、さっきよりまた目つきが悪くなった！

怖い怖い〜!!

「あの…」

「だけど……いま一番気になるものは、ゲンさんを一目見て変わったしまった。」

ベルメールさんの家ではなくなった。

ゲンさんの、頭の風車が凄く気になる。

カラカラカラカラ……いいなあ〜あれ。なんとなく。

さすがにひっこぬいっちゃだめですよネ?

「というか、ごめんおっさん。道よりも今はその頭が気になりすぎる!!」

「あいつに何のようだ?…お前はなんだ?」

「あ、自分はリースです。はじめまして。」

今日は知人のおばあちゃんの紹介でベルメールさんに会いに来たんです」

なんか『海軍』って名乗りたくないんだよね。

原作を知ってるからとか、ゲンさんが駐在さんだとか、警戒してるからとかじゃなくて…純粋にオレが、なにかに巻き込まれそうで。

ん?オレがトラブルを呼んでるのか?

わからん。

けどオレはせっかくの休暇を“普通の子供”として過ごしたかった。

「ベルメールさんに会いにきたんですけど。」

「ただ家がどうしてもみつからなくて。それで彼女の家はどこでしょう?」

「まかせろ!こうなったらこのゲンという砦を落として、いざオレ

の癒しに会いにいこう！

オレは子供。それを最大限利用しまして、お願いをしてみた。
オレは突如その場にしゃがみこむ。

そのまま感情に任せて、盛大に泣きつつ——土下座して

「お願いです！オレの休暇がかかってるんです！オレ早く休みたいんです！！

もう無理なんですあそこにいるの！！本気で無理なんです！！

オレの物はもうあそこには一個もないんです！！

早くベルメールさんに会ってかくまって貰わないと上司が自転車乗って戻ってきちゃうんですよお！！助けてください！！」

たのんます〜！

本心です。

マジで助けてほしい。

クザンさんはだらけ同盟の盟友だけど、一緒に仕事をするとなるとオレが休める瞬間が一切なくなることが判明。

かわりにクザンさんは忍者のようにフラリフラリと姿を消して——後始末はオレと彼の部下である少将さんに回ってくるという最近のオチ。

おかげでおつるさん提案の基地廻りでなんとかオレ息抜きしてたわけだけど、今は昨日の人為的な事故のせいでオレの部屋が溶けてなくなっちゃったんで逃亡中。

こうなると帰る場所は、フーシャ村（遠くて無理）かクザンさんの部屋かじいちゃんの部屋しかないわけ……。

それは部屋が焼失するより、はるかに自分の命の危機なような気がするわけ。

可愛い子供のしぐさ——土下座攻撃——はこうをそうしたようで、

オレはついてこいといったゲンさんに手をひっぱられて、無事にベルメールさんのお宅の前に到着した。
うかれて周りを見ていなかったオレは目的地につく前に、何度か樹に激突した。

「ありがとうございます！」

ゲンさんにお礼を言う。

その去り際、彼は「フン！」と言いつつも頭をなでてくれて——オレは感動した！

つぶされなかった！！

おじいさん系列の人間に頭をなでられて、はじめてつぶされなかった！

あまりの感動に、尊敬とああいう素敵な人になりたいと目を輝かせて見送ったのはまた別の話。

——目の前にはかの原作キャラ様総集合の家へ続く扉。
さあ、潔くドアをノック。

コンコンコン。

カチャッと軽い音がして開かれた扉の先には、やっぱりたばこを吸ってる素敵な女性。

ペコリとお辞儀をすると、不思議そうな顔をした後、思い出したようにポンと手をたたいてニカツと笑った。

「お。あら、それじゃあアンタがあれかい？」

休暇を求めてさすらっているっていう、食費がかからない軍曹？」

「ぎゃーーーーー!!!!いろいろ…おつるさんにはれてる!?!」

それがオレと彼女の出会いでした。

+++++

じいゝ……

「そんなにみるんじゃないよ。照れるだろ」

いや、だって。

「こげてます!!」

ジューっという音を立てて、いままさに魚だったものが、炭になっていきました。

あちゃっつと笑う相手に、オレとノジコが悲鳴を上げる。

「ノジコ…君のお母さんはいつもあんなですか?」

「た、たまに?」

ノジコはオレから視線をそらした。

ナミはあまり状況をわかっていないらしく無邪気に笑っている。

ノジコはオレと同じく現在6歳。しっかり味とわかるようです。ナミはルフィと同じくらいで、ちょうど3歳だそうだ。

本当におつるさんの人選は最高だ。

オレ、生まれてはじめて同い年の友達ができた。

ベルメールさんには、オレの給料からオレの世話代としてきちんと支払ってますよ。

もちろんオレが計算して、オレのお金で。おつるさん以外の人様には金なんて大切なもの預けられない。

なにせこないだの部屋焼失——消失じゃないよ——事件があるのでことさら余計に。

まあ、オレがいること〃バイトにきているようなもので、払うのは当たり前だ。

だけどそのお金で買った。いや、これは置いておいて、まるで彼女の間をつくように、目少し話ただけで美味しそうなお魚やらを黒焦げにされては、さすがに泣けてくる。

焦げたものをみて、オレはついに立ち上がった。

「オレも弟の面倒を見てきたので、この子たちにはしっかり大きくなってもらいたいのわかります。

ですがこのままの状況はオレには耐えられません!!

ベルメールさん!一緒に料理の勉強をしましょう!!」

そうしてオレと彼女の料理教室が開かれ、ノジコがホッと息をついていたのを聞いてしまった。

「いいですかベルメールさん。せっかくおいしいみかん畑があるんです。」

このみかんを使わない手はないですよ」

「え？みかんを？だってそれ、売り物よ」

「戦闘技術よりも料理の腕を磨きましょうよ！！」

缶詰とか缶詰とか…軍人飯なんか却下だー！！

まずはジャム。

これではできるらしい。

では、次っ！

次はソースの作り方。砂糖を使わずに甘いものが手に入るのだからこれをソースに変えて、おいしい料理を作る。

魚と合うようにつくるのがベスト！

そして最後はみかんの皮をゆずの変わりに使ったスープだ！

将来用に、残ったミカン进行ピクルスにして、パンにでもまぜるなり、ヨーグルトに混ぜるなりしていただく。

オレンジとはまた違うけど、あと乾物もいいかもしれない。

ミカンでもジューズ以外にできることはあるはずだ！！

っと、まあ、そうやってベルメールさんに料理を教えながら、お子様達と外を駆け回り。

畑の手伝いをして、町でいたずらをしかけてゲンさんをはめたり…。

「いいですかナミ。本に載っていることはわかっててもそれ以外はわからない。」

なら見えないものを知りたいときは肌で感じるのが一番ですよ！」

「りーすすごい！」

「ナミわかりますか？もうじきイイ感じで雨がきますよぉ」

「ういーす！」

「では問題です雨はどこからくるでしょうか」

「南！なんか向こうから湿った風が来るから！」

「正解です！いやあ。ナミは物覚えがいいですね」

「いやいや、あんた達本当に人間？」

オレは初日にうかれすぎたせいで木に何度も激突したのを教訓に、常に周りに気を使うことを覚えた。

なのでナミたちの前では、ぶつかりもせず普通に歩いたりしている。片目が見えない。見える方はほとんど視力がない。そんなオレにナミが興味をもつたらしくある日「リースは目が見えないのどうしてそんなに平気なの？」とたずねてきた。

そんなもののあのじいちゃんの愛情をうければ誰でも強くなれる——という理屈は、たぶん可愛い女の子には無理な注文なので、当たり前障りのないことを言っておいた。

「わからないなら感じればいいんです！」

力説したオレに、ナミが手をたたいてまで喜んで、しまいには弟子入り志願してきた。

アッハハ。かわいいなもう。

そんなわけでオレはナミと一緒に地面に穴を掘ったりゲンさんをそこに落としたり、縄を使った罾でゲンさんや村の子供を吊り上げたり、水撒きの時間と空を確認したりして天気のあるてこをしたり、ベルメールさんに楽をしてもらおうと畑に竹を利用した自動水撒き装置を作ったり、いろんなことをして楽しく遊んだ。

途中でノジコにつつまれつつもこの日々は、間違いなく楽しくオレはお子様 ライフ 人生を堪能していた。

ちなみに将来アーロンパークができる場所では、火薬の使い方を二人に教えた。

未来の姿に腹が立ったので、何もないけどそこを爆破しておきたかったんだ。

もちろん「やりすぎだ!!」とベルメールさんに殴られた。

いたかった。でもじいちゃんとは違って、そこには優しさか
そういうものを感じる痛さ。

うーん。お母さんってあんな感じなのかな。

前世の親の記憶はあるけど、現代日本人だったオレはあんまり親と
話さなかったし、なにより今の家族であるじいちゃんとの暮らしが
濃すぎて……どどん記憶が薄れて行くので仕方ない。

エースはすぐにおかあさん死んじゃったし、オレやルフイはいろい
ろとね。

得にオレは5歳のときから家族と離れてるし。

いいなあーお母さん。

「この休暇が終わった後もまた会いに来てもいいですか？」

「あんた、本当に子供らしくないわね。いいわよ！いつでもきなさ
い！」

タバコをすいながらもニカツと笑ってぐしゃぐしゃになるまで頭を
なでてくれる。

その優しい手にはじめからゆがんてる視界がさらにゆがんで、「う
わーん！おかあさん!!」と抱きついてしまった。

「あつはっは！わたしがアンタのお母さんかい？そりゃ、あんたの
母親に申し訳ないねえ」

そんなことをいいつも優しく抱きしめ返してくれるので、つい甘え
たくなる。

とちゅうでナミとノジコに無理やり引き剥がされ「だめ！ベルメー
ルさんは私たちのお母さんなんだから!!」といわれて、鼻水ぬぐ
ってそうでしたとうなずいて離れた。

「とつたりしませんよ。オレにはたくさん愛情をくれる人がいますからね」

ベルメールさんにヒシッ！と抱きつく小さな子供達の姿に、みているこつちが嬉しくなってしまうたのは、やっぱりどこかで精神が大
人だからかもしれない。

「そついえばアンタ親は？」

「え…」

愛おしそつに二人を抱くベルメールさんに、オレの動きが止まる。

ど、どういえと？

親父については、知らないわけじゃないけど…
だつてねえ。

面倒をみてくれている祖父は「あのガープなんです」なんて笑顔
でいえない。むしろオレに対する態度が、その一言でたいがいのみ
んなは一氣に変化するので言いたくない。

ましてやおつるさんに頼んで、目の前の彼女にはオレの素性は言わ
ないように口封じしていてガープの孫だと知らないのだから。

まあ祖父のこととはともかく、軍を辞めたとはいえ元海軍（それも将
校）の方に、親父のことなんて…もつと言えない。

「え、えーつと。ひ、秘密」

あたまをかきつつ、無邪気に見えるよう笑いながら、視線をぐい
い！とそらす。

冷や汗がドバーってでました。

だつて、だつて…。

お袋のことはもとからなんとも言えない。

親父は革命家のドラゴン。

祖父は英雄のガープ。

育ての親は…山賊のダダン。

義理の弟は、あの海賊王の血族で、しかも未来の白ヒゲ2番隊。
実の弟は未来の大海賊ルーキー。

……どいつも口にして言えねー！！！！！！

「相当の事情がありそうだね」

「き、きかないでください。普通でまっとうで、碌な人間なんていないんです！！」

改めて、本気で泣きたくなった。

いや、むしろ泣いていたかもしれない。

そうしたらしょうがないなあという表情をしつつも優しい顔でベルメールさんが、腕を広げた。

「泣くな泣くな。もう、聞かないから。アンタもこっちにおいで」

ノジコとナミと一緒にその大きくて優しい腕にだかれた。

二人はオレが泣いてるのに驚きつつも二人そろってヨシヨシとオレの頭をなでてくれて、幼い子に気を使わせてしまった！！

結局、二人とも三人一緒に抱きしめられる分には問題ないらしく怒らずに仲間にいれてくれた。

オレはやっぱりただの6歳の子供らしい。

いやいや、決して家族の愛情表現が濃すぎて、“普通”にあこがれてあまりの違いに感動して泣いているわけじゃないよ！！

っで、また別のある日のこと。

「リースの髪はきれいな。あたしたちとはちがって黒いしつやつやしてる」

「つやつやなのはノジコもナミもオレ以上だと思いますよ」

オレは手入れしてないからね。

風呂上りにぼろっとしていたら、突然ノジコに怒こられた。

そこにいたのは知っていたけど、まさか怒られるとは思ってもなくてその大きな声にビクリしていると、「何ぼけつとしてんの？そのままでしたら風引くわよ！もうしょうがないんだから」とタオルをもったノジコが濡れたまんまのオレの髪をわしわしと拭いてくれた。

んゝ気持ちいいな。

いままでは短かったから自然乾燥でよかったんだけど、伸ばすとそうも行かないらしい。

あとでベルメールさんに笑われ、ナミとノジコにより髪の大切さやら何やらしつかり説教された。

こんなやり取りがあつてからは、オレはノジコやナミに昼夜問わずよく髪をいじられる。

どうもサラサラで触っていて楽しいんだそうだ。

「ねえ、どうしてリースは髪を伸ばしているの？」

ある日、無邪気に尋ねてきたナミの言葉に固まる。

ベルメールさんまで固まったところをみるに、オレの傷から予測が

ついているのだろう。

「そ、それは……」

「せつかなのに顔が隠れてもつたいたない。かわいいし、きれいなのに」

…それは顔か？それとも髪か？

どっちだ！？

むしろどっちもイヤだ！

いやね、きれいとか関係なくて。

むしろ男のオレに、まだ6歳だけど——かわいいはないでしょ。キレイも嬉しくないよ。

落ち込むよ。

それでなくても一度、海軍本部の側の島に行ったとき、小さな子供に怖いって顔見られただけで泣かれたという痛い思い出があるのに。故郷に戻れば、エースは怪我みて泣くし。

幼いルフイには別人だと思われておびえられたし。

「子供が泣くんですよ。人の顔を見て。

だから髪の毛でいろいろ隠すようになったんですよ」

わけをはなすと、ベルメールさんを含めた二人が、「うちのこになんてこというんだ！」「ヒドイ！こらしめてやる！」となぜかこぶしを握っていたのが謎だ。

いやお嬢さん方や、オレ傷跡とか微塵もきにしてないんだけど。

怖がられたのはちょっとショックだったけどさ。

「…だめよ！せつかなんだからできる限りめだたなくさせないと

！
「」

せつかくってなにさと思った。

傷を残すな！化粧で消すんだ！！とかいろいろ言われたけど…めんどい。

そもそもそれをやる理由はなんだろう？

嫁がこないとか？でもオレまだ六歳だしなあ。もうじき七歳にはなるけどそれでも結婚には程遠いし問題なくね？

オレは思っていることをそのまま告げたら、ノジコとベルメールさんにあきれたような溜息をつかれた。

本当に意味がわからない。

「「わかってないのはお前だ！！」」

叫ばれても。

わからないものはわからない。しかたないので、意味がわかっていなそうにただニコニコとしているナミを抱き寄せて、お互い顔を見合わせて首をかしげた。

オレ達お子様ズの日常は忙しい。

家の手伝いから、隣の村のお子様と抗争したり、あそんだり、勉強したり。

なんて愛しいのだろうと思う。

この穏やかな時間こそ生まれてはじめて感じる平穩そのものだった。おかげでオレはすっかり子供らしく——なるわけもないが、すさんだ心が少しは和らいだのは言うまでもない。

この静かな生活が大切で、側にいるひとたちが優しくてうれしくてしょうがない。

そうして本当の家族のように過ごしているうちに…

ふと、思うようになった。

この島の未来を――

オレはまだ、覚えている。

ONE PIECE という漫画のシーンが、自分の脳裏によぎる。

・・・ナミが泣いている。

順調に世界の時間が進めば、今から七年後にはこの島にアーロンは確実に来るだろう。

あと七年したら、ここからは笑顔が消えてしまう。

オレがいることで少なからず未来は変わるだろう。

でもここへアーロンがくるのは確実だ。

だってアーロンを止めようとするものは、その時代にはいないのだから。

未来（原作）のことを話せば対策もあるかもしれない。

でも、オレにはそれがいいことなのかわからない。

一番いいのはアーロンをオレが倒してしまえばいい。それが一番無理だ！！

オレは悩んで、バカな回答を導き出してそれに自分で突っ込んで、さらに悩んだ。

でも、そんなオレに気付いた人が、オレに『言葉』をくれた。
それはオレに与えられた選択肢だった。

だからオレは逆にすっきりしてしまつて。
結論としては、とにかく三週間楽しんだ。

物凄く有意義に子供らしく過ごさせてもらっているうちに、あっ
というまに三週間は過ぎてしまった。
なんてこつた。

オレの休暇が終わりかけてる！？
しかも物凄く側にクザンさんの気配を感じる気が…！？

「む、迎えが近くにきてる！？」

とつさに逃げなきゃと思ったオレはすでに“普通”という幸せを感じ
受しすぎていた。

「いつちやうのリース？」

「そういや。今日だったわね」

「ええー！！いつちややだー！！」

オレも離れたくない！

でも、あの強烈な気配が海の方からやってくるのはわかるので、逃
げようがない！

無効から乗ってくる風は微かに冷機を含んでるし、間違いなく近い！

さらには船影もないのに鼻歌が微かに聞こえることから、どうやらあの人は自転車できているようだ。

なんかなあ。

なんでか、ベルメールさんにあの人をみられたくない。

あれが上司だってばれたくない。

粒になって逃げようか！？

却下！！

だめだ自分。落ち着け！ひとまず落ち着かなければ！！

「べ、ベルメールさん！迎えが来ているようなのでオレいきますね！あの約束、よろしくお願いします！」

「こつちこそ頼むよ」

「まかせてください」

子供達には再会の約束をして、ノジコには拳で握手。

ベルメールさんにはいたずらの共犯的な、意味深な笑顔で。

未来を変えるための約束をこぎつけた——それに笑う。

オレは三人にお別れを言い、急いで荷物を抱えるとダッシュで、あの人村人に目撃される前に港へと向かった。

チャリンチャリン。

「よー！」

海岸にはやっぱり自転車いたー！！

しかも嬉しそうにこっちに手を振ってきている。

「わるいけど、うしろで」

オレはついキョロキョロと周囲を確認してしまい、近くに村人がいないこと、この人がみられていないことにほっとする。

だって海軍トップクラスの人だし。

それに、なにより能力者って目立つし！！

普通な子供だと思っていていたこの島の人には、いろいろ誤解されたくなかった！

安堵したオレは、そうしてゆらゆら揺れる海の上をクザンさんの自転車の後ろに乗せてもらって、近くの船まで向かったのだった。

次はなんのお仕事がまっているのやら。

小さな島で“普通”という幸せをもらったオレは、恩返しに少しにベルメールさんとあるたくらみを練り、手を組んだ。

どうやらオレは未来を少し変える…らしい？

+

オレが未来のことを考えているとき――

オレが悩んでるって、それに気付いていた人がいたんだ。

それはまさに天啓のように……

オレは――

A vertical sequence of symbols from the Rika chart, including hiragana, katakana, and various punctuation marks.

<Side
ベルメール>

子供を二人育てることにしてから、気がつけば三年がたっていた。であった当初赤ん坊だったナミは三歳になった。ナミと二歳離れたノジコは、最近誕生日を迎えたため六歳になっていた。

私はというと、海軍を辞めて…相変わらず黒いご飯を作っている。うーん。家計もやばいけど私の料理の腕もやばい。そんなとき、とんでもない人から電話があった。

『少しねえ、哀れな軍曹をそっちでかくまってやってほしいのさ。頼まれてくれないかい？』

元自分の上司のさらに上司からだった。会ったことはないはずだ。

海軍をやめた私だったが、相手は大将。それを断れるはずもなかった。

けれどもうちの家計は年中火の車状態。それでは余分に一人分さえ養いきれない。

そういうと、女大将は大丈夫だと少し矢枯れた声で静かに笑った。

『金ならアイツが自らだすそうだよ。』

それに食の細い子だし、頭の回転も速い。迷惑はけかないだろうさ』

そこで給金の話になり、やってくる軍曹とやらと一日過ごすだけで5万ベリー。

ついでにそいつの食費は別料金。

これは家計の助けになる。

交渉は即決まった。

軍曹というからには、どのような奴が来るのだろうか。

話によるととにかくいい奴だけど、いたずらが好きらしい。

特徴は黒髪。顔まで広がるでかい傷があって、そのときの事故のせいで片目の視力を失ったというからには、そうとう目立つ容姿ではある。

その少ない情報から判断するに、私の頭の中でその軍曹は“男”と決定された。

マッチョムキムキ？いたずらが好き？それはヤバイおっさんということか？

……ナミとノジコが危ない！

まあ、将校であつた私の方が位も高いからなんとかできるかも。

力技で従わせるのが一番ね。

海軍にも女はいたけど、やはり男性陣より数が少ないから、うちに来るといふ軍曹もきつと男だろう。

大将はなにを考えて、ステキな未亡人たる私に男を養えというのだろう？

「まあ、いつか。きたら殴り飛ばすだけよ」

お金も入るし。

いざとなったら、ゲンさんの家におしつけよう。

そう思つて、やってくるはずの軍曹を待っていた。

「ノジコ、ナミ！今日は家に客が来るからね」

「わかつたあ！ゲンさんでしょ？」

「ちつつち。甘い甘い。私の昔の職場の…後輩よ（たぶん）。ちなみに変なことされそうになったり、近づいてきたら私に言いなさい！

私がいちちゃんとブチのめしてやるわ！外では変態が襲ってきたって言えば助けてくれるからね」

しこみはバツチシ。

元気よく返事する二人に満足し、私はその軍曹とやらを待っていた。

——コンコンコン。

きた！

一人だつたら、即銃でもつきつけてやろうかと思ってたけど、外の気配からどうやらゲンさんに付き添ってきてもらっていたらしい。ゲンさんがここまで案内するくらいだから、銃まではいらなかったかもしれない。

「はいはい。今行くから待って」

ナミたちにはおとなしく待つように言うと、なんだかワクワクした表情をされて頷かれた。

うん、いいわねその顔。

私、信頼されてるわ。しっかりこたえるからね！

ガチャリと扉を開けると…

なにもいなかった。

おかしいなと首を傾げていると、予想よりかなり低いところから声がかかった。

「はじめまして。リースといいます」

うちの子よりも少し低い位置。

いたのは期待に目を輝かせている子供。

小柄なその子は、子供らしくない丁寧な口調で、丁寧なおじぎをしてきた。

目元が少し晴れていることから、少し前に泣いたのだと気付く。私の家は村から少し離れているからわかりづらい。

迷ったのだろうか？

それならゲンさんがいたのも頷ける。

この子がこれから一緒に住むという軍曹なのだろうか？

少し幼すぎやしないかと思っていたが、すぐに彼の特徴が大将から聞いていたものと同じであることに気付いた。

「それじゃあアンタがあれかい？

休暇を求めてさすらっているっていう、食費がかからない軍曹？」

そこにいたのはノジコと同じくらいの男の子だった。

ナミよりも少し長くて肩にかかっている黒髪はサラサラで、顔を隠すように少し前髪がなく、やばったい前髪とは対照的にいかしたデザインセンスのいい眼鏡をかけている。

よくよく見ると、頬から首、衣服の中にまで続いているだろう火傷の跡のような傷跡が見える。

袖では隠しきれない手の甲や平にもそれはあるようで、こんな子供が…と胸が痛くなる。

喉元を覆うようなのもこの気温の中で長袖を着ているのもこれなら頷ける。

「ぎゃーーーーー！！！！いろいろ…おつるさんにばれてる!？」

私の言葉に悲鳴を上げてもだえる姿は、やはり年齢相応の子供らしく、ついおかしくなって笑ってしまった。

「ノジコー！ナミー！！ちょっときなさい！」

面白いものが家に来た。
今日から楽しくなりそうだ。

子供たちはよく遊び、リースが来てからはなぜか高度な遊びを覚え始めた。

子供達のいたずらもやたらと高度になっている。
ついでにノジコにツツコミの素質があることが判明した。
これが女大将の言ういたずらかと…頭が痛くなった。

爆薬はどこで調査したのやら、ある日、村はずれで派手な花火が上がったときはさすがに度肝をぬかれた。

元凶であるリースに拳骨をくらわしたら、凄く嬉しそうにしていた。
どうも家族の愛情をあまりうけていなかったようで、それからもとあるごとに「なんて幸せなんだろう」と「平穏ってサイコー」とよく呟いていた。

でも、リースは時々、不思議な表情を見せる。
幸せを感じるだけじゃない…そんな表情。
私がいるときは、酷く懐かしそうに。

子供達だけのときには、まるで孫でも見るかのようにノジコとナミを優しさで慈愛にあふれた穏やかな瞳で。
たくさん遊んだあとなどによくみられるものでは、ふいに、酷く辛そうな大人びた表情を見せるときがある。

それを目撃するたび、声をかけようと思うけど、伸ばした手も声も結局は戻して終わってしまう。

リースもその表情を隠したいのか、いつも一瞬だけしかみせないから余計だ。

気になるから言いなさい！そう叱れないのは、相手が他人の子供だからという意味ではなく、たぶん“リースだから”だ。
リースにはそんな雰囲気がある。

大将から預かった軍曹は――変わった子供だった。

子供達二人をいつもの部屋に寝かしつけたあと、ふとここ数日ですっかり見慣れた黒い姿が見えないのに気付いた。

家の中を探してみてもすっかり我が子同然に馴染んだ気配はどこにもなく、もうひとりたらないなと黒い髪の子供を捜していると、みかん畑の見える場所で夜空を見上げていた。

子供達に人気の黒い髪も、片方しかない黒い瞳も、傷を隠すのと考えるのが面倒という理由だけできている黒い服もすべてが夜空に解けてしまいそうだった。

そのまんま消えてしまうんじゃないかとおもったが、「どうかしましたかベルメールさん」そう、名を呼ばれたら。あの子はここにいるんだって、ここがあの子のいる場所なんだって思えた。

「オレはどこにも行きませんよ」

隣に腰を下ろすと、こちらを気遣うようにやわらかく微笑まれ、目の前にいるのが6歳の子供だというのを疑いたくなった。

もしかすると自分よりも年を経たような目が、ひどく穏やかで、ただそこに含まれる絶望にも近い深い悲しみを感じて――ここにきてよかったと思った。

私はこの子の言葉を聴くためにここにいるんだろう。

だからフツと私からは笑みがこぼれた。

リースは私の反応に驚いたような顔をしている。

ああ、やっぱり聞かないと。ここでこのこからききださないと…聞かないでいるままよりきつと後悔する。

さあ、話せ。

「ベルメール…さん？」

「あんたさ…実は私にいいたいことあるだろ？」

「……さあ」

返ってきたのは、予想外にも穏やかな返答。

どうしようかと悩んでいるものの、それでも言う気はない…そんな雰囲気だった。

でも。

そこで諦めるような私じゃないわよ。

「あんだけ毎日のように見られてたら気付くわよ」

ニヤリと笑ってやったわ。ついでにこれ以上黙っているようなら…私の拳を上げるわよと、片腕を持ち上げたら、物凄く慌てたようにバタバタと首を横に振っていいわけじみたことを言ってくる。

「いえいえ！あなたを見ていたのは、料理が隙を突いてこげがされないためと、母親ってこんな感じなんだなっあって懐かしく思っていたからです！！決して悪気は！！」

そ、それは…すべて否定できない事実だけど。

それだけじゃないだろ？

だけどそれは私が言っではいけない気がした。
見てるだけしかできない。

ため息も微笑みももうでない。

ただ次の言葉を、真実を述べてくれるのを待つて、私は黙ったまま
左右違う瞳をみつめた。

視力をなくして色が失せた瞳は、白というよりは銀色の星を散ら
した夜空のようで。

漆黒の闇を塗り固めたような黒い瞳は、ガラスの向こうで目の前の
ものとは違う情景でも見ているかのよう。

銀と黒のオッドアイが不安げに揺らいだ後、小さくため息をついて
リースは口を開いた。

「…時が来たら、わかれる運命であつたとしても。なくしたくない
ものはありますか？

例えば命を賭けてでも守りたいもの…。

その後、抗えない苦痛が待っていたとしても」

小さいながら可愛いといえる顔が大人び、柔らかな唇から零れ落
ちるのは、まるでなにかの詩を朗読するかのような子供らしくない
質問。

何を意味するのかさえまったくわからないそれに、一瞬戸惑う。

リースの表情は真剣でそれがただの詩ではなく、何かを暗示してい
ると気付く。

その大人びた表情一つ一つに飲み込まれそうになる。

二つの夜空のような二色のこの目が望むのはなんだろうか？

彼が望んでいる言葉を捜してそれを言いたくなる。

けど、それより何より、この目には嘘をついていけないと…なぜか
そう思った。

自分の心のままに。

——私は頷いた。

「あるよ。ナミとノジコと笑って生きたい。

あいつらとついでにあんたも……みんな私の子だ。そういつらには笑っていてほしいからね」

ニツとわらってやると、『あんたも』という言葉には反応しなかったが、「守りたいものがあるのなら」そう言ってリースは私に手を差し伸べてきた。

「わかりました。なら、オレは変える覚悟をしましょう。オレもともに背負います、あなたの作る道を」

そのとき私はまだ知らなかった。

その言葉の意味も、この先に待ち受けるものがなんなのかも——

その日はリースと一緒に朝日が昇るまで二人で星を眺めていた。リースは星を見ながら、ポツリポツリといろんな話をしてくれた。あの子から語られるすべてはまるでなにかの物語のようで。

リースがみているのは、決まった終わりのあった小説のような一つの物語だったのだらうと思う。

「守りたいという想いは、オレにもよくわかります。」

「やんちゃでひねくれた弟が二人もいるので」

「リースも？」

「ええ、親代わりになってそだててきましたよ」

「一緒ね」

「つていうか、あなた6歳でしょ？」

「どんだけ苦労してるのよ…」

「さて、ベルメールさん。その守りたいものを手放さなければいけなくなつた、あるいは危機に陥つたとき、助けられる方法が一つあつたとしましょう」

突然リースの雰囲気さがらりと変わった。

先程まで愛しいものを思い出す優しいそれではなく、すべてを知っている高い位置から最後の審判を下すようなまっすぐでいて強い瞳。

「失われるはずだつたもの。失われるのが正確な未来だつたとしましょう。」

失うものがなんなのかわからなくとも、それでも守る道を選びますか？」

「なんだいそりゃあ？」

「…とある本の話ですよ」

「なくなるのがサダメ。それでも守りたい…か。私は…」

「そうだ…ひとつ言い忘れていました。」

その失うという未来を変える手立てがひとつだけあるかもしれないかつたのを忘れていました。

それはたつたひとつの存在です。

たつたひとつの存在がそこに“いる”というだけで、あるべき未来を変えることができる…かもしれない」

「かもつて…なによそれ」

「…さっきの『失う未来』の話がひとつの本の中の話だったとしたらということですよ。」

そしてその本の中に一人の人間が加わることで、『失う未来』を変えられるとしたら？」

「よくわかんないわね。本の登場人物に別の存在がいるの？」

「いいえ、それは無理です。」

本自体はその中で未来も過去もすべて一冊の中に完結しています。すでにその本は、しっかりとした本として出版されていますから、他人には変えようがありませんしね。

ですがその本の中に突然別世界の一人の人間が入り込んでしまったら？そうすると本の中にはないイレギュラーな存在が誕生したことで、そのシナリオはどんどん変わっていきます。たったひとつの波紋で…」

話はだんだんややこしいほうへと進んで行く。

どうやら神の審判者は、いつのまにか本の作者になつたらしい。

実のところ私にはよく理解はできなかった。

それは私の頭が悪いのか…。

いや、たぶん違う。

私にはわからないように言葉を濁し、ぼかし、わからせないようにリースがしているからだろう。

「生まれた波紋は…消すべきなのでしょうか？」

「そうさね。私あんまり難しいこと考えるの好きじゃないけど、それってさ。結局はそういうもんなんじゃないの？」

タバコを思いっきり吸い込んで吐き出す。

チラリとリリースをみると、不思議そうにキョトンとしている。

「そついう、もの…?」

子供とは思えないほど頭がいいリリースでもわからないのか。それがおかしくなって、つい笑いつつおデコを指で押す。

「かたいぞお。もっと簡単に考えなリリース」

その方が世界は楽しいだろうから。

あんたは難しく考えすぎなんだよ。

「だって未来つてのはさ。自分で作るものであつて、このときこうするかあるか?どちらか悩むときはあるだろ?でもそのとき別の選択肢を選んだ自分がどこかにいるかもしれない。なら、それはそれだ。」

でも私は、私できちんと選択した。

つまりさ、選択によっていくらでも未来は変わるんだよ。さつきリースが言っていた波紋とかイレギュラーとかさ、また別の現在なんだよ。」

違う奴がいるんだからその未来は、本の未来とは異なる。それだけのことさ」

「……それが悪いことではないかと…聞いているのですが?」

「だからさ。その、なんだ。」

元の本はあくまで元の本なんだよ。

でもイレギュラーな奴が入った本は、元の本とはまったく別の本で、だからイレギュラーがそこで暴れても何も問題ない…ってかわり、私もなに言つてんだかわかんなくなってきた」

頭を使うのは苦手だ。

自分で言っていてだんだんわけがわからなくなってきた、結局そこで放り投げた。

珍しくない頭を遣ったから頭が痛くなってきた。
それをごまかすようにあたまをかいて笑いながらわびる。

「！」

横に座っている子供へと視線を向ければ…

そこには一人照れたようににはにかんで小さく笑うリースの姿があった。

いままでにないスッキリした顔に、なんだかたくましく差が見えた気がして声がでなかった。

一瞬いつもと違う顔に見ほれてしまう。

「そうですね。オレは『ここで生きている』。それが現実」

オレはオレらしく生きてやると決めたばかりだったのに…たくさん
のことがありすぎて、日々がめまぐるしく、忘れていたようです。

オレが戻ってきた理由を――

その言葉の意味は、やっぱりわからなかった。

リースはリースで自己完結してしまっているし、さっぱりだ。

それでも我が子の成長振りを目の当たりにしているようで嬉しくな
って、いつもよりキラキラしているリースを抱きしめた。

「ちょ、ちよつとベルメールさん!？」

「んゝ!てれるなてるな!リース、もっと大きくなれよ!」

ギョウギョウ加減で名ほどきつく抱きしめ、わしわしとその頭をなでてやった。

それから二人で草むらの上をゴロゴロ転がっていると、ふとリースが思い出したように起き上がった。

「ベルメールさん。オレと契約をしませんか？」

「は？」

意味がわからず呆然としてみると、リースはニヤリと笑みを浮かべた。

「オレは万能ではないので、色々と間に合わないこともあるかもしれません。

この手は小さすぎて、届かないものの方が多い。
それでも……」

自分自身には嘘はつきたくない。

「だから関わってしまったからには、守らせてください」
「いや、あの…それと契約ってどう関係があるのよ？」

私の言葉を待っていたようにリースは笑みを深める。

そのあと聞いた言葉に、私はおかしくなってお腹を抱えて笑った。

「あっはっはっは！！リース。あんた、本当に6歳児？」

しかりと頷く相手は、最高の相手だった。

——みかんをオレ、いや、海軍に売ってください。

言われた条件は向こうに不利にしかならないものばかりで、なにこっちは儲かるという信じられない好条件。

「・・・こっちは儲かるからいいけどね。あんたに利益がまったくないじゃない？」

「いいんですよ。うちには山のように食料をあさるやつしかいません」

不思議な気がした。

リースがもちかけた案は、私にしか得がないような話だった。私の方は、不作でも豊作でもお金が入る。

だけど買い手のリースは出費しか出なくて、彼にとって私と売買契約を結ぶことは利益は何処にあるのかわからない。

どう考えてもリースが不利にしかない内容。

なのにリースは譲る気はないようで、きっと何かを考えている。

でも私にはそこまでこの子が考えている“何か”がなんであるかわからない。

「もしみかんが豊作だったら、他の畑の2倍の値段ですべて買い取りましょう。」

逆にもしその年が不作だったなら、一個につきあがるであろう値段の1倍で買い取りましょう。

数はあなたの気分しだい。

みかんの運送にかかる費用は、こちらから船を出します。そこへ投げ込んでください」

海では栄養がかかせないですからね。

そう言つてクスクスと笑うのは、六歳とは思えない知識を持ちながらもいたずらを考えた子供の顔だった。

「つまり壊血病対策といったところかしら？」

「ええ。海軍だって海を行くときは必ずもっていきますが、移動している間に食料は腐つてしまふ。とくに果物は。

ですから現地調達ですよ。そうですね、簡単に言えばエネルギー補給にご協力下さいといったところでしょうか？」

もちろん交渉対象はみかん。

ただでさえ小さな村だ。取引商品以外の水や食料は無意味に請求しない。

「そういう制約でいかがです？あ、交渉責任者はオレ名義で行うので、お金は主にオレから払われます。

ついでにオレはお金って使わないので売価に関しても先程の条件でまったく問題ないですよ。

それに、オレからかいへいたちに売ってるのと同じなので、あちらからきちんと請求してふんだくるのでベルメールさんは商品を提供してくれるだけでかまいません」

いかがです？

そう無邪気そうに微笑まれて笑うしかない。

コチラこそ頼むよ！そう言っ、互いに手を組んだ。

これはたくらみが成立した証。このかたく握られた腕は同盟の証拠。

「いい根性してるじゃないのあんた」

「光栄です。それに…お金はいくらあってもいいですからね」

「むしろあつたほうが言いに移るじゃない！」

「ええ。その通りです」

二人で月を見ていたはずなのに、気付けば朝日が昇ってきて、ちょうど大要を背にしたリースの表情は見えなくなってしまうが、そのときリースが小さく何かをつぶやいたような気がした。

——もし、そのときリースの表情が見えていたら私は、私に好条件にしかないこの不思議な契約と、あの本に入って未来を変えようとした異邦人の話を——もっと深く考えていたかもしれない。

握られた手に力が入った。

その顔は——今にも泣きそうで…

それをこらえるように強く強く、小さなこどもは齒を食いしばって
嗚咽を飲み込んだ。

その最後のつぶやきは誰の耳にも届くことなく消えた。

——それがあなた救う方法に繋がる…オレのできること…——

08 認識の森羅万象、逃亡先のカケガエノナイモノ（後書き）

データ復帰!!

頑張りました。そして長かったorz

人力車様、史部様、С покойной Ночи様、アーチャー様、お役立ち情報と応援メッセージありがとうございました！

おかげで消えた分も戻ってきて、さらに過失修正をして…長くなりました（汗）

それでも今回は上中下にわけなくなかったので、無理やり詰め込んでみました。

さてさて、またもや原作についてですが。

^{ジャンプ}原作でもついにでしたね。

ルフィとエースの過去編。そしてダダンさんの正体が。

これから原作で始まる過去編は、間違いなくイチマルの話とは内容が大きく異なるでしょう。

なので原作の方で、過去編が終了しだい「地味にひそかにおだやかに」の幼少編を原作沿いにあわせた話に修正するつもりです。

それまではすでに原作で明かされているストーリーや、差しさわりのないところに話を持っていきたいと思っています。

たくさんの閲覧者のみなさまへ、心よりお礼申しあげます。

09 奇跡の海（上）（前書き）

このページは2010年5月2日にかいたものをそのまま修正せずあげています。

09 奇跡の海（上）

青い海をこの目で見たい。

そう思つて涙が出そうになるのは現実逃避だろうか。

——願うならば……

次に目を覚ましたときは、今のような不幸な世界でないといい
もう一度家族の顔を見てから死にたかったと……そんな思いが脳裏
によぎる。

優しい手にもう一度触れたい
温かいぬくもりを……

そうすればまたがんばれる気がするからと
けれど身体の自由は利かない。

「たすけて」

体中の血が勢い良くひいていくのがわかる。

さむくて、さむくて。震えがとまらなくなりそうだ。

もう限界だと思つた。

自分でもありえないくらい血の気が引いて行く顔は、今頃青を通り
越して白くなっているだろうか。

下がっていく血の気と共に。

それにともない視界がぼやけ、どんどん目の前が真っ暗になってい
く。

すでに力の入らなくなった身体は、自分でささえていることもでき

ない。

その闇はきつと優しいだろう。

一歩踏み出せばそれはすぐにでも手に入るのに。

「……もう、無理……」

このまま重い瞼を閉じてしまいたくなる。
暗闇にすべてを任せたくなる。

きつと この誘惑に身を委ねるのはひどく簡単だ。
かわりに目を開けるのが億劫になるほどには…。

目は意思に反して重くなっていく。

二度と目覚めない深い眠りのごとく、どこまで続くかもわからない
闇に おちていく…

力の入らない身体はグラリと傾いで――
自分の意識後とすべてを狩りとっていく。

鈍い衝撃が一度身体に走ったがそれももう遠い。

何も感じない。

触れる手のぬくもりも なにも…

どこか遠くで自分の名を呼ぶ声が聞こえたが
それに答える思考はどこにもなくて

ましてや口ひとつ動かすようなそんな体力さえそこには残っていなかった。

ただ零れ落ちる意識が闇へと飲まれるだけ

もう、わめくことも泣くことも…返事することさえできなかった。

「死んだね」

突然ドサリと鈍い音がして小さな身体が地面に倒れた。

それに周囲にいた者達が驚きに目を見開く中、つるだけが机に手を組んで深くため息をついた。

意識を失って倒れた子供の顔は、血の気がいつさもなく死んでいるのではないかと疑いたくなる程真っ白で…苦痛に顔がゆがめられている。

意識を失ってなお眉間のしわは深く刻まれ、酷く苦しそうだった。

「…貫徹12日目か。そろそろかとは思ったが」

はあゝと深い溜息をついて、医療班を呼び倒れた子供を運ばせる。今年でやつと七歳になったばかりの小さな子供は、十歳にも満たないながらも部下としては優秀で、ひっきりなしにいるんところから声がかかる。

そのせいで本日12日目の徹夜となっている。

本人は大丈夫と引きつった笑顔で答えつつもテキパキと動き続け、今日にいたっては目がうつろで「アハハ。弟の誰かかナミかノジコに会いたかった」と遺言のようなものをつぶやいて倒れた。

リースはその境遇からか海軍に入った後も、初めから軍曹という特殊な扱いを受けていた。

今では准尉ながらも他の少将をさしおいて、中將であるクザンの手伝いをしている。

おかげでサボリ癖のあるとある中將を働かせることに成功はしていた。

しかし彼についていた少将が過労で倒れ、当の元凶たる本人は行方をくらまし、主に秘書のような仕事をしていたリースに二人分の仕事 that 回った。

なんとか仕事を片付けても海軍の仕事は普通のそれとはことなり次から次へと増える一方だ。

しかもクザンは中將。

海軍のトップに近い位置にいる彼が行うべき仕事量は、書類整理だけでも並ではなく、さらに人材が二人も欠員した状態では終わるものも終わらない状態だった。

連日徹夜であつたとしても、それをこなしてしまうのだからリースも並みの子供ではない。

本当に子供とは思えない処理能力を持っていて、科学班には鋭い指摘をしたり、将校達との戦いに生き残れるほどの戦闘センスを持ち合わせ、さらには下のものにも慕われている。

おかげで誰よりも若くとも地位が低くとも気にするものはなく、きちんと部下達はリースの指示を聞いて動いている。

しかしそれもそろそろ限界だろうと、つるはふんでいた。

大將や元帥の手伝いまではさせられないが、クザンが行方をくらましてから12日。クザン付きの少將が病院に担ぎ込まれてから6日目。

さすがに限界が近いだろうと様子見をかねて、つるはリースを自分の側に呼んだ。

案の定、倒れたリースは、極度の疲労と睡眠不足と診断が下り、タイミングよく帰ってきたクザンは医者に説教を食らっていた。

「やれやれ」

以前、いろんな意味で疲労困憊であった子供を哀れんだつるは、リースを一度クザンから離し、外海の見回りをさせていた。

そこでできる限りリースに休息を取らせたつもりだったが、帰ってきたリースを迎えたのは部屋消失（焼失）事件。

孫好きなガープがリースを迎えに行き、そのせいで仕事がたまったサカズキがきれた。

「仕事をしろ！」とあらわれたサカズキと「いやじゃ！」と反抗したガープにより、リースの部屋はなくなり、居場所を失ったリースが錯乱しかけたところをつるが保護した。

それから三週間の休暇を経て戻ってきたリースは、さっそくクザンの下にもどされた。

しばらくはいつものような穏やかで少し騒がしい日々が続いていた。クザンもリースも互いに互いの扱いにすっかり慣れたのか——ただたんに思考回路が似ていたために親しくなったに違いない——二人の間には年齢も立場も関係なく言いたい放題やりたい放題。

だからクザンはリースに後を押し付けて逃げた。

そうして気がつけば、こんな状態になっていたというわけだ。

つるの目下にもそれとわかる隈があつたが、リースの状況はそれに付け加えて半端がない。

最近では、リースも体を鍛えるためか『六式』を練習しているようだったが、肉体よりも頭脳を鍛えたいと思いますと図書館によく籠る。

その時間さえも今回はなく、また本部から遠ざけようかとつるは思案し始めた。

I

O O
 \
 .
 .
 .
 .
 .
 •
 I

O O
 \
 .
 .
 .
 .
 .
 •
 I

O O
 \
 .
 .
 .
 .
 .
 •
 I

<side
リリース>

ベルメールさんとみかんの契約を結んでから、3、4ヶ月に一度くらいはあの親子の元に遊びにくくようにしている。

実際はそれはなかなか叶わず、できて半年に一度くらいというのがむずがゆい。

フーシャ村にいるルフィやエースには手紙をだしたり、電伝虫で話したりしている。

海軍の中では最近なんでオレを追い掛け回す人が山のようになつたの

か理解して、おかけとやらを殲滅する方向に動いている。

不気味な目でこちらを見てくる相手や罠には待った相手の顔を覚えて、彼らの上司に頼んで遠くに飛ばしてもらったり。

最近では科学班と協力して色々つくっていたらそれが功績として認められてしまい、気がつけば位がまた上がってしまうというドツボ体験をしたときは絶望した。

さらに一度、自分自身の实力を知っておいたほうがいいだろうといわれ、同じ階級の人と真剣勝負を行なった。

いままでの経験がモロに生かせてしまい、いつのまにか自分がかかり鍛えられているのを知った。

じいちゃんやボルサリーノさんいわく、冷静に相手の目の動き、指の動き、体の傾きなどをみていれば、普通に銃弾はよけられるという。

はじめのうちは「無理だ！」「お前らは妖怪か！」「そう叫びながら殺傷能力のないビービーダンのようなおもちゃながらも銃弾の雨を食らった。

にげてにげてにげて…それだけではやられると体で教えられてからは、必死で目で物を追うようにして、気配でものを察知する努力もして。それらが全部フルでいかせてしまったのだ。

結論から先に言うと、中佐レベルまでは能力も何もなく勝てた。それ以上は怖くて考えたくもなくて逃げた。

その決闘のせいで軍曹から一個あがっただけの位が、またポンととんで准尉になってしまった。

みんなが手をたたいて喜んでくれて、おめでとうと、そうでなくちゃ！と言ってくれたけど……ちよつとまでコラッ！

オレがいつ…以下略。

もう、なんだか平穩を望むのも、海軍なんかいやだというのも疲れた。

オレは普通に名倉氏にいつか戻るため海兵達から逃げただけだけど、それでもなぜかポンポンと昇進してしまったのだから、

もしかすると意外と体力はついてきたのかもしれない。
とりあえずじいちゃんのこぶしを避けられるだけの度胸がついたのだから、『六式』でも覚えようかなと、現実逃避ついでに『六式』の勉強を始めた。

まず『六式』とは結局なんぞや？

海軍の教本と、海兵達の訓練の様子、将校達の話聞いて、『六式』についてまとめてみた。

鉄塊テツカイ：肉体の硬度を鉄の甲殻にまで高める技。

紙絵カミエ：敵の攻撃を紙のようにヒラヒラと避ける技。

剃ソル：瞬発的に加速し、消えたように移動する技。原作のルフィ曰く、その際地面を瞬時に10回以上蹴っているらしい。

月歩ゲツボウ：爆発的な脚力で空を蹴って浮く技。主に回避に用いられ、応用技は無い。

嵐脚ランキヤク：蹴りで呼び起こす鎌風。

指銃シガン：指で敵の体を撃ち抜く技。技のバリエーションは「一転集中」という点は共通するが、必ずしも「指から」とは限らない。基本的には鉄塊が習得できていないと使えない。

六王銃ロクオウガン：『六式』を極限まで高めた者が、使える『六式』最終奥義。

『六式』は特殊能力というよりも、ひたすら努力の結晶といった後天的な、あくまで技術だ。

やっぱり少し尋常じゃない人外の技のような気もするけど。
よくよく考えると、これはオレの場合能力で代用できるものが多い。

例えば、鉄塊^{てつかい}。これは身体の構造を変化させればできないこともない。

海棲石にはかなわないが、ダイヤモンドは世界でも有数の強度を誇る。

だから身体をダイヤモンドにかえるとかなりめんどろだけど、やってできないことはないだろう。

なにせ身体のほとんどは水できているわけだし、ダイヤモンドは炭素の塊である。

これをうまく使えば、わざわざ鍛えてまで肉体の硬度を上げる必要はないし、鉄よりも硬い防御ができる。

オレにとっては体を鍛えるより、肉体構築をしておいたほうがとてもお手軽だったりする。

そもそもオレは自ら鍛えたり戦ったりするのを嫌うLet'sインドア派の人間である。

考えているうちに修行さえするのめいやになってきて、毎日鍛錬している自分を想像するだけで憂鬱^{カミエ}になってくる。

さて次に、紙絵^{カミエ}だけど、これはほぼ普段のオレそのものだと思う。敵の攻撃を紙のようにヒラヒラと避ける技——オレの場合は技ではなくそれだけ取り柄で。

次。

剃^{ソル}はとにかくたくさん地面蹴^{ソル}って瞬間移動しているようにみせるんだそうだ。

一番めんどくさいのではと思うのはオレだけか？

もしオレが怪物なみの脚力があつたでしょう。だけど目で見えない速さで10回地面を蹴る……それだけじゃあ、瞬間的に移動したような感じで動けないんじゃないかとも思うわけだ。

オレがやる場合はね。だってオレあんまり体力ないし（子供だから）。

たぶん蹴ることに必死になって、オレは正面を見るのを忘れるだろう。しかもその場で10回やると、戦っている最中だとか進むことさえ忘れるんだよ。オレだから。

ちなみに実は…瞬間移動モドキならできる。

オレは能力者。それも身体を粒にかえられる。

身体をミクロほどの粒に変えてしまえばいいのだから。

まあ、小さいころの夢だったし、とりあえず『剃』はあとで練習してみよう。

そのうちできるようになるかもしれないし。

四番目は月歩^{ゲッボウ}。これはエースと一緒に谷に落とされたとき、いつも考え習いたかった奴だ。

でもこれの話を聞いたときオレが愕然としたとしてもおかしくない。理論はわかるけどね。水の上で沈む前にもう一步足を出せ!!と同じだ。ロケット噴射があしについているようなものだろうから。そこまでやったらオレは足だけ筋肉マッチョになってしまうよ。

いやいや、それ以前に、普通にオレの場合は某正義のロボット鉄。アトムのように足から噴射して飛んだ方がいい気がする。

…たぶんやればできるし!

そこまで考えて、オレはオレ自身の異常性と、六式の必要性がオレにはないことに気付いてしまった。

むしろはじめからやる気がなかったオレが、修行なんてするとは思えない。

「今まで『剃』や『月歩』をほしがったオレって…ただのばかみたいじゃん」

いやいや、まちたまえ自分よ。
そうひげにするでもない。

「あ、そっか」

もし海楼石や覇気などで能力を封じられてしまった場合を考えておけば、六式は学んで損はない。

最近おつるさんとクザンさんにはオレのだらっけぶりな性格を完璧に把握できてしまっているようなので、彼らに訴えれば色々となんとかなるだろう。

まあ、元帥を含めて階級の降格を願い出てもたけどソレはさすがに却下されたのは、今のところ一番痛い思い出だ。

とりあえずきつちり話を聞いてくれるおえらがたを味方につけ、オレは海軍改革——なんてするわけないだろう。改革ではなく、オレの修行相手を“まっとう”な人にしてもらっぐうらいの配慮は頼むつもりだ。

やっぱりここまでできたので、逃げ足を鍛えようと思ひまして。

——とか、思ってたんだけど。

その相談におつるさんのところにいったら、丁度良いと笑顔で言われた。

「煎餅いるかい？」

「あ、いただきます。緑茶入れましょうか？」

「たのめるかい」

二人で向かい合って、オレは日本茶そっくりのソレをきちんとした茶器にいれて葉を入れる。

おつるさんに相談しに行ったら、まずはお茶をしようと誘われた。向かい合うように座って、おつるさんからはせんべいをもらって、

ふたりでまったりしながら秘密会議が始まった。

「訓練をしようかと思うのです」

「ほおう。アンタらしくないじゃないのさ。自分から修行だなんてね」

「自分もそう思いますが、いざというとき逃げ足を早くさせたいかっただのです。そうでなければここ（の世界）では生きていけません。自分は修行も面倒ごと嫌いですが、それよりも早死にはしたくなかったのです」

「そうかいそうかい」

「だから師匠となるべき人はぜひまっとうそれはちょうどよかった」
「は？」

「アンタの強さについてこれで、まっとうな人間…いるよ」

「え？ほんとうにそのひと、人なのになっとうなんですか？」

「アンタもずいぶんへんなところに食いつくようになったねえ」

「ははは…そりゃあ」

自分が10歳未満であることさえ忘れそうなほど、子供らしい日々を送っていないので…。

警戒ぐらいしてしまう。

よくよく考えると能力者ってのは、能力使って変身とかいろいろするわけで、それだけでも能力者のほとんどが変な人に見える。

そんな人間が海軍には山のようにいて——常識？なにそれ？そんな気分になっとなる。

その点では、おつるさんはかなりの常識人だと思う。

だって常識人そうなセンゴクさんは、ヤギつれているところがよくわからないし。

能力者じゃない人」常識人つてのはあてはまらない——ほら、いい例としてじいちゃんがいるでしょ？あれは能力者でもないのにぶっ飛んでるし、もう規格外だよな。

「任務ついでに行つてほしいのは北の海だよ」

「北の海ですか。なんでまたそんな場所へ？」

おつるさんがいうところによると、オレが師匠となるべき人に会うのには北の海に行かないといけないらしい。

内容としては海賊を捕まえるついでなのだが、今までと同じように『海軍支部めぐり』に近い内容だった。

北の海。そこで一時姿を隠せといわれた。

だけどそこまでいつて姿を隠すぐらいなら、ぜひ東の海に戻つてフーシャ村にいきたい。

静かに暮らせというなら、たとえ山賊がいようと、故郷ともいえるドーン島が一番だ。

まあ、そこまでわがままはいえないのはわかっていた。

なので、とりあえず言葉には出さず、目だけで訴えてみたところ、すぐに連れ戻されたいのかいと首を横に振られた。

たしかに。

灯台元暮らしと知っている場所に逃げても、なぜかクザンさんとか、じいちゃんとかじいちゃんとか…かぎつかれそうな気がしてしょうがない。

「さすがにガープもクザンの坊やもアンタに頼りすぎなところがあるからね。」

少し離れてほしいというのもひとつ。

一番はアンタのためだよ。こないだ過労で倒れたこともわすれたのかい？」

「い、いいえ。いや、そこまで甘えていいのになって」

「（この年で仕事中毒かい。なんてこった。どうりで子供らしくないわけだよ）」

そんな小さな子供が何ばかなこと言ってんだい。みつかるまえにさつさとおいき」

おつるさんはオレを見て、子供は子供らしく生きろという。

それは嬉しいけど、無茶言うな、このひとと、内心ため息をついた。ついつい視線をそらしたら、おつるさんの方からため息が聞こえた。

「無茶なのは承知だよ」

だから今のうちに早く行けと・・・

「名目上は、あの近海の海賊が幅を利かせているらしいからね。ついでに首をつかまえておいで。」

そうしたら行方不明になってかわまないよ。あとはこっちでうまくやっておこつ」

連絡だけは取れるようにとオレはおつるさんから、電伝虫を一匹あずかった。

つまりこれでオレは長期間のお仕事扱いの脱出計画と…なんて素晴らしいんだ！！

あまりにオレに優遇が良すぎて、突然不安に襲われ、おそろおそろ尋ねると

「言いたいことはわかるけどね」

「えっと、そのなぜとお聞きしても？」

「アンタ自分が何を言ってるかわかってるかい？」

突然、なんなのだろうと首を傾げると、おつるさんがやっぱりかため息をついて新たな質問投げてよこした。
「いったいなんのことだろう？」

「やれやれ本当にこのこは自覚がないようだね…リースは今年でいくつになった？」

「え？えっと…七歳ですが？」

「じゃあ聞くけどね、普通の七歳の子供はアンタのような反応を返すかい？」

たぶんだけど、あんたが今考えた答え、その考え方を普通の子供がするかい？」

お前に会わせたベルメールのところの子はアンタの会話についていたかい？」

—— 普通、その年の子供は、外で遊ぶものだよ——

言われて、この世界に来てはじめて己という存在の違和感に気付かされた。

なまじ周りが凄すぎてついて行くのでやっとだったオレは気付いて

いなかったが、10歳にも満たないこどもではなく“オレ”という性格のまま“リース”として暮らしていた。

環境で性格も随分変わったが、それでも前世のオレは高校生だったわけで、中身17歳過ぎの人間がこどもらしい行動をとるわけがない。

誰にも言われなかったし、それどころでないハードな暮らしだったから気付かなかったが、こどもとしての“リース”の存在はふりかえてみても違和感がありすぎいろいろとおかしかったことだろう。オレは前世の知識を持ったまま“リース”としてすごしていたため、流暢に口を動かせなくともその思考回路も行動もすべて普通の子供が知らないようなことばかりしていたのではないだろうか？

たまにこどもらしく演じたり、体の幼さに引っ張られて心が幼児化するものの、それ以外普通の言動はいかにもこどもらしくない。

「やっと気付いたようだね」

そこまで“普通”でないこどもにおつるさんは、元から頭がいいことが起因し環境がオレを大人びたこどもへと変えたとそう思っているらしい。

中身異世界人ですという疑いはなかった。

だがまっとうな思考回路をもつおつるさんからみたら、オレという奴は「可愛そうな子供」に映ったらしい。

いやね、オレだってたまになんでこんなについてないんだろうつて思うけど、普通の子供のようとか今更無理ですよね。

だって…

なんか七歳にして海軍准尉（これからして意味がわけわかんない）。海軍の英雄といわれた男の「愛ある拳（手加減バージョン）」とやらをよける。

こないだどこぞやの中佐をボコってしまいました（7割は畏にはめて落とした結果）。

他の上位階級の人を無視して、オレなんか中将の秘書のようなこととしてます。

体力は普通のこども並みだけど、足の速さと気配読みなら最近誰にも負けなくなってきました。

実は悪魔の実の能力者で、気合を入れれば一瞬で船を沈められます。

……今更。いまさら普通って——ナニ？

オレには遠い世界のお話のような気がします。

それにそういうことは、オレが悪魔の実を食べる前に行ってほしかった。

でも、決して穏やかな老後だけは諦めない！！

この世界で海賊は、夢を追うものをさす。

夢を追う——それつまり諦めないこと。

オレだって夢を見たい。諦めなくたっていいだろ？

普通なオレなんてものは

「無理な気がします」

でも

「平和が好きです。昼寝をして日々のんびり暮らすのが好きです。戦闘は面倒です。修行もやるきがしません。策略とか頭を働かせる

も面倒で嫌です。それでも」

したいことがあるから

「逃げ足だけは鍛えてきました！少し頑張ってみます」

おつるさんは常識があるから、オレのめんどくさがりの性格も周囲にいいように遊ばれている涙の苦労さも理解してくれていた。だからなりたくはないけど、おつるさんに頷いて、修行の旅にできることにした。

もちろん。オマケで少し“普通”と戯れて、本当について海賊を捕らえてこよう。

そこまで考えて……

ふと、一番重要なことを聞いていなかったの思い出す。

「……ところでどんな方なんです？」

さっそく旅支度を……と、席を立とうとしたが、慌てて座りなおすと「初めにそれをお聞き」とおつるさに笑われてしまい、なんだか恥ずかしくなる。

「はあ、本当に抜けた子だね」

「自分もそう思います」

「まあ、いい。リースは【^{ディエス}X・ドレーク】という子を知っているかい？」

聞いた名前に固まっていると、詳細の書かれた書類をわたされ、一目見てオレは頭を抱えた。

オレンジ色の髪に少し釣り上がり気味に目、プロフィールの写真をみて眩暈がした。

どうしてこうも原作キャラとの遭遇率が高い？

しかもいまだこの^{ディエス}X・ドレークはまだ海賊ではなく、海兵の衣装に身を包んだ年若い大佐だ。

これがあと十年ばかりすると、海軍将校にまでなる有望株。

しかも上半身半裸にマントというあやしい格好をする海賊になるのか…。

オレはこの人を知っていました！

「この子はこの若さでこの地位につくだけの腕がある。

これから伸びる逸材だし、なによりそれにわたしが知る限りかなりの常識人だ。

もともとリースを海軍支部を順に回らせたのもこの子にあわせようと思っていたんだよ。

まあ、それよりも早く支部めぐりをやめることになっちゃったがね」

「ああ、それで支部めぐり…」

でも、ひとつ言いたい。

常識人は半裸でマントなんて妖しい格好はしません！！

っが…

「喜んでお受けします!!」

その後、電伝虫をつかって話したドレークさんは、物凄くまじめで、だけど物凄く気さくで、優しくて！普通で！！

即、仲良くなったオレは、さっそくドレークさんに会いに行くことを決めた。

約十年後はわからないが、今はいたって普通な海兵なドレークさん。たとえ厳しかろうが、そこはそれ。“普通”という存在にはかえらるものはない。

ドレークさんはオレを鍛えてくれると言った。でもきつとあの人なら、じいちゃんや大将&中将連中のように、はじめからフルパワ―で前触れもなく襲い掛かってくることもないだろう。

まっとうな海軍の訓練から始めた方が、まだオレの心は平常でいられる気がした。

彼は北の海にいる。

いままではずっと南と東の海ばかりまわっていたので、北の海ははじめてだ。

少しだけ、【常識人】というのに胸がキュンとした。

オレの中に“普通”という人生の夢がグルグルとまわり、自分とはかけ離れすぎたそのあまり理想さに…オレのトキメキはおさまらない。

いますぐ海に出たくなった。

いますぐ旅立ちたくなった。

ドレークさんの元に行けば、普通でいられる気がした。

そのままオレは渡されていた電伝虫を懐にしのばせる。

おつるさんからは座ったまま視線だけで窓の外を見るように示され、ここから伺える船のひとつを示して「あれにのるといい」とアドバイスをもらった。

急がなければ、そろそろオレの逃亡を計画に気付いた鼻とか勘のいい猟犬に気付かれるかも知れない。

オレは視線だけでおつるさんに意思表示をして、互いに頷きあうと席を立つ。

窓から海と海軍のマークの入った大型の帆船がみえる。

それを視界に入れつつ、凝り固まった身体を伸ばして、深呼吸をする。

深呼吸して、気持ちを入れ替え、心の準備もおこなう。

はあゝ

ひとつ大きく息をついてから、窓の外へ意識を離す。

この息はため息ではなくて、あまたの海賊たちと同じようにオレが夢を追うための気合入れ。

窓の外から見えるのは、空を映したような海の青。

この世界は海を中心に世界が回っている。

「いつてきますね、おつるさん」

扉に手をかけながら、去り際に振り替える。

いつも本当のおばあちゃんのように思っていた人に笑って手を振る。おつるさんは一瞬驚いたような顔をしたあと、穏やかに孫でも見るかのような優しい笑顔で大きく頷いた。

「ああ、いつておいで」

それからオレは必要な着替えと読みかけの本を数冊もって、通りがかりのバーソロミュー・クマさんに懇願して、そのに陰に隠れるように移動。

気配をできるだけ消して、ハイエナのような上司や祖父から逃げる。大きな身体の背中に張り付いていたりすると、誰も気付かないのでとても平和に島を出れました。

じゃんじゃん。

っが、しかし。

「オレ、ついてねー!!!」

軍艦から降りて商船へと乗り換えたオレは、予定とは異なる場所に漂流。

なぜならば、のっていた船が突然の時化で転覆。

そのあとはさらに運が悪く、吹き荒れた巨大竜巻が発生。

なんとか原形をとどめていた甲板はギタギタに破壊され、近くを泳いでいた海王類も悲鳴を上げてサイクロンにみこまれ、オレは船員と積荷と船の破片と共に吹き飛ばされた。

「まじでオレなにかした!？」

この世界はとことんオレには優しくないらしい。

っで

グランドライン(たぶん)の……ここだよ!？

「え？」

「うん、うん」

09 奇跡の海（上）（後書き）

人力車様、すぎやん様、アーチャ-様、ライ様、秋人様。

閲覧してくださったたくさんの皆様、いつも応援ありがとうございます！

今回もまた長くてまたわかれてます。ごめんなさい。

さあ、戻ってきましたグランドライン。

次はちゃんと戦闘の描写とか書けるようにしたいと思います！
それとリースが海賊になるって意見をたくさんいただいているので、

なるとしてもリースですからたぶん変則な変化球です（笑）

ついでに気になっているかと思うので未来の話をひとつだけ。

『エース救出大作戦』のとき、リースは海軍側にいます。

まあ、そこまでは随分時間がかかるとは思います。こうごきたいということで…。

自分でもわかっていたのですが、やっと時間ができたので…。

これよりチキンイチャマルは、誤字脱字修正期間にはいりたいと思います。

すべての修正が終わるまで、誤字への不満は解消されないかと思いますが

どうか広いお心で終了ををお待ちください。

誤字脱字に関しては、ご迷惑をおかけしてしまって申し訳ありませんでした。

さあ、やるぞ修正！修正修正しゅせえ！だあ！！

それでは次回「奇跡の海（中）」にて

100502

10 奇跡の海（中）（前書き）

リス、7歳ということで。

10 奇跡の海（中）

「うるさい」

そう低い声が聞こえて振り返ると、ギン！とした鋭い目つきのお方。

鷹のような鋭い目が、さつさと降りると暗に語っていて、落下地点にいたお兄さんの腹の上にオレは不時着した。

「う、ごめんなさい！！」

サイクロンの影響で空から落下中だったオレは、側にいた巨大生物——海王類と一緒に海に向かっていている最中だった。

だけどオレは悪魔の実の能力者。このままでは海に嫌われたオレは溺れて死んでしまう。

とりあえず海王類の背中に張り付いて、こいつが海に落ちたら足場の代わりにするつもりでいた。

それができず見知らぬ人の腹の上に落ちたのは、落下中に突如下から吹いた鋭い風の力で巨大生物が消えたからだ。

少し時間を戻そう。

まずオレは、（誰にも言っていないけど）能力者である。

悪魔の実の能力があるから、あのくらいのサイクロンや風では死なない。

ただし、それが“オレ一人だけ”であればということだ。他の船員達はそうもいかないだろう。

元来、オレは誰かと喧嘩するのも誰かが傷つくのも嫌いだ。死なんか目のあたりにしたら、オレが死にたくなるぐらいもつと嫌いだ。だから船が風に飲み込まれた瞬間、とつさにオレは能力を使った。

いろんなものが巻き込まれた風のおかげで周囲が何も見えないのをいいことに、生き物の気配のする方の空気を操作して、“それら”の周囲に分厚い空気の壁を作る。

どれが人間かなんて考えている余裕はなかったから、“生きている”とオレが感じたものだけという大雑把なことをした。

風の渦から“それら”を守った後はよくわからない。たぶん生きているとは思うけど、風の威力が弱まったところで、“それら”を空気の壁ごと弾き飛ばしたあとのことまで保障はできない。

問題はオレだった。子供ならではの身体は、他の者より軽すぎたのか、みんなからかなり離されて吹き飛び、自力ではサイクロンの渦から外に出る事ができなかった。

悪魔の実の能力を使って陸地か船を見つけてそこへ降りるつもりでいたが、それもあの視界では不可能だった。

だけどそこはさすがグランドラインのサイクロンというべきか。風の渦の間からはそうそうお目にかかれないうなひたすらばかでかく凶暴そうな巨大生物——海王類まで吹き飛ばされていた。

とにかくふきとばされ続けていると、やがてサイクロンは自然に消滅し、巻き込まれていたオレたちは必然的に落下する。

そうして一緒に落ちていたはずの海王類にまたどこかに吹き飛ばさ

れないようにしがみついて、海面着地を待っていた。

しかし衝撃は全身ではなく、下から風と共に訪れた。

ゴウ！と風のうなり声が聞こえたかと思った瞬間、突如真下からふいてきた鋭い風がパシュツ！と小気味良い音を立てて海王類を腹の部分から真つ二つにしてしまった。

海王類は気絶したまま死んでしまったので、痛みもなかっただろう。悲鳴一つなく上半身と下半身が分かれていく。

オレはそのときの風圧でしがみついていた手が滑って離れ、また宙に投げ出されていた。

どうしてこうなった！？とか叫びたいが、まずは自分の身を守らなくてはいけない。

このまま海に落ちるのだけはカンベンと、能力で空気を操作して、落ちる速度をオレの周囲だけ緩やかにする。

重力の影響と重さのせいで、海王類はさきにおちていく。

そうして二つに分かれた海王類のちょうど真ん中。オレの落下位置に、点のような黒ものが見えたのに気付いた。

もしかしてさっきの風はあそこからか？

徐々にそれが小船だとわかる。

本当に小船だった。しかも湖でいちゃいちゃデートするようなそんな小さな漁船以下のサイズしかない船。

よくそんなんで海を越えられるナとか思っていると、視界にとまっただ『漆黒』。

そこで黒くて大きな十字の剣を掲げてたたずんでいた男——ああ、なんてこったどうみても【鷹の目】じゃん——に突撃するような形で落下した。

それは見事なまでにクリーンヒットした。

思いつきり驚きに目を見張って固まった目の鋭い男、ジュラキュール・ミホークを踏み潰してオレの落下は止まる。

なんか【鷹の目】が物凄く驚いたような顔をしてオレをよけるのも

忘れて踏み潰されていたとか、そのまま船の上に尻餅ついた【鷹の目】がいたとか・・・そういうのは、みてない。
うん。みてないふりだけだ。

そんな某週間。ヤンプ愛読者達の夢も希望も何もを壊すようできて、彼の周知を煽るようなこと。

してない！見てないんだおれはあー！！！

そう、オレは何も見えてない。何もしてない！！そう暗示をかけて気合でスルーした。

むしろみてはいけないものを見た気がしてしまい、慌てて周囲へと視線を向け、場所を確認しようとして――

オレの目玉は落ちんばかりにひらき、あごも閉じられないほど驚くものが視界に止まった。

この小船を覆うような大きな影が海におちている。

頭上には大きな島が七つほど連なって浮いている。

空島とよばれる浮く島だ。

こんなものがあるのはグランドラインだけだ。

「オレ、ついてねー！！！！まじでオレなにかした！？ここどこよ！？」

浮かぶ島ってことは、グランドライン。

オレはグランドラインでない【楽園】北の海に向かっていたはずだが、これはどうして、とんでもないところにきてしまったようだ。

思わず座布団代わりになってしまっている人物のことも忘れて頭を抱えて叫んだ。

「うるさい」

そうして冒頭に戻る——っと、いうわけだ。

ふつ。と、この現状を鼻で笑って、視線を遠くに向けたりして、すべてを無視できたらしただけすばらしいだろうか。

視線さえそらすことができず、ただいまオレは、狭い船でミホークに黒い十字の剣をつきつけられにらまれている。

ああ。もうこの時には【夜】を持っていたのですねミホークさん。

そんな史実、実地で知りたくなかったよ！！

ちなみにオレはというと、戦えるとしても下準備バツチリしたあとに罠とかはったりする戦いがモットーだし、今は武器一つお玉ひとつなく、未開発の悪魔の実の能力しか身を守るすべがない。

覇気？そんなもんあるわけないだろ！！

逃げ足の速さだけが取柄でも、ここは狭い船の上。

だめじゃんオレエ！！！！！？

自分は戦力になりはしない。気配が人より読めるだけの逃げ足の早だけの自分は所詮一般人だ。

そんなオレがこの状況で平然としていられるはずもなく、鷹の目といわれるだけあるあの鋭い目ににらまれればガタブルものだ。

や。ごめん。実はそこまでガタブルでもない・・・かも。

なにぜ日々サカズキさんがいいちゃんに向ける殺気とか、センゴクさんの静かなる殺気とか、オレのファンだとほざく兵隊どもの熱烈にして異様な殺気めいた意気込みとか、悲しいことに、その余波を浴びまくって生活しているせいか、殺気には慣れてるから結構平気なんだよね。

それでも刀が喉元ちらつかされてるとさすがにオレだって泣きたい。どうせワンピキャラと会うならこんな顔が怖い人じゃないほうが良かった！！せめてうちの弟ズなみに可愛らしい男の子がいい！！おっさんこえー！ってか瞬きしろよ。よけいこええっての。

そもそも現状そのものがおかしいよね。

サイクロンに巻き込まれることも、それで無傷で生きてることも・

・ってそれはともかく。

もともとオレは『北の海』にいるドレイクさんに会いに行くはずだったんだ。

つまり今はグランドラインを越えて、『楽園』にてのんびり静養しつつ、まったり普通の人間の速度（マリンフォードの将校たちの指導が普通であるはずがない）で身体を鍛える——と、まあ、そういう予定だった。

それがどこをどう間違ったか、まだグランドラインにいて。

むしろグランドラインのさらに奥にでも入り込んでしまったようで、ドーン！と馬鹿でかい空島が目の前の大空を占拠していたりする。

そして横には、オレを救ってくれたのかそうでないのかワカラナイ立ち位置となった“鷹の目”ジュラキール・ミホーク氏が、物騒なものを突きつけてきてくれちゃってるわけでした。

かの有名にして危険な剣豪。そんなひとになんで真正面から殺気を向けられなければいけないんだろうねオレ。

せめてドレイクさんに会ったあとか、オレが六式の一つや二つ使えるようになってから、こういう有名どころとはあいたかった。

むしろ会いたくなかった。

だって、オレ強くなかないからね！！

そもそも後の七武海にして世界的な剣豪と名を轟かせるようなやつに、鍛えたからといってオレなんかが勝てるとは到底思えない。それがすでに【夜】なんて名刀持っていたらなおさらだ。

つで。まずはこの今にも首をはねられそうな『コレ』ね。

とりあえずは――

「さきほどはもうしわけありませんでした！！」

秘儀、日本伝統の究極奥義。ジャンピング土下座！！

それはもうプライドとか醜態とか恥とか一切関係なく、ギリギリラインでミホークの刃を交わしてスライディングする勢いで、額を船底にこすり付けるようにとにかく謝った。

だって、不可抗力とはいえ、思いつきり踏んづけたし。腹に乗ったし。無許可乗船しちゃったし・・・いろいろとしてかしてるから当然だ。

げんにオレが土下座するその寸前まで鷹の目の手が刀を握っていて、その刃先はオレの喉元数センチという状態だった。はつきりいつてこれにはもう気が気ではなかった。

なのでオレの土下座に一瞬手が緩んで刀が喉元から離れた隙に、自分が誰で、なぜここにいいのか、サイクロンでとばされたこともすべてはなした。

それでやっと刀から手を離してくれたのだった。

それからこれからのことを考えた。

そもそもオレがここにいるのは、はちゃめちゃんな海軍（主にじいちゃん）から逃げたくてのこう同だ。

ならばいつそ、このまま死んだとか記憶喪失ということにしてミホークさんにすがるか。

sonでもって、海軍から遠ざかるのも手かもしれない。

まあ、まずは周囲がまるっとぐるっとすべてが海なので、そこには落ちないようにするのが一番常用事項だ。

能力者って面倒くさい。

まずは――

「ちかくのまちまでのせてください！おねがします！！」

近くの【町】でよろしく。

【島】はやめてよ。

そこが食べ物も獲物もないような1mしかないような無人島だったら困るからね。

町に着けば人がいる。

そうしたらだれかにむかえにきてもらうさ！

その場合はしかたないので海軍本部へちゃんと連絡するよ。
逃げずに戻るよ。

だから

「お願いします！！」

本日二度目の土下座をした。

そんなオレに鷹の目が何かを言おうと口を開きかけ

ぷるるるるうゝ

「ん？」

「・・・・・・・・」

ぷるるるるるる　　ぷるるる

「・・・・・・・・」

「なにか、持っていないか？」

「え？なにか？つて、ああああああ！？」

突然鳴り響いた電話音に、思わず2人で首をかしげていたが、ふいに投げかえられた言葉に、あるものを思い出した。窓からの脱走のときおつるさんにもたされた伝電虫。

オレは慌てて懐を探り、そこにいたカタツムリのような生き物を取りだし、背につけられた受話器を外す。

それと同時にデンデン虫は目を開き、“おつるさん”の口調で語りだす。

『よかった。つながったようだね』

「おつるさん！？」

『サイクロンにあったって連絡を受けたんだ。あんた無事かい？』

「おつるさん！オレはなんとか無事です。ほかのかたは？」

『ああ、それが奇跡的に全員助かったようだね。きせきというか・

・まあ、ヤボなことはいわないけどねえ。

あとはお前だけがみあたらないと報告をうけたんだ。いまどこにいるんだい？』

「いま？えーつと・・・」

そんなもんするか。

町に行く前に取れた連絡に涙が出そうになりつつ、今の状況を思い知らされるような問いに、思わず空に浮かぶ島を見上げてしまう。

「グランドラインの――――諸島近海だ」

ひとり思考が脱線して、そのまま黄昏モードに入ろうとしていた矢先、横から救いの手が差し伸べられた。

それに驚いて振り返ると、デンデン虫がちょっとした表情を浮かべていた。

『おや。その声は鷹の目の坊やだね。うちの子をたすけてくれたつてのはあんたかい？』

「たまたまだ」

『ああ、そうかい。』

それとリース。ドレイクは北の海にいるからね。あんたをむかえにいくとかはできないよ。だからといってこのまま帰つてくると、しばらくは本部に缶詰だからね。まだ帰つてくんじゃないよ』

「あ、そつか。じゃあ、オレの休暇取りやめ？」

『いんや。そうさね。どうせなら、そのまま鷹の目。あんたそのことをしばらく面倒見てくれないかね？』

「断る」

「即答ですか！？」

『かといつてお前の休暇はドレイクのもとにいき、きたえるという名目だったからねえ。』

そのぶん強くなるか成長を見せなければ帰ってきてても怪しまれる。というか、休暇が取りやめになるだろうねえ。かわいそうに」

「え」

『むしろ休暇も含んではいるがしばらく海軍本部を明けておきながら、なにもありませんでしたでもどつてくるなんて・・・リリースが鍛えるための修行に出ると外に出したから困ったねえ』

「え？えつとあの？」

『そのぶん強くなつてから帰っておいで』

「その・・・つまりそれって」

『鷹の目に支持して強くなつてこないと変えれないってコトさね』

「帰りたくないけどいけないのはもつと困る！！」

『そのまま帰ってきたら休暇はなし。』

半年以上かえつてことなくともかまわないがその場合は実力をあげてなければいけない。

さあ。おまえはどうするんだいリリース？』

これでやつとたすけてもらえる！そう思っていたオレの小さな希望は、一瞬で泡となって消えた。

完璧に口で圧倒されていた。

しかも最後におつるさんにつきつけられたのは、究極の二択。

事故にあったのでしかなく帰る＝休暇なし

今よりもつと強くなるか技術を磨かないければいけない＝一年でも休暇OK

なんて卑劣な！！

しかもおつるさんはこっちのことなどお見通しだといわんばかりに、

最後の方は笑っていた。

電話越しでもそれは十分伝わってきた。

ぶっちゃけここまできたら答えなんて一つしかない。

思わず――

「お願いします！オレを弟子にしてください！！」

デندن虫そっちのので、再び鷹の目に向け派手に土下座した。

勢いあまってゴン！と船底におでこをぶつけたが気にもならない。

そのあとは嫌がる鷹の目にすがりにすがりつき、スッポンのような泣き脅しに鷹の目が負けてくれた。

勝手にしろといわれたので、勝手についていくことにしました。

俺は何も教えんって言われたけど、それって見て盗めってコトですか！？なんてどこかの時代劇小説のような台詞だろう。

いや、でも休暇がほしいのでついてきますけどね！！

そうしているんなところに突っ込む暇もなく、誰か来るから切るとあっけなくおつるさんとの通信は切られてしまった。

沈黙してしまったデندن虫に、あまりのショックでしばらく呆然としてしまったが、先程の言葉を脳で反復し、あまりに難しい難題にゴクリと生唾を飲み込む。

そのままチラリと背後にいるだろう人を見やる。

ギロリとした視線と目が合った。

あまりの威圧感に思わず顔がひきつった。

「あ、あの・・・」

とりあえず無理やり師弟の結成です。

鷹の目こえー！！！！

「あ。申し送れました。オレはリースといいます。無理やり海兵にさせられ、まあ、いろいろありまして先程のような状況に追い込まれているわけなんですが」

「おれは三ホーク」

「はあ。それでミホークさん」

「なんだ？」

「ところで、これからどこへいかれるんです?」

「漂流中だ」

え え え え え え え え え え え え え え え え
え え え え え え え え え え え え え え え え
え え え え え え え え え え え え え え え え
え え え え え え え え え え え え え え え え

ええエえええ――――！！！！！！

そんなのありですか！？

なら。なら！

なんでさっきあっさりおつるさんに場所を答えられたんだよあんた！！

「場所はわかる。だが櫂もこの船にはない」

あっさり言われました。

もう、なんていうか、なんでこのひと生きてるの！？

こういうひとほど一人にしちゃだめだよねえ！？

「………食料とかは……」

恐る恐るたずねたら、無言で、すぐそばにぶっかりつかぶ物をしめされた。

ちょ。ちよつとまで。

予想はしていたがアレはないだろアレは。

しめされたのは、オレと落下してきてそのまま鷹の目の技の餌食になつた海王類。まっぴらなやつ

もう何も言つまいと心の底から絶望した日。

11 奇跡の海（下）

時間がたつのは早いですね。

オレがこの世界に生まれておおよそ8年。この世界で生きるのだと決意をしてから2年。サイクロンに吹き飛ばされて“鷹の目”を踏み潰してから半年。

一年たつのが速いという言葉はよくあるけど、オレからしてみれば、一年一年が『はやい』とかよりも異常に【濃いい】です。

そうだね。オレのこの短い人生、おかしいと思うよ。

だってオレはひたすら平穏な日常を望んでいただけだから。

なのに悪魔の実を食べちゃうわ、船の下敷きになるわ、海軍に入れられるわ（しかもなぜかオレにも階位がしっかりあたえられている）、部屋を消し炭にされるわ。

ああ、そういえばぞくにいう“原作キャラ”であるナミにもあったなあ。

つで、「普通のいいひと」であるドレイクさんに会いに行こうとしてサイクロンに巻き込まれてグランドラインを出るところかさらに奥に戻されて、そこで偶然に偶然を重ねたあげく“鷹の目”を踏み潰して――。

なんか生まれて七年の後半部分だけを振り返ってみても思うけど、濃いな。濃すぎだろ。

ここだけのはなし、オレの人生の前半――それも赤ん坊のころからすごいイベントは結構あったよ。

海賊王は自首するし、家に船は降ってくるし……。

まあ、その頃のことはまたそのうちはなすとして。

とにかく“鷹の目”に土下座をしてから数ヶ月たつわけだが、実はまだ“鷹の目”と一緒にいる。
サイクロンによる突発的弟子騒動より約半年。

半端なく“鷹の目”ミホークさん、とことん放任主義でした。

ほとんど放浪生活をしていて、ちなみに見て勝手に盗めと言っただけあつて自ら直接指導とかは一切無い。

それでもまるでオレにみせるように・・・というよりは、このひと敵が多いんだね。

海賊を見れば斬りかかる。

逆に“鷹の目”みるなり挑んでくる海賊さん多数。

もちろん切り捨てられている。

いやだー。

血が舞ってるよ。

悲鳴が聞こえるよ。

視力のあまりよろしくない目の代わりに、敏感になりつつあるほかの五感が、否応がなしに彼の強さをオレに魅せつける。

よく見ていると一言残し、オレの前で行われる惨劇の数々は、まさに覚えると言っているようなもの。

なんかいろいろ麻痺してきたというかあきらめざるを得なかったオレの心境など、こいつらには計り知れないことだろう。

そんなこんなで、ミホークさんはオレの前でよく刀を振るって敵を倒す様を見せてくれるし、たしかに勉強になる。

それに律儀に約束を守っているのか、傍にくっついていても特にい

やそうにされるわけでも邪険にされるわけでも何か言われるわけでもない。

だけどね。だけど、ここでよく考えてみなよ。

7、8歳のお子様と、三十路に近い20代後半の大人な青年。

身長も体格も体力も何もかも違うと同時に、コンパスの長さが一番違います！！

おかげで無言で進むミホークさんのあとを必死で追いかけても、すぐにおいてけぼりをくらってそのまま迷子になってしまう。小さいって不便だね！本当に泣きたいよ。

周りの建物が全部でかいし、この世界の人間もみんな馬鹿でかいし。みんなみんな蟻のように縮んでしまえばいい。

思わず体格が良すぎる人々しかない世界の無常さを叫びたくそうろう。

オレがミホークさんとした約束というのは、オレがコンパス差にくるしみ必死についていくのがやっとだった初めの頃。食事として海王類を指し示す光景からいやな予感はしていたが案の定、旅生活ゆえのことだとは思うが、このひと料理ができなかった。

じゃあふだんの食事はどうしていたかと問えば、海賊やどっから奪った金で普通に街の酒場や食事どころにはいつていた。

でもそれも毎回町がある島にたどり着けるわけではないし、むしろ無人島なんていくつ越えたかもう定かでないほどだ。

思わず焼いただけの肉料理というのを見て、せめてしおぐらいかけると「お前もかブルータス！」と叫んでひざを突いて頭を抱えたのは記憶に新しい。

オレの周囲の人ってどうしてこう料理ができないや面が集うのか。しかもその半分は生でも肉にかじりつくという豪胆振りを見せる。ああ、そうだったね。ここはワンピース世界。

肉を好む赤ん坊が平然と居て、傷がすぐに治る脅威の回復力を持った爺さんもいて――ふつうな料理人などいるわけなかったな。

そんなこんなで料理やら加治の面倒は見ることを買って出た。か

わりに俺の面倒を見てくれるように頼んだ。Sonogo

随分前にミホークさんに買ってもらった中華なべと包丁とお玉はつねにまちあるいていたのですでに自分の一部のようなかんかくだ。こないだはどれだけ野菜というものが重要かを語って聞かせたことからオレがこの船の財布を握るようになった。

「召集だ」

「無理です」

「……」

あのあといろいろあつて、オレは“鷹の目”に弟子入りした。

ミホークさんの小姑のように最近自分が口うるさくなってきたと思うこの頃。この時点の“鷹の目”はまだシッケアール王国跡地には住んでおらず、転々と旅住まいだ。

”そんなでもって最近、七武海に入ったらしい。たぶんおつるさんがひそかにかかわっている木がするよ。そうでなきゃこの一匹狼なこの男が、自由を捨てなにかの下にくだるとかあるわけがない。

そして早速収集がかかったとか。

海軍も大変だね。”

「師匠、いつ海軍と出会ったので？」

「お前がいない間だ」

「そりゃあわかりますよ。ただそれが“いつ”の話ですか？つてことを聞いているんですよ」

会話になりませんでした。

とりあえず航海術をちゃんと学び始めているので、最近船の帆とかヨットのようりでつかつたり、ちゃんと海の予備も用意してあります。あいかわらずの小船でブラリ旅ですが、今度は地図を持っているので問題なく航海中だ。

この半年で分かったこと。迷子になりやすいオレ、喧嘩にまきこまれやすいミホークさん。二人でいるといままで異常に平穩から遠ざ

かつていく。たまにデندنムシをとおして会話するおつるさんには「トラブルコンビ」命名される始末。あげく「けっこうあんたたちきがあうんじゃないかい？もう半年ぐらい帰ってこなくていいからね」とのこと。それとオレのことはばれるんじゃないよと言われた。

なら変装するかと、染めていた髪を元に戻し、かけていてもなくても余変わらない眼鏡を外す。それだけで随分雰囲気が変わるなといわれた。

髪は実はあの事件以降すっかり色素が抜けてしまった。本当なら次に髪が伸びるころには徐々に色が戻っていてもおかしくないのだが髪はもどらず、目も見えなくなったり色素が薄れたりと銀色をしている。

オレたんとうになつてくれていた女医さんぐらいだ。

そう思うとオレって当事海兵ではなかったし、せまりくるじいちゃんから護るためとか言われていたけど、隔離されてかくまわれていた感じた。

おかげであの事件から二年たつ今もなおらない髪の色を知る人は居ない。ついでに幼いころからじいちゃんやマキノさん、ダダンによつてしつけられた“若干丁寧なふだんのですます口調”をやめて心のままに口調をくずしてみたら、もう別の人だった。

じいちゃんやおつるさんでさえ、オレの髪がここまで真っ白だとはしらない。

いわれてみると別人かもしれない。いくぞといわれて

買った食材や自分の少ない荷物を包んでなべにいれる。そのままひもでくくったなべをかつぐようにする。これがいまのオレノスタイルになりつつある。

能力？バリバリしようしてますよ。そのときばかりはさすがの放任主義な高の目さんも言葉を通し時には実践を経て教えてくれていま

す。むしろ能力の暴走や使えないただのカンヅチにはなるなといわれた。

むしろ海軍では能力があることを隠していたんで、はじめからおれが能力者であることをしているミホークさんのせいかつは海兵たちに襲われるが能力の制御について教えてくれている。これは俺の身を護るという契約のひとつであるらしく、自分で自分のみは護れるようにしろという配慮らしい。

。そんなわけでただいまグランドラインを逆走中。目的地はマリージョア。天竜人がまた我儘でも言って海軍を困らせているんだろうと、ため息が出る。

「師匠には漂流癖があるから。いくの反対です」「途中でおろしてくれればいい」

そういう問題でしょうかね。

まあ、えっちらおっちらと手漕ぎボートを懸命に漕いでいます。7歳児（もうすぐ8歳だけど）に船をこがす大人ってどうよとおもったけど、目の前のマイペースすぎるひとはとちゅうで昼寝をしまったり海賊に切りかあっている間に船をなくしかねないのでこの関係もまた慣れたものだ。

「ではおたっしやで」

とちゅう遠くに海軍の軍艦が見えたので、見送ることにする。いまのオレはある意味逃亡兵のようなもので返送しているにしてもどうしたって近づけない。

小さな一人用のボートをだしてたかめをみおくことにした。

「まにあうかな」ぶっちゃんけ緊急収集がかかてからもう四日はたっている。

いつもどおり天竜人のわがままだったとしても、なにか事件があったにしても今更間に合うと尾は思えない。まあ、ミホークさんは意

外と律儀だったのか、それとも面白そう。暇つぶしだともいつものようにおもっているのかさだかではないが、ヒーローはあとからやってくるという理論によって意外と佳境には間に合うのかもしれない。もちろんついていけないオレには興味もなく、あとあとシャボンディで待ち合わせをしているので、ミホークさんには野生の勘でもなんでもいいからなんとかシャボンディにたどりついてもらって拾ってくれればいい。

オレはここぞとばかりに、自分の「認識」というつぶの能力の向上をはかるべく、空気を操作して、一定の空気の塊が帆のそばでかいてんするようにすることで風が帆に当たるようにした。

いうなればエースが炎の能力で操っていたボートに原理は似ている。そのまま解を船内にほふる。

ちなみにこの船しかり、あの鷹の目さんののった小船もだが、オルがながされないようにひもでしっかりつながれている。

これはミホークさんと過ごしたオレの経験からくるもので、さすがに風任せもいい加減やばいと思うほど食料もつきひもじくなった時からの誓いだ。

なくしてたまるかとな。

あのときの島は、無人島だったが、おれはじいちゃんによる訓練でそういった場所にはなれていた。枝や木をナイフでけずってそくかいをつくり、柄の部分に穴をあけてひもとおしたのはつらい思い出だ。

なお、いまこの船にあるかいはさつきほおったのでちょうど10代目だ。

理由はこの際割愛させて頂こう。

そんなこんなで、シャボンディにつくまで能力維持の時間を延ばす地味訓練以外に思いつくこともなく、もっていた本でも読むかとのんびりしていた。

ガコン。

は？

本を読もうと荷物へ手を伸ばした途端、突然船が何がぶつかった。周囲を見渡しても岩などはなかったし、どこからどうみてもここが浅瀬だとは思えない。まさか魚人か海王類だろうか？

思わず衝撃で、海にふつとばされそうになったところを舳先にしがみついてまぬがれる。

そこでようやくオレの視界に“原因”を確認することが出来た。ここからはちよつと離れているが、某豪華客船タ。タニツクのように、傾いて半分沈んでいる船のへさきらしきものを見つけた。

沈没船しく、それによる破片が潮の流れでこんな遠くまできて、オレ&ミホークの家がゆれたらしい。船じゃないよ家だよ。

空ばかりたら見てたしスピードだしすぎてたし、大本の船の残骸とは随分距離があつたため、視界に入らなくてから気付かなかつたけど、よくよくみわたせばこの海域周辺にはあちこちに船の破片と思える残骸があつた。

ここ半年でいままで以上に、気配やらなにやらに敏感になったオレの第六勘的な感覚が、オレの耳が、かすかな声をとらえたのはその時だ。

今にも消えそうなうめき声。

けれどそこに何かが生きていると感じ取れる。

あわてて揺れる船を水平に戻し、不慣れな能力を使う。

ゆっくりと残骸を避けつつ進み、やがて船の全容が見えてきた。いたるところに焦げ跡や砲弾の跡がある大きな帆船だった。

グランドラインの異常現象にやられたのか、はたまた海賊か、我が

師匠ミホークさんのような暇つぶしで攻撃されたのかはわからない。しかしその船は明らかに、なにかしらの攻撃を受けた後だった。

「助けに来ました！生存者はいますか！！」

我が家である船を沈没しかかっているマストに鎖を巻きつけ流されないようにすると沈没船の甲板をつたい、先程オレの感覚にヒットした何かにむけて次々に残骸を飛びうつる。

おかしいと思ったのは、搜索をしてしばらくして。

某タ。タニツクを思わせる客船のような豪華な船でありながら、船の周囲を漂う漂流物の中に、荷物らしきものが一切ない。

それは客たちのにもつというだけでなく、客船でないにしても海を航海するなら食糧や武器それ以外に必要なもの、さらにはタルひとつないのだ。

船の近くには浮いていたのは、船の残骸のほかは、同じような衣服に身を包んだ様々人間達の死体だけ。

間に合わなかったというより、かなり前に攻撃を受けて崩壊したのだろう。

だから既に冷たく息をしていないものには申し訳ないが彼らのことはおきすて、生きているだろう者の気配を懸命に探す。

まだ望みはあるのだとオレは思っている。

そう、感じたから。

それに第六勘がささやくのだ。だれかが生きてると――。

だが、そうやって飛び移りつつ生存者を探しているうちに、新たな違和感に眉をしかめる。

これが海賊船でないなら、乗客と思われるものたちはいても、死体の中に乗組員の姿がひとつもない。

しかもみながみな、年齢も性別も種族もばらばらなのだ。

たとえば人買いは、見目の良い子供か女を重視する。

その系統の船でないとしても自分より強そうな大男など商品として

扱えるはずがない。

真の高みを目指さない普通の人であれば、心理のひとつとしてひとは自分より弱いものを狙う。

強いものを相手にするなら一人では不可能だ。

だけど大男や魚人でさえ、可憐な女性と同じ服を着ていたりする。

それもひとりだけであれば複数の人間が応対することでその大男を捕らえたとも考えられるが、そういった強面の強そうな奴らが十人以上となると話は違ってくるだろう。

「何なんですかねこの船は？」

商船や奴隷船、はたまた海軍の護送船か。だが、そのどれも違う気がした。

どこから流れ着いたのか。

なぜ全員が死んでいるのか。

なぜ船は沈没したのか。

護衛は？荷物は？目的は？

さっぱりわからない。

どれほど真意が知りたくても、ほとんど沈んでしまった船からうかがい知ることはできない。

「だれか、いないのですか？」

勘を頼りに進んでいくと、二十歳ぐらいの女性在必死に機の破片にしがみついている姿にひかれそちらへ向かった。

返事はないし、女性には生きはなかった。

しかし彼女在必死に抱きしめているものは――

「う……あ……」

生きていた。

オレと同じくらいの男の子。

意識もなく、身体に力は入らないようだが、彼女が死んでも尚その子を抱きしめたまま離さなかったおかげで、水も飲んでないし、いまなら水から引き上げれば助かるだろう。消耗が激しいが生きている。

「いま、助ける」

そつと触れた女性の肌はすでに死後硬直が始まっていて、海よりも冷たく凍えそうだ。

子供でしかない自分の腕力だけで彼女ごと持ち上げるのは不可能だ。先程の船を動かしたのと同じ要領で、周辺の空気の密度に干渉する。二人の身体を支えつつ、見えない手が二人を抱き上げるように海から持ち上がる。そのまま原形をとどめていた船の甲板にまで運ぶ。

女性には申し訳ないが、その手を離してもらおう（この辺はあまり言い話じゃないし15Rとつけないといけなくなりそうなので細かいことは割愛する）。

そつと横に彼女を寝かし、浅く息をしているギリギリのラインで生きている男の子の様子を伺う。

オレは医者じゃないので人工呼吸と心臓マッサージと擦り傷の手当てぐらいしか出来ない。

とりあえず濡れた服から水分だけをとりぞき、側にとめてあった自分の船から大量の布をもってきて肌の方の水分をぬぐってかけてやる。

「ごめんなさい。もう少し待っていてください」

まだだ。

オレを呼んだのは、この子じゃない。
もつと、もつと必死で。
もつと「生きたい」と願う強い声――。

オレは再び海の上に降りると、残骸を渡って探す。
もつと、もつと他にも何人が生きてるはずだ。

「救助に来た！だれかいなか！！

焦る声は、いつの間にか強制的に直されたはずの口調を巢に戻していた。

必死で探した。
探して探して――

そこにいたのはいたのは女の子。

甲板か壁かは分かりかねるが、ちょうどたたみ一畳ぶんぐらいの板状の残骸。

その木片の上にねかせられているのは、意識を失っていてもしつかり呼吸を刻む二人の少女。

少女と女性のちょうど中間のオレのこの外見より年上の少女たち。

先程の男のより大人であるぶん、生命力が強いのもかもしれない。

この調子だと先程の男の子より呼吸もしっかりしてる。

ただ披露からか意識がないだけのようだ。

それにほっとしていると、側で水音がした。

波があたるには不自然なそれ。

もしやと慌ててそちらに視線を移せば、この板の隅、二人の少女の身体で見えなかった向こう側にもう一人女の子がいた。

少女二人を乗せて要領オーバーだったのだろう、もうひとり少女は上半身を大きな目のこの板に乗せるので精いっぱいだった。腕

の力で何とか氏がミツツ居ているといった感じだった。

必死にがれきにつかまっているが、それだけでせいっぱいのようで、もうそれも本能だけでしがみついている感じだ。意識があるかも怪しい。

「大丈夫か！？いまたすけるからな！！」

オレより随分年上だろうお姉さん。

驚いたことに、彼女はまずいながらも意識があった。

「わたしよりいもうとたちを！」

彼女はオレが声をかけると、勢いよく目を開き、そう乾いた喉を無理やり振り絞るようにして叫んだ。

その目が強くオレを見た。

だけどオレにはその言葉に応えることは出来ない。首を横に振る。

「あんたが先だ！」

まだこの板の上に全身を乗せて眠っている妹だという彼女たちの方が、安全は保障されている。

七歳の子供の体で年上の人を支えることはできないが、場をつくることはできる。

そく、たくさんのがれきを一か所に集めて、二人の少女が乗っているこの板の範囲を広げ、彼女を男の子と同じ要領で引っ張り上げる。

「っ！？」

ふれてわかったけど、なんだかまだなれきっていないオレの悪魔の実が、ざわめくように、身体を構成していたものが分離しかける。

そのざわつとした感覚は海軍でもよく感じたことがある。

失敗するとそのまま共鳴するように、オレの能力は制御を失い、また腕とかが粒になってしまう。

その感覚を思い出し、相手ももしかすると能力者なのかもしれないと気付く。

思い当つたら驚きすぎて目を見張る。

「よく、無事でしたね」

「？」

能力者は海に弱い。

上半身だけは海面から出ていたとしてもほとんど力などはいるはずもなかっただろうに、それでも彼女は妹たちを守ろうと意識を保つてこらえていたというのか。

思わず口からこぼれた言葉に、ぐったりとよこになっていた女性がうろんげに視線をよこした。

もう言葉を出すほどには、体力も残っていないようだ。

それにきつと海から出たことで少し安堵して力が抜けているのだろう。

それでも警戒を怠らない。

目だけがギラギラとしていた。

「能力者、でしょう？」

「……………なぜ…それ、を？」

オレの言葉に警戒を強める少女は、相手が七歳の子供であることに気付いたのか、例を言うべきかなぜ助けたのか、お前は敵かと、怪訝げな表情だ。

大丈夫。オレは味方です。

そういう意味を込めて笑い返す。

「オレも能力者なんです。オレの能力は悪魔の実に反応する」

世界を構成する粒という粒を認識することで、それを動かすことができる能力。

しかしいくら調べようと、海軍の化学班に研究をもちこんでも「悪魔の実」についてだけは成果が得られなかった。

なにもわからなかったのだ。

誰かが口に入れる前の実は、しょせん植物であり、メロンのかたちをしていればメロンでしかなかった。

口入れた後の残骸も調査してみたが、その結果は同じだった。

だからなぜ能力がそなわるのかわからなくて、オレが認識できないものとして悪魔の実が存在した。

ゆえにオレの能力は悪魔の実を拒絶する。

たとえばオレの身体が砂のように細かく分解しても悪魔の実だけはとりこめずあとにのこってしまうというかたちだ。

悪魔の実がどれだけ身体に溶け込もうと再構築の際に抜け出てしまい、能力ともども実がその場に残る。

ちなみに、なぜかオレ自身の実はいくらやっても出てこないのも、もしここで悪魔の実だけ身体の外に出ていたら粒になった身体を戻せないのではないかと思い至り、自分を再構築することができた時はほっとしたものだ。

つまり、能力者とはかく、悪魔の実とは、おれの能力には天敵なのだ。

それを身の内にもちながら海の中で耐えていた彼女の意思は何と強い者だろう。

「オレには自分以外を再構築する力は、今はないけど、その能力が

いやなら。

オレはもつとがんばるよ。

そうしたらいつかあなたから悪魔をひきはなしてあげる」

結局極度の疲労からか、彼女は会話の途中で目を閉じてしまった。オレの言葉がどこまで彼女に届いていたかは知らないが、それでも気にはならなかった。

しょせんベルメールさんの時と同じ、自分の身勝手な偽善活動で、オレのこの差し伸べた手は、あなたたちにとっては通りすがりにしか過ぎない一時の風と同じなのだから。

「ああ、でも」

死ぬなんて怖いことだ。

行きたいと思うことの何が悪い？

暖かい手を望んで何が悪い？

死なせたくないと思って——何が悪いのさ。

オレはそうやって、二年前にこの世界に戻ってきた。

だから

「生存者がいてよかった……かな」

それから生存者を連れて船に戻って、とにかく暖をとれる陸を
指した。

しばらくして――

おもしろデコボコひげのメガネなおっさんに襲われた。
なんなの？こんどはなんなの！？

つてか海の上、それも人様のそれもオレの家よ。

なんでびしょびしょなの！？

考えたくないけど、あんたどこからあらわれた！？

「いや、なあに。近くの島にいたのだがな。久しぶりに鷹の目の船
を見かけたものでな」

――泳いできた。

ありえない。

だってオレのセンサーにも近くに島があるなんてわからない。
見える範囲にも島はない。

それを泳いだだと！？

「どこから見えるんだよ。どこから泳いできた！？お前は人間か！
」

その後、陸についた。

陸についても騒動はやってくるようだ。

こなくていいのに。

勘違いも、もうおなかいっぱいだよ。

騒ぎなんかいらぬのに・・・平穩をくれよ平穩をさ！

何を勘違いしたのか、生存者たちの治療をしようとしたら、陸で待っていたというおっさんの連れの蛇のつえをもったボンキュッボンの美女に、その杖でもって殴られた。
オレがなにをした！？

「お前さんがうちの若いのを襲ってるようにみえてね」

治療だ！！

そんなこんなで、謎の水泳男と謎の美女とであい、事の次第を説明したところ、彼女たちが傷の手当を引き受けてくれた。

それにおれもついていき――

“おんなのこ”と間違われて、女ヶ島というところへ連れていかれ

た。

そこは見事なボインちゃんのとどういろうっぽい女だけの島でした。サンジじゃないけど、鼻血がでた。

ずっと山賊と暮らしてたし軍にいたからすっかりかたつくるしい衣装に身をつつまれた女性しかみてなかったし、前世は前世でエロ本より漫画の雑誌ばかりみていたので、めんえきなかったおれはそのあとしばらく寝込むこととなる。

スリットや衣服の間から除く素肌がハンパないです。

11 奇跡の海（下）（後書き）

リースが拾った人たち、リースをちぎんと間違っ
て襲ったメガネ、
リースを殴った美女。

このひとたちの詳しいことは次回で～

壱円の更新はとてものろいです。

それだけ知っておいてくださいorz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2729k/>

ONE PIECE ～地味にひそかにおだやかに～

2011年11月17日13時06分発行